

375-42



1200501451216

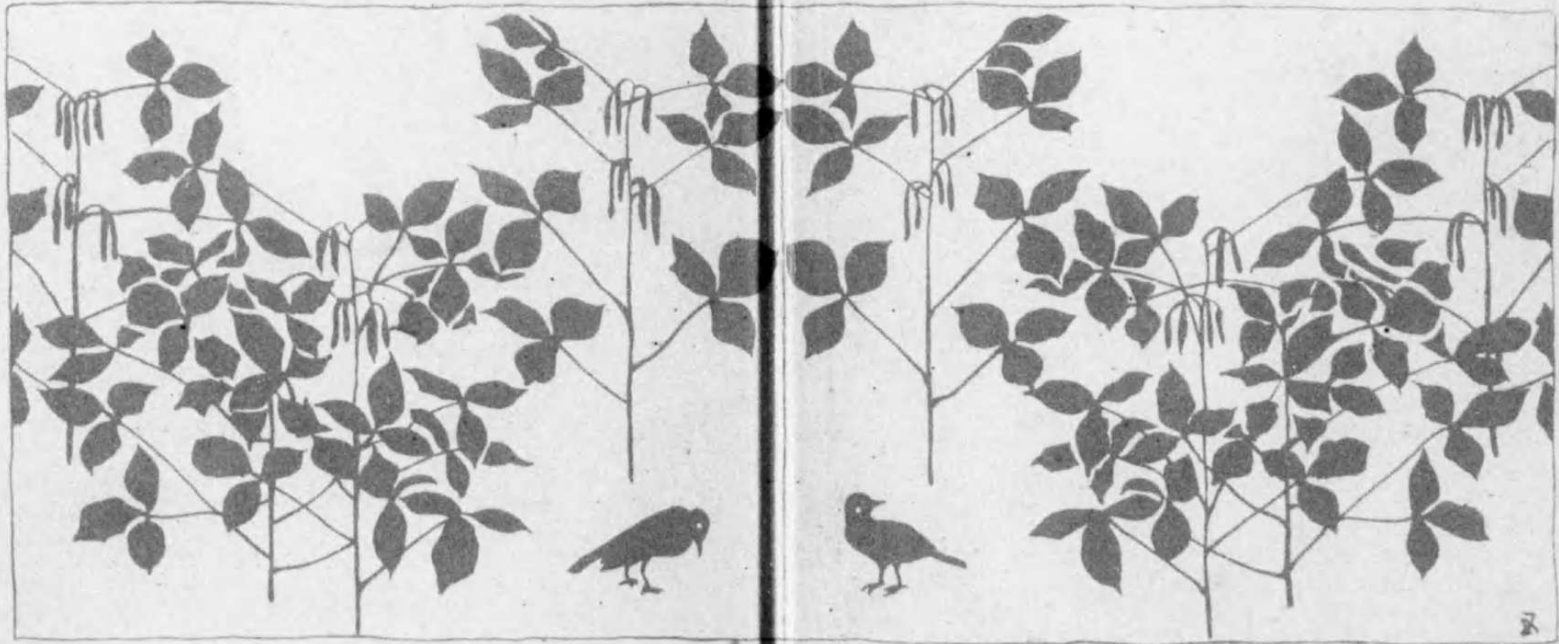
'5

42



始







四



書

全

四

書

全

### 大學章句序

大學之書。古之大學所以教人之法也。蓋自天降生民。則既莫不與之以仁義禮智之性矣。然其氣質之稟。或不能齊。是以不能皆有以知其性之所有而全之也。一有聰明睿智。能盡其性者。出於其間。則天必命之。以爲億兆之君師。使之治而教之。以復其性。此伏羲神農黃帝堯舜所以繼天立極。而司徒之職。典樂之官。所由設也。三代之隆。其法寔備。然後王宮國都。以及闔巷。莫不有學。人生八歲。則自王公以下。至於庶人之子弟。皆入小學。而教之以灑掃應對進退之節。禮樂射御書數之文。及其十有五年。則自天子之元子衆子。以至公卿大夫元士之適子。與凡民之俊秀。皆入大學。而教之以窮理正心修己治人之道。此又學校之教。大小之節。所以分也。夫以學校之設。其廣如此。教之之術。其次第節目之詳。又如此。而其所以爲教。則又皆本之人君躬行心得之餘。不待求之民生日用彝倫之外。是以當世之人。無不學。其學焉者。無不有以知其性分之所固有。職分之所當爲。而各俛焉以盡。

其力。此古昔盛時。所以治隆於上。俗美於下。而非後世之所能及也。及周之衰。賢聖之君不作。學校之政不脩。教化陵夷。風俗頹敗。時則有若孔子之聖。而不得君師之位。以行其政教。於是獨取先王之法。誦而傳之。以詔後世。若曲禮少儀。內則弟子職。諸篇固小學之支流餘裔。而此篇者則因小學之成功。以著大學之明法。外有以極其規模之大。而內有以盡其節目之詳者也。三千之徒。蓋莫不聞其說。而曾氏之傳。獨得其宗。於是作爲傳義。以發其意。及孟子沒。而其傳泯焉。則其書雖存。而知者鮮矣。自是以來。俗儒記誦詞章之習。其功倍於小學。而無用異端虛無寂滅之教。其高過於大學。而無實。其他權謀術數。一切以就功名之說。與夫百家衆技之流。所以惑世誣民。充塞仁義者。又紛然雜出乎其間。使其君子不幸而不得聞大道之要。其小人不幸而不得蒙至治之澤。晦旨否塞。反覆沈痼。以及五季之衰。而壞亂極矣。天運循環。無往不復。宋德隆盛。治教休明。於是河南程氏兩夫子出。而有以接乎孟子之傳。實始尊信此篇。而表章之。既又爲之次。其簡編。發其歸趣。然後古者大學教人之法。聖經賢傳之指。粲然復明於世。雖以烹之不敏。亦幸私淑。而與有聞焉。願其爲書。猶頗放

失。是以忘其固陋。采而輯之。間亦竊附己意。補其闕略。以俟後之君子。極知僭踰。無所逃罪。然於國家化民成俗之意。學者脩己治人方則。未必無少補云。淳熙己酉二月甲子。新安朱熹序。

## 例言

- 一、四書即ち大學中庸論語孟子の各全部を収めて本書一卷とす。
- 二、本文は朱熹集註の流布本に従へり。
- 三、訓讀及び註解に關しては、必ずしも朱註のみによらず、所謂古註をはじめ和漢古今諸家の見を參看し、其宜しきに従へり。由來四書の訓解に解しては、殊に諸說紛々、章によりては、殆ど其適從する所を知らざるが如きもの尠しとせず。それ等諸家の説を一々列載攻究するが如きは、本叢書の性質上固より不可能の事に屬す。よりにて今姑く私見を以て其最も平靜穩健なりと認むるものを採りて略註を下す事とせり。
- 四、便宜上數章を集めて一段とせるものは、一に朱子章句の定むる所從つて其に一章毎に本文と同大の圈號を加へ、之を識別し易からしめたり。

四書目次

大學	一一三	泰伯第八	二〇九
中庸	三一天	卷之五	
論語	三二〇七	子罕第九	二二五
卷之一	三	鄉黨第十	二三四
學而第一	三	卷之六	
為政第二	七	先進第十一	二三
卷之二	七	顏淵第十二	二四〇
八佾第三	三	卷之七	
里仁第四	九	子路第十三	二四九
卷之三	九	憲問第十四	二五
公冶長第五	三	卷之八	
雍也第六	三	衛靈公第十五	二六
卷之四	三	季氏第十六	二七
述而第七	三	卷之九	
		陽貨第十七	二八
		微子第十八	二九
		卷之十	

目次

此處為書中正文內容，因字跡模糊，無法逐字辨識。其內容應為《四書》各篇之正文。

子張第十九	二九	離婁上	三三三
堯曰第二十	三〇	卷之八	
孟子	二〇九—二五七	離婁下	三三四
卷之一		卷之九	
梁惠王上	二二三	萬章上	三六五
卷之二		卷之十	
梁惠王下	二二三	萬章下	四〇五
卷之三		卷之十一	
公孫丑上	二二七	告子上	四二三
卷之四		卷之十二	
公孫丑下	二六〇	告子下	四四四
卷之五		卷之十三	
滕文公上	三〇一	盡心上	四六四
卷之六		卷之十四	
滕文公下	三三五	盡心下	四六七
卷之七			

—(目次終)—

### 四書解題

●●●●●  
 四書の由來 四事とは大學、中庸、論語、孟子を總稱する名にして、大學、中庸、二書を論語、孟子に配したるは、朱子に昉まる。論語、孟子は古來何れも單行せるが、大學、中庸は禮記西漢の戴聖が編せるものの中に收められて各々其の一篇を成せるのみ。中庸は漢以降三四の註釋有りて別行せるものありしも、大學に至りては則ち宋以前には單行せるものを見ず。宋に至りて大學、中庸、孟子三書を尊ぶの風盛んにして、遂に朱子は大學、中庸の章句及び論語、孟子の集注を著はし、之を大學章句、論語集注、孟子集注、中庸章句と次第して世に公にし、四書の名因りて生じたり。大學、中庸は他の二書に比すれば紙數少きを以て、書肆が便宜上大學章句と中庸章句とを合せて一本と爲せるより、四書は大學、中庸、論語、孟子と次第さるるに至れり。元明以後朱子が學界の權威として崇敬さるるに至るや、四書は試驗制度所謂科擧に於て最も重要な地位

を占め、書を読み功名を得んと欲する者の必讀の書となれり。我が國王朝時代は唐代の學制に従ひたれば、大學、中庸は禮記の中に存せるのみ、清原頼業の如く此の二書を別行せしめば聖學に功多かるべしと爲せる者有りしも、未だ之を實行せる者を見ず。其後四書彼の土より傳はり、五山の僧侶先づ之を講習し、徳川氏の文教を起すや、朱子學を奉じたるにより四書大に世に行はるることとなれり。

四書の注釋 論語の注釋は古來甚だ多かりしも、唐以後専ら用ひられしものは魏の何晏等の集解なり、梁の皇侃が集解に本づきて作れる義疏及び宋の邢昺の正義有るも、前者は支那には早く亡びて、獨り我が足利學校等に寫本を存するのみ、物祖孫の門人根本 聖志之を印行せり孟子に就きては西漢の末に趙岐が著せる注釋有り、宋人此れに本づきて正義を作り、孫奭の名に託せるものあり。禮記に關しては西漢の末に大儒鄭玄が著はせる注釋最も勢力を得、唐の太宗が孔頴達等をして五經正義を撰述せしめし時、禮記は鄭注を取れり。宋に至りて所謂性命義理の學起るや、經傳の解釋

爲めに一變し、朱子が四書に注するに至りてより漢唐の古注疏に對して、朱子の書を新注と稱す。

朱子が大學、中庸には章句と云ひ論語、孟子には集注と云へるは抑々故有り。朱子は後二書は其の篇章の分け方は古注疏に従ひ、其の解釋に至りては漢唐以來宋に至るまでの學者の説を研究して其の間に取舍を行ひたれば名づけて集注と云へり。大學、中庸に關しては則ち或は舊本の次第を改め或は舊本の分章に従はず、一に己れの見解を以て之を整理したるによりて名づけて章句と云へり。後人朱子の説に服せざる者少からず、大學は禮記に在る儘の次第にて之を讀むべしと爲して古本大學を取る者有り、王陽明の如きなり中庸を上下二篇に分くる者有り。支那に在りては王柏、王鶴、我が國に在りては伊藤仁齋、佐藤一齋の如き即ち是れなり

大學の根本思想 大學が何人の著なるかは今得て知るべからず。大學は周代に於て最高教育機關にして官吏養成を目的と爲し、其の教科は詩書禮樂の四術な



りき 大學の書に説くところは修己治人の道に外ならず。此の書を宋儒が特に重んじたる所以は修己の方面に於て正心誠意致知格物の思想有るに因る、而して程伊川及び朱子の派と陸象山及び王陽明の派との學說の相異點は之れが解釋の相異に存す。抑々宋代の儒學の特色は第一に其の理氣性命の說に在り、此の說は宋儒の宇宙觀及び人生觀の根本なり。今之を略説すれば、彼等は宇宙の本體を理と爲す、但理は無形のものなるに、宇宙萬物に有形の方面あり、理を直に有形の原因とは爲すべからざるを以て、理の外に別に氣を認めたり、理氣を以て宇宙萬物を説明するは宋學の特色なり。人も亦他の物と同じく理氣二者より成る、人の肉體は氣に屬し、心性は理に屬す、自然に在りては理と稱せらるるものが、人に賦與されて性となる、賦與之を命と謂ふ、心と性との關係如何に就きては、朱子は心は理、性は仁義禮智信五常の理と爲し、又心は性と情とを統ぶるものと爲せり。理は本と完全なるものにして、宇宙に在りては流行し人に在りては發現するものなるが、何れの

場合にも發達と云ふことは有り得べからず。理既に完全なるものとして人に具はると雖も、常に完全に又自由に發現すること能はず、其の發現往往氣の爲めに妨碍を受くるを免れず。氣とは人に在りては肉體を成す、肉體有るが故に人には種種の欲有り、欲は盲目的のものなれば固より理に従ふことを知らず、而して人動もすれば欲に徇ふ、此れ理の發現の自由が妨げらるる所以なり、故に意誠ならず、心正しからず、随つて身修まらず。此に於て理の發現をして完全に又自由ならしむるの必要生ず、致知格物は實に其の方法手段なりとす。而して程朱と陸王との二派の間に意見の扞格して相容れざるものは致知格物の解釋に在り。程朱は理の自由發現を可能ならしむるには理を明にせざるべからず、理は人事の上にも亦自然の事物の上にも發現す、其の發現を一一に研究するによりて理始めて明なるべし、之を研究するは即ち格物なり、格物より致知に入るとして所謂究理を主張せり。然るに陸象山は此くの如きは心は理なりと言ひながら理を心外の物と爲すの弊



有りと非難し、天地萬物の理皆吾が心に具はる、能く吾が心を知れば理悉く明なるべしと言ひ、王陽明は格物の物は念頭格は正なり、一念動く時に其の善惡は吾が心自ら之を知る、其の知るところに従ひ、惡を去り善を爲すは即ち格物なり、善惡を自知するは良知の作用なり、事毎に良知の作用を自由ならしむるによりて良知を致む調はずるは即ち致知なりと爲せり。此く格物致知の解を異にせるは程朱と陸王との根本思想の相異に本づけり。

中庸の作者 中庸は史記に孔子の孫名は伋字は子思の作とあり、後の學者多く此れに従へり。然るに程朱が此の書を重んじたる結果、反つて中庸を疑ふ者出で遂に史記を信ぜざる者有るに至れり。然れども事實の上より史記を否認すべき證左を挙げ得るにあらずして中庸の内容より史記を疑ふのみ。内容とは思想の事にして、其は中庸の解釋に屬す、宋儒努めて高遠の思想を中庸に求めんとしたるにより、反つて他學者の疑ひを惹き起したるも、中庸に現はれたる思想は子思時代

に有り得べからざるほど高遠玄妙なるものにあらず、孔子立教の後を承けて儒教思想の哲學的根據を明にせんとすれば當然生じ得べかりしものに外ならず、内容より史記を疑ふは誤れり。或は中庸に摺入若くは脱簡有りと爲し、或は思想聯絡を缺き文義貫通せずと爲す者有れども、皆誤れり。朱子は子思を曾子の門人と爲せども、其は道統の觀念より孔子と孟子との間に道の傳授の系統を作らんが爲めにせる説にして、事實に本づけるものにあらず。

中庸の意義 中庸二字の解釋亦區區なるが、中は過と不及とに對して中間を意味し、庸は常を意味す。中の字は中庸以前に多く見え、經書或は衷に作り、古人は衷を善と解せり。中は又禮と相關して言はる。蓋し古の所謂禮とは動作進退の儀は勿論、凡そ共同生活を維持する所以の行爲軌範を總稱せる名なり、故に道徳も法律も皆禮の内に包括さる。禮は大小の共同生活小にしては家、大にしては社會、國家を謂ふに於て衆人の行動を律して一途に歸せしむるを目的とす、此の目的を達せんとするには、禮は社

會多數の人が常に行ひ得ると云ふことを標準と爲すを必要とし、智徳の勝れたる人若くは其の劣れる人の能くするところを標準と爲すべきにあらず、此の意味に於て禮は中なり。更に他の方面より觀れば、人は理智と感情とを兼ね具ふ、二者の一のみを標準として行爲軌範を定むれば、人心の要求を満足すること能はず、故に禮は二者の要求を兼ねて満足せしむることを目的とす、此れ亦禮の中なる所以なり。一方に偏したるものは時に或は可なること有れども、凡ての場合に通すべからず、唯々能く中に合ふものにして始めて凡ての場合に通すべし、即ち所謂常なり、故に中は又常なり。禮は人の常に依るべきの道なり。此く中庸は具體的に言へば禮にして、抽象的に言へば人の道なり。古は禮を最も重しと爲し、論語には立於禮と云ひ、又不知禮無以立とも言へり、禮に依るは人格を完成する所以にして、完全なる人格は知情意の完全なる調和を意味し、而して此くの如き人格は必ず常に同一なり、他語を以て言へば完全なる人格は中にして庸なり、此の見地よりすれば中

庸は徳なり。道として又徳としての中庸は此の書の中心思想なり。此の書前半は中庸を言ひ、後半は誠明を説く、誠とは人格の完全なる統一徹底を意味す、此の書始めに道を説き、後に徳を説く、故に始めに中庸と曰ひ、後に誠と曰ふなり。道は古今の學者或は他律性のものと爲し、或は自律性のものと説く、儒教は之を自律性のものと爲す、即ち人性を超越せる權威の命令とは爲さずして、人性に根據を有するものと爲す、此の點を明にせんが爲めに、此の書は性と道との關係を第一に説けり、道を人性に根據を有すとせば、性の儘にして即ち道に合ふとも考へ得べけれども、儒教は聖人道を修めて教を立て、人に行爲の軌範を示したるによりて、人始めて完全に道を行ひ得と爲して、聖人立教の功を重んず、故に此の書又始めに先づ教の字を提起し、後半に至りて更に之を詳説せり。聖人が能く道を修め教を立つる所以は其の徳即ち人格の本來完全なるに因るとして、後半に聖人を説きて其の至誠の徳を讀す。然れども天賦の性は凡聖一なり、人能く聖人の教によりて道を行ひ以

て其の徳を成せば、亦至誠の域に入るべし、此れ教の效なり。中庸の論するところ大體は此の趣意にして、中間に幾多の事理を加ふるのみ。

論語の内容と其編者 論語は主として孔子の語を録したるものなり、孔子の動作及び門人の語を記したるものも亦少からず。此の書何人の手に成りしかは古來議論紛々、今敢て決定の言を爲さず。書中に孔子の門人中最年少なりし曾子の臨終の言を記しあるによれば、孔子の死後稍々久しくして始めて編纂されしものなるべし。論とは論撰の義にて、編纂の際多くの材料に就きて嚴重なる研究を経て論撰したるものなりと爲す者有れども、體裁の上に完全なる統一無く、又時に記載の重複せるあり、精選の結果に成るとは言ひ難し。又所有材料を網羅して取舍選擇したるものとも認め難し。

論語に孔子の動作等を録せるところ亦少からず、今日に於て孔子の性行人格を窺ふべき倔強の資料たり。蓋し孔子の人格は孔子の道の體現にして、其の人格の

甚だ偉大なるは其の道の廣大なるに因る。門人の孔子を學ばんとせる者或は直に孔子人格の根本を衝かんとせば、手を下すべきの所を發見し難きに苦み、人格の表現たる孔子の言動を模範として聖人の人格を學ばんとせるも有り、此れ孔子の動作を微細に涉りて録せる所以なるべし。

孔子教の根本たる仁の意義 孔子は自ら述而不作と言ひ、子思は仲尼祖述堯舜、憲章文武と言ひ、孟子は孔子集而大成と言へり、集大成とは單に零碎なるものを收拾するの謂ひにあらず、整然たる一個の體系に作り上ぐるを謂ふなり。凡そ一の體系を成すには必ず一の根本原則無かるべからず、孔子の根本原則は仁即ち是れなり。仁は宋以來種々の解釋有れども、要するに人性に具はる同情と愛情との結合せるものを根本と爲し、知情意の發達によりて漸く發達して博愛の徳となるものなり、而して其の發達は遠心的に進む、即ち先づ己れに最も近く親しき者を愛することより進みて次第に遠く疎き者に及ぼし、遂に人類は勿論萬物をも悉く覆ふ

に至る。更に他の方面より觀れば、仁は人の人たる所以のものなり、之を完全に實現するによりて始めて人と爲るものなるが、其の人たる所以のものは具はりて我れに在りて我が性を成す、之を實現して人と爲るとは自我を完全に實現するに外ならず、自我を完全に實現することは知情意の完全なる發達と相伴ふ、此くて仁は自我實現の事なり。而して仁は自我實現に止まらず、既に自我を完全に實現したる時は更に進みて天下の人をして皆其の性を實現せしめんとを期し、猶ほ進みては天下の物をして皆其の生を全くせしめんことを期す、仁の目的此に至りて方めて全く達す、故に仁は一面は己れを修め己れを成す所以にして、一面は人を治め物を成す所以なり、修己治人の二面を兼ねて仁方めて全し。此くの如きは孔子の理想なり。而して仁は人性の實現なるが、他の方面より觀れば人の當に行ふべき道なり、人の當行の道としては之を義と謂ふ。人性自然の發現として觀れば孝弟共に仁なれども、子弟たる者の當行の道として觀れば孝弟共に義なり。仁の發現は

一般には忠信又は忠恕となり、父兄に對しては孝弟となる、故に論語に此等の事に就きて言へるもの最も多し、蓋し此等を擴充するによりて仁を完成すべければなり。宋儒は仁に專言即ち絶對的と偏言即ち相對的との別有りと言ふ、論語に知仁勇を相對して言へる場合の仁は即ち偏言に屬す、仁義を相對して言へるものは論語には無し。

孔子の教學 論語二十篇學而篇を第一と爲し、學を言ふもの全書到る處に之有り、此れ獨り論語の特色たるのみならず、實に儒教の特色なり。中庸の條下に言へるが如く、儒教は聖人立教の功を大なりとし、人は聖人の教に由りて道を知り以て道を行ふことを得と爲す、此れ學を重んずる所以なり。殊に孔子は卓越せる天稟を以て學を好めること異常なりき、故に論語多く學を言ふ。

孔子の弟子を教ふるや、博文より約禮に進ましむ、博文とは博く詩書禮樂を學ぶこと、約禮とは禮によりて行爲を統一することなり、博文は知情意の發達を期する



所以にして、約禮は人格の統一を得る所以なり。孔子は此く學問進修の次第を示せるも、學修の實行は弟子自身の努力に期し、身を以て法を示す外に、平生各人の資性、學修の工夫等に就きて精密なる觀察を施し、其の間に隨ひて各人の性の近きところと其の進境とに適應する答を與へて、進修の方向と目的とを啓示せり、故に其の言簡にして繁ならず。重んずるところは理論の研究にあらずして、實際によりて磨鍊發明し躬行して反省自得するにあり、故に其の言ふこと味深く、世事を経ること多きに隨ひ益々其の妙味を覺ゆべし。

治國平天下の思想。仁は治人の方面有るを以て、論語に政治を言へるもの多く、孔子が國君大夫等の間に應じて政を言へるもの亦少からず。皆儒教本來の徳治主義を發揮し、法治主義を排斥し、仁義を重んじ、功利を斥けたり。後孟子最も能く此の旨を發明せり。後世の儒者は道徳仁義理氣性命を談するを専らとし、政治經濟の方面を閑却せる者多し、孔孟を學びて孔孟を知らざる者と謂はざるべからず。

孔孟は決して迂濶なる道學者にはあらず、徒に治國平天下を口にして經綸の才無き空論家にはあらざるなり。

論語に見はれたる天命の意義。儒教最も天命を重んず、天命の意義は一に止まらずと雖も、論語に見ゆるものは(一)死生の命(二)貧富究達の命(三)天より命ぜられたる任務是れなり。孔子が五十而知天命と言へるは第三の天命にして、孔子が天は己れに命ずるに道を天下に明にし生民の爲めに太平を開くの任務を以てすと自覺せるなり、此の自覺は孔子の人格の原動力となり、孔子半生の行動の動機たり。天下を周游し、流離艱難の際常に從容自若たりしもの、實に此の信念有りしによる。死生、貧富究達皆天命なりと言ふは、其の個人の意志を超越せるもの有るを信ずればなり。此の信念は或は宿命説となり得べしと雖も、儒教には宿命思想無し。道を行ひ徳を修むれば富貴長壽自ら來るべき理なれども、實際は必ずしも然らず、君子は富貴を得んが爲めに徳を修むるにあらずと雖も、徳を修めて凶禍を得ること

あれば則ち其の身に缺けたるところ無きを得んやと反省す、若し缺點有ることを自覺せば益々進みて徳を修む、若し自ら省みて缺點無きを知れば、禍を取るべき原因己れに無きに禍の來りしは此れ天意なりとして天命に安んじ、而も福を得ざるの故を以て徳を廢せず、此れ君子天命に安んずるの説なり。此の説は一見退嬰思想の如くなるが、其の實は大なる進取思想なり。天命を知らざれば自ら修むるを知らずして妄に天を怨み人を尤む、君子は然らず。此の天命思想は論語中に到る處に現はれたり。但後世の支那國民が進修に努めずして妄に天命を談るが如きは孔子の旨に背けり、後の思想を以て孔子を觀ること勿れ。

孟子の書 孟子は朱子は或は子思の門人と爲せども、實は子思の門人に學びしなり。孔子に私淑し深く其の教を究め、學成りし後、梁、齊等の國に遊び、晚年門人公孫丑、萬章等と孟子七篇を作る、孟子死後門人校訂して世に行はれたり。

孟子の主張せる仁・義と性・善 孟子口を開けば仁義を稱し性善を唱へたり。孟

子の時は所謂戰國時代にして、七國各々富強を圖り天下に覇たらんことを期し、種の學者現はれ、各々其の學を以て諸侯に用ひらる。其の先王の道にあらざるを以て孟子一一之を排斥したるが、其の最も力を用ひて排斥せるものを楊朱及び墨翟の學と爲す。楊朱は老子の流を汲める者にして、共同生活を無視し、各人獨立只管自己の範圍に於て己れを全くせんことを期し、他人を害することを避くるは勿論、他人を利することも亦爲すを敢てせざるを主義と爲せり、孟子が楊朱爲我と云ひ又拔一毛利天下不爲と云へるは即ち是れなり。墨翟は夏の禹王を理想と爲し、無差別平等の愛を主張せり、所謂兼愛即ち是れなり。孟子は墨子の學を評して無父と言ひ、楊朱の説を評して無君と言へり。他の語を以て言へば、墨子の兼愛主義は仁に似て而して仁にあらず、其の親疎遠近の差等を無視して徒に平等を主張するを以てなり、差等之を義と謂ふ、墨子は義を知らざるを以て其の兼愛は孔子の仁と異なり。楊朱の説は義に似て而して義にあらず、徒に人我の差別のみを知りて

共同生活を無視すればなり、共同生活は仁を本と爲し仁によりて維持せらる、儒教に謂ふところの差等は仁の上に立ち仁の裡に行はる、然るに楊朱は仁を知らず、故に其の差別觀は眞の義にあらず。他の學者の説は聖人の道と明白に相異なりて人を誤るの虞無きも、楊墨二子の説は疑似の點有り、孟子は人或は其の惑はずとこそとならんことを恐れて、乃ち仁義を並稱し以て二子の説と聖人の道との異なるところを明ならしめたり。孟子必ず性善を言へるは儒教思想發達の當然の結果なる外に、性論が當時の思想界の問題たりしによる。孟子の性善は宋儒が主張せるが如きものにあらず、即ち人は生れながらにして完全なる理を具有すと謂ふにはあらずして、唯人には道德的本能有りと謂ふのみ。孟子は該本能が直覺的に作用するものが善たることを認め、因りて性は善なりと論じ、以て仁義の自律性なることを示せり、此の論は孟子の書中に反復提起さる。

孟子仁義を並稱せる結果として仁義は相對的原則となり、仁義の觀念に一の變

化を來せり。加之孟子は仁義の外に猶ほ禮智を加へ、此の四者は人性に本來具はれるものを發達實現せしめて成れる徳なりと爲し、遂に漢に至りて更に信を加へて所謂五常説の成る本を爲せり。

孟子の政治主義 孟子の時代に政治に關して帝道、王道及び霸道の説有り、帝道は老莊一流の主義、霸道は獨逸流の軍國主義にして種々の學者之を唱へたり、孟子は儒教本來の主義たる王道を主張せり。孟子は又仁政といふ語を用ひたるが、畢竟同一意味なり。王道は仁義を以て本と爲すものにして、即ち徳治主義なり。但孟子は當時の社會は各國富強を競ふの結果、經濟情態一變し國民の生活甚だしく不安定に陥りしを慨し、王道の第一着手は國民生計の基礎を立つるに在りとして、古の井田制を主張し、生活を安定ならしめて然る後に教育を施すべしと論ぜり。但孟子は其の持論を實行するの機會を得ざりしを以て王道に關する施設の具體的案を示さず、井田に關して稍々詳細の説を見るのみ。

人往々孟子を民主主義者なるかの如く言ふも、實は然らず。儒教には元來民の爲めに君を立つと云ふ思想有り、此れ民主主義と相似て而して非なり。孟子は當時の國君等が人民を殆ど機械視し、名は國家の富強を圖ると云ふも、實は自己の富強權勢を高めんとするにあるを慨し、民の爲めにすべきことを高調せり、其の言時に矯激に過ぐるを以て不用意に讀み去る者誤りて民主主義と爲すのみ。

孔子、子思、孟子の事蹟等は之を略す。

文學博士 服部宇之吉

大學

子程子曰。大學孔氏之遺書而初學入德之門也。於今可見古人爲學次第者。獨賴此篇之存。而論孟次之。學者必由是而學焉。則庶乎其不致矣。

子程子の曰く、大學は、孔氏の遺書にして、初學徳に入るの門なり。今に於て、古人學を爲す次第を見る可き者、獨り此篇の存するに賴る。而して論孟之れに次ぐ。學者必ず是れに由りて學ばば、則ち其の差はざるに庶からん。

● 子とは男子の美稱、程子とは程明道程伊川の兄弟の稱、其學同じきを以て概稱して程子と云へるなり。論語孟子

大學之道。在明明德。在親民。在止於至善。知止而后有定。定而后

大學の道は、明德を明にするに在り、民を親にするに在り、至善に止るに在り。止るを知りて后定まる有り、定まりて后能く靜に、靜にして后能く安し、安くして后能く慮る。慮りて后能く得。物に本末有り、事に終始有り、先後する所を



能靜。靜而后能安。安而后能慮。慮而后能得。物有本末。事有終始。知所先後。則近道矣。古之欲明明德於天下者。先治其國。欲齊其國家。欲脩其身者。先脩其身。欲正其心。欲正其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物。物格而

知れば、則ち道に近し。古の明德を天下に明にせんと欲する者は、先づ其國を治む。其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふ。其家を齊へんと欲する者は、先づ其身を脩む。其身を脩めんと欲する者は、先づ其心を正しくす。其心を正しくせんと欲する者は、先づ其意を誠にせんと欲する者は、先づ其知を致す。知を致すは物に格るに在り。物格りて而して後に知至る。知至りて而して後に意誠なり。意誠にして而して後に心正し。心正しくして而して後に身脩る。身脩りて而して後に家齊ふ。家齊うて而して後に國治まる。國治まりて而して後に天下平なり。天子自ら以て庶人に至るまで、壹に是れ皆身を脩むるを以て本と爲す。其本亂れて而して未治まる者否す、其の厚き所の者薄くして、而して其の薄き所の者厚きは未だ之れ有らざるなり。

● 大人の學ぶべき道 ● 人の心に本來具有する徳即ち中庸のいはゆる性なり ● 親は新の義なり、人心を攝まざらしむる意なり。或は親は親愛なりしと解し「民に親しむ」と訓ず ● 至善に止まること、后は後に同じ ● 物事につきて本末終始を知ればやがて正にそれを行ふ事となるを以て大學の道に近し ● 國は天下の一部分なり

后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身脩。身脩而后家齊。家齊而后國治。國治而后天下平。自天子以至庶人。壹是皆以脩身為本。其本亂而未治者否矣。其所厚者薄。而其所薄者厚。未之有也。

● 知を致すの知は朱子の説にては汎くいふ所の知識なりとすれど、實は道徳的價值判斷にかける知識をいふが如し ● 物事の道理を自分から進みて推し極むること、一説に己の良知を致すと解し「物ヲイタス」と訓ず ● 普通一般の人 ● 齊家、治國、平天下は皆修身に基づくを謂ふ ● 修身を謂ふ ● 治國、平天下をいふなり

右經一章。蓋孔子之言。而曾子述之。其傳十章。則曾子之意。而門人記之也。蓋本頗有錯簡。今因程子所定。而更考經文。別爲序次。如左。

右經一章は、蓋し孔子の言にして曾子之れを述ぶ。其傳十章は、則ち曾子の意にして、門人之れを記す。舊本頗る錯簡あり、今程子の定むる所に因りて、更に經文を考へ、別に序次を爲すこと左の如し。

康誥曰。克明德。大甲曰。顧諟天之明命。帝典曰。克明

康誥に曰く、克く徳を明にす。大甲に曰く、諱の天の明命を顧みる。帝典に曰く、克く峻徳を明にす。皆自ら明にするなり。

峻徳。皆白明也。右傳之首章。湯之盤銘曰。新。又日新。康誥曰。作新民。詩曰。周雖舊邦。其命維新。是故君子無所不用其極。右傳之二章。釋新民。詩云。邦畿千里。惟民所止。詩云。緝蠻黃鳥。止于丘隅。子曰。止。知其所止。可以

右傳の首章、明德を明にするを釋す。

湯の盤の銘に曰く、苟に日に新に、日に日に新にして、又日に新なりと。康誥に曰く、新民を作すと。詩に曰く、周は舊邦と雖も、其の命維れ新なりと。是の故に君子は、其極を用ひざる所なし。

右傳の二章、民を新にするを釋す。

詩に云ふ、邦畿千里、惟れ民の止る所と。詩に云ふ、緝蠻たる黃鳥は、丘隅に止ると。子曰く、止るに於て、其の止る所を知る、人を以てして鳥に如かざる可んやと。詩に云ふ、穆穆たる文王は、於緝熙にして敬止すと。人君と爲りては、仁に止まり、人臣と爲りては、敬に止まり、人子と爲りては、孝に止まり、人父と爲り

- 殷の湯王 ● 沐浴する所の盤なり ● 其器にはりつけて自ら磨しむること ● 自新の民を振起す
- 詩經大雅文王篇の詩 ● 至善に止まるを欲するなり

人而不レ如レ鳥乎。詩云。穆穆文王。於緝熙敬止。爲人君止於仁。爲人臣止於敬。爲人父止於孝。爲人父止於慈。與國人交。止於信。詩云。瞻彼淇澳。萋萋君子。如切如磋。如琢如磨。詩云。有斐兮。有斐兮。君子終不可誼兮。如切如磋者。道學也。如琢如磨者。

ては、慈に止まり、國人と交れば、信に止まる。詩に云ふ、彼の淇澳を瞻れば、萋々竹猗猗たり。斐たる君子有り、切するが如く、琢するが如く、磨するが如し。瑟たり侘たり、赫たり喧たり、斐たる君子有り、終に誼する可からずと。切するが如く、磋するが如しとは、學を道ふなり。琢するが如く、磨するが如しとは、自ら脩むるなり。瑟たり侘たりとは、恟慄なり。赫たり喧たりとは、威儀なり。斐たる君子有り、終に誼する可からずとは、盛徳至善、民の忘るゝ能はざるを道ふなり。詩に云ふ、於戲、前王忘られすと。君子は其賢を賢として其親を親とす、小人は其樂みを樂みて、其利を利とす、此を以て世を没へて忘れざるなり。

右傳の三章は、至善に止るを釋す。

- 詩經の商頌玄鳥の篇なり ● 邦畿は五百、畿内なり ● 詩經小雅緝蠻の篇 ● 鳥の聲 ● 隅の隱晦く
- 詩經文王の篇 ● 深く遊きかたち ● はめることば ● 緝はツマキ、熙は光明
- 詩經衛風淇澳の篇 ● 淇水は水の名、澳はくま ● 萋々たる竹 ● 美盛のかたち ● 有斐なる竹 ● 美盛のかたち ● 有斐なる竹

自脩也。瑟兮  
僴兮者恂慄  
也。赫兮喧兮  
者威儀也。有斐君子終不可訕兮者道盛德至善民之不能忘也。詩云於戲前王不忘君子賢其賢而親其親小人樂其樂而利其利此以沒世不忘也。右傳之三章釋止於至善。

やあること ① 切理琢磨とは骨を折りて鋭強すること ② 嚴密なるかたち ③ ふるいをのく ④ 學問修徳の功をつめば徳内に明にして自然にそれが外にあらはれ威儀盛美内と外とが一致し表と裏とが相應して至善なり、故に民永く之れを愛慕するをいふ ⑤ 詩經周頌文之篇 ⑥ 歎辭 ⑦ 周の文王武王をさしていふ

子曰聽訟吾  
猶人也。必也  
使無訟乎。無  
情者不得盡  
其辭。大畏民  
志。此謂知本。  
右傳之四章。  
釋本末。此  
謂知之至也。  
右傳之五章。

子曰く、訟を聴くは吾れ猶ほ人のごときなり、必ずや訟無からしめんかと。情なき者は其辭を盡すを得ず、大に民志を畏れしむ、此を本を知ると謂ふ。

右傳の四章は、本末を釋す。

① 他人の事なからず ② 必ず訴訟事件なからしめん ③ 本文先後

此れを本を知ると謂ふ。此れを知の至ると謂ふなり。

④ 此一句衍文なるといふ ⑤ 此一句は上文缺文となり結句の釋留せるものといふ

右傳の五章は、蓋し格物致知の義を釋す。而して今は亡びたり。間嘗て竊

蓋釋格物致  
知之義。而今  
亡矣。間嘗竊  
取程子之意。  
以補之。曰。所  
謂致知在格  
物者。言欲致  
吾之知。在即  
物而窮其理  
也。蓋人心之  
靈。莫不有知。  
而天下之物。  
莫不有理。惟  
於理有未窮。  
故其知有不  
盡也。是以大  
學始教。必使  
學者即凡天  
下之物。莫不  
因其已知之  
理。而益窮之  
以求至乎其  
極。至於用力  
之久。而一旦豁然貫通焉。則衆物之表裏精粗無不到。而吾心之全體大用無不明矣。此謂知之至也。

に程子の意を取つて、以て之を補ふ。曰く、所謂知を致すは物に格るに在りとは、言は吾の知を致さんと欲するは、物に即きて其理を窮むるに在るなり。蓋し人心の靈、知有らざる莫し。而して天下の物、理有らざる莫し。惟理に於て未だ窮めざる有り。故に其知盡くさざる有るなり。是を以て大學の始めの教は、必ず學者をして凡そ天下の物に即き、其の己に知るの理に因つて益々之を窮めて、以て其極に至るを求めざる莫からしむ。力を用ふるの久しく、一旦豁然として貫通するに至つては、則ち衆物の表裏精粗、到らざる無く、吾が心の全體大用、明ならざるなし。此を物の格ると謂ひ、此を知の至ると謂ふなり。

① 朱子次の一文を補ふ也 ② 其心愈々大なる光明を得て萬理自ら通じ吾が心の體用皆明かなるをいふ

所謂誠其意者。毋自欺也。如惡惡臭。如好好色。此之謂自謙。故君子必慎其獨也。小人閒居。爲不善。無所不至。見君子。則後厭然。揜其不善。而著其善。人之視己。如見其肺肝然。則何益矣。此謂誠於中。形於外。故君子必慎其獨也。曾子曰。十目所視。十手所指。其嚴乎。富潤屋。德潤身。心廣體胖。故君子必誠其意。右傳之六章。釋誠意。

所謂其意を誠にすとは、自ら欺く毋きなり。惡臭を惡むが如く、好色を好むが如し。此を之れ自ら謙すと謂ふ。故に君子は必ず其の獨を慎むなり。小人閒居して不善を爲す、至らざる所なし。君子を見て而る后厭然として、其不善を揜ひて、其の善を著はす。人の己を視ること、其肺肝を見るが如く然り。則ち何ぞ益あらん。此を中に誠あれば、外に形はると謂ふ。故に君子は必ず其獨を慎むなり。曾子曰く、十目の視る所、十手の指す所、其れ嚴なるかなと。富は屋を潤し、徳は身を潤す、心廣く體胖なり。故に君子は必ず其意を誠にす。

右傳の六章は、意を誠にすることを釋す。  
● 心にこゝろよきなり ● 獨りあるなり ● 心にいやに思ふなり ● 腹のどん座 ● 多くの人の視る所  
指して批評すること ● 畏るべきの甚しきなり ● 徳あれば心は廣大寛平にて落ちつきあるなり

所謂脩其身者。正其心也。身有所忿懣。則不得其正。有所恐懼。則不得其正。有所好樂。則不得其正。有所憂患。則不得其正。正心不在焉。視而不見。聽而不聞。食而不知其味。此謂之身在其心。右傳之七章。釋正其心。

所謂身を脩むるは其心を正しうするに在りとは、身忿懣する所有れば、則ち其正を得ず、恐懼する所あれば、則ち其正を得ず、好樂する所あれば、則ち其正を得ず、憂患する所あれば、則ち其正を得ず。心焉に在らざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其味を知らず。此れ身を脩むるは其心を正しうするに在りと謂ふ。

右傳の七章は、心を正しくし身を脩むるを釋す。  
● 程子曰く、身の字當に心に作るべしと。一説に身と云へば心をも兼ぬと ● 怒るなり ● 心を欺かされるなり ● 好みたのしむ ● 心配 ● 心が身に添はぬ時は物を視ても見えぬ

所謂齊其家者。在脩其身也。人之其所親



愛而辟焉。之其所二賤惡。而辟焉。之其所二畏敬。而辟焉。之其所二哀矜。而辟焉。之其所二散情。而辟焉。故好而知二其惡。惡而知二其美者。天下鮮矣。故諺有之曰。人莫知其子之惡。莫知其苗之碩。此謂身不脩。不修可三以齊其家。

辟す、其の敷情する所に之て辟す。故に好みて其惡を知り、惡みて其美を知る者は、天下に鮮し。故に諺に之れ有り、曰く、人其子の惡を知る莫く、其苗の碩なるを知る莫しと。此れ身脩まらざれば以て其家を齊ふ可からずと謂ふ。

右傳の八章は、身を脩め家を齊ふるを釋す。

- ① なたよるなり
- ② 賤みにくむなり
- ③ かそれうまふなり
- ④ あはれ少あはれむ
- ⑤ 輕んじ薄し
- ⑥ 殆ど掃しの意
- ⑦ 人情として自分の苗を小なりとして不足に思ひ、苗の大に育ちたるを知らず、即ち惡みて其美を知らざらなり

所謂治國。必先齊其家。其家不可教。而能教人者。無之。故君子不出家而成二

所謂國を治るには必ず先づ其家を齊ふとは、其家教ふ可からずして、而して能く人を教ふる者之れ無し。故に君子は家を出でずして、教を國に成す。孝は君に事ふる所以なり、弟は長に事ふる所以なり、慈は衆を使ふ所以なり。康誥に曰く、赤子を保するが如しと。心誠に之を求めば、中らずと雖も遠からず。

教於國。孝者。所以事君也。弟者。所以事長也。慈者。所以使衆也。康誥曰。如保赤子。心誠求之。雖不中。不遠矣。未下有學養子。而后嫁有上也。一家仁。一國興仁。一家讓。一國興讓。諱一國興讓。一人貪戾。一國作亂。其機如此。此謂一言僨事。一人定國。堯舜帥天下以仁。而民從之。桀紂

未だ子を養ふを學びて、而して后嫁する者有らざるなり。一家仁なれば、一國仁に興る。一家讓なれば、一國讓に興る、一人貪戾なれば、一國亂を作す、其機此の如し。此れを一言事を僨り、一人國を定むと謂ふ。堯舜天下を帥るるに仁を以てして、民之れに従ひ、桀紂天下を帥るるに暴を以てして、民之れに従ふ。其の令する所は其の好む所に反して、民從はず。是の故に君子は諸を己に有りて、而して后諸を人に求め、諸を己に無くして、而して后諸を人に非とす。身に藏する所知ならずして、而して能く諸を人に喻す者は、未だ之れ有らざるなり。故に國を治むるは其家を齊ふるに在り。詩に云ふ、桃の夭夭たる、其葉秦秦たり。之の子子に歸ぐ、其家人に宜しと。其家人に宜しくして、而して后以て國人を教ふ可し。詩に云ふ、兄に宜しく弟に宜しくして、而して后以て國人を教ふ可し。詩に云ふ、其義式はず、是の四國を正すと。其の父子兄弟たる法るに足つて、而して后民之れに法るなり。此れを國を

治むるは其家を齊へ國を治むるを釋す。

右傳の九章、家を齊へ國を治むるを釋す。

● 弟の道 ● 書經の篇石 ● 生れたての子 ● 貪慾の心あるなり ● はづ ● 古への聖王 ● 古への亂暴の君 ● 命合 ● 非として正す ● 思ひやろ心 ● 人に道々さとすなり ● 詩經周南桃夭の篇の詩 ● 天夫妻業は美しく盛なるをいふ ● 婦人の嫁するを歸といふ ● 詩經小雅采芣苢の詩 ● 詩經曹風采芣苢の詩 ● 君子の威儀たがはざるなり ● 四方隅々の國の意にて一國內全體のこと

帥天下以暴而民從之。其所令反其所好而民不從。是故君子有諸己而后求諸人。無諸己而后非諸人。所藏乎身不恕而能喻諸人者。未之有也。故治國在齊其家。詩云。桃之夭夭。其葉蓁蓁。之子于歸。宜其家人。而后可以教國人。詩云。宜兄宜弟。宜兄宜弟。而后可以教國人。詩云。其儀不忒。正是四國。其爲父子兄弟足法。而后民法之也。此謂治國在齊其家。右傳之九章釋齊家治國。

所謂平天下。在治其國者。上老老而民興孝。上長長而民興弟。上恤孤而民不倍。是以君子有絜矩之道也。所惡於上。毋以使下。所惡於下。毋以事上。所惡於前。毋以先後。所惡於後。毋以從前。所惡於右。毋以交左。所惡於左。毋以交右。此之謂絜矩之道。詩云。樂只君子。民之父母。民之所好好之。民之所惡惡之。此之謂民之父母。詩云。節

所謂天下を平にするは其國を治むるに在りとは、上老を老として民孝に興り、上長を長として民弟に興り、上孤を恤みて民倍かす。是を以て君子は絜矩の道有るなり。上に惡む所は、以て下を使ふ毋れ。下に惡む所は、以て上に事ふる毋れ。前に惡む所は、以て後に先ずる毋れ。後に惡む所は、以て前に從ふ毋れ。

倍。是以君子有絜矩之道也。所惡於上。毋以使下。所惡於下。毋以事上。所惡於前。毋以先後。所惡於後。毋以從前。所惡於右。毋以交左。所惡於左。毋以交右。此之謂絜矩之道。詩云。樂只君子。民之父母。民之所好好之。民之所惡惡之。此之謂民之父母。詩云。節

右に惡む所は、以て左に交はる毋れ。左に惡む所は、以て右に交はる毋れ。此を之れ絜矩の道と謂ふ。詩に云ふ、樂只の君子は、民の父母と。民の好む所は之れを好み、民の惡む所は之れを惡む。此を之れ民の父母と謂ふ。詩に云ふ、節たる彼の南山、維れ石巖巖、赫赫たる師尹、民具に爾を瞻ると。國を有つ者以て慎まざるばある可からず。辟すれば則ち天下の僂と爲る。詩に云ふ、殷の末だ節を喪はざるや、克く上帝に配す。儀く殷に監みるべし。峻命易からずと。衆を得れば則ち國を得、衆を失へば則ち國を失ふを道ふ。是の故に君子は先づ徳を慎む。徳有れば此れ人有り。人有れば此れ土有り。土有れば此れ財有り、財有れば此れ用有り。徳は本なり、財は末なり。本を外にして末を内にすれば、民を争はしめて奪ふを施す。是の故に財聚れば則ち民散じ、財散すれば則ち民聚る。是の故に言悖りて出づれば、亦悖りて入り、貨悖りて入れば、亦悖りて出づ。康誥に曰く、惟れ命常に于てせずと。善なれば之れを得、不善なれば之れを失ふを道ふ。

彼南山。維石巖巖。赫赫師尹。民具爾瞻。有國者不可不以不慎。辟則爲天下僂矣。詩云。股之未喪師。克配上帝。儀監于股。峻命不易。道得衆則得國。失衆則失國。是故君子先慎乎德。有德此有人。有人此有土。有土此有用。德者本也。財者末也。外本內末。

楚書に曰く、楚國は以て寶と爲す無し、惟善以て寶と爲すと。舅犯曰く、亡人は以て寶と爲す無し、仁親以て寶と爲すと。秦誓に曰く、若し一個の臣有らん、斷斷として他技無く、其心休休として、其れ容るゝ有るが如し。人の技有る、己之れ有るが若く、人の彥聖なる、其心に之れを好し、營に其口より出すが若きのみならず、寔に能く之れを容る、以て能く我が子孫黎民を保せん。尙はくは亦利有らん。人の技有る、媚疾して以て之れを惡くみ、人の彥聖なる、而も之れに違ひて通ぜざら俾む、寔に容るゝ能はず、以て我が子孫黎民を保する能はず、亦曰に殆きかな。唯仁人は之れを放流し、諸を四夷に迸けて、與に中國を同じうせず。此を唯仁人は能く人を愛し能く人を惡くむを爲すと謂ふ。賢を見て而も舉ぐる能はず、擧げて而して先ずる能はざるは命なり。不善を見て而して退くる能はず、退けて而して遠くる能はざるは過なり。人の惡くむ所を好み、人の好む所を惡くむ。是れを人の性に拂ると謂ふ。菑必ず夫の身に逮ぶ。是の故

争、民施、奪。是故財聚則民散。財散則民聚。是故言悖而出者、亦悖而入。貨悖而入者、亦悖而出。康誥曰。惟命不予常。善則得之、不善則失之矣。楚書曰。楚國無以爲寶。惟善以爲寶。舅犯曰。亡人無以爲寶。仁親以爲寶。秦誓曰。若有一個原斯斷兮。無他技。其心休

に君子は大道有り、必ず忠信以て之れを得、驕泰以て之れを失ふ。財を生ずるに大道有り、之れを生ずる者衆く、之れを食する者寡く、之れを爲る者疾く、之れを用ふる者舒なれば、財恆に足る。仁者は財を以て身を發し、不仁者は身を以て財を發す。未だ上仁を好んで、下義を好まざる者あらざるなり。未だ義を好みて其事終へざる者あらざるなり。未だ府庫の財其財にあらざる者有らざるなり。孟獻子曰く、馬乗を畜へば、雞豚を祭せず、伐冰の家には、牛羊を畜はず、百乗の家には、聚斂の臣を畜はず、其の聚斂の臣有らん與りは、寧ろ盜臣有れと。此れを國は利を以て利と爲さず、義を以て利と爲すと謂ふ。國家に長として財用を務むる者は、必ず小人に自る。彼之れを善するを爲して、小人に之れ國家を爲め使むれば、菑害並び至る。善者有りと雖も、亦之れを如何ともする無し。此れを國は利を以て利と爲さず、義を以て利と爲すと謂ふなり。右傳の十章、國を治め天下を平にするを釋す。

休焉。其如<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>容焉。人之有<sub>レ</sub>技。若<sub>レ</sub>己<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之。人之彥聖。其心好<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>啻若<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>口<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>。寔能容<sub>レ</sub>之。以能保<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>子孫。黎民。尚亦有<sub>レ</sub>利哉。人之有<sub>レ</sub>技。疇疾以惡<sub>レ</sub>之。人之彥聖。而違<sub>レ</sub>之。俾<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>通<sub>レ</sub>。寔不能容<sub>レ</sub>。以不能保<sub>レ</sub>我子孫。黎民。亦曰殆哉。唯仁人放<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。迷<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>夷<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>中國<sub>レ</sub>。此謂<sub>レ</sub>下

● 上にある者が老者を老者として尊敬すれば民は親に孝を爲すに至る ● 親なし子 ● 上の意にわかず我が心を規矩として人の心をはかる方法即ち恕のことなり。聖矩の道は善く其の己れに有る所を持して人を出ひやるとして治國の要全くこゝに在り ● 詩經小雅南山有臺篇の詩 ● 只是助字にして樂只はたのしむの意なり ● 詩經小雅節南山の篇の詩 ● 高大の貌 ● 周の都の南に在る終南山 ● 山の石の面目につくこと ● 世に時めく ● 師尹は文王の大匠にて政を爲す者 ● 道を失ふなり ● 身を試せられ國を亡びて天下の大獄となる ● 詩經大雅文王の篇の詩 ● 民衆 ● 徳能く天に配す ● 手本にする ● 大命 ● 民に財を劫奪する例を教へ施す ● 財が上に乗れば民は四方に散り ● 君命道に違うて出づれば民亦君命にさかふ ● 財有道に違うて上に入れば國亂れて之れを失ふ ● 書經の篇名 ● 天命は常に一家のみを祐げざるなり ● 天命 ● 楚の昭王の時の記録ならん、今日にては其の如何なる善なりしか不明 ● 晉の文公の甥、狐偃なり ● 國を出じしたる人即ち晉の公子重耳、後の文公なり ● 仁と愛と或は曰く仁人と親戚 ● 書經の篇名 ● 一人の臣 ● 賢者なること ● 美士を濫となす ● 人民 ● ねたみにくむ ● 前の人を容る、能はざるものを指す ● 同上 ● 己より先に立てる ● 命は覆みて慢となす怠慢の意 ● 節度あるをいふ ● 仁人は財あれば施與をつとめ身を起し名をなす ● 魯の大矢、仲孫儀なり ● 士の初めて大矢と稱するは領土の細利に人民と利を争はず ● 卿大夫以上のものにて喪祭に冰を用ふるものなり ● 兵車百乘を出す領土を有せる家にては主家の腹を肥すやうなために租税を多く取り上げる知き臣を用ひず、これ人民が恨む故なり ● 小人の利を以てす ● わざわひがついて起る ● 國をいむるには

唯仁人爲<sub>レ</sub>中能<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>人。能<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>人。見<sub>レ</sub>賢<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>。舉<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>命<sub>レ</sub>也。見<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>退<sub>レ</sub>。退<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>也。好<sub>レ</sub>人之所<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>。惡<sub>レ</sub>人之所<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>。是謂<sub>レ</sub>拂<sub>レ</sub>人之性<sub>レ</sub>。舊<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>。夫<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>。君子有<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>。必<sub>レ</sub>忠<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。驕<sub>レ</sub>泰<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。生<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>。生<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>衆<sub>レ</sub>。食<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>寡<sub>レ</sub>。爲<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>疾<sub>レ</sub>。用<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>舒<sub>レ</sub>。則<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>恆<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>矣。仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>。未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>也。未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>事<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>也。未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>府<sub>レ</sub>庫<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>也。孟<sub>レ</sub>獻<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>。畜<sub>レ</sub>馬<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>察<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>雞<sub>レ</sub>豚<sub>レ</sub>。伐<sub>レ</sub>冰<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>家<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>畜<sub>レ</sub>牛<sub>レ</sub>羊<sub>レ</sub>。百<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>之家<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>畜<sub>レ</sub>聚<sub>レ</sub>斂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>。與<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>聚<sub>レ</sub>斂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>。寧<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>盜<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>。此謂<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>也。長<sub>レ</sub>國家<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>財<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。必<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>矣。彼<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>國家<sub>レ</sub>。當<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>。雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。亦<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>矣。此謂<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>。義<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>利<sub>レ</sub>也。右傳之十章。釋<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>平<sub>レ</sub>天下<sub>レ</sub>。

凡<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>章<sub>レ</sub>。前<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>章<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>綱<sub>レ</sub>領<sub>レ</sub>の指<sub>レ</sub>趣<sub>レ</sub>を統<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>し、後<sub>レ</sub>六<sub>レ</sub>章<sub>レ</sub>は、條<sub>レ</sub>目<sub>レ</sub>の工<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>を細<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>す。其<sub>レ</sub>第<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>章<sub>レ</sub>は、乃<sub>レ</sub>ち善<sub>レ</sub>を明<sub>レ</sub>にするの要、第<sub>レ</sub>六<sub>レ</sub>章<sub>レ</sub>は、乃<sub>レ</sub>ち身<sub>レ</sub>に誠<sub>レ</sub>なるの木、初<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>に在<sub>レ</sub>りて尤<sub>レ</sub>も當<sub>レ</sub>に務<sub>レ</sub>むべきの急と爲<sub>レ</sub>す。讀者は其<sub>レ</sub>近<sub>レ</sub>きを以<sub>レ</sub>てして之<sub>レ</sub>を忽<sub>レ</sub>にす可<sub>レ</sub>からざるなり。

● 大もとの筋

凡傳十章。前四章。統論綱領。指趣。後六章。細論條目。工夫。其第五章。乃明善之要。第六章。乃誠身本。在初學。尤爲當務之急。讀者不可以其近而忽之也。



大

學終

中庸章句序

中庸何爲而作也。子思子憂道學之失其傳而作也。蓋自上古聖神繼天立極。而道統之傳。有自來矣。其見於經。則允執厥中者。堯之所以授舜也。人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中者。舜之所以授禹也。堯之一言。至矣盡矣。而舜復益之以三言者。則所以明夫堯之一言。必如是而後可庶幾也。蓋嘗論之心之虛靈知覺。一而已矣。而以爲有人心道心之異者。則以其或生於形氣之私。或原於性命之正。而所以爲知覺者不同。是以或危殆而不安。或微妙而難見耳。然人莫不有是形。故雖上智不能無人心。亦莫不有是性。故雖下愚不能無道心。二者雜於方寸之間。而不知所以治之。則危者愈危。微者愈微。而天理之公。卒無以勝夫人欲之私矣。精則察夫二者之間而不雜也。一則守其本心之正而不離也。從事於斯。無少間斷。必使道心常爲一身之主。而人心每聽命焉。則危者安。微者著。而動靜云爲。自無過不及之差矣。夫堯舜禹。天下之大聖也。以天下相傳。天下之大事也。以天下之大聖行天下

之大事。而其授受之際。丁寧告戒。不過如此。則天下之理。豈有以加於此哉。自是以來。聖聖相承。若成湯文武之爲君。阜陶伊傅周召之爲臣。既皆以此而接夫道統之傳。若吾夫子。則雖不得其位。而所以繼往聖。開來學。其功反有賢於堯舜者。然當是時。見而知之者。惟顏氏曾氏之傳得其宗。及曾氏之再傳。而復得夫子之孫子思。則去聖遠而異端起矣。子思懼夫愈久而愈失其真也。於是推本堯舜以來相傳之意。質以平日所聞父師之言。更互演繹。作爲此書。以詔後之學者。蓋其憂之也。深故其言之也。切。其慮之也。遠。故其說之也。詳。其曰天命率性。則道心之謂也。其曰擇善固執。則精一之謂也。其曰君子時中。則執中之謂也。世之相後千有餘年。而其言之不異。如合符節。歷選前聖之書。所以提挈綱維。開示蘊奧。未有若是之明且盡者也。自是而又再傳。以得孟氏。爲能推明是書。以承先聖之統。及其沒而遂失其傳焉。則吾道之所寄。不越乎言語文字之間。而異端之說。日新月盛。以至於老佛之徒出。則彌近理而大亂真矣。然而尙幸此書之不泯。故程夫子兄弟者出。得有所考。以續夫子千載不傳之緒。得有所據。以斥夫二家似是之非。蓋子思之功。於是爲大。而微程夫子。則亦莫

能因其語而得其心也。惜乎其所以爲說者。不傳。而凡石氏之所輯錄。僅出於其門人之所記。是以大義雖明。而微言未析。至其門人。所自爲說。則雖頗詳盡。而多所發明。然倍其師說。而淫於老佛者。亦有之矣。熹自蚤歲。卽嘗受讀而竊疑之。沈潛反復。蓋亦有年。一旦恍然。似有以得其要領者。然乃敢會衆說。而折其衷。比爲定著章句一篇。以俟後之君子。而一二同志。復取石氏書。刪其繁亂。名以輯略。且記所嘗論辯取舍之意。別爲或問。以附其後。然後此書之旨。支分節解。脈絡貫通。詳略相因。巨細畢舉。而凡諸說之同異得失。亦得以曲暢旁通。而各極其趣。雖於道統之傳。不敢妄議。然初學之士。或有取焉。則亦庶乎行遠升高一助云爾。淳熙己酉春三月戊申。新安朱熹序。

中庸

子程子曰。不偏之謂中。不倚之謂庸。中庸者天下之正道。庸者天下之定理。此篇乃孔門傳授心法。子思恐其久而差也。故筆之於書。以授孟子。其書始言一理。中散爲萬事。末復合爲一理。放之則彌六合。卷之則退藏於密。其味無窮。皆實學也。善讀者玩索而有

子程子曰く、偏らざる之れを中と謂ひ、易らざる之れを庸と謂ふ。中は天下の正道、庸は天下の定理、此篇は乃ち孔門傳授の心法。子思其久しくして差はんことを恐る。故に之れを書に筆して以て孟子に授く。其書始めは一理を言ひ、中は散じて萬事と爲り、末復た合して一理と爲る。之れを放てば則ち六合に彌り、之れを卷けば則ち密に退藏す。其味窮り無し。皆實學なり。善讀者の玩索して得る有らば、則ち終身之れを用ひて、盡す能はざる者あらん。

● 子は男子の美稱、程子とは程明道程伊川のな ● 孔子の門人 ● 孔子の孫 ● 天地四方

得焉則終身用之。有不能盡者一矣。

天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。道也者不可須臾離也。可離非道也。是故君子戒慎乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。莫見乎隱。莫顯乎微。故君子慎其獨也。喜怒哀樂之未發謂之中。發而皆中節謂之和。中也者天下之大本也。和

天の命する之れを性と謂ひ、性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを教と謂ふ。道なる者は、須臾も離る可からざるなり、離る可きは道に非ざるなり。是の故に君子は其の睹ざる所に戒慎し、其の間かざる所に恐懼す。隠れたるより見はるゝは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其の獨を慎む。喜怒哀樂の未だ發せざる之れを中と謂ひ、發して皆な節に中る之れを和と謂ふ。中なる者は、天下の大本なり。和なる者は、天下の達道なり。中和を致して、天地位し、萬物育す。

● 天が賦する所の物を性と云ふ ● 性のまゝ、に行ふを道と云ふ ● その道を併じて修むる所に教あり、以上を中庸性道教の章と云ふ ● 道の効用を説く、既に道と云ふ以上は人生に最も密邇なるなり ● 有徳者の意 ● 敬はす 上からは人の見聞なしと云ふも、忽ちせず道に背かん事を慎み懼る ● 薄暈き中に在る物程見はれ易い ● 微細な事程顕になり易い ● 萬象を爲さずと雖も氣已に動き、人知らずと雖も已先づ知る、故に己一人居るを慎む ● その喜怒哀樂の情の起らずして平靜なるは即ち性なり、偏倚せず故に中と云ふ ● 適度にして道に遠はざるを和といふ、人間の正なるものにして即ち和はなり、中は道の體、和の道の用なり ● 通じて行はら、道 ● 中和の二者行はれて天地も感應し萬物も生育す

也者。天下之達道也。致中和。天地位焉。萬物育焉。

右第一章。子思述所傳之意。以立言。首明達道之本原。出於天而不可易。其實體。備於己而不可離。次言存養省察之要。終言聖神功化之極。蓋欲學者於此。反求諸身。而自得之。以去夫外誘之私。而充其本然之善。楊氏所謂一篇之體要。是也。其下十章。蓋子思引夫子之言。以終此章之義。

右第一章は、子思傳ふる所の意を述べて以て言を立つ。首めには道の本原は天に出でて而して易ふ可からず、其實體己に備つて、而して離る可からざるを明にす。次には存養省察の要を言ひ、終には聖神功化の極を言ふ。蓋し學者此に於し、諸を身に反求して、而して之れを自得し、以て夫の外誘の私を去て、而して其の本然の善を充さんことを欲す。楊氏の所謂一篇の體要是れなり。其の下十章は、蓋し子思夫子の言を引き、以て此章の義を終ふ。

● 君子が其の節を慎むは、天より賦與せられたるものを存養し省察するにあらざるなり ● 中和を致して天地位し萬物育すは、聖神功化の極なりといふべし ● 人には本來具はる所の天性は善あり ● 楊氏者は時、程氏の門人なり ● 子思は孔子の孫 ● 孔子

仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子而時中。小人之中庸也。小人而無忌憚也。

仲尼曰く、君子は中庸し、小人は中庸に反す。君子の中庸や、君子にして時に中す、小人の中庸に反するや、小人にして忌憚無きなり。

右第二章

子曰。中庸其至矣乎。民鮮能久矣。

孔子の字 中庸の行をなす 君子の徳ありて時と處とに因りて適當の行をなす 無遠慮にして思ひはさかる所なく思ふ通りの事をなす

子曰く、中庸は其れ至れるかな。民能くする鮮なきこと久し。

右第三章

子曰。道之不行也。我知之矣。知者過之。愚者不及也。道之不明也。我知之矣。賢者過之。不肖者不及也。

孔子の徳である 世に於てより民能くするなきこと久き以前よりなりの意 子曰く、道の行はれざるや、我れ之れを知る。知者は之れに過ぎ、愚者は及ばざるなり。道の明ならざるや、我れ之れを知る。賢者は之れに過ぎ、不肖者は及ばざるなり。人飲食せざる莫し、能く味を知る鮮きなり。

右第四章

子曰。道其不行矣夫。

中庸の道 其の理由 中庸の道 不才の人 道は踰る可からず而も人自ら禁せざる比喩

者不及也。人莫不飲食也。鮮能知味也。右第四章。

子曰く、道は其れ行はれざるか。

右第五章

子曰。舜其大知也與。舜好問而好察邇言。隱惡而揚善。執其兩端。用其中於民。其斯以爲舜乎。

智者は過ぎ思ふ不肖者は及ばず故に道は行はれざるかと歎ぜられたるなり 子曰く、舜は其れ大知なるか、舜問を好んで而して好みて邇言を察す。惡を隠して而して善を揚げ、其兩端を執つて、其中を民に用ふ。其れ斯れ以て舜たるか。

右第六章

子曰。人皆曰。予知。驅而納諸罟獲陷阱之中。而莫之

古への聖人舜帝なり 大なる智慧ある人 手近な話を注してきく 兩極端を去りて普通に行はるべきものを取りて政に用ひたり これが帝舜たる所以でせうか 子曰く、人皆予知ありと曰ふ。驅つて諸を罟獲陷阱の中に納れて、而して之を辟くるを知る莫きなり。人皆予知ありと曰ふ。中庸を擇んで、而して期月も守る



能はざるなり。

右第七章

● 自分自身 ● 罵り立てて、即ち利慾に迷ひ ● 若は魚を捕ふ具、獲て獸を捕る具、罔罟は善し穴即ち網の  
おな ● 一個月

子曰く、回の人たるや、中庸を擇び、一善を得れば則ち拳拳服膺して、而して  
之れを失はず。

右第八章

● 孔子の高節節制 ● 日夜に之れを遺忘すとも、拳々を捧げ持つこと、服膺は胸に引き附けておきぬこと

子曰く、天下國家は均しくす可きなり、爵祿は辭す可きなり、白刃は蹈む可き  
なり、中庸は能くす可からざるなり。

右第九章

● 平治ナリ ● 出来る ● 爵位俸給 ● 辭退 ● 以上の劉仁勇の三體事より以上に中庸を爲すは難事な  
り

子路強を問ふ。子曰く、南方の強か、北方の強か、抑も而の強か。寛柔以

知辟也。人皆曰予知。擇乎中庸。而不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>期月守<sub>レ</sub>也。右第七章。子曰。回之爲人也。擇<sub>レ</sub>乎中庸。得一善。則拳拳服膺。而弗<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>之矣。右第八章。子曰。天下國家可<sub>レ</sub>均也。爵祿可<sub>レ</sub>辭也。白刃可<sub>レ</sub>蹈也。中庸不可<sub>レ</sub>能也。右第九章。子路問。南方之強。與。北方之強。與。抑而強與。寛柔以教。不報<sub>レ</sub>無道。南方之強也。君子居之。衽<sub>レ</sub>金革。死而不<sub>レ</sub>厭。北方之強也。而強者居<sub>レ</sub>之。故君子和而不<sub>レ</sub>流。強哉矯。中立而不<sub>レ</sub>倚。強哉矯。國有道不<sub>レ</sub>變。塞焉。強哉矯。國無道至<sub>レ</sub>死。不<sub>レ</sub>變。強哉矯。右第十章。

て教へ、無道に報ぜざるは、南方の強なり。君子之みに居る。金革を衽として、  
死して厭はざるは、北方の強なり。強者之れに居る。故に君子は和すれども流れ  
ず、強なるかな矯。中立して而して倚らず、強なるかな矯。國道あれば、塞を  
變ぜず、強なるかな矯。國道なければ、死に至るも變ぜず、強なるかな矯。

右第十章

● 孔子の弟子仲由なり ● 教化行はれし南方人の強か但しは汝の質美する強か、而は汝な  
り ● 照厚質柔の徳 ● 人我れに無法の舉動ありとも返鞭をしない ● 兵器甲冑 ● 席のこと ● 柔和  
であるけれども不仕だに流れず ● 矯は強を形容する辭 ● 中正なる所に立つ ● 塞は不通なり、通達せ  
ざる處にして首領をいふ ● 平素の守る所を變ぜず

與。北方之強  
與。抑而強與。  
寛柔以教。不  
報<sub>レ</sub>無道。南方  
之強也。君子  
居之。衽<sub>レ</sub>金革。  
死而不<sub>レ</sub>厭。北  
方之強也。而  
強者居<sub>レ</sub>之。故  
君子和而不<sub>レ</sub>  
流。強哉矯。中  
立而不<sub>レ</sub>倚。強  
哉矯。國有道  
不<sub>レ</sub>變。塞焉。強  
哉矯。國無道至<sub>レ</sub>  
死。不<sub>レ</sub>變。強  
哉矯。右第十章。

子曰く、隠たるを素の怪しきを行ふ。後世述ぶる有らんも、吾は之れを爲さ  
ず。君子道に違ひて行ひ、半塗にして而して廢す、吾は已む能はず。君子は中  
庸に依る。世を遷れ知られずして而して悔いざる、唯聖者之れを能くす。

子曰。素隱行  
怪。後世有<sub>レ</sub>述  
焉。吾弗<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>之  
矣。君子違<sub>レ</sub>道  
而行。半塗而

廢。吾弗能已矣。君子依乎中庸。遯世不見知而不悔。唯聖者能之。右第十一章。君子之道。費而隱。夫婦之愚。可以與知焉。及其至也。雖聖人亦有所不知焉。夫婦之不肖。可以能行焉。及其至也。雖聖人亦有所不能焉。天地之大也。人猶有所不能。故君子語大。天下莫

右第十一章

● 世に隠れたる理窟を考へ出し。素は察に作るべしと云ふ ● 詭異の行 ● 後世にその名が傳はることありんも ● 徳ある人、但此の君子は次に訓ふ君子より少徳者なり ● 半途  
 君子の道は、費にして隱、夫婦の愚も、以て與り知る可し。其の至れるに及びてや、聖人と雖も、亦知らざる所あり。夫婦の不肖も、以て能く行ふ可し。其の至れるに及びてや、聖人と雖も、亦能くせざる所有り。天地の大なる、人猶ほ憊むる所有り。故に君子大を語れば、天下能く載する莫く、小を語れば、天下能く破る莫きなり。詩に云ふ、鳶飛んで天に戻り、魚淵に躍ると。其の上下に察なるを言ふ。君子の道は、端を夫婦に造す。其の至れるに及びてや、天地に察なり。  
 ● 君子の行ふ中庸の道は用廣く其の理は隠れて微なり ● 匹夫匹婦の意 ● 道の至極の所 ● 大徳の意  
 ● 人の天地にうちわ所あり、覆載生成の偏及び災異災神の其の正を得ざるが如き類 ● 天下の人の背負ひきれぬ ● 微小の物故に能く破る能はず ● 詩は大雅旱麓の篇の詩 ● 戻るに至るなり ● 君子の道

能載焉。語小天下莫能破焉。詩云。鳶飛戾天。魚躍于淵。言其上下察也。君子之道。造端乎夫婦。及其至也。察乎天地。

右第十二章。子思之言。蓋以申明首章道不可離之意也。其下八章雜引孔子之言。以明之。子曰。道不遠人。人之爲道而遠人。不可。以爲道。詩云。伐柯伐柯。其則不遠。執柯以伐柯。睨而視之。猶以爲遠。故君子以

右第十二章は、子思の言、蓋し以て首章の道は離る可からざるの意を申明するなり。其の下八章は、孔子の言を雜引して以て之れを明にす。

● かまねてあきらかにすること

子曰く、道は人に遠からず、人の道を爲して人に遠ければ、以て道と爲す可からず。詩に云ふ、柯を伐り柯を伐る、其則遠からずと。柯を執り以て柯を伐る、睨んで之れを視る、猶ほ以て遠しと爲す。故に君子は人を以て人を治め、改めて止む。忠恕道を遠ること遠からず。諸を己に施して願はずんば、亦人に施す勿れ。君子の道四、丘未だ一を能くせず。子に求むる所、以て父に事ふるは、未だ能はざるなり。臣に求むる所、以て君に事ふるは、未だ能はざるなり。弟に求

人治人。改而止。忠恕違道不遠。施諸己而不顧。亦勿施於人。君子之道四。丘未之聞也。所求乎子。以事父。未也。所求乎臣。以事君。未也。所求乎弟。以事兄。未也。所求乎朋友。先施之。未也。庸德之行。庸言之謹。有所不足。不敢不勉。有餘不敢盡。言顧行。行顧言。君子胡不慥慥爾。

人治人、改而止。忠恕違道不遠。施諸己而不顧。亦勿施於人。君子之道四、丘未之聞也。所求乎子、以事父、未也。所求乎臣、以事君、未也。所求乎弟、以事兄、未也。所求乎朋友、先施之、未也。庸德之行、庸言之謹。有所不足、不敢不勉。有餘不敢盡。言顧行、行顧言。君子胡不慥慥爾。

右第十三章

● 詩經商風何何篇の詩 ● 斧の柄を造るには今持てる斧の柄を標準とすれば足れり ● 人たる道を以て人の心を治め、其人を改めてそれ以上には跡をせぬ ● 己の心を盡し己を推して人に及ぼす心なり ● 孔子の名平常の德行 ● 丁寧にして忠實なること

素夷狄。行乎夷狄。素患難。行乎患難。君子無入而不自得焉。在上下位。不陵下。在上位。已而不陵上。正己而不求於人。則無怨。上不怨天。下不尤人。故君子居易以俟命。小人行險以徼幸。子曰。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。

君子は其位に素して行ひ、其外を顧はず、富貴に素しては富貴に行ひ、貧賤に素しては貧賤に行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ふ。君子入るとして自得せざる無し。上位に在りて下を陵がず、下位に在り

て上を援がす、己を正しくして人に求めずんば、則ち怨むなし。上天を怨みず、下人を尤めず。故に君子は易に居て以て命を俟つ、小人は險を行ひて以て幸を徼む。子曰く、射は君子に似たる有り、諸を正鵠に失すれば、反つて諸を其身に求む。

右第十四章

● 素は僅なり素より然る如くの意、朱註にては素を見在すと解す ● 其の境遇以外の事を思はず ● 野蠻何れに居るとも中庸の道を失はざるをいふ ● よりすがちない ● 其の平の境遇に居りて天命を俟つ ● 求むなり ● 正も鵠も皆矢のまことなり

命。小人行險以徼幸。子曰。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。

君子之道。辟如行遠。必自邇。雖辟如登高。必自卑。詩曰。妻子好合。如

君子の道は、辟へば遠きに行くに必ず邇き自するが如く、辟へば高きに登るに必ず卑き自するが如し。詩に曰く、妻子好合して、瑟琴を鼓するが如し、兄弟既に翁ひ、和樂し且つ耽しむ、爾の室家に宜しく、爾の妻孥を樂ましむと。子曰



鼓瑟琴兄弟既翕和樂且耽宜爾室家樂爾妻孥子曰父母其順矣乎

右第十五章

① 遠きに行くには近きよりするが如く家を治むるも亦近き妻子より始むるをいへるものなり ② 詩經小雅棠棣篇の詩 ③ 好く和合する事 ④ 瑟と琴との合奏に調子合へるが如し ⑤ 合なり ⑥ 樂しむなり ⑦ 夫婦中よろしく ⑧ 妻子 ⑨ 孔子は此詩を費して父母の心も其れ順にして家道成るといはれしなり

子曰鬼神之为德其盛矣乎視之而弗見聽之而弗聞體物而不可遺使天下之人齊明盛服以承祭祀洋洋乎如在其上如在其左右詩曰神之格思不可度思矧可射思夫微之顯誠之不可揜如也此夫

右十六章

① 鬼神は形なく聲なし ② 鬼神の徳は物の根幹となりて之をわかれることは出来ない ③ 齊は新戒なり明は深きなり ④ 詩經大雅抑の篇の詩 ⑤ 来るなり ⑥ 況んやなり ⑦ 厭忘して敬せずはをられぬ

子曰舜其大孝也與德爲聖人尊爲天子富有四海之內宗廟饗之

右第十六章

子曰く、舜は其れ大孝なるか。徳は聖人たり、尊きこと天子たり、富四海の内を有ち、宗廟之れを饗け、子孫之れを保つ。故に大徳あれば必ず其位を得、必ず其祿を得、必ず其名を得、必ず其壽を得。故に天の物を生ずる、必ず其材に因りて篤くす。故に裁つ者之れを培し、傾く者之れを覆へす。詩に曰く、嘉樂の君子は、憲憲たる令徳あり。民に宜しく人に宜しく、祿を天に受く、保佑して之れに命じ、天より之れを申ぬと。故に大徳ある者は必ず命を受く。

右第十七章

① 宗廟に祭れる祖先の神も舜の如き大孝の人が之れを祭れば喜んで其の祭をうけらるゝなり ② 保ち安んずるなり ③ よき評判 ④ 人柄なり ⑤ 篤は厚きなり ⑥ 眞直に立ちたる樹は雨露之を培養す、即ち氣至つて滋息するを云ふ ⑦ 前者の反對に氣反して遊散すること ⑧ 詩經大雅假樂篇の詩 ⑨ 令徳ある君子のこと ⑩ 盛なるかたち ⑪ 安じ助くること ⑫ 天命を受けて天子となるなり

詩曰嘉樂君子憲憲令徳宜民宜人受命于天保佑命之自天申之故大徳者必受命



賤也序事所以辨賢也旅酬下爲上所以以逮賤也燕毛所以序齒也踐其位行其禮奏其樂敬其所尊愛其所親事死如事生事亡如事存孝之至也郊社之禮所以事上帝也宗廟之禮所以祀乎其先也明乎郊社之禮禘嘗之義治國其如示諸掌乎。

右第十九章

● 武王周公は天下萬人の異端なき孝徳ある人といふべし ● それ孝の大なるものは先代の志を繼ぎ先代の事業を紹述するより大なるはなし ● 春秋に其の祖廟を脩めより以下は祭祀の禮をいふ ● 祭謂 ● 先祖の遺されたる衣服なり ● 四時折々の供饗 ● 宗廟の禮は天子は七廟、諸侯は五廟、卿は三廟、士は二廟にて、正面に祖先を祀り順序は左を昭とし右を穆とし右に二代左に三代右に四代とし祖先の外己れより前二代と順序して祀るは身分によつて差あり ● 公卿大夫士をいふなり ● 祭終りて衆人の酒を飲む時尊者をして各其の酒杯を長者に歌せしむ ● 宗廟の中は事に預るを以て祭となすを以て史賸者より爵威に飲盃するなり ● 祭後の宴をなす時に年齢に従つて席次を定むること、毛は頭髪 ● 社は地神を祭るなり、郊は野外なり、昔天子天神を祭るに郊外に於てせり ● 禘は夏の祭嘗は秋の祭なり ● 上帝祖先に敬事すれば國を治むること皆掌中の物を見るが如く容易なり

哀公問政。子曰。文武之政。布在方策。其人存。則其政舉。其人亡。則其政息。人道敏政。地道敏樹。夫政也者。蒲盧也。故爲政在人。取人以身。脩身以道。脩道以仁。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮所生也。在天下位不獲乎上。民不可得而治矣。故君子不可不脩其身而求好政。修其身而好政。則民自歸之。如水之就下。焉可禦之。君子之德。四時行焉。百物生焉。三代之禮。皆養也。故曰。君子之德。風也。小人之德。草也。君子之德。風。小人德。草。風吹草靡。德教加。小人化。

哀公問政を問ふ、子曰く、文武の政は、布きて方策に在り、其人存すれば、

布在方策。其人存。則其政舉。其人亡。則其政息。人道敏政。地道敏樹。夫政也者。蒲盧也。故爲政在人。取人以身。脩身以道。脩道以仁。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮所生也。在天下位不獲乎上。民不可得而治矣。故君子不可不脩其身而求好政。修其身而好政。則民自歸之。如水之就下。焉可禦之。君子之德。風也。小人之德。草也。君子之德。風。小人德。草。風吹草靡。德教加。小人化。

ば、則ち其の政舉り、其人亡すれば、則ち其政息む。人道は政に敏し、地道は樹するに敏し。夫れ政なる者は蒲盧なり。故に政を爲すは人に在り。人を取るに身を以てし、身を脩むるに道を以てし、道を脩むるに仁を以てす。仁は人なり、親を親むを大と爲す。義は宜きなり、賢を尊ぶを大と爲す。親を親むの殺、賢を尊ぶの等は、禮の生ずる所なり。下位に在りて上に獲られずんば、民得て治む可からず。故に君子は以て身を脩めざる可からず。身を脩めんとせば、以て親に事へざる可からず。親に事へんと思はば、以て人を知らざる可からず。人を知らんと思はば、以て天を知らざる可からず。天下の達道五、之れを行ふ所以の者三。曰く、君臣なり、父子なり、夫婦なり、昆弟なり、朋友の交なり。五つの者は天下の達道なり。知仁勇の三者は、天下の達徳なり。之れを行ふ所以の者一なり。或は生れながらにして之れを知り、或は學びて之れを知り、或は困みて之を知る、其の之を知るに及びては一なり。或は安じて之れを

身。思脩身。不可不以不事親。思事親。不可不以不知人。思知人。不可不以不知天。天下達道五。所以行仁者三。曰君臣也。父子也。夫婦也。昆弟也。朋友之交也。五者天下之達道也。知仁勇三者天下之達德也。所以行仁者一也。或生而知之。或學而知之。或困而知之。及其

行ひ、或は利して之れを行ひ、或は勉強して之れを行ふ。其の功を成すに及びては一なり。子曰く、學を好むは知に近く、力を行ふは仁に近く、恥を知るは勇に近し。斯の三者を知れば、則ち身を脩むる所以を知る。身を脩むる所以を知れば、則ち人を治むる所以を知る。人を治むる所以を知れば、則ち天下國家を治むる所以を知る。凡そ天下國家を爲むるに九經あり。曰く、身を脩むるなり、賢を尊ぶなり、親を親むるなり、大臣を敬するなり、羣臣を體するなり、庶民を子とするなり、百工を來すなり、遠人を柔ぐるなり、諸侯を懐くるなり。身を脩むれば則ち道立つ。賢を尊べば則ち惑はず、親を親めば則ち諸父昆弟怨みず。大臣を敬すれば則ち眩せず。羣臣を體すれば則ち士の報禮重し。庶民を子とすれば則ち百姓勤む。百工を來せば則ち財用足る。遠人を柔すれば則ち四方之れに歸す。諸侯を懐くれば則ち天下之れを畏る。齊明盛服し、禮に非れば動かす、身を脩むる所以なり。讒を去り、色を遠げ、貨を賤みて徳を尊ぶ、賢を勸

知レの一也。或安而行之。或利而行之。或勉強而行之。及其成功一也。子曰。好學近乎仁。知恥近乎勇。知斯三者。則知所以脩身。知所以脩身。則知所以治人。知所以治人。則知所以治天下國家矣。凡爲天下國家。有九經。曰。脩身也。尊賢也。親親也。敬大

むる所以なり。其の位を尊くし、其祿を重くし、其好惡を同じくす、親を親むるを勸むる所以なり。官盛にして任使せしむ、大臣を勸むる所以なり。忠信祿を重くす、士を勸むる所以なり。時に使ひて薄く斂す、百姓を勸むる所以なり。日に省し月に試み、既廢事に稱ふ、百工を勸むる所以なり。往を送り來を迎へ、善を嘉して不能を矜む、遠人を柔する所以なり。絶世を繼ぎ、廢國を擧げ、亂を治め危きを持し、朝聘は時を以てし、往に厚くして來に薄くす、諸侯を懐くる所以なり。凡そ天下國家を爲むるに九經有り。之れを行ふ所以は一なり。凡そ事豫めすれば則ち立ち、豫めざれば則ち廢す。言前に定まれば則ち踏す、事前に定まれば則ち困まず、行前に定まれば則ち疚しからず、道前に定まれば則ち窮せず。下位に在りて上に獲られざれば、民得て治む可からず。上に獲らるゝに道有り。朋友に信ぜられざれば上に獲られず。朋友に信ぜらるゝに道有り。親に順ならざれば朋友に信ぜられず。親に順なるに道有り。諸を身を反し



臣也。體二羣臣一也。子庶民也。來二百工也。柔二遠人也。懷二諸侯也。脩身則道立。尊賢則不惑。親親則諸父昆弟不怨。敬大臣則不眩。體羣臣則士之報禮重。子庶民則百姓勸。來二百工則財用足。柔二遠人則四方歸之。懷諸侯則天下畏之。齊明盛服。非禮不動。所以脩身也。去

て誠あらざれば親に順ならず。身を誠にするに道有り。善に明ならざれば身に誠あらず。誠は天の道なり、之れを誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中るは聖人なり。之れを誠にする者は善を選んで固く之れを執る者なり。博く之れを學び、審に之れを問ひ、慎で之れを思ひ、明に之れを辨じ、篤く之れを行ふ。學ばざる有り、之れを學びて能くせざれば措かざるなり。問はざる有り、之れを問ひて知らざれば措かざるなり。思はざる有り、之れを思ひて得ざれば措かざるなり。辨ぜざる有り、之れを辨じて明ならざれば措かざるなり。行はざる有り、之れを行ひて篤からざれば措かざるなり。人一にして之れを能くすれば己之れを百にす。人十にして之れを能くすれば、己之れを千にす。果して此道を能くすれば、愚と雖も必ず明に、柔と雖も必ず強し。

右第二十章

讒遠色。賤貨而責德。所以勸賢也。尊其位。重其祿。同其好惡。所以勸親也。官盛任使。所以勸大臣也。忠信重祿。所以勸士也。時使薄斂。所以勸百姓也。日省月試。既稟稱事。所以勸百工也。送往迎來。嘉善而矜不能。所以絕遠人也。繼絕世。舉廢國。治亂持危。朝聘以時。厚往薄來。所以懷諸侯也。凡爲天下國家。有九經。所以行一也。

① 書籍に書き残されてある ② 人道は政治によりて直ぐ變化を生ず、地道の樹木に於ける如し ③ 輕厲即ち細勝蜂なり、政治は細腰蜂が他蟲の子を變化して己の子とするが如く政治も民心を變化して己に心服せしめざる可からず ④ 政を爲すには賢者を必要とす ⑤ 賢者を得るの則は己自身の身を以てす ⑥ 己が賢者となるには仁義を以て其の身を修む ⑦ 漸を以て殺滅するなり ⑧ 等級なり ⑨ 先王の道をいふ、天下に通じて行はるる道 ⑩ 一の意義につきては諸説あるも朱子説の一は則ち誠なりとするを最可となす ⑪ 勞して學びて之れを知るをいふなり ⑫ 愛名を貪るを謂ふ ⑬ 人に若かざるを恥づるなり ⑭ 知仁勇のこの三者を以て基となす ⑮ 九つの大切なる道 ⑯ うけ納るゝなり ⑰ 深く變ずるをいふ ⑱ 賢を尊べば任ずる所明らかに謀る所の善良なるを以て感はざるなり ⑲ 信任厚ければ小臣之れを離間することなく故に事に臨みて敗せざるなり ⑳ 歸服するなり ㉑ 己が身を新戒し盛衰をつくるにあらずれば苟も退退せざるは之れ即ち節身なり ㉒ 人を惡し様にいふなり ㉓ 財貨即ちたからなり ㉔ 好むこととにくむことなり、其の好惡を同じくすとは特に好惡する所あらず、蓋し同姓に於ては恩同じからずと雖も義必ず同じければなり ㉕ 大臣は其の屬官に任使する所あり全くその任使に委するをいふ ㉖ 忠信ある者には其の諫を重くするなり ㉗ 之れを使ふに時を以てすなり ㉘ 既服は月俸のこと ㉙ 諸侯國に歸れば天子より往きて厚く之れに賜ふなり ㉚ 諸侯よりの貢獻を薄くするなり ㉛ 一は誠なり ㉜ 踏くなり ㉝ 病しきなり ㉞ 得るなり、いはば臣にして君の信任を得ざれば其の位に居ても民を治むることが出来ないとなり ㉟ 天性のまゝにて誠なるは天道の自然なれど人々皆然る能はずして力めて天道の誠に達するなり ㊱ 善を擧げて固く之れを執るは道に入るの方法なり



凡事豫則立。不豫則廢。言前定則不跲。事前定則不困。行前定則不疚。道前定則不窮。在下位不獲乎上。民不可得而治矣。獲乎上。有道不信乎朋友。不獲乎上。矣。信乎朋友。有道不順乎親。不信乎朋友。矣。順乎親。有道。反諸身不誠。不順乎親。矣。誠身有道。不明乎善。不誠乎身。矣。誠者。天之道也。誠之者。人之道也。誠者不勉而中。不思而得。從容中道。聖人也。誠之者。擇善而固執之者也。博學之。審問之。慎思之。明辨之。篤行之。有弗學。學之弗能。弗措也。有弗問。問之弗知。弗措也。有弗思。思之弗得。弗措也。有弗辨。辨之弗明。弗措也。有弗行。行之弗篤。弗措也。人一能之。己百之。人十能之。己千之。果能此道矣。雖愚必明。雖柔必強。

右第二十章。

自誠明謂之性。自明誠謂之教。誠則明矣。明則誠矣。

右第二十一章。子思承上章夫子天道人道之意而立言也。自此

誠なるより明なる、之れを性と謂ひ、明なるより誠なる、之れを教と謂ふ。誠なれば則ち明に、明なれば則ち誠なり。

● 至誠なるによりて善に明らかなるは之れ聖人の性なる者なり、善に明らかなるより至誠なる之れを教といふ

右第二十一章、子思上章、夫子天道人道の意を承けて言を立つるなり。此れより以下十二章は、皆子思の言にして、以て此章の意を反覆推明せり。

● 繰り返して意味を明らかにするなり

以下十二章。皆子思之言。以反覆推明此章之意。

唯天下の至誠は、能く其性を盡くすを爲せば、則ち能く人の性を盡くす。能く人の性を盡くせば、則ち能く物の性を盡くす。能く物の性を盡くせば、則ち以て天地の化育を贊す可し。以て天地の化育を贊す可ければ、則ち以て天地と參たる可し。

右第二十二章

● 至誠なる人は人の具有する性を盡く行ふことなすから遺憾なく人の性を盡くす ● 人にも遺憾なく其の性を行はしむ ● 萬物をして皆其性を成ぐることを得せしむ ● 天地の萬物を變化生育する功をたすけ ● 造物者と其功を並ぶるに至り、天と地と人と並び立ちて三つと爲るをいふ

其次は曲を致す。曲なれば能く誠有り、誠あれば則ち形る、形るれば則ち著しく、著しければ則ち明に、明なれば則ち動く、動けば則ち變じ、變すれば則ち化す。唯天下の至誠は、能く化することを爲す。

唯天下至誠。爲能盡其性。則能盡人之性。則能盡人物之性。則能以贊天地之化育。則可以與天地參矣。

右第二十二章。其次致曲。曲能有誠。誠則形。形則著。著則明。明則動。

動則變、變則化。唯天下至誠爲能化。

右第二十三章

至誠之道。可以前知。國家將興。必有祲祥。國家將亡。必有妖孽。見乎蓍龜。動乎四體。禍福將至。善必先知之。不善必先知之。故至誠如神。

右第二十四章

右第二十三章

● 細小の意なり細小の事にまて心を用ひて之れを吾一身に得る機にすれば矢張誠となる

至誠の道は、以て前知す可し。國家將に興らんとすれば、必ず祲祥有り。國家將に亡びんとすれば、必ず妖孽あり、善龜に見はれ、四體に動く。禍福將に至らんとすれば、善も必ず先づ之れを知り、不善も必ず先づ之れを知る。故に至誠は神の如し。

右第二十四章

● 蓍出度きこと ● わざわび ● 占なり、等とは「メトギ」と云ふ草、龜ノ甲と土に占ト用ふ ● 動作成儀の問をいふ

誠は自ら成すなり。而して道は自ら道なり。誠は物の終始なり、誠なら

而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者非自成己而已也。所以成己也。成物知仁也。成物知性也。故時措之宜也。

右第二十五章

ざれば物なし。是の故に君子は之れを誠にするを貴しとなす。誠は自ら己を成すのみに非ざるなり、物を成す所以なり。己を成すは仁なり、物を成すは知なり。性の徳なり、外内を合するの道なり。故に時に之れを措きて宜しきなり。

右第二十五章

● 誠は性のまゝなる己の徳を成熟すと也 ● 中庸の道とは人々が己れの身を道に入る道との義也

故至誠無息。不息則久。久則遠。悠遠則博。博厚則高明。博厚所以載物也。高明所以覆物也。悠久所以成之。

故に至誠は息むなし。息まざれば則ち久し。久しければ、則ち微あり。微あれば則ち悠遠なり。悠遠なれば則ち博厚なり。博厚なれば則ち高明なり。博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆ふ所以なり。悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆なし。此の如き者は見えずして章はれ、動かすして變じ、爲すことなくして成る。天地の道は、一言にして盡くす可きな

物也博厚配地高明配天。悠久無疆如。此者不見而章。不動而變。無爲而成。天地之道。可二一。言而盡也。其爲物不貳。則天地之道博也。厚也。高也。明也。悠也。久也。今天天斯昭昭之多。及其無窮也。日月星辰繫焉。萬物覆焉。今夫地一撮土之多。及其廣

り。其の物たる貳ならず、則ち其の物を生ずる測られず。天地の道は博なり、厚なり、高なり、明なり、悠なり、久なり。今夫れ天は、斯の昭昭の多きなり。其の窮りなきに及んでや、日月星辰繫り、萬物覆はる。今夫れ地は、一撮土の多きなり。其の廣厚なるに及んでは、華嶽を載せて而して重しとせず。河海を振めて洩らさず、萬物載せらる。今夫れ山は、一卷石の多きなり。其の廣大なるに及んでは、艸木之れに生じ、禽獸之れに居り、寶藏興る。今夫れ水は、一勺の多きなり。其の測られざるに及んでは、鼉鼉蛟龍魚鼈生じ、貨財殖す。詩に云ふ、維れ天の命、於穆として已ます。蓋し天の天たる所以を曰ふ。於乎顯ならざらんや、文王之徳の純と。蓋し文王之文たる所以を曰ふなり。純も亦已まざるなり。

右第二十六章

● 猶ほ效驗の如きなり ● 悠久とは至誠の徳既に博厚高明にして天地に配し又其の長久に之れを行はんと欲するをいふ ● 至誠二なく乃ちよく萬物を生ずる測られざるなり ● 天は昭昭の明を積みたつて過ぎず ● 一つまみの土 ● 華山にして文王五嶽の一なり ● 一個の石 ● 一掬の水のこと ● 電に龍に似て大なるもの、龍は蜥蜴の大なるもの、蛟はみづち、鱓は鱓なり ● 財寶増加す ● 特經周顯維天之命篇の詩 ● 於は款詳なり ● 深遠の貌 ● 純一にして雜らざれば已まざる也 ● 周代の聖王なり文王之徳も天地と同じくまじらず休まざるなり

厚。載華嶽而不重。振河海而不洩。萬物載焉。今夫山一卷石之多。及其廣大。艸木生之。禽獸居之。寶藏興焉。今夫水一斗之多。及其不涸。鼉鼉蛟龍魚鼈生焉。貨財殖焉。詩云。維天之命。於穆不已。蓋曰天之所以爲天也。於乎不顯。文王之徳之純。蓋曰文王之所以爲文也。純亦不已。

大哉聖人之道。洋洋乎發育萬物。峻極于天。優大哉禮儀三百。威儀三千。待其人而後行。故曰。苟不至德。道不凝焉。故君子尊

大なるかな聖人の道、洋洋乎として萬物を發育し、峻として天を極む。優優として大なるかな、禮儀三百、威儀三千。其人を待つて而る後に行はる。故に曰く、苟も至徳ならざれば、至道凝す。故に君子は徳性を尊んで問學に道る。廣大を致めて精微を盡くす。高明を極めて中庸に道る。故を温ねて、新を知り、敦厚にして禮を崇ぶ。是の故に、上に居つて驕らず、下と爲りて倍かず、國道有れば、其言以て興るに足り、國道なければ、其默以て容らるゝに足る。詩に曰ふ、既に明

且つ哲、以て其身を保つと。其れ此れを之れ謂ふ與。

右第二十七章

① 下文の萬物を愛育し、及び天を擁護の兩節を包含していへる句 ② 道徳充滿したる貌 ③ 高大なるをいふ  
 ④ 充足して餘あるの意 ⑤ 禮儀とは經禮のこと、威儀とは曲禮なり、之れ道の至小に入りて闕然する所なきを  
 いふ ⑥ 其人とは河任者、而後ほ初めて意なり ⑦ 己の徳を尊んで其を得るに問學により徳の廣大を致し願は  
 精勤を盡くす ⑧ 徳高く學明かになりて後中庸の徳による ⑨ 往古の事を研究して新知識を得 ⑩ 人情の  
 手厚きなり是の故に中庸の徳ある人は上となるとも下となるとも又亂世にても治世にても一身を保つことを得る也  
 ⑪ 詩經大雅蕤民篇の詩 ⑫ 事物に明らかにしてさときこと

徳性二而道二問  
 學。致二廣二大二而  
 盡二精二微二極二高  
 明二而道二中庸。  
 溫二故二知二新。敦  
 厚二以二崇二禮。是  
 故二居二上二不二驕。  
 爲二下二不二倍。國  
 有二道二其言足二  
 以興二國無二道  
 其默足二以容二詩  
 曰。既明且哲。以保二其身。其此之謂與。  
 右第二十七章。

子曰。愚而好二  
 自用。賤而好二  
 自專。生二乎今  
 之世。反二古之  
 道。如此者。裁  
 及其身。不者也。  
 非天子不議

子曰く、愚にして自ら用ふるを好み、賤にして自ら專にするを好み、今の世に生れて、古の道に反へる。此の如き者は、裁其身に及ぶ者なり。天子に非ざれば、禮を議せず、度を制せず、文を考へず。今天下、車軌を同じうし、書文を同じうし、行倫を同じうす。其位有りと雖も、苟も其徳なければ、敢て禮樂を

禮二不制度。不  
 考文。今天下  
 車同軌書同  
 文。行同倫。雖  
 有其位。苟無  
 其徳。不三敢作  
 禮樂。一焉。雖  
 有其徳。苟無  
 其位。亦不三敢  
 作禮樂。一焉。子  
 曰。夏禮。吾杞  
 不足二徵也。吾  
 宋二殷禮。有  
 存焉。吾學二周  
 禮。今用之。吾  
 從二周。  
 右第二十八章。

作らず。其徳ありと雖も、苟も其位なければ、亦敢て禮樂を作らず。子曰く、吾れ夏の禮を説けども、杞は徴とするに足らず。吾れ殷の禮を學ぶ、宋の存するあり。吾れ周の禮を學ぶ、今之れを用ふ。吾れは周に従はん。

右第二十八章

① 此章は第廿七章の高明を極めて中庸によるの言を推明して愚にして自ら用ふるを好む等は中庸にあらざるを説く ② 災に同じ ③ 諸侯の間に用ふる文字を一定するについて考へず ④ 車輪の寸法、書籍の文字、人倫の行儀を同じくす之れ等は皆天子の定められたる所にして天下一致の意なり ⑤ 禮樂を作るとは必ず聖人天子の位にあるなり、天子の位と聖人の徳とあり一初めて禮樂を作るべきいふ ⑥ 杞は夏の後にして宋は殷の後なり、徴とは證するの義なり、孔子が申さる、には吾能く夏の禮を説けども願ふに杞國にて考證するに足らざるなり ⑦ 現今周禮行はる

天下に王とし、三重を有せば、其れ過寡きか、上なる者は、善と雖も微なし、微なければ信ぜられず、信ぜざれば民従はず、下なる者は、善と雖も尊から

王天下有三  
 重焉。其寡過  
 矣乎。上焉者。







右第三十章。

唯天下至聖。爲能聰明睿知。足以有臨也。寬裕溫柔。足以有容也。發強剛毅。足以有執也。齊莊中正。足以有敬也。文理密察。足以有別也。溥博淵泉。而時出之。溥博如天。淵泉如淵。見而民莫不敬。言而民莫不信。行而民莫不说。是以聲名

唯天下の至聖は、能く聰明睿知、以て臨むあるに足るなり。寛裕溫柔、以て容るゝ有るに足るなり、發強剛毅、以て執る有るに足るなり、齊莊中正、以て敬する有るに足るなり、文理密察、以て別つ有るに足るなり、溥博淵泉にして、時に之れを出だす、溥博は天の如く、淵泉は淵の如く、見て民敬せざるなく、言うて民信ぜざるなく、行うて民説ばざるなし。是を以て聲名中國に洋溢し、施て賢賢に及ぶ。舟車の至る所、人力の通する所、天の覆ふ所、地の載する所、日月の照す所、霜露の降つる所、凡そ血氣ある者は尊親せざる莫し。故に天に配すと曰ふ。

右第三十一章

天下の聖人と云ひて暗に孔子を指すか 耳きとくすぐれたる智慧のあること、即ち聖人は聰明睿知にして下に臨みて政を爲すの明あり 賢者進まにして衆人を容る、弘量あり 發強剛毅にして我が行ふ所を固守する意あり 齊莊中正にして人より畏敬せらる、徳あり 文理密察にして是非利害を識別する人なり

洋溢乎中國。一施及鬻。猶舟車所至。人力所通。天之所覆。地之所載。日月所照。霜露所降。凡有血氣者。莫不尊親。故曰配天。

而して以上の五徳を身に積みて泉流るゝが如く時に之れを出すを以て衆人之れを敬し之れを信じて之れを説ぶ其の功は天の如く大なり、溥博は所き意、淵泉は長き意 説は悦なり 賜欬なり、南なるを譽、北なるを貶といふ 其の徳の及ぶ所廣大なる天の如きをいふなり

唯天下至誠。爲能經綸天下之大經。立天下之大本。知天地之化育。夫焉有所倚。肫肫其仁。淵淵其淵。浩浩其天。苟不固聰明聖知。達天德者。其孰知之。

唯天下の至誠は、能く天下の大經を經綸し、天下の大本を立て、天地の化育を知らんと爲す。夫れ焉ぞ倚る所あらん。肫肫として其れ仁なり。淵淵として其れ淵なり。浩浩として其れ天なり。苟も固に聰明聖知天徳に達せるものにあらずんば、其れ孰か能く之れを知らん。

右第三十二章

性の至誠なる者、孔子を指すか 天下を經綸し天下の大本たる中の徳を立て、天地化育の道を知るに至る 一方に偏倚することなく 聖誠にして仁となり 淵の如く深し、靜深の貌 天の如く大なり、廣大の貌 聰明聖知天の徳を得し者即ち聖人に非ずば聖人を知る能はず

右第三十二章。

詩曰。衣錦尚絺。惡其文之  
 著也。故君子  
 之道。闇然而  
 日章。小人  
 之道。的然而  
 日章。君子  
 之。昭昭也。而  
 文之。溫而理。  
 知遠之。近。知  
 風之。自。知。微  
 之。顯。可。與。入  
 德。矣。詩云。潛  
 雖。伏。矣。亦。孔  
 之。昭。故。君子  
 內。省。不。疚。無  
 惡。於。志。君子  
 之。所。不。可。及  
 者。其。唯。人。之  
 所。不。見。乎。詩

詩に曰く、綿を衣て絺を尚ふと。其文の著るゝを惡むなり。故に君子の道は、闇然として日に章かに、小人の道は、的然として日に比ぶ。君子の道は、淡にして厭はれず、簡にして文、温にして理。遠の近きを知り、風の自るを知り、微の顯を知る。輿に徳に入る可し。詩に云ふ、潛まりて伏すと雖も、亦孔だ之れ昭と。故に君子は内に省みて疚しからず、志に惡む無し、君子の及ぶ可からざる所は、其れ唯人の見れざる所か。詩に云ふ、爾の室に在るを相るに、尚くは屋漏に愧ぢざれと。故に君子は動かすして敬し、言はずし信ず。詩に曰く、奏假して言ふなく、時に争ふと有る靡しと。是の故に君子は賞せずして民勸め、怒らずして民鉄鉞より威る。詩に曰く、顯ならざらんや惟れ徳、百辟其れ之れに刑ると。是の故に君子は驚恭にして天下平なり。詩に曰ふ、予明德を懷ふ、聲と色とを大にせじと。子曰く、聲色の以て民を化するに於けるは、未なり。詩に曰く、徳の輪こと毛の如しと。毛は猶ほ倫有り。上天の載は

聲もなく、臭もなしと。至れり。

云。相。在。爾。室。  
 尚。不。愧。于。屋  
 漏。故。君。子。不  
 動。而。敬。不。言  
 而。信。詩。曰。奏  
 假。無。言。時。靡  
 有。爭。是。故。君  
 子。不。賞。而。民  
 勸。不。怒。而。民  
 威。於。鉄。鉞。詩  
 曰。不。顯。惟。徳。  
 百。辟。其。刑。之。  
 是。故。君。子。篤  
 恭。而。天。下。平。  
 詩。云。予。懷。明  
 徳。不。大。聲。以  
 色。子。曰。聲。色  
 之。於。以。化。民。末。也。詩。曰。徳。輪。如。毛。毛。猶。有。倫。上。天。之。載。無。聲。無。臭。至。矣。

● 詩經。國風衛碩人の詩 ● 美錦の衣を着て其上に單衣を加ふとあるのは、錦が餘り派手過ぎるを避くるなり ● 之れと同じく君子の道も聞きが如くにして日に章かなり中庸は常行の道なれば日に比ぶが如くも千譲ぜざる事の出来ざる道なり ● 小人の道はきら／＼すれども漸次消失す、一時人目を惹くが如く道は中庸にあらざるもの味薄きに似たるもの ● 風化の從つて來る所を知る ● 微細なる事程顯れやすきを知る ● 詩經小雅正月の篇の詩 ● 經詩大雅抑の篇の詩 ● 家屋の西北隅、中雷の神を祭る所といふ、人の到らざる所なり ● 詩經周頌祖の篇の詩 ● 姜は進むなり假は格なり至なり、神前に進みて神と一致するにあり ● 君子は此の道を守るを以て自然に人に敬稱せられ人々其の徳に懐くを以て終には刑賞を用ひずして天下を治むることを得るに至る ● 鉄は鎌の類、鉞は斧の長きもの、皆刑具なり ● 詩經周頌烈文の篇の詩 ● 百辟は衆君の意、故に諸侯といふ ● 詩經大雅皇矣の篇の詩 ● 予は我なり ● 猶は貴からずといふが如し ● 言語と顔色とにて民を化するは根本の法に非ず ● 詩經大雅烝民の詩 ● 徳の用ひ易きは毛の如く軽しと云へども毛は尚比較すべき類あり以て十分の形容とはいへず ● 詩大雅文王篇の辭に上天の載は聲もなく臭もなしとあるに至つて始めて至極といふべし

右第三十三章。子思前章極致之言。反求其本。復自下學爲己。謹獨之事。推而言之。以馴致乎篤恭。而天下平之盛。又贊其妙。至於無聲無臭。而後已焉。蓋舉一篇之要。而約言之。其反復丁寧示人之意。至深切矣。學者其可不盡心乎。

右第三十三章、子思前章極致の言に因りて、其本を反求し、復た下學して己の爲にし、獨を謹むの事自ら、推して之れを言ひ、以て篤恭にして天下平なるの盛に馴致し、又其妙を贊して、聲無く臭無きに至りて、而して後已む。蓋し一篇の要を舉げて之れを約言す。其反復丁寧人に示すの意、至りて深切なり。學者其れ心を盡さざる可けんや。

● 前章極致の言とは天地鬼神至誠等をいふ ● 其本とは第二十七章以下中庸君子小人屋漏に備ぢず等をいふ ● あつくうやくしきこと ● 妙なり

中庸 庸終

論語

朱熹集註序說

史記世家曰。孔子名丘。字仲尼。其先宋人。父叔梁紇。母顏氏。以魯襄公二十二年庚戌之歲十一月庚子。生孔子於魯昌平鄉陬邑。爲兒嬉戲常陳俎豆。設禮容。及長爲委吏。料量平。安史本作季氏更。景遷云。一爲司職吏。當蕃息。養。見周禮牛人。讀爲。與材同。蓋。適。周問禮於老子。既反而弟子益進。昭公十五年甲申。孔子年三十五。昭公奔齊。魯亂。於是適齊。爲高昭子家臣。以通乎景公。政。二。事。公欲封以尼谿之田。晏嬰不可。公惑之。有。季。老之。孔子遂行。反乎魯。定公元年壬辰。孔子年四十三。而季氏強僭。其臣陽虎作亂。專政。故孔子不仕而退。修詩書禮樂。弟子彌衆。九年庚子。孔子年五十一。公山不狃。以費畔。季氏召孔子。欲往而卒不行。有。子。路。定公以孔子爲中都宰。一年四方則之。遂爲司空。又爲大司寇。十年辛丑。相定公會。齊侯于夾谷。齊人歸魯侵地。十二年癸卯。使仲

由爲季氏宰。墮三都。收其甲兵。孟氏不肯墮。成圍之不克。十四年乙巳。孔子年五十六。攝行相事。誅少正卯。與聞國政。三月魯國大治。齊人歸女樂以沮之。季桓子受之。郊又不致。膳俎於大夫。孔子行。魯世家以此以上適衛主於子路妻兄顏濁鄒家。孟子作適陳過匡。匡人以爲陽虎而拘之。有說謂後及文。既解還衛。主適伯玉家。見南子。有矢子感及去適宋。司馬桓魋欲殺之。有天生德語及。微服過宋事。又去適陳。主司城貞子家。居三歲而反。于衛。靈公不能用。有三年有。成之語。晉趙氏家臣佛肸以中牟畔。召孔子。孔子欲往。亦不果。有子路擊白語及。荷衰過門語。將西見趙簡子。至河而反。又主適伯玉家。靈公問陳。不對而行。復如陳。以孟子所記。歎詞。爲主司城貞子時。爲疑不然。孔子如蔡及葉。有葉公問答子路不對。謂精耕。荷衰蓋語。蓋語。蓋所記。本於此一時期。而所記有異。同耳。夫人等事。史記云。於是楚昭王使人聘孔子。孔子將往。禮而陳蔡大夫發徒圍之。故孔子絕糧於陳。蔡之問。有他見。及告子實一楚之語。楚昭王將以書社地封孔子。令尹子西不可。乃止。無此理。則有接輿之歌。又反乎衛。時靈公已卒。衛君輒欲得孔子爲政。有魯衛兄弟。及答子實。與齊子路正名之語。而冉求爲季氏將。與齊戰有功。康子

乃召孔子。而孔子歸魯。實哀公之十一年丁巳。而孔子年六十八矣。有自哀公及康子語。然魯終不能用孔子。孔子亦不求仕。乃叙書傳禮記。有祀宋桓魋。刪詩正樂。有語大師及樂正之語。序易象繫象說卦文言。有復我歌。年之語。弟子蓋三千焉。身通六藝者七十二人。弟子至回最賢。蓋死後。唯曾參得傳孔子之道。十四年庚申。魯西狩獲麟。有夏我知之歌。孔子作春秋。有知我罪我等語。論語。明年辛酉。子路死於衛。十六年壬戌。四月己丑。孔子卒。年七十三。葬魯城北泗上。弟子皆服。心喪三年。而去。唯子貢廬於冢上。凡六年。孔子生鯉。字伯魚。先卒。伯魚生伋。字子思。作中庸。子思學於孟子。子受。案子思之門人。

何氏曰。魯論語二十篇。齊論語別有問王知道。凡二十二篇。其二十篇中。章句頗多。於魯論古論出。孔子壁中。分堯曰下章。子張問。以爲一篇。有兩子張。凡二十一篇。篇次不與齊魯論同。

程子曰。論語之書。成於有子。曾子之門人。故其書獨二子以子稱。

程子曰。讀論語。有讀了全然無事者。有讀了後其中得一兩句喜者。有讀了後知好之者。



有讀了後直不知手之舞之足之蹈之者。

程子曰。今人不會讀書。如讀論語。未讀時。是此等人。讀了後。又只是此等人。便是不會讀。程子曰。願自十七八讀論語。當時已曉文義。讀之愈久。但覺意味深長。

### 論語卷之一

#### 學而第一

子曰。學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。○有子曰。其爲人也。孝弟而好犯上者。鮮矣。不好犯上。而好作亂者。未之有也。君子務

子曰く、學びて時に之を習ふ、亦説しからずや。朋遠方より來る有り、亦樂しからずや。人知らずして慍みず、亦君子ならずや。○有子曰く、其の人と爲りや孝弟にして、而して上を犯すを好む者は鮮し。上を犯すを好まずして、而して亂を作すを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む、本立ちて而して道生ず、孝弟なる者は其れ仁の本たるか。○子曰く、巧言令色、鮮し仁。○曾子曰く、吾れ日に吾が身を三省す、人の爲めに謀りて患ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、傳習はざるか。○子曰く、千乗の國を道むるには、事を敬みて信、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てす。○子曰く、弟子入りては



本。木立而道生。孝弟也者。其爲仁之本。與。○子曰。巧言令色。鮮矣仁。○曾子曰。吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳不習乎。○子曰。道千乘之國。敬事而信。節用而愛人。使民以時。○子曰。弟子入則孝。出則弟。謹而信。汎愛衆而親仁。行有餘力。

則ち孝、出でては則ち弟、謹んで而して信、汎く衆を愛して仁に親しむ。行ひて餘力有れば、則ち以て文を學べ。○子夏曰く、賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致し、朋友と交り、言ひて信有らば、未だ學ばすと曰ふと雖も、吾は必ず之を學びたりと謂はん。○子曰く、君子重からざれば則ち威あらず、學べば則ち固ならず、忠信を主とし、己に如かざるものを友とする無れ。過たば則ち改むるに憚る勿れ。○曾子曰く、終を慎み遠きを追へば、民の徳厚きに歸す。

●孔子をいふ、子はもと男子の尊稱にして有徳の稱(先生の仰せあるやう)といふが如き也 ●學は效法 先覺の爲す所をまなびて、而して時となく之を習ひ、一回は一回之に習熟するに至る、豈に心の眞悅を覺えざらんや ●同志の士をいふ ●心に形を合む、むつとする ●孔子の弟子 ●父母によく仕へ兄弟は仲よくすること ●朱子は爲の字を行ふと訓じたれども本邦所傳の論語の古寫本には爲の一字なし、古來學西の議論のある所にて、之れ全く仁の見方の相違に基づく、朱子は仁は愛の理心の徳なりと説くも、孔子の所謂仁なるものは、思ふに本能的に人心に存する愛情を修養實現して遂に高遠なる徳に到達せるものを指せるが如し、古寫本に従ひて爲の一字を衍文とすべし、今姑く私意を以て訓ず ●書葉上手に顔色をよくするものには誠の人がすくないと

以學文。○子夏曰。賢賢易色。事父母能竭其力。事君能致其身。與朋友交言而有信。雖曰未學。吾必謂之學矣。○子曰。君子不重則不威。學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。○曾子曰。慎終追遠。民徳歸厚矣。

の意 ●孔子の弟子 ●三省の三は三度又は三個の義にあらざればしほの義なり ●親切 ●師より教はりしものを習熟せざる事なきか ●大諾侯の國にして兵車千乘を以て治すべし ●治なり ●百訓のひまの時 ●人の弟たり子たるもの縁間の目的は躬行實踐にあることを説きたるものなり ●孔子の弟子 ●賢者賢者として尊崇し、好色の念にかよふ、蓋し好色は人心自然の調に出づ、この心をさながら尊賢の念にかよふ也 ●十二分につくすの義 ●ゆだねること ●重みがなければ威嚴がない ●先覺に學べば固陋に陥らず ●邪喪の義 ●祖先の祭 ●民は人君に見做ひて其の風儀が敦厚となる

子禽問於子貢曰。夫子至於是邦也。必聞其政。求之與。抑與之與。子貢曰。夫子溫良恭儉讓。以得之。夫子之求之也。其

子禽子貢に問うて曰く、夫子是邦に至るや、必ず其政を聞けり、之れを求めたるか、抑も之れを與へたるか。子貢曰く、夫子は溫良恭儉讓以て之れを得たり、夫子の之れを求むるや、其れ諸れ人の之れを求むるに異なるか。○子曰く、父在せば其志を觀、父没すれば其行を觀る、三年父の道を改むる無きは、孝と謂ふ可し。○有子曰く、禮の和を用つて貴しと爲る、先王の道

諸異乎人之求之與。○子曰。父在觀其志。父沒觀其行。三年無改於父之道。可謂孝矣。○有子曰。禮之用。和爲貴。先王之道。斯爲美。小大由之。有所不行。知和而節。不可行也。○有子曰。信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。因不失其親。亦可宗。

斯れを美と爲す。小大之れに由れば、行はれざる所あり、和を知りて和すれども、禮を以て之れを節せざれば、亦行ふ可からざるなり。○有子曰く、信、義に近ければ、言復むべきなり、恭、禮に近ければ、恥辱に遠ざかる、因、其親を失はざれば、亦宗ぶべきなり。○子曰く、君子食は飽くことを求むる無く、居は安きことを求むる無し、事に敏にして、而して言を慎み、有道に就きて正さば、學を好むと謂ふ可きのみ。○有子曰く、貧にして諂ふこと無く、富んで驕る無きは何如。子曰く、可なり、未だ貧にして樂み、富みて禮を好む者に若かざるなり。子曰く、詩に云ふ、切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如く、其れ斯れの謂ひか。子曰く、賜や、始めて與に詩を言ふ可きのみ、諸に往を告げて、而うして來を知る者なり。○子曰く、人の己を知らざるを患へず、人を知らざるを患ふるなり。

● 子貢も子貢も皆共に孔子の弟子にして子貢は賢る兄弟子に當るものなり ● 孔子をさしていふ ● 同政

也。○子曰。君子食無求安。飽居無求安。敏於事而慎於言。就有道而正焉。可謂好學也已。○有子曰。貧而無諂。富而無驕。何如。子曰。可也。未若貧而樂。富而好禮者也。子曰。賜也。始可與言詩已矣。告諸往而知來者。○子曰。不患人之不己知。患不知人也。

● 其は子を指すとも父を指すともいふ ● 父の死後もよく立てたる道を守りて失はず ● 禮は儀を主とす故に和を以て始めて中を得、先王の道の美たる所ハ、此あり ● 萬事萬端只禮にのみれば行はれざる所あり ● 和を節するに禮を以てして事よく行はる ● 約束した事が義理になつてあるならば ● 復た踐むなり實行するをいふ ● 因は姻に通じ外族に親むをいひ親は内族のものに親むをいふ ● 朱註には因は依也、依る所の著其の親むべき人を失はずと解す ● 磨ぶなり ● 敏は敏捷にして詳しく丁寧にするなり ● 有道の人に就きて其是非を正す ● 充分ではないがまあいい ● 詩經にいふ所の切磋琢磨とは骨を折りて修養の功を積むこと ● 子貢は斯は端木名は賜 ● 古昔のことを告げて將來のことを悟るものなりとて感歎せざるなり ● 君子は誰之れを己れに求むるのみにて決して人に求むることなしと也

爲政第二

子曰。爲政以德。譬如北辰。居其所而衆星共之。

子曰く、政を爲すに徳を以てせば、譬へば北辰其所に居て衆星之れに共ふが如きなり。○子曰く、詩三百、一言以て之れを蔽へば、曰く思ひ邪無し。

星共之。○子曰。詩三百。一言以蔽之。曰。思無邪。○子曰。道之以政。齊之以刑。民免而無恥。道之以德。齊之以禮。有恥且格。○子曰。吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而君順。七十而從心所欲。不踰矩。○孟懿子問孝。子曰。無違。樊遲御。

○子曰く、之れを道くに政を以てし、之れを齊しくするに刑を以てすれば、民免れて恥づる無し。之れを道くに徳を以てし、之れを齊しくするに禮を以てすれば、恥づる有りて且つ格す。○子曰く、吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず。○孟懿子孝を問ふ、子曰く、違ふ無し。樊遲御たり、子之れに告げて曰く、孟孫孝を我に問ふ、我對へて曰く、違ふ無れと。樊遲曰く、何の謂ぞや。子曰く、生るには之れに事ふるに禮を以てし、死せるには之れを葬るに禮を以てし、之れを祭るに禮を以てす。○孟武伯孝を問ふ、子曰く、父母は唯其の疾を之れ憂ふ。○子游孝を問ふ、子曰く、今の孝は是れを能く養ふと謂ふ、犬馬に至るまで皆能く養ふ有り、敬せずんば、何を以て別たん。○子夏孝を問ふ、子曰く、色難し、事有れば弟子其の勞に服し、酒食有れば先生に饌す、會て是を以て孝と爲るか。○子曰く、吾れ回と言ふ、

子告之曰。孟孫問二孝於我。樊遲曰。何謂也。子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。○孟武伯問孝。子曰。父母唯其疾之憂。○子游問孝。子曰。今之孝者。是謂能養。至於犬馬。皆能有養。不敬何以別乎。○子夏問孝。子曰。色難。有事弟子服其勞。有酒食

終日違はざること愚なるが如し、退いて其私を省れば、亦以て發するに足れり、回や愚ならず。○子曰く、其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安する所を察れば、人馬んぞ度さんや、人馬んぞ度さんや。

① 辰は星のやどる所北辰は北極星、天下自然に之に歸するを形容していふ。② 向ふなり。③ 實は詩は三百十篇なるも三百とはその大略をいひたるものなり。④ 一口にいへば。⑤ 人の誠心の發露にて一點の邪思を含まざるもの也。⑥ 此章は道徳と政刑とを區別して國を治むるの内外を云ふ以て支那政教一致の理を知るべし。⑦ 天下の人民。⑧ 刑罰。⑨ 正すなり民自ら感服してその不正を正すを謂ふ。⑩ 此章は孔子一生の経験説を述べられしものなり。⑪ 自ら進んで學に志す。⑫ 知天命の三字につきては古來異説多きも就中劉寶楠の説等も下の生民をして各其所を得しめんとの天の使命を自覺せるなり。⑬ 何事なきとも耳に逆ふ事なきをいふ。⑭ 養の極、心と道とが全く合致せる境界をさしていふ。⑮ 魯の大夫なり。⑯ 禮に違ふなかれの意。⑰ 馬を御する御者。⑱ 孟懿子のこと、孟懿子の氏は仲孫なるを以ていふ。⑲ 孔子の弟子なり。⑳ 父母を所す、古註新註共に子を指すと爲せどもは父母となす説最も通アベシ。㉑ 孔子の弟子。㉒ 親に仕へて愛のみありて敬なくばその可なるを知らず。㉓ 孔子の弟子。㉔ 親に對する心の深愛面に表はれて滿面悅の色あるを難しとすと也。㉕ 父兄。㉖ 供するなり。㉗ 孔子の高弟顔淵。㉘ 發明。㉙ 以ははすなり人の行爲をいふ

先生饒。曾是以爲孝乎。○子曰。吾與回言。終日不違如愚。退而省其私。亦足以發。回也不愚。○子曰。視其所視。其所以由。察其所安。人焉廋哉。人焉廋哉。

以て其人の全自我を見ざるべし、豈よく誠匿し得んや

子曰。温故而知新。可以爲師矣。○子曰。君子不器。○子貢問君子。子曰。先行其言而後從之。○子曰。君子周而不比。小人比而不周。○子曰。學而不思則罔。思而不學則殆。○子曰。攻乎異端。斯害也

子曰く、故きを温ねて新しきを知る、以て師と爲る可し。○子曰く、君子は器ならず。○子貢君子を問ふ。子曰く、行ひを先にし、其の言は而して後に之れに従ふ。○子曰く、君子は周して比せず、小人は比して周せず。○子曰く、學びて思はざれば則ち罔し、思ひて學ばざれば則ち殆し。○子曰く、異端を攻むるは斯れ害あるのみ。○子曰く、由汝に之れを知るを誨へんか、之れを知るは之れを知ると爲し、知らざるは知らずと爲せ、是れ知るなり。○子張祿を干むるを學ぶ。子曰く、多く聞きて疑はしきを闕き、慎んで其餘を言へば、則ち尤め寡し、多く見て殆はしき闕き、慎んで其餘を行へば、則ち悔い寡し、言尤め寡く、行悔い寡ければ祿其中に在り。○哀公問うて曰く、何を爲さば則ち民服せ

已○子曰。由誨女知之乎。知之爲知之。不知爲不知。是知也。○子張學于祿。子曰。多聞闕疑。慎言其餘。則寡尤。多見闕殆。慎行其餘。則寡悔。言寡尤。行寡悔。祿在其中矣。○哀公問曰。何爲則民服。孔子對曰。舉直錯諸枉。則民服。舉枉錯諸直。則民不服。○季康子問。

ん。孔子對へて曰く、直きを擧げて諸を枉れるに錯げば則ち民服す、枉れるを擧げて諸を直きに錯げば、則ち民服せず。○季康子問ふ、民をして敬忠以て勸ましむるには之れを如何。子曰く、之れに臨むに莊を以てすれば、則ち敬す、孝慈なれば則ち忠、善を擧げて不能を教ふれば則ち勸まん。○或ひと孔子に謂つて曰く、子奚ぞ政を爲さざると。子曰く、書に云ふ、孝か惟れ孝、兄弟に友に、有政に施くと、是れ亦政を爲すなり、奚ぞ其れ政を爲すを爲ん。○子曰く、人にして信無くんば、其の可なるを知らず、大車輓無く、小車輓無くんば、其れ何を以て之れを行ん。○子張問ふ、十世知る可きや。子曰く、殷は夏の禮に因れり、損益する所知るべし、周は殷の禮に因れり、損益する所知る可し、其れ周に繼ぐ者或らば、百世と雖も知る可きなり。○子曰く、其鬼に非らずして之れを祭るは、詔ふなり、義を見て爲さるは、勇無きなり。

● 舊く見聞修得せる所を温習しそれによりて新を知る ● くりかへしく習ふ ● 君子は徳性が凡人と異なる



使民敬忠以勸。如之何。子曰。臨之以莊則敬。孝慈則忠。舉善而教不能則勸。○或謂孔子曰。子奚不爲政。子曰。書云。孝乎惟孝。友于兄弟。施於有政。是亦爲政。奚其爲爲政。○子曰。人而無信。不知其可也。大車無輓。小車無軌。其何以行之哉。○子張問。十世可知也。子曰。殷因於夏禮。所損益可知也。周因於殷禮。所損益可知也。其或繼周者。雖百世可知也。○子曰。非其鬼而祭之。諂也。見義不爲。無勇也。

リ一局部の用に備せざるをいふ ④ 世の士君子とは如何なるものと問ふ ⑤ 善偏 ⑥ かたより篤すること  
 ⑦ 事理に暗し ⑧ あぶなつかしくて安定ならず ⑨ 老子の學等を異端といふは漢漢以後のことにて當時は異端とは唯常道に變りたることを意味するが如し ⑩ 孔子の弟子子路の名 ⑪ 孔子の弟子 ⑫ 昔は愚あれは任官したるものなり故に職をもとむるを學ぶといふも不可なきなり ⑬ 人よりとがめらるゝこと ⑭ 僇君なり ⑮ 平かにてくせなき材木を曲れるくせある材木の上にかげば曲れるものは直くなるが如く政をなすにも其人を得れば民服すとなり。朱註は錯は捨置也。語は樂也と註す。即ち「直きを擧げて語の枉れるを直せば」云々と謂ずる也 ⑯ 魯の大夫季孫氏なり ⑰ 以ては而してと通ず ⑱ 其の方法は如何にしたらよるしからんか ⑲ 民に對して莊重にもしくせば ⑳ 民が上に對して忠である ㉑ 古文尙書君陳にあり ㉒ 有政の有の字は附言にて意味なし ㉓ 父母に孝に兄弟に友なることそのことが即ち政をやるといふことである ㉔ 荷車 ㉕ 輓は大車の輓端 ㉖ 馬車即ち乘車 ㉗ 小車のくびきを持つる木 ㉘ 孔子の弟子 ㉙ 一世は三十年 ㉚ 荀子に禮は政の條貫といへり ㉛ 其立てたる道の大本は知る可きなり ㉜ 當然祭るべき鬼

### 卷之二

#### 八佾第三

孔子謂季氏。八佾舞於庭。是不可忍也。孰不可忍也。○三家者以雍徹。子曰。相維辟公。天子穆穆。奚取於三家之堂。○子曰。人而不仁。如禮何。人而不仁。如樂何。○林放問禮

孔子季氏を謂ふ。八佾して庭に舞はず、是れを忍ぶ可んば、孰れか忍ぶ可からざらん。○三家者雍を以て徹す。子曰く、相くるは維れ辟公あり、天子穆穆たりと。奚ぞ三家の堂に取らん。○子曰く、人にして不仁ならば、禮を如何せん、人にして不仁ならば、樂を如何せん。○林放禮の本を問ふ。子曰く、大なるかな問や。禮は其の奢らん與りは寧ろ儉せよ、喪は其の易らん與りは寧ろ戚めよ。○子曰く、夷狄の君あるは、諸夏の亡きに如かず。○季氏泰山に旅す。子冉有に謂つて曰く、女救ふ能はざるかと。對へて曰く、能はずと。子曰く、嗚呼、曾て泰山は林放に如かずと謂へるか。○子曰く、君子は争ふ所無し、必ずや射か、揖讓



之本。子曰。大哉問禮。與其奢也。寧儉。與其易也。寧戚。○子曰。夷狄之有君。不如諸夏之亡也。○季氏旅於泰山。子謂冉有曰。女弗能救與。對曰。不能。子曰。鳴呼。曾謂泰山不如林放乎。○子曰。君子無所爭。必也射乎。揖讓而升。而飲。其爭也君子。○子夏問曰。巧

して升下し、而うして飲ましむ。其の争ひや君子なり。○子夏問うて曰く、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を爲すとは、何の謂ぞや。子曰く、繪の事は素きを後にす。曰く、禮は後か。子曰く、予を起す者なり、商や始めて與に詩を言ふ可きのみ。○子曰く、夏の禮は吾れ能く之れを言へども、杞微するに足らざるなり。殷の禮は吾れ能く之れを言へども、宋微するに足らざるなり。○子曰く、禘は既に灌して自り往者、其の故なり。足らば則吾能く之れを徵せん。○子曰く、禘は既に灌して自り往者、吾れ之れを觀るを欲せず。○或ひと禘の說を問ふ。子曰く、知らざるなり。其の說を知る者の天下に於けるや、其れ諸を斯に示くが如きかとて、其の掌を指す。○祭れば在すが如く、神を祭れば神在すが如し。子曰く、吾れ祭に與らざれば祭らざるが如し。○王孫賈問うて曰く、其の奥に媚びん與りは、寧ろ竈に媚びよとは、何の謂ぞや。子曰く、然らず、罪を天に獲れば、禱る所無し。○子曰く周は二代を監すれば、郁郁乎として文なるかな、吾は周に従はん。○子夏廟に

笑倩兮。美目盼兮。素以爲絢兮。何謂也。子曰。繪事後素。曰。禮後乎。子曰。起予者商也。始可與言詩已矣。○子曰。夏禮吾能言。之杞不足徵也。殷禮吾能言。之宋不足徵也。文獻不足故也。足則吾能徵之矣。○子曰。禘自既灌而往者。吾不欲觀之矣。○或問禘之說。子

入つて、事毎に問ふ、或ひと曰く、孰か郷人の子禮を知ると謂へる乎、大廟に入つて事毎に問ふと。子之れを聞きて曰く、是れ禮なり。

●魯の大夫季孫氏なり ● 評論して言ふ義なり ● 一列八人即ち六十四人にてやるは天子の晋樂なり ● 忍ぶべからずとの意を強めていふ ● 三家とは孟孫、叔孫、季孫をいふ ● 周廟の篇名 ● 祭の供物を取り下げるを徹といふ ● 諸侯 ● 天子の容也 ● 魯の大夫なる三家が無知妄作天子の禮を習せるの罪を取るを諷る也 ● 仁は禮樂の根本なり故にかくいはれたるなり、即ち人にして仁なくんば禮樂もその用を爲さずと也 ● 樂は禮樂の樂にて音ガク ● 魯人なり ● 禮は中を得るを貴ぶ、中を得ずとすれば、文而に過ぎんよりは寧ろ消極的なるをよしとすと也 ● 魯は具なり、トクもなはるとの意なり ● 野蠻の國のことといふ ● 中國をいふ ● 泰山は山名にして旅は祭の名なり季氏は陪臣にありながら泰山にて祭をなすは非禮なり ● 泰山の神は林放に及ばないであらうか林放すら禮の本を問うた況んや泰山の神は非禮をうけざるは明らかである ● 若し争ふ所ありとせば射であるか。射とはけいすることなり ● 揖讓して升るは射のときの禮法なり ● 孔子の弟子 ● 口元の美しきなり ● 日の白黒が明らかなるなり ● 繪は、白を彩色し、後白色にて中間を分布す、即ち非實ありて飾るに禮を以てするに喩ふ ● 禘問するもの、商は子夏の名 ● 杞は國の名なり蓋し夏は殷に滅ぼされし後は杞として存せり ● 禮なり ● 宋は殷の後なり ● 文は典籍、歌は樂者なり ● 禘は王者の大祭 ● 灌はそ、ぐなり酹の酒をそ、ぐぎ神を降すなり ● 昔の如くならざるを以て殆んど見るに足らず ● 先王が本に報じ禮を追ふの意は禘の祭より深きはなし ● 天下何事にて困難を感じることなくして容易に事柄を處すること物を掌中に置くが如くならん ● 宜くにてかく

曰。不知也。如  
其說者之於  
天下也。其如  
示諸斯乎。指  
其掌。○祭如  
在。祭神如神  
在。子曰。吾不與祭如不祭。○王孫賈問曰。與其媚於竈。何謂也。子曰。不然。獲罪於天。無所禱也。○子曰。周監於二代。郁郁乎文哉。吾從周。○子入大廟。每事問。或曰。執謂

と讀む。自身祭典の事に與らざれば、祭りても祭らざる如し。竈の大夫なり。王孫賈は孔子を己れの手に入れんとて俗語を引て與なる辭に近づくかんなりは察するに我に媚びよといへるか、問答は凡て祭に托して言へるが故に孔子は君といはずして天といへる也。夏殷の二代。文の盛なる貌。魯の明公の廟をいふ。孔子のことなり、詳は魯の邑名、孔子の父叔梁紇はかつて其の邑の大夫と爲る、孔子は幼より禮を知るを以て聞ゆ故に成人之れによりてその禮を知らざるををしるなり

子曰。射不主皮。爲力不同科。古之道也。○子貢欲去告朔之餼羊。子曰。賜也爾愛其羊。我愛其禮。○子曰。事君盡禮。人以爲諂也。○

子曰く、射は主皮せず、力の科を同じうせざるが爲なり、古の道なり。○子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、爾は其羊を愛す、我は其禮を愛す。○子曰く、君に事ふるに禮を盡くせば、人以て諂ふと爲すなり。○定公問ふ、君臣を使ひ、臣君に事ふるは、之れを如何にすべき。孔子對へて曰く、君臣を使ふに禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てす。○子曰く、關雎は樂んで淫せず、哀んで傷せず。○哀公社を宰我に問ふ。宰我對へて曰く、夏后氏は松を

定公問。君使臣。臣事君。如之何。孔子對曰。君使臣以禮。臣事君以忠。○子曰。關雎樂而不淫。哀而不傷。○哀公問社於宰我。宰我对曰。夏后氏以松。殷人以柏。周人以栗。曰。使民戰栗。子聞之曰。成事不說。遂事不諫。既往不咎。○子曰。管仲之器小哉。或曰。管仲儉乎。

以てし、般人は柏を以てし、周人は栗を以てし、曰く、民をして戰栗せしむと。子之れを聞きて曰く、成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず。○子曰く、管仲の器は小なるかな。或ひと曰く、管仲は儉か。曰く、管氏三歸有り、官事は攝ねず、焉んぞ儉を得ん。然らば則ち管仲は禮を知れるか。曰く、邦君は樹して門を塞ぐ、管氏も亦樹して門を塞ぐ、邦君兩君の好を爲すに反玷有り、管氏亦反玷有り、管氏にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん。○子魯の大師に樂を語りて曰く、樂は其れ知る可きなり。始め作す翕如たり。之れを從つ純如たり、嘒如たり、釋如たり、以て成る。○儀の封人見えんと請ふ。曰く、君子の斯に至るや、吾れ未だ嘗て見ゆるを得ずんばあらすと。從者之れに見えしむ。出で曰く、二三子何ぞ喪を患へん、天下の道なきや久し、天將に夫子を以て木鐸と爲さんとすと。○子韶を謂ふ。美を盡し、又善を盡せり。武を謂ふ、美を盡し、未だ善を盡さざるなり。○子曰く、上に居て寛ならず、禮を爲して敬せず、喪に臨んで哀まず



以<sub>レ</sub>其道<sub>一</sub>得<sub>レ</sub>之<sub>二</sub>。不<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>也。貧<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>也。不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>也。君<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>乎<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>名<sub>レ</sub>。君<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>間<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>。造<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>。幽<sub>レ</sub>沛<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>。○子<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>。我<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。惡<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。好<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。無<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>尙<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。惡<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。無<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>。其<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>。不<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>乎<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>。有<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>仁<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>。

者も、其れ仁たり、不仁者をして其身に加へしめざればなり、能く一日其力を仁に用ふる有らんか、我未だ力の足らざる者を見ず、蓋し之れ有らん、我未だ之れを見ざるなり。○子曰く、人の過や、各其黨に於てす、過を觀れば斯に仁を知る。○子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり。○子曰く、士道に志して、惡衣惡食を恥づる者は、未だ與に議るに足らざるなり。○子曰く、君子の天下に於けるや、適なきなり、莫なきなり、義之れと與に比ふ。

● 仁とは惡愛の徳、聖は居なり、仁に心を盡くは次によきことなり、若し精神を何れかに安居せしめんとして而も遂に仁を擇ぶるものあらば何んぞ知ありといふを得んやと也 ● 不仁者は水く貧困に處るを得ず何となれば必ずや困難の余り非を行ふに至るべければなり又之れと反對に不仁者は久しく富貴に處るを得ざるものなり而して仁者は安心して外に動かず仁を守るものなり知者は仁を以て身を利せんとしてよく仁を守るものなり ● 窮困なり ● 富貴なりガクと訓ずれば音樂の意となる ● 利として行ふの意、或は貪る意とす ● 仁者は位を得れば爵を擧げ不爵を去る即ち好悪一に徳と不徳とによる ● 人が假りそめにも仁に志せば假令過失はありとも惡をなすことなし。苟は誠の意 ● 志すとは心の之くをいふ ● 仁なれば當に富貴なるべく不仁なれば當に貧賤なるべし是れ理の當然の然れども人事往々理のまゝならず仁未だ至らざるに富貴を得るあり君子は之れに處らざ仁にして反りて貧賤なるあり君子は之れに居りて疑はずと也。蓋し仁に至らずして富貴なるは是れ其の道を以て之れを得ざるなり仁にして貧賤なる亦然り ● いかで其名を成さんや ● 嚴遠苟且の時をいふ ● 傾覆流離の際なり ● 章指は仁を好む者は人格高く徳性至る復た之れに加へ難し不仁を惡む者は稍々劣るも不仁なる者をして吾身に加へしめざる故惡に犯さるることなく矢張仁を爲すを得、仁を爲さんと欲すれば決して難きことなし力の足らずといふ事はなし誰人の能く一日だも力を仁に用ひざる故仁に至らざるなり世間には或はこの理の人もあらんされど吾は未だ之れを知らず ● 加ふる意 ● 人は下位に在る小人なり。人の字一に民に作る ● 黨は類なり。章指、民の過につきては各其の類に隨つて責め備はることを一人に求めず黨惡各々其所に當らしむるを仁と爲す ● 章指、人、道を知らずんば以て生きて順なる能はず死して安きを得ず苟も道を聞くを得ば直ちに死すとも遺憾なしとて道の知らざる可かちざるを切言する也、而してその所謂道につきては諸説紛々として底止する所を知らず或は事物當然の理といひ、或は先王の道といふ、要するに人の踏むべき人倫當行の道也 ● 世の士君子たるものにて苟も道に志しながらその心が衣食の如き外物に役せらるる、ものは何ぞ與に議るに足んや ● 主の意、主より親の義となる ● 定の義、定より親の義となる ● 従ふの義なり。章指、君子は天下の物に於て自己の成見を以て親疎厚薄をなすことなく一に義の在るところに従ふと也

乎。我未見力不足者。蓋有之矣。我未之見也。○子曰。人之過也。各於其黨。觀過斯知仁矣。○子曰。朝聞道夕死可矣。○子曰。士志於道而恥惡衣惡食者。未足與議也。○子曰。君子於天下也。無適也。無莫也。義之與比。

子曰。君子懷德。小人懷土。君子懷刑。小人懷惠。

子曰く、君子は徳を懐へば、小人は土を懐ひ、君子は刑を懐へば、小人は恵を懐ふ。○子曰く、利に放りて行へば、怨み多し。○子曰く、能く禮讓を以



人懷惠。○子曰。放於利而行。多怨。○子曰。能以禮讓。不勝乎。何有。爲國乎。何有。不能以禮讓。爲國如禮。何。○子曰。不患無位。患所以立。不患莫己知。求爲可知也。○子曰。參乎。吾一道以貫之。曾子曰。唯。子曰。出門人問曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。○子曰。君子喻於義。

て國を爲めんか、何か有らん、禮讓を以て國を爲むること能はざれば、禮を如何せん。○子曰く、位なきを患へず、立つ所以を患ふ、己を知る英きを患へず、知らるべきを爲すを求むるなり。○子曰く、參か、吾が道は一以て之れを貫く。曾子曰く、唯。子出づ。門人問ふ、曰く何の謂ひぞや。曾子曰く、夫子の道は、忠恕のみ。○子曰く、君子は義に喻り、小人は利に喻る。○子曰く、賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省るなり。○子曰く、父母に事ふるには幾諫す、志の従はざるを見ては、又敬して違はず、勞して怨みず。○子曰く、父母在せば、遠く遊ばず、遊べば必ず方有り。○子曰く、三年父の道を改むるなき、孝と謂ふ可し。○子曰く、父母の年は、知らざる可からざるなり、一は則ち以て喜び、一は則ち以て懼る。○子曰く、古者言の出さざるは、躬の逮ばざるを恥づればなり。○子曰く、約を以て之れを失ふ者鮮し。○子曰く、君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。○子曰く、

小子喻於利。○子曰。見賢思齊焉。見不賢而內自省也。○子曰。事父母。幾諫。見志不從。又敬不違。勞而不怨。○子曰。父母在。不遠遊。游必有方。○子曰。三年無改於父之道。可謂孝矣。○子曰。父母之年。不可不知也。一則以懼。一則以喜。○子曰。古者言之不出。恥躬

德孤ならず、必ず鄰有り。○子游曰く、君に事へて數々すれば、斯に辱めらる、朋友に數々すれば、斯に疎せらる。

● 章指、上、徳を以て國を治むれば人民其の土に安んじ、上、刑法を以て國を治むれば人民は只恩恵を得んことを望む。或は徳の上より見たら君子小人の心的状態を比較せるものと解するも亦通ず。● 懐は思念するなり。● 放は依るなり、己を利するを主とすれば必ず人の怨を受く。● 章指、讓は體の實詞なり故に讓なき體は虚體なり。● されば禮讓を以て國を治むれば何の困難もなくよく治る也。● 其の位に立つ所以の者即ち我が心の徳をいふ。● 以て知らるべきの實即ち亦心の徳也。● 曾子の名を呼びて之れを告ぐなり。● 忠は真心なり親は同情心なり。● 孔子の道は仁なり仁は愛他本能の發達して高遠の徳となれるもの、其あらはる、所は即ち忠なり親なり、之に達する所以の途亦忠恕のみ。● 故に謂ふ。● 章指、君子は義を見るに敏にして小人は利を見るに敏なり、故に君子は義に於て小人は利に於て深きとる也。● 天理の宜しき所。● 利は人情欲する所のもの。● 章指、君子の心をいふ賢者不賢者皆以て吾に師たるべし。● 幾諫は氣を下し色を和げて諫むるなり。● 父母に我言を用ひざらんとするの志向あるを見ては。● 己に東にゆくといへば則ち更に改めて西にゆかざるが如きをいふ。● この章に首端に出づ、蓋し重出して其半を逸せる也。● 父母の壽を見ては則ち喜び、其衰を見ては懼る、也。● 古への人。● 躬の行ひなり。● 及ばざるを恥づ。● 凡てつままかに引きしむるものは失なし。● 一説約は因約の義。● 章指、行を先きにして言を後にすべきをいふ也。● 遲鈍。● 早くて正しく詳かなること。● 章指、徳あれば必ず同相相親り同志相求めて孤獨ならず同朋あるなり。● 相親しむこと尙ほ居の鄰



之不逮也。○  
 子曰以約失  
 之者鮮矣。○  
 子曰君子欲  
 訥於言而敏  
 於行。○子曰  
 德不孤必有  
 鄰。○子游曰  
 事君數斯等  
 矣。朋友數斯  
 疎矣。

あるが如しと也。○ 昔の盟を待みて歡々相見ゆる時は遂に押れて辱を受くるに至り、朋友の典を待みて歡々相見  
 る時は押れて遂に疎んぜられんとの意、或は歡々諷めて容れられず去るべくして去らざれば辱しめらるの義と解す  
 るも亦通ず

### 卷之三

#### 公冶長第五

子謂公冶長  
 可妻也。雖在  
 縲絏之中。非  
 其罪也。以其  
 子妻之。子謂  
 南容。邦有道  
 不廢。邦無道  
 免於刑戮。以  
 其兄之子妻  
 之。○子謂子  
 賤。君子哉。若  
 人。魯無君子  
 者。斯焉取斯。

子公冶長を謂ふ。妻はす可きなり、縲絏の中に在りと雖も、其罪に非ざるな  
 りと。其子を以て之れに妻はす。子南容を謂ふ。邦道あれば廢てられず、邦道無き  
 も刑戮を免ると。其兄の子を以て之れに妻はす。○子子賤を謂ふ。君子なるか  
 な。若き人、魯に君子なる者無くば、斯れ焉んぞ斯れを取らんと。○子南問う  
 て曰く、賜や何如。子曰く、女は器なり。曰く、何の器ぞ。曰く、瑚璉なり。○或  
 ひと曰く、雍や仁なれども佞ならずと。子曰く、焉んぞ佞を用ひん、人に禦るに  
 口給を以てすれば、屢々人に憎まる、其仁を知らず、焉んぞ佞を用ひん。○  
 子漆彫開をして仕へしむ。對へて曰く、吾れ斯れを之れ未だ信する能はずと。子





○子張問曰。令尹子文三仕爲令尹。無喜色。三已之。無愠色。菑令尹之政。必以告。新令尹。何如。子曰。忠矣。曰。仁矣乎。曰。未可知。焉得仁。崔子弑齊君。陳文子有馬十乘。棄而違之。至於他邦。則曰。猶吾大夫崔子也。違之。之一邦。則又曰。猶吾大夫崔子也。違之。何如。子曰。

り。○子曰く、齊武子、邦道有れば則ち知、邦道無ければ則ち愚、其知は及ぶ可きなり、其愚は及ぶ可からざるなり。○子陳に在り、曰く、歸らんか、歸らんか、吾黨の小子、狂簡斐然として章を成す、之れを裁する所以を知らず。○子曰く、伯夷、叔齊は、舊惡を念はず、怨を用つて希なり。○子曰く、孰れか微生高を直しと謂ふ。或ひと醜を乞ふ、諸を其の鄰に乞ひて之れを與ふ。○子曰く、巧言令色足恭する、左丘明之れを恥づ、丘も亦之れを恥づ、怨を匿して其人を友とするは左丘明之れを恥づ、丘も亦之れを恥づ。○顔淵・季路侍す。子曰く、盍ぞ各、爾の志を言はざる。子路曰く、願はくは車馬衣輕裘、朋友と共に之れを散りて、憾む無けん。顔淵曰く、願はくは善に侂る無く、勞を施す無けん。子路曰く、願はくは子の志を聞かん。子曰く、老者之れを安んじ朋友之れを信じ、少者は之れを懐かしめん。○子曰く、已ぬるかな、吾未だ能く其過を見て内に自ら訟むる者を見ざるなり。○子曰く、十室の邑、必ず忠

清矣。曰。仁矣乎。曰。未可知焉。得仁。○季文子三思而後行。子開之曰。再斯可矣。○子曰。齊武子邦有道則知。邦無道則愚。其知不可及也。○子在陳。曰。歸與。歸與。吾黨之小子。狂簡斐然成。章。不知所以裁之。○子曰。伯夷、叔齊不念舊惡。怨是用希。○子曰。

信丘の如き者あらん、丘の學を好むに如かざるなり。  
● 章指、子路は必行に勇にして師に聞く所必ず之を實行せんことを期す、故に前に聞く所未だ行ふ能はざるに又聞くことあらんを恐る、なり ● 章指、子貢は孔文子の文といふ諡の高次に過ぐるを疑ひ此の間を説せるなり、孔子之に對して、孔文子は性敏にして學問を好み下輩に問ふを恥とせざる徳あるを以て文と諡せるなりと答へたるなり ● 衛の大夫孔圉なり ● 子産は鄭の大夫公孫僑なり ● 陳蔡なり ● 民を愛し利するをいふ ● 怪理あり ● 柱に漢の形を畫くなり、二者は共に天子宗廟の飾なり ● 知者 ● 孔子の弟子 ● 柱頭に刻む升形なり ● 柱に漢の形を畫くなり、二者は共に天子宗廟の飾なり ● 怨めるなり ● 齊の大夫崔杼亂を尹は官名にして楚の上卿政を執るものなり ● 子文嬖は國名は嬖 ● 怨めるなり ● 齊の大夫崔杼亂をなし齊君莊公を弑す ● 之れ亦婦の大夫なり ● 車一乘は馬四匹なり故に十乘は四十四匹なり ● 去るなきを稱揚するを聞き、懇慮にも程度があり、事々に三思するにも及ばじと言へるならん、三といひ再といふ、正軌として拘はるべからず、要は其懇慮の程合ひのみ ● 章指、國治まり道行はる、ときには知者たり、道行はれざる時には愚者と稱せらる、其知は人の企て及ぶべきことなるも其の愚は他人の企て及び難き所也 ● 章指、賢は賢に同じ齊武子は徳大夫名は魯なり ● 章指、此れ孔子四方を周流し道行はれずして歸るを思ふの歎なり ● 門人の魯にあたるものを指していふ ● 志大にして事に疎略なり ● 文の貌 ● 其の文理、成就して觀るべきもの有るをいふ ● 孤竹の二子なり ● 二子心清し而も人の舊惡を念はざるの類あり ● 孫なり ● 通用す ● 微生は姓、高は名、魯の人なり ● 正直 ● 醜なり ● 或人の乞ひに應じて己の家になき



執謂二微生高直。或乞レ醴焉。乞二諸其鄰一而與レ之。○子曰。巧言令色。足恭。左丘明恥レ之。丘亦恥レ之。○隱怒而友二其人一。左丘明恥レ之。丘亦恥レ之。○顏淵季路侍。子曰。盍各言二爾志一。子路曰。願車馬衣輕裘。與二朋友共一。敝レ之而無憾。顏淵曰。願無伐善。無施勞。子路曰。願聞二子之志一。子曰。老者安レ之。朋友信レ之。少者懷レ之。○子曰。已矣乎。吾未見レ能見二其過一而內自訟者也。○子曰。十室之邑。必有二忠信如丘者一焉。不如二丘之好學一也。

ものを國家より乞ひて已有するが如くにして與へたりと也。 羸指、世辭上手にうはべの恭を飾りてべこし、する事や又怨あるにも係らず之を心の内に匿して其の人に深く交はるなどは皆君子の心より恥づる所なり。 足は過ぐるなり。 魯の大史。左傳の著者とは全く別人也といふ。 孔子の名。 盍は何不の略。 衣は衣服、裘は皮服。一説輕の字を衍とす。 禮なり。 慎むなり。 勞は勞事なり。勞事を人に及ぼす事なからんと也。 老者は之れを養ふに安を以てす。 少者は之れを教くるに恩を以てす。 このまゝ斯うして見ずじまひになる事かとの歎聲也。 口に言はずして深く心の内に勉むるなり。 小邑なり、十室といへるは忠信の人得易きをいふ。 孔子の名。

子曰。雍也可レ使二南面一。○仲弓問二子桑伯

子曰く、雍や南面せしむべし。○仲弓子桑伯子を問ふ、子曰く、可なり、簡なればなり。仲弓曰く、敬に居て簡を行ひ、以て其の民に臨まば、亦可ならず

雍也第六

子曰。可也。簡。仲弓曰。居敬而行簡。以臨其民。不亦可乎。居簡而行簡。無乃大簡乎。子曰。雍之言然。○哀公問。弟子孰為好學。孔子對曰。有顏回者。好學不遷。怒不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。○子華使於齊。冉子為其母請粟。子曰。與之釜。請益。

や、簡に居て簡を行ふは、乃ち大簡なる無からんか。子曰く、雍の言然り。○哀公問ふ。弟子孰か學を好むと爲す。孔子對へて曰く、顏回といふ者あり、學を好んで、怒を遷さず、過を貳せず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し未だ學を好む者を聞かざるなり。○子華齊に使す、冉子其母の爲めに粟を請ふ。子曰く、之れに釜を與へよ。益を請ふ。曰く、之れに與を與へよ。冉子之れに粟五秉を與ふ。子曰く、赤の齊に適くや、肥馬に乗り、輕裘を衣る、吾之れを聞くと、君子は急に周して富めるに繼がすと。原思之れが宰となる、之れに粟九百を與ふ。辭す。子曰く、毋れ、以て爾が鄰里郷黨に與へんか。○子仲弓を謂ふ。曰く、犂牛の子も、駢くして且つ角あらば、用ふる勿らんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんや。○子曰く、回や、其心三月仁に逸はずんば、其餘は則ち日月に至らん而已矣。○季康子問ふ、仲山政に従はしむ可きか。子曰く、由や果なり、政に従ふに於て何か有らん。曰く、賜や政に従はしむ可き





問之。自牖執其手。曰。亡之命矣夫。斯人也。而有斯疾也。而有斯疾也。○子曰。賢哉回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。賢哉回也。○冉求曰。非不說。子之道。力不足也。子曰。力不足者。中道而廢。今女畫。○子謂子夏曰。女爲君子儒。無爲小人儒。

子游爲武城宰。子曰。女得人焉爾乎。曰。有澹臺滅明者。行不由徑。非公事。未嘗至於偃之室也。○子曰。孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬曰。非敢後也。馬不進也。○子曰。不有祝鮀之佞。而有宋朝之諂。自牖執其手。曰。亡之命矣夫。斯人也。而有斯疾也。○子曰。賢哉回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。賢哉回也。○冉求曰。非不說。子之道。力不足也。子曰。力不足者。中道而廢。今女畫。○子謂子夏曰。女爲君子儒。無爲小人儒。

子游武城の宰と爲る。子曰く、女人を得たるか。曰く、澹臺滅明なる者有り。行くに徑に由らず。公事に非ざれば、未だ嘗て偃の室に至らざるなり。○子曰く、孟之反伐らず。奔りて殿す。將に門に入らんとするや、其馬に策ちて曰く、敢て後るゝにあらざるなり、馬進まざればなり。○子曰く、祝鮀の佞あらずして、宋朝の美あらば、難いかな今の世に免るゝこと。○子曰く、誰れか能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由る莫なや。○子曰く、質、文に勝てば、野、文質に勝てば、史、文質彬彬として、然る後に君子なり。○子曰く、人の生るゝや直し。之れを罔ひて生くるや、幸にして免るゝなり。○子曰く、之れを知る者は、之れを好む者に如かず。之れを好む者は、之れを樂む者に

之美。難乎免於今之世矣。○子曰。誰能出不由戶。何莫由斯道也。○子曰。質勝文則野。文勝質則史。文質彬彬。後然君子。○子曰。人之生也直。罔之生也幸而免。○子曰。知之者。好之者。不如樂之者。○子曰。中人以上。可以語上也。中人以下。不可以語也。

如かず。○子曰く、中人以上は、以て上を語る可きなり、中人以下は、以て上を語る可からざるなり。○樊遲、知を問ふ。子曰く、民の義を務め、鬼神を敬して之れを遠ざく。知と謂ふ可し。仁を問ふ。子曰く、仁者は難きを先にして獲るを後にす。仁と謂ふ可し。○子曰く、知者は水を樂み、仁者は山を樂む、知者は動き、仁者は靜に、知者は樂み、仁者は壽し。○子曰く、齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らん。○子曰く、觚觚ならず。觚ならんや、觚ならんや。○宰我問ふ。曰く、仁者は之れに告げて井に仁ありと曰ふと雖も、其れ之れに従はんや。子曰く、何爲れぞ其れ然らん。君子は逝かしむ可し、陷る可からざるなり。欺く可し、罔ふ可からざるなり。○子曰く、君子は博く文を學び、之を約するに禮を以てせば、亦以て畔むかざる可きか。○子南子を見る。子路説ばず、夫子之れに矢つて曰く、予の否なる所の者は、天之れを厭てん、天之れを厭てん。○子曰く、中庸の徳たる、其れ至れるかな、民鮮きこ

上也。○樊遲問之。子曰。務民之義。敬鬼神而遠之。可謂知矣。問曰。仁者先難而後獲。可謂仁矣。○子曰。知者樂水。仁者樂山。知者動。仁者靜。知者樂。仁者壽。○子曰。齊一變至於魯。魯一變至於道。○子曰。觚不觚。觚哉。觚哉。○宰我問曰。仁者雖告之曰。非有仁焉。

と久し。○子貢曰く、如し博く民に施して能く衆を濟ふあらば、何如。仁と謂ふ可きか。子曰く、何ぞ仁を事とせん、必ずや聖か、堯舜も其れ猶ほ諸を病めり。夫れ仁者は己立たんと欲し、而して人を立て、己達せんと欲し、而して人を達し、能く近く賢を取る、仁の方と謂ふ可きのみ。

●孔子の弟子言偃のこと ●魯の下邑なり ●女は汝なり ●澹臺は姓にして澹明は名なり ●路の小路にして近きもの、徑によらずとは公正なること ●孟之反は魯の大夫なり ●功にはこちがなるなり ●敗走にあたりて ●軍後を殿といふ ●殿敗れて還るには後を以て功となす故に多くは奔りて殿して功を誇り稱するもの多し、然るに之反は此の言を以て其の功をあはへり賢なるかな ●祝は宗廟の官にして、鮑は鮑の大夫、字は子魚なり ●口才なり ●宋の美人にして善く淫す ●今世の害を免る、ことは六ヶ敷なり ●入室内を出入するや戸に由らざるべからずその如く人の社會に處するや道に依らざるべからざるなり ●買は買なり ●野は野人にして鄙俗なるをいふ ●文章を掌り多聞にして事に習熟し誠或は足らざるなり ●文質共によく具備せば始め君子と稱すべきなり、彬彬野ならず史ならず ●章指、人の此の世に生存し得るは正直なるがためなり、若し正直なる道を誣ひて不正直ならんか遂には身滅亡を免れざるものとす、然るに不正直にして此の世を送るを得ば是は實に僥倖に頼る免れたるものと謂ふべし ●道の當に學ぶべきを知るものなり ●之れ好むものは道を好みて未だ得ざるなり ●道を得る所ありて之れを學むものなり ●高遠の道 ●語るは告ぐなり、蓋し人を教ふるものは當に其の高下に隨つて之れに告ぐべきなり、然らば則ち其

其從之也。子曰。何爲其然也。君子可逝也。不可陷也。不可欺也。不可罔也。○子曰。君子博學於文。約之以禮。亦可以弗訾矣。夫○子見南子。子路不說。夫子矢之曰。予所否者。天厭之。天厭之。○子曰。中庸之爲德也。其至矣乎。民鮮久矣。○子貢曰。如有博施於民而

の言入り易く等をこゆるの弊なし ●人民を教化する所以の義をつとむるなり ●鬼神を敬して餘りに近づかざるなり、勞苦を先きにして功を得るを後にす此れ仁たる所以なり ●知者は事理に達して周流滯りなく水に似たる所あり故に水を樂むなり ●樂むとは喜び好みて自己の本性と合するなり ●仁者は義理に安じて厚直離らず山に似たる所あり故に山を樂むなり ●樂と善とは其の効を以て言ふなり ●齊國は其の特有の人情風俗あり魯國は其國特有の人情風俗あり、其の善惡優劣各異あり、是れ各其の歴史の異なるが故なり、魯は齊よりも其の人情風俗の善美なることは人の知る所なり、故に齊の風俗一變せば魯の風俗になり魯の人情一變せば道を得るに至らん、先王の道を得るに至らん ●觚は酒器なり。今の觚は古制を失ひて禮に叶はず、觚既に其古を失ふ豈亦觚と稱すべけんやとて深く名實の相叶はざるを歎ぜざる也。或はいふ、觚を用ひて酒を酌むは禮を成すが爲なり、今人觚を用ふれども飲酒成す、是れ禮なきなり、故に斯くいはれて歎聲を發せられしものなり、亦道が爲なり、孔子の弟子 ●仁は人の義 ●人の井にあるに隨ひて之れを教ふをいふ ●蓋し聖者は孔子の或は福に陥られんことを恐れて此の間を發して暗に之れを訓せしものなり ●道くは之れを往きて教はしむるをいふ ●陷るは之れを井に陥る、をいふ ●門ふは之れを味まし理の端と所を以てするをいふ ●章章、人は廣く古人の書を學び禮儀の全を以て身を節制せば廉くは道徳に背かざるを得んか ●時背なり ●説は悦なり ●衛靈公の夫人なるも淫行あるを以て孔子が勸にゆかれて之れを見るを子路は悦ばざるなり ●説は悦なり ●矢は箭なり ●棄絶なり、蓋し聖人の道は大にして徳全し故に不可不なし、其の聖人を見る固より我に在りて見る可きの禮あらば則ち彼の不善は我の聞する所にあらず、然れども此れ豈に子路の能く測る所ならんや、故に單言して以て之れを善ひ其の姑く此れを備じて深思以て此の意を得しめんと欲するなり ●中は過不及なきの名なり、庸は平常なり ●立派なものだ ●先王の言能く之れを行へり、然るに古の民能く

能濟也衆何如。可謂仁乎。子曰。何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者己欲立而立人己欲達而達人。能近取譬可謂仁之方也已。

之れを行ふ者少きこと曰に久し。孔子の弟子にして遊は端木、若は賜。如しは若しなり。博は廣なり。若し能く廣く恩惠を民に施し民を愚鈍の中に濟ふが如きは堯舜の至徳と雖も猶は其の難きを病めり。立つは位に立つなり仕へ朝廷に位するをいふ。遠は遠より通國をいふ。以上の如くすることは仁に刻連する道といふべきなり。

### 卷之四

#### 述而第七

子曰。述而不作。信而好古。竊比於我老彭。○子曰。默而識之。學而不厭。誨人不倦。何有於我哉。○子曰。德之不脩。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。是吾憂也。○子之燕居申申如也。

子曰く、述べて作らず、信じて古を好む。竊に我が老彭に比す。○子曰く、黙して之れを識るし、學んで厭はず、人を誨へて倦まず。何か我に有らん。○子曰く、徳の脩まらざる、學の講ぜざる、義を聞きて徙る能はざる、不善改むる能はざる、是れ吾が憂なり。○子の燕居、申申如たり、天天如たり。○子曰く、甚しきかな吾が衰へたるや、久しきかな吾れ復た夢に周公を見ず。○子曰く、道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。○子曰く、束脩を行ふより以上は、吾れ未だ嘗て誨へ無くんばあらず。○子曰く、憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず、一隅を擧げて三隅を以て反せざれば、則ち復たせざるなり。







聞爲樂之至也。○冉有曰。夫子爲衛君乎。子貢曰。諾。吾將問之。入曰。伯夷叔齊何人也。曰。古之賢人也。曰。怨乎。曰。求仁而得仁。又何怨。出曰。夫子不爲也。○子曰。飯疏食。飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴。於我如浮雲。○子曰。加我數年。卒以學。易可以無大過矣。○子所雅言。詩書執福。皆雅言也。

葉公問孔子於子路。子路不對。子曰。女

にて得たり。運河は河を徒渉するなり。○補正成語。孔明の如きは即ち之れなり。○事の成敗。○章章、富に於て求めて得べきものならば。職役と雖も之れをなさん。然れども富に求めて得べからざる故に吾が好むところ。○隨ひて古人の道に樂まん。○賤者の事なり。○孔子。○窮即ちものいみなり。○敬。○病なり。○聖人は聖人の作りし音楽、蓋し聖樂の盛衰を聞習して故に肉味を寓れしなり。○孔子の弟子。○先生即ち孔子のこと。○所君とは出公祖のこと、衛の靈公其の世子蒯聵を逐ふ、靈公死す、而して衛國人蒯聵の子衛立つ、是に於て一管は蒯聵を納れんとす、觀之れを拒、時孔子衛に居る、衛人は蒯聵は父に得而して軌は攝保にして當に立すべきの故に冉有疑つて之れを問ふ。○爲は助なり。○孔子の弟子。○應ずる辭なり。○孤竹君の二子にして共に父命を疑ひ天倫を重じたる人。○粗食なり。○食なり。○不義の富貴を視ては浮雲の有るなきが如し。○加は假なり、謂ある中にも榮注を最も可なりとす。○易は吉凶消長の理進退存亡の道を明にせるもの即ち易之れなり。○雅言は宋西に從ひ平常口に於ての言と解すべし。○詩。○詩經書經。○口に讀みよのみにあらず之れを執り守るなり。

葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ、其の人と爲りや。○子曰く、三人行て、必す我が師を得。其の善なる者を選んで之れに従ひ、其の善ならざる者を選んで之れを改む。○子曰く、天德を予に生せり。桓魋其れ子を如何にせん。○子曰く、二三子我を以て隱すと爲すか。吾は隱すこと無きのみ。吾れ行ふとして二三子と與にせざる者無し。是れ丘なり。○子曰く、文行忠信。○子曰く、聖人を吾れ得て之を見ず、君子者を見るを得ば斯に可なり。子曰く、善人をば吾れ得て之を見ず、恒ある者を見るを得ば斯に可なり、亡くして有りて爲し虚しうして盈りと爲し、約にして泰れり爲さば、恒あること難し。○子曰く、釣して綱せず。弋して宿れるを射す。○子曰く、蓋し知らずして之を作す者有らん、我は是れ無きなり。多く聞き、其の善者を選んで之に従ひ、多く見て之を識るす。知るの次なり。○互郷與に言ひ難し、童子見ゆ、門人惑ふ、子曰く、其の進むを

奚不曰其爲人也。發憤忘食。樂以忘憂。不知老之將至。云爾。○子曰。我非生而知之者。好古。敏以求之者。也。○子不語怪力亂神。○子曰。三人行。必得我師焉。擇其善者而從之。其不善者而改之。○子曰。天生德於予。桓魋其如予何。○子曰。二三子以我爲隱乎。吾

りと曰はざるや。○子曰く、我れ生にして之れを知る者に非ず。古を好みて敏く以て之れを求めたる者なり。○子怪力亂神を語らず。○子曰く、三人行けば、必す我が師を得。其の善なる者を選んで之れに従ひ、其の善ならざる者を選んで之れを改む。○子曰く、天德を予に生せり。桓魋其れ子を如何にせん。○子曰く、二三子我を以て隱すと爲すか。吾は隱すこと無きのみ。吾れ行ふとして二三子と與にせざる者無し。是れ丘なり。○子曰く、文行忠信。○子曰く、聖人を吾れ得て之を見ず、君子者を見るを得ば斯に可なり。子曰く、善人をば吾れ得て之を見ず、恒ある者を見るを得ば斯に可なり、亡くして有りて爲し虚しうして盈りと爲し、約にして泰れり爲さば、恒あること難し。○子曰く、釣して綱せず。弋して宿れるを射す。○子曰く、蓋し知らずして之を作す者有らん、我は是れ無きなり。多く聞き、其の善者を選んで之に従ひ、多く見て之を識るす。知るの次なり。○互郷與に言ひ難し、童子見ゆ、門人惑ふ、子曰く、其の進むを

無隱乎爾吾無行而不與二三子者。是以丘也。○子曰。以四教。文。行。忠。信。○子曰。聖人吾不得而見之矣。得見君子者斯可矣。子曰。善人吾不得而見之矣。得見有恒者斯可矣。亡而爲之虛而爲之約。而爲之泰。雖乎有恆矣。○子曰。釣而不綱。弋而不宿。○子曰。蓋有不知而

與す、其の退くを與さざるなり。唯何ぞ甚だしきや、人已を潔くして以て進む、其潔きを與す、其の往を保せざるなり。○子曰く、仁遠からんや。我れ仁を欲せば、斯に仁至る。○陳司敗問ふ、昭公、禮を知れるか。孔子對へて曰く、禮を知れりと。孔子退く。巫馬期を指して之を進めて、曰く、吾れ聞く、君子は黨せずと。君子も亦黨するか、君吳に取り、同姓たり、之を吳孟子と謂ふ。君にして禮を知らば、孰か禮を知らざらん。巫馬期以て告ぐ、子曰く、丘や幸なり。苟も過有れば、人必ず之を知る。○子人と與に歌ひて善ければ、必ず之れを反さしめて、而る後之れに和す。○子曰く、文莫は吾れ猶ほ人のごときなり。君子を躬行する、則ち吾れ未だ之れを得る有らざるなり。○子曰く、聖と仁との若きは、則ち爾りと謂ふ可きのみ。公西華曰く、正に唯。弟子學不能はざるなり。○子疾みて病す。子路禱らんと請ふ。子曰く、諸有りや。子路對へて曰く、

作之者我無是也。多聞擇其善者而從之。知之次也。○互鄉難與言。童子見。門人善。子曰。與之進也。不與之退也。唯何其與人潔己以進。與其往也。不保其往也。○子曰。仁遠乎哉。我欲仁。斯仁至矣。○陳司敗問。昭公知禮乎。孔子對曰。知禮。孔子退。揖巫

之れ有り。註に曰く、上下の神祇に禱爾す。子曰く、丘の禱ること久し。○子曰く、奢なれば則ち不孫、儉なれば則ち固。其の不孫ならん與りは、寧ろ固なれ。○子曰く、君子は坦にして蕩蕩、小人は長く戚戚。○子温にして厲、威にして猛からず、恭にして安し。

① 整の整飾のゆかり ② 汝なり ③ 未だ得ざる所あれば慎を以て食を忘れ已に得れば則ち之れを樂みて憂を忘る ④ 爾りは是 如きの意 ⑤ 生れながらにして之れを知るものは氣質清明、義理昭著、學を持たずして知るなり ⑥ 傲は進にして正なるなり ⑦ 孔子 ⑧ 怪は怪異、力は腕力なり、亂は滔の反にしてみだれたること、神は鬼神なり ⑨ 人常同あ、す此に我と善者及び不善の三人あれば師存するなり即ち善者は擇びて之れに依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑩ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑪ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑫ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑬ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑭ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑮ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑯ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑰ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑱ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑲ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む ⑳ 孔子聖國にありしとき宋の、馬料懸れ子を殺さんとす事此に依り不善者は自ら省みて惡あらば之れを改む

馬期而進之。曰。吾聞君子不黨。君子亦黨乎。君取於吳。爲同姓。謂之吳孟。子。君而知禮。孰不知也。告。巫馬期以禮。子曰。丘也幸。苟有過。人必知之。○子與人歌而善。必使反之。而後和之。○子曰。文莫吾猶人也。躬行君子。則吾未之有也。○子曰。若聖與仁。則吾豈敢。抑

鈎を附けて更に大綱に結合したるもの。 ① 戈は衣に練を附けて鳥の翼に纏繞せしむるもの、飛鳥を射るに用ふ。 ② 木に止まれる鳥を宿といふ。蓋し仁愛の鳥に及ぶなり。 ③ 章冠、當時の學者が強附會し妄作するの弊あり。故に孔子此の言ありしなり。 ④ 譏諷なり。 ⑤ 是れ道を知る者の次ぎとなすべし。 ⑥ 互郷は郷名。 ⑦ 其郷人不善に習ひ興に善を言ひ難し。 ⑧ 童子の來りて孔子に見ゆるものあり、門人孔子の其の之を見るを怪む。 ⑨ 學問を御免望るといふをいふ。 ⑩ 惡をにくむこと一に何ぞ甚しきや。 ⑪ 往くべきのこと。 ⑫ 章冠、世に仁を敬へて行ふものなきは之れ仁を敬せざるなり、仁は却つて手近にあり。 ⑬ 陳は國名、司敗は官名なり。 ⑭ 昭公は魯君にして威儀の節に習ふ、當時以て禮を知れりと爲す。 ⑮ 禮に同姓婚せずと云ふ、然るに魯と吳とは同姓たり、魯昭公は吳に娶れり、又婚嫁なれば吳知と云ふべきに、問みて吳孟子和云へり、是れ昭公禮を知らざるものなり。 ⑯ 孔子昭公の非禮を充分に知れども魯君の非を口にするに忍びざればなり。 ⑰ 孔子の弟子。 ⑱ 司敗が巫馬期に向つて曰ふなり。 ⑲ 相助け非を覆すを黨といふ。 ⑳ 吳の長女なる娘の義。 ㉑ 孔子の名なり。 ㉒ 反は復なり。 ㉓ 文は強、莫は弱なり。即ち強して仁を行ふことは人に劣らずとも仁義に由りて行ひ勉めずして仁義に申ると云ふこと未だ能はず。 ㉔ 孔子の謙辭なり、世人善を聖且つ仁と云ふと雖も豈に敢て當らんや。 ㉕ 爾は應辭にして猶ほ然りと謂ふが如し。 ㉖ 孔子嘗て病甚し。 ㉗ 病の甚だしきを病といふ。 ㉘ 詐は死を哀みて其の行を違ふるの辭なり。 ㉙ 天神地祇。 ㉚ 周禮に上下の神祇に屬祭するは即ち之れにして祠は醴辭なり。 ㉛ 章冠、人稱著なれば不謙遜となり、僉言なれば固陋となる所とす、されども不謙遜ならんよりも固陋なる方よるしきなり。 ㉜ 垣は平城の垣にて心の平易なること。 ㉝ 容儀の寛廣なること。 ㉞ 威は憂へ懼る、なり。 ㉟ 孔子。 ㊱ 道は和順なり。 ㊲ 嚴冠なり、蓋し此の文によりても以て孔子の人格の、満完全なるを見るべし。

爲之不厭。誨人不倦。則可謂之師矣。公西華曰。正唯弟子不能學也。○子疾病。子路請禱。子曰。有諸。子路對曰。有之。誅曰。禱。爾于上下神祇。子曰。丘之禱久矣。○子曰。奢則不孫。儉則固。與其不孫也。寧固。○子曰。君子坦蕩蕩。小人長戚戚。○子溫而厲。威而不猛。恭而安。

### 泰伯第八

子曰。泰伯其可謂至德也已矣。三以天下讓。民無得而稱焉。○子曰。泰而無禮。則勞。慎而無禮。則蕙。勇而無禮。則亂。直而無禮。則絞。君子篤於親。則民興於仁。故舊不遺。則

子曰く、泰伯は其れ至徳と謂ふ可きのみ。三たび天下を以て譲り、民得て稱することなし。○子曰く、恭にして禮なければ、則ち勞す。慎にして禮なければ、則ち蕙す。勇にして禮なければ、則ち亂す。直にして禮なければ、則ち絞す。君子親に篤ければ、則ち民仁に興る。故舊遺れざれば、則ち民倫からず。○曾子疾有り。門弟子を召して、曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今而後、吾れ免るゝを知るかな小子。○曾子疾有り、孟敬子之を問ふ。曾子言ふ、曰く鳥の將に死なんとするとき、其の鳴くや哀し、人の將に死なんとするとき、其の言や善しと。君子の道

民不<sub>レ</sub>論<sub>〇</sub>曾子有疾。召<sub>二</sub>門弟子<sub>一</sub>。啓<sub>二</sub>予足<sub>一</sub>。啓<sub>二</sub>予手<sub>一</sub>。詩云。戰戰兢兢。如臨<sub>二</sub>深淵<sub>一</sub>。如履<sub>二</sub>薄冰<sub>一</sub>。而今而後。吾知<sub>レ</sub>免矣。小子<sub>〇</sub>。曾子有疾。孟敬子問<sub>レ</sub>之。曾子言。曰。鳥之將死。其鳴也哀。人之將死。其言也善。君子所貴<sub>二</sub>乎道<sub>一</sub>者三。動<sub>二</sub>容貌<sub>一</sub>。斯遠<sub>二</sub>暴慢<sub>一</sub>矣。正<sub>二</sub>顏色<sub>一</sub>。斯近<sub>二</sub>信矣。出<sub>二</sub>辭氣<sub>一</sub>。斯

に貴ぶ所の者三、容貌を動かして、斯に暴慢に遠かり、顔色を正しくして、斯に信に近づき、辭氣を出して斯に鄙倍に遠ざかる。蓬豆の事は、則ち有司存せり。○曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが若くし、實つれども虚きが若くし、犯さるゝも校からず。昔者吾が友嘗て斯に従事せり。○曾子曰く、以て六尺の孤を託す可く、以て百里の命を寄す可し、大節に臨んで、奪ふ可からざるなり、君子人か、君子人なり。○曾子曰く、士以て弘毅ならざる可からず、任重くして道遠し、仁以て己が任となす、亦重からずや、死して後已む、亦遠からずや。○子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成る。○子曰く、民は之に由ら使む可し、之を知ら使む可からず。○子曰く、勇を好みて貧を疾むは亂なり、人として不仁なる、之を疾む已甚しきは亂なり。

●泰伯は周の大王の長子なり、三讓については古來種々の説あり、されど民得て稱するなすと云へる如く、今日果して何なるやを論ずべきに非ざるに似たり。其の事の公然にあらずして隱微の中に之を成せり故に民其の意を

遠<sub>二</sub>鄙倍<sub>一</sub>矣。蓬豆之事。則有司存。○曾子曰。以能問於不能。以多問於寡。有若無。實若虛。犯而不校。昔者吾友嘗從事於斯矣。○曾子曰。可<sub>三</sub>以託六尺之孤。可<sub>三</sub>以寄<sub>二</sub>百里之命<sub>一</sub>。臨<sub>二</sub>大節<sub>一</sub>而不可奪也。君子與人與。君子人也。○曾子曰。士不可<sub>三</sub>以不弘毅<sub>一</sub>任重而道遠。仁以爲

知らず、是れ其の至徳なる所以なり。●禮は節文なり。●意は事毎に恐怖を懐くこと。●毅は無死の毅にて急功の義。蓋し恭順勇直は各體を以て之を節して始めて整無し。●以下は神教の民にのぼすの效を述ぶ。而して君子と上に在る人をいふ。●起るなり。●薄なり。●孔子の弟子にして殊に實踐躬行を重じたる人。●啓は問なり、蓋し曾子は平日謂へらく身體は父母に受く敢へて毀傷せずと、故に是に於て其の弟子をして其の義を聞き之れを視せしめしなり。●詩經小晏の詩。●戒め謹むなり。●蓬き米なり、蓋し以上は身體を保つ所以の難きを言ふなり。●身體を傷するを免かる、を知るなり。●小子とは門人のこと、門をばりて又之を呼びて以て反覆丁塚の意を致す、其れ之を變むるや深し。●魯の大夫仲孫捷なり。●自ら言ふなり。●在位の君子。●容は身づくろひしたる形、如は姿なり。●易は粗厲なり、慢は放肆なり。●信は實せ置きて可なり。●章意、才能を有しながら少能者に問ひ、多知にして少知の者に問ひ、己に道あれども無きが如くして謙遜し、徳内に充つれども一向臨しきが如く自持し、人に侵犯せらるゝも自ら己に宜みたるのみにて懇みて報はず、かゝる事は人の難しとするなり、昔吾が友即ち顔淵之を行へり。●計校なり。●六尺は我が四尺三寸余にして即ち幼少の君の義、孤はみなしなり。●百里四方にして大國の義。●命は運命。●國家の大難有るに當り自ら國家の重きに任じ節義を失ふなし。●かゝる人は君子人かと一旦疑ひ、それより君子なりとて決定せるなり。●丈夫の世に處するに於いては。●弘は寛弘、毅は強忍なり、蓋し弘にあらざれば其の重きに勝る能はず、毅にあらざれば其の避きを致すなし。●仁を以て己の任となす、實に重任なり、仁を完全にせんは一生の事業なり亦遠からずや、蓋し此京によりても亦曾子の毅然たる人格を見るべし。●章旨、詩三百篇は人情の自然に出て人倫の事備はる、故に身の學問、事先づ詩に始まらざれば禮を以て身を立て樂を以て



己任。不亦重一乎。死而後已。不亦遠一乎。○子曰。興於詩。立於禮。成於樂。○子曰。民可使由之。不可使知之。○子曰。好勇疾貧。亂也。人而不仁。疾之已甚。亂也。

之を成し而して後始めて人格完備す ① 章意、民を愚にして治めんとの主観にあらず、民には一々教へて知らしむることが能はずとの義なり ② 章意、勇れあるを誇とする人が自分の貧賤なるを嫌惡する様になれば、憚風の人とならんとす、又不善なる人を惡むことは當然なれども甚しきは却て其の人をして益悻亂に至らしむるなり

子曰。如有三。周公之才之美。使驕且吝。其餘不足觀也。○子曰。三年學。不至於穀。不易得也。○子曰。篤信好學。守死善道。危邦不入。亂邦不居。入下有道則隱。邦無道則隱。邦

子曰く、如し周公の才の美有るも、驕且つ吝ならしめば、其餘は觀るに足らざるのみ。○子曰く、三年學びて、穀に至らざるは、得易からざるのみ。○子曰く、篤く信じて學を好み、死を守りて道を善くし、危邦に入らず、亂邦には居らず。天下道有れば則ち見はし、道無ければ則ち隱す。邦道有りて、貧且つ賤なるは恥なり。邦道無くして、富且つ貴きは恥なり。○子曰く、其位に在らざれば、其政を謀らず。○子曰く、節擘の始は、關雎の亂、洋洋乎として耳に盈てるかな。○子曰く、狂にして直ならず、倜にして愚ならず、慳にして信ならずんば、吾れ之れを知らず。○子曰く、學は及ばざるか如くす

有道。貧且賤焉。恥也。邦無道。富且貴焉。恥也。○子曰。不在其位。不謀其政。○子曰。詩擊之亂。洋洋乎盈耳哉。○子曰。狂而不直。侗而不信。吾不知之矣。○子曰。學如不及。猶恐失之。○子曰。巍巍乎舜禹之有天下也。而不與焉。○子曰。大哉堯

るも、猶ほ之を失はんことを恐る。○子曰く、巍巍乎たり、舜禹の天下の有つや。而して與からず。○子曰く、大なるかな堯の君たるや、巍巍乎として、唯天を大と爲す。唯堯之に則る。蕩蕩乎として民能く名づくる無し。巍巍乎として其の成功有るや、煥乎として其れ文章あり。○舜に臣五人有り、而して天下治まる。武王曰く、予に亂臣十人有り、孔子曰く、才難しと。其れ然らざらんや。唐虞の際、斯に於て盛なりと爲せど、婦人有り、九人のみ。天下を三分して、其二を有ち、以て殷に服事す。周の徳は、其れ至徳と謂ふ可きのみ。○子曰く、禹は吾れ間然すること無し、飲食を菲くして、而して孝を鬼神に致す、衣服を惡しくして、美を黻冕に致し、宮室を卑うして、而して力を溝洫に盡す、禹は吾れ間然すること無し。

① 若しなり ② 周の成土を輔けて周の文を制度を確立制定したる聖人なり ③ 禮泰 ④ 音節 ⑤ 章指、三年學びて穀を求めざるほどの善は他日の大成を期する篤學の人にて容易に無しとなり。三年は多年の義 ⑥ 祿なり ⑦ 危邦とは將に亂れんとする邦、亂邦とは既に亂れたる邦 ⑧ 章指、各其の職に専一なるべきを説かれ



之爲君也。巍巍乎。唯天爲大。唯堯則之。蕩蕩乎。民無能名焉。巍巍乎。其有功也。煥乎其有文章。○舜有臣五人。而天下治。武王曰。予有亂臣十人。孔子曰。才難。不其然乎。唐虞之際。於斯爲盛。有婦人焉。九人而已。三分天下。有其二。以服事殷。周之德。其可謂至德也。已矣。○子曰。禹吾無間然矣。非飲食。而致孝乎鬼神。惡衣服。而致美乎黻冕。卑宮室。而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。

たるものなり。① 章指、大節樂の四始を樂するを聞くに此の闕誰の亂即ち終りが洋々として最も美を極む。② 師樂は魯の樂師、名は樂。③ 亂とは樂の卒章をいふ。④ 章指、狂愚にして信まらざる者は教化する所以を知ちずとの意、狂は進取の氣象に富むもの、偏は無知なり、怪怪は質朴なる者、愚は信まらざる者。⑤ 章指、人の學をなす既に及ばざる所あるが如くするも而して猶ほ其の或は之を失ふことを恐る、學問たつもの寸時も油断すべからず。⑥ 舜の天下に君たる賢に任じ能を使ひ已れ事を自らせずして治まる。亂々乎とは山の如き、舜禹の大功を云へり。與ちず、私意を加へず。⑦ 章指、堯の天下に君たるや大なりと稱美し、名づくべからずとなし、只向大なる功効あり清明なる文章ありと謂へり其の德實に廣大絢々然たり、宇宙間に天は最も大なるものなるが猶ほ此の天に法とりて政治を施せり、而して堯は誠に大なる故に賞め云ふべき様なし。⑧ 廣遠の義。⑨ 班業なり。⑩ 光雨の說。⑪ 此章先づ事實を擧げて然る後に孔子の論を出す。⑫ 禹、夏、殷、周、魯、伯益の五人。⑬ 亂は治なり官を治むるもの十人の義。⑭ 孔子曰く古人云ふ才を得ること難しと實し然り、唐虞即ち舜の際は人才盛なりしが其れより以下夏殷二代を経て今の周初に至りて又より以上に盛なり、然れども治官の臣十人中には婦人一人有りしかば、男子は九人のみです。又天下を三分して其の二を得て、尙ほ殷に臣事したるは周の至徳なる所以なり。⑮ 堯舜の際のこと。⑯ 章指、禹は一の非議すべき點なし自己の飲食を節して祭祀を盛にし自己の宮室を卑くして人民の爲めに灌漑の便を興ふるに勉めたり、實に禹は一の非議すべき點なし。⑰ 間は隙なり、其の隙を指して之を非議すべきをいふ。⑱ 薄なり。⑲ 常服。⑳ 禮は隆あてなり、是は冠なり、共に祭服たり。㉑ 田間の水道にして以て灌漑を正しくして旱に備ふるなり。

### 卷之五

#### 子罕第九

子罕言利。與命與仁。○達巷黨人曰。大哉孔子。博學而無所成名。子聞之謂門弟子曰。吾何執執。御乎。執御乎。吾執御矣。○子曰。麻冕。禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今

子罕に利を言ふ。命と與にし仁と與にす。○達巷黨人曰く、大なるかな孔子、博學にして名を成す所なし。子之を聞き門弟子に謂ひて曰く、吾れ何を執らん。御を執らんか、射を執らんか、吾れは御を執らん。○子曰く、麻冕は禮なり、今や純は儉、吾は衆に従はん。下に拜するは禮なり、今や上に拜するは泰なり。衆に違ふと雖も、吾は下に従はん。○子四を絶つ、意毋く、必毋く、固毋く、我毋し。○子、匡に畏す。曰く、文王既に没したれども、文姪に在らざるか。天の將に斯文を喪さんとするや、後死者は斯文に與るを得ざるなり、天の未だ斯文を喪さざるや、匡人其れ子を如何せん。○大宰、子貢に問ふ、曰く、夫子は聖

拜乎上泰也。雖違衆吾從。下○子絕四。毋意毋必毋固毋我。○子畏於匡曰文王既沒交不在茲乎天之將喪斯文也後死者不得與於斯文也天之未喪斯文也匡人其如予何○大宰問於子貢曰夫子聖者與何其多能也子貢曰固天縱之將聖又多能也子

者か、何ぞ其の多能なる。子貢曰く、固より天を縦し將に聖ならんとして、又多能なり。子之を聞いて、曰く、大宰我を知るか。吾れ少くして賤、故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや、多ならざるなり。宰曰く、子云ふ、吾れ試られず、故に藝あり。○子曰く、吾れ知る有らんや、知る無きなり。鄙夫有り、我に問ふ、空空如たり、我其兩端を叩きて濁くせり。○子曰く、鳳鳥至らず、河圖を出ださず、吾れ已ぬるかな。○子齊衰者を見、冕衣裳者と暨者とは、之を見れば、少しと雖も必ず作つ、之を過れば必ず趨る。○顔淵喟然として歎じて曰く、之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し、之を瞻れば前に在り、忽焉として後に在り、夫子循循然として善く人を誘ひ、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす、罷めんと欲すれども能はず、既に吾が才を竭せり、立つ所有つて卓爾たるが如し、之に従はんは欲すと雖も、由る末きのみ。○子疾みて病す、子路門人をして臣たらしむ。病間に曰く、久しいかな、由の詐を行ふや、

聞之曰。大宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。宰曰。子云。吾不試。故藝。○子曰。吾有知乎哉。無知也。有鄙夫。問於我。空空如也。我即其兩端而竭焉。○子曰。鳳鳥不至。河不出圖。吾已矣夫。○子見齊衰者。冕衣裳者。與一見之。雖少必作。過之必

臣無くして、而して臣有りと爲す。吾れ誰をか欺かん、天を欺かんや。且つ予れ其の臣の手に死なん與りは、無寧二三子の手に死なん、且つ予れ縱ひ大葬を得ざるも吾れは道路に死なんや。

● 章指、孔子利を言ふこと稀なりし、若し之を言ふときは或は命と共に云ひ又は仁と共に云ふ、何となれば利は必ずしも人力を以て得べきにあらず、仁を捨てて利に趨けば利遂に利たざればなり。● 達巷村の村人。● 孔子の博識なりしこと及び謙遜のこと此章にて見ゆべし。● 孔子の學は多方面にして、一道を以て名づくべからざるをいふ。● 孔子。● 孔子自ら謙遜して六藝の中此きものたる御を執らんと云へり。● 麻冕即ち緇布冠を著くるは古禮なり。● 今人は純白の糸製の冠を用ふ古例には違へども純冠は丈夫にして且つ儉約なれば昔も衆人に從つて之を用ひん。● 君を拜するに堂下に於てすは古禮なり。● 堂上にて拜すは國祭なり、衆人に違へど吾は古禮に従はん。● 孔子の人格完全にして道と契合し自然にして道に中るを見る可し。● 道によりて行へば成敗利鈍を意とせざるなり。● 行止時に中り可無。不可無きを以て期必することなきなり。● 經權並び得、一を固執して權變を知らざるなきなり。● 人と接するに善は人と之を同じくし己を捨てて人に從ふなり。● 章指、孔子が、其の道を以て自ら任ずる抱負の大なる天命を知るの深き此の章により見るべし、孔子が匡と云ふ地にて畏るべき事に遭ひて心使ひせり、そは嘗て匡人は魯の陽虎のために仇讐をせられたり、孔子を陽虎と見誤り匡人孔子を攻圍せしなり。● 道の顯はる、善之を文と謂ふ。● 彼は此なり孔子自らを謂ふ、後死者は後人に同じ。● 匡人は天に違つて己を害すること能はず。● 官名。● 孔子の弟子。● 大宰は聖人は多能

趨。○顔淵謂然歎曰。仰之彌高。鑽之彌堅。瞻之在前。忽焉在後。夫子循循然善誘人。博我以文。約我以禮。欲罷不能。既竭吾才。如有所立卓爾。雖欲從之。末由也已。○子疾病。子路使門人爲臣。病間曰。久矣哉。由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。且予與其

多藝なりと思へり、孔子は餘り能藝多きを以て聖人なるかと問へる也。孔子の弟子。孔子。試は用なり。故に藝に習ひ多藝なるなり。時人孔子を以て知らざるころ無しと爲せり、孔子之に就きて云ふ我は知る無し、然るに人が評判を爲すは嘗て鄙夫來りて我に問へり其事によりしならん。鄙夫の意誠なりしかば。即は發劾なり、兩端は極は兩端。言はんが如し、言は終始本末上下精粗盡さざる所なし、故に世人がかか評判を立つるものならん。古昔聖人上にありしとき、風至り黃河より八卦の圖を出す等の瑞草ありと傳ふ、今此の如きことなし、明君の靈なり、我道も萬事休せりと。文王のとき岐山に鳳凰至り、伏羲のとき黃河より河圖を出せりと。孔子。喪服を着する者を見れば衰少。鼻は冠なり、衣は上服、裳は下服なり、是して衣裳服をつくるは貴者の盛服なり。目無き者。或は曰く少は坐に作るべしと。作は起なり。疾行なり。章指、顔回、後孔子の盛徳を讀みせるなり、顔回初め孔子に學ぶ初には從に其の益々大なるを感ぜしが、孔子循循として次に隨うて之を誘導し、先づ文を以て之を博め次に禮を以て之を約す、同は今や聰明んと欲して聽むる能はず、常に其の後に隨ひて其の才を端しぬ、是に於て始めて孔子の卓然として高く立てる處を認め得るに至り、初めとは大に其の趣きを異にせり、而して進みて其處まで行かんとするに其處は至り、高遠にして自分には達し得ざるなり。一説に立つ所ありて卓爾たるが如しは、四回の學に進みたる事なりと云ふ。○唯は歎聲。堅くして入る可からず。循循は次序ある貌。博文約禮は教ゆる順序なり。○末は無なり。章指、死生之際尤も當むは君子の心なり。息軒曰く、婦人の手に死せず、臣ある者は臣の手に死す禮なり、孔子臣あるは臣の手に死せんも既に致仕して臣なし、軍あるは臣の手に死なんと。もは子路の賢く所の二三字は實の臣に非ざればなりと。假令臣を具へ禮を以て葬るの大葬を受けずとも、汝等有る以上はまさか道路に死することあるまじ何ぞ臣を置くを用ひんやとなり。○無軍は軍なり。○大葬とは君臣の禮葬なり。

死於臣之手也。無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬。予死於道路乎。

子貢曰。有美玉於斯。韞匱而藏。求善買而沽。諸子曰。沽之哉。我待買者也。○子欲居九夷。或曰。陋如之何。子曰。君子居之。何陋之有。○子曰。吾自衛反魯。然後樂正。雅頌各得其所。○子曰。入則事父兄。喪事不敢不

子貢曰く、斯に美玉有らば、匱に韞みて藏せんか、善買を求めて沽らんか。子曰く、之を沽らんかな、之を沽らんかな、我は買を待つ者なり。○子九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋なり、之を如何せん。子曰く、君子之に居らば、何の陋か之れ有らん。○子曰く、吾れ衛より魯に反へり、然る後樂正しく、雅頌各其所得たり。○子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入りては則ち父兄に事へ、喪の事は敢て勉めずんばあらず、酒の困を爲さず。何んか我に有らんや。○子川の上に在りて、曰く、逝く者は斯の如きか。晝夜を舍かず。○子曰く、吾れ未だ徳を好むこと色を好むが如くなる者を見ざるなり。○子曰く、譬へば山を爲るが如し。未だ一簣を成さずして、止むは吾が止むなり。譬へば地を平にするが如し。一簣を覆へすと雖も、進むは吾が往くなり。○子曰く、之に語けて、而して惰らざる者は、其れ回なるか。○子顔淵を謂つて曰

勉不爲酒困。○子有於我哉。○子在川上。○逝者如斯夫。不舍晝夜。○子曰。吾未見好德如好色者也。○子曰。譬如爲山。未成一簣。止吾止也。譬如平地。雖覆一簣。進吾往也。○子曰。暗之而不惰者。其回也與。○子曰。顏淵曰。惜乎。吾見其進也。未見其止也。○子曰。苗

く、惜しいかな吾れ其の進むを見るなり。未だ其の止むを見ざるなり。○子曰く、苗にして秀でざる者有るかな、秀でて實らざるもの有るかな。○子曰く、後生畏る可し、焉ぞ來者の今の如くならざるを知らん。四十五、而して聞ゆる無くば、斯れ亦畏るゝに足らざるのみ。○子曰く、法語の言は、能く從ふ無からんや。之を改むるを貴しと爲す。異與の言は、能く説ぶ無からんや。之を釋ぬるを貴しと爲す。説んで釋ねず、從つて改めず。吾れ之を如何ともする末きのみ。○子曰く、忠信を主とせよ、己に如かざる者を友とする毋れ、過つては則ち改むるに憚る勿れ。○子曰く、三軍も帥を奪ふ可きなり。匹夫も志を奪ふ可からざるなり。○子曰く、敝れたる縕袍を衣、狐貉を衣る者と立ちて、恥ぢざる者は、其れ由なるか。伎はず求めず、何を用つて賊らざらん。子路終身之を誦す。子曰く、是の道や、何ぞ以て賊とするに足らん。○子曰く、歳寒くして、然る後に松柏の後に凋むを知るなり。○子曰く、智者は惑はず、

而不秀者有矣夫。秀而不實者有矣夫。○子曰。後生可畏。焉知來者之不及乎。今也四十五。而無聞焉。斯亦不足畏也。已。○子曰。法語之言。能無從乎。改之爲貴。異與之言。能無說乎。釋之爲貴。說而不釋。從而不改。吾未如之何也。已矣。○子曰。主忠信。毋友不如己

仁者は憂へず、勇者は懼れず。○子曰く、與に共に學ぶ可きも、未だ與に道に適く可からず。與に道に適く可きも、未だ與に立つ可からず。與に立つ可きも、未だ與に權す可からず。○唐棣の華は、偏として其れ反せり、豈に爾を思はざらんや、室是れ遠し。子曰く、未だ之を思はざるなるか、何の遠きか之れ有らん。

● 孔子の弟子 ● 匿り ● 藏なり ● 商賈人 ● 賈なり、蓋し玉ある者は之を藏して善き商賈の來り買ふを待つ、我も道を見き明君を待ち、之を行はんとなり ● 孔子なり ● 地名なり ● 一説に居は之なり、行くなりと ● 夫子自らをいへるなり ● 章、當時道衰へ音聲廢る、是に於て魯の哀公十一年の冬孔子衛國より魯河に歸り來り、先づ音聲を變調せり、故に音聲始めて正しくなり高尚なる雅又頗も其の音を得ずに至れり ● 章指外に出で、は公卿に事へ家に在ては父兄に事へ喪事に大に禮力し又酒の爲りに心を亂さず、此の四事は我の能くする所なれども他は悔すべきものなし ● 章指、世亂れ民困む孔子道を以て之を救濟せんとして志を得ず、其の身も漸く老ゆ、此に於て河水の發後となく流れ去つて後水復た前水にあらざるを見思はず歎息したるなり ● 好色を好し聲臭を惡むは諷なり、故に德を好むこと色を好むが如きは、斯れ諷に德を好むなり、然れども民之を能くする鮮し ● 一簣にて山成らんとするに至りて止むるをいふ ● 一簣の實は土箱なり ● 地 凸凹を直して平地とす穀物を以て農間に比して畝をす、めしなりとの説可なるが如し、蓋 本章は進徳修業の道は自ら勉むるに在るをいふ ● 章指、顏回は道を備ずること深く行に篤き人なり故に孔子より聞くことあれば拳拳服膺して忘らざり孔子と雖も及ぶものなし ● 孔子 ● 章指、顏回は徳高く論明かにして



者過則勿憚。改。○子曰。三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。○子曰。衣敝緇袍。與衣狐貉者立。而不恥者。其由也與。○子曰。不求。何用不臧。○子曰。是道也。何足貴也。○子曰。歲寒。然後知松柏之後凋也。○子曰。知者不惑。仁者不憂。勇者不懼。○子曰。可與

孔門第一と稱せられ、又師孔子の最も窮を屬せし所なり、然るに惜しうかな早死せり、故に子をして惜しきか。同は日に進歩して止まざるの人なりしにと歎せしめたるなり。○章指、顏回早死に付、一歎息せるなりと説あり。○章指、後生即ち年少氣銳の者は畏るべし、勉めて止まざれば學精少徳成らんとすればなり、安ぞ其の將來の道徳が我が今日の如くならざるを知らん、四十五は徳以ち名彰はるべき時なるに其の年にたりて世に聞えざる者は將來の進境も亦限り有り畏る、に足らざる。○孔十、詩書禮樂の言、○孫臏與にすべきの言なり。○其の語を尋ぬるなり。○説は悦なり。○無きなり。○己に如かざるものを友とする母れとは之を棄てて顧みずと云ふにあらざる唯友としては交はらぬと云ふことにて到切に教誨諷諭することは之を誨すなり。○章指、三軍の勇は人に在り、匹夫の志は己に在り、故に帥は奪ふ可し、而るに志は奪ふ可からず、若し奪ふ可くば則ち亦之を志と謂ふに足らざる。○敵は壞なり。○粗細の衣服なり。○狐はきつね類は狸に似たる一種の獸なり、狐貉は狐貉の皮にて作りたる衣服、貴人の用ふる所。○孔子の弟子、子貢の名。○快は害なり、臧は善なり、蓋し快はず求めず何を用つて臧からざらんとは、人を害せず自ら責り求めず、此の如くならば善となすに足らんとの義にて是れ衛風蒹葭の詩にして孔子之を引きて以て子路を美贊せり。○自ら其の態を喜ひて復た以上に道を求めよとの意。○章指、小人の治世に在るや或は君子と異なることなし、惟利害に應じ事變に迫ひらる後、君子の守る所見の可なり。○習者は物を辨ず故に惑はざるなり。○仁者は内に省みて疚しからず故に憂なきなり。○學問の要は共に輕重をはかりて宜を問するに在る意、學に志有る者は與に共に學び切磋すべし、但し道を信すること篤からざれば未だ與に道に拘り可からず、道を信すること篤ければ與に道に拘り可なり、未だ與に朝に立つ可からず、國の爲めに家を忘るる者にして與に朝に立つべきも、學問其の極に至る者にあらずと與に朝に臨み權を制すべからず。○唐棣之華云々は逸詩にあり、唐棣はゆすらうめなり、偏は片寄るなり、反は花師の

共學。未可與適道。未可與立。可與立。未可與權。○唐棣之華。偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰。未之思也。夫何遠之有。

反るなり、偏として其れ反せりと満開の義にて男女相思の盛なるに比す、汝我を思はざるに非ざれど室相距ること遠しとの意。○孔子曰く、是れははざらんや、何の遠き事か之れ有らんやと、蓋し人徳を思慕せば何ぞ得られざる事有らんや華思慕足らざるなり。

郷黨第十

孔子於郷黨。恂恂如也。似不能言者。其在宗廟朝廷。便便言。唯謹爾。○朝與下大夫言。侃侃如也。與上大夫言。誾誾如也。君在。踧踖如也。與與如也。

孔子郷黨に於て、恂恂如たり。言ふ能はざる者に似たり。其の宗廟朝廷に在りては、便便として言ふ。唯謹めり。○朝にて下大夫と言へば、侃侃如たり。○君召し上大夫と言へば、閑閑如たり。君在せば、踧踖如たり。與與如たり。○君召して擴せしむれば、色勃如たり。足躩如たり。與に立つ所を揖すれば、手を左右にす。衣の前後は襜如たり。趨り進むは翼如たり。賓退けば、必ず復命して曰く、賓顧すと。○公門に入れば、鞠躬如たり。容れざるが如くす、立つに門に中せず、行くに闕を履まず。位を過ぐれば、色勃如たり。足躩如たり。其言

也。○君召使。擯。色勃如也。揖。足躡如也。揖。所。與。立。左。右。手。衣。前。後。襜。如也。襜。進。翼。如也。賓。退。必。復。命。曰。賓。不。顧。矣。○入。公。門。鞠。躬。如也。如。不。容。立。不。中。門。行。不。履。闕。過。位。色。勃。如也。足。躡。如也。其。言。似。不。足。者。揖。齊。升。堂。鞠。躬。如也。屏。氣。似。不。息。者。出。降。一。等。還。二。頰。色。怡。怡。

は足りざる者に似たり。齊を撮けて堂に升れば、鞠躬如たり、氣を屏めて息せざる者に似たり。出て一等を降れば、顔色を退べて怡怡如たり。階を没して趨り進めば、翼如たり。其位に復れば、躡踏如たり。○圭を執れば鞠躬如たり、勝へざるが如くす。上ぐるには揖するが如くし、下ぐるには授くるが如くす。勃如として戰色あり。足踏踏として循ふ有るが如し、享禮には容色あり、私覲には愉愉如たり。○君子は細細を以て飾らず、紅紫は以て褻服と爲さず。暑に當つては珍の稀給す。必ず表して出づ。緇衣には羔裘、素衣には麕裘、黃衣には狐裘。褻裘は長し、右袂を短くす。必ず寢衣有り、長さ一身有半。狐貉の厚き以て居る、裘を去れば佩びざる所無し。帷裳に非ざれば、必ず之を殺す。羔裘玄冠、以て弔せず。吉月には、必ず朝服して朝す。

● 物々とはななきなり、遇難なるなり ● 便々とは事理を解する貌なり ● 朝は魯の朝服にて此時は魯の大夫たり、故に下大夫は孔子の下役に當る ● 佩々とは解けるなり ● 闕々は中正より ● 賦語は魯の貌なり、故意内に充ちて外貌安からざるが如きといふ ● 質々かなるなり ● 君々が孔子を召して賓客を擯

如也。没階趨進。翼如也。復其位。躡踏如也。○執圭。鞠躬如也。如。不勝。上。如。揖。下。如。授。勃。如。戰。色。足。躡。如。也。有。循。享。禮。有。容。色。私。覲。愉愉如也。○君。子。不。以。紉。緇。爲。褻。服。當。暑。而。出。緇。衣。羔裘。素。衣。麕。裘。而。出。緇。衣。羔裘。玄冠。不。以。弔。吉。月。必。朝。服。而。朝。

待せしむれば、擯は來客ヲ接待スルの意ナリ ● 喜色見はるをいふ ● 大股に歩むなり、闊歩なり ● 衣服の前後に動く形容 ● 翼如は鳥の翼を舒ぶる時の貌、門に出てて賓を見るとき態度端止なるをいふ ● 心に満足して去る時に顧みること無し ● 孔子が表門に入らるれば ● 身を詰むる貌 ● 門の中央に立たずして東隅に立つをいふ ● 門限なり ● 君の座位にして空位なり ● 衣の下を齊といふ ● 疑は謙なり ● 一段なり ● 喜ぶ貌 ● 階を下り盡すなり ● 恭敬の貌 ● 圭は諸侯の信を表する爲め玉を上げざるなり ● 戰色は長に持つ玉なり ● 重きに勝へざるが如く見ゆる程節重し取り扱ふなり ● 玉を上げるなり ● 私覲れ敬しむる色 ● 躡々は小足に歩むなり ● 京師の享は獻なり、既に聘して而して獻するなり ● 私覲は享禮の後にある私覲なり ● 顔色の和きたる貌 ● 紺は黒衣、黻は青色の衣をいふ ● 紅紫は間色にして正しからず且つ婦人女子の服に宜し ● 常衣なり、不斷衣なり ● 珍は厚衣なり ● 緇は葛布の粗きもの、紵は其の細きもの ● 裘とは綿紵の上に別に上衣を加ふるをいふ ● 麕色の朝服 ● 黒色の皮衣 ● 白衣 ● 小鹿の皮の白きもの ● 平常に着る皮衣なり、其の長きは道を主とするなり ● 事をなすに便なる爲り右袂を短くするなり ● 狐貉の裘を著けて以て宴に居り客に擬す、其の厚きは過きが爲めなり ● 夏に居るときは偏を主とし偏を事とせざれども、裘を去りては禮に於て宜しく佩ぶべき者は服せざるが如し ● 朝祭の服を帷裳といふ ● 殺は嚴謹なり ● 玄冠とは黒色の冠 ● 吉月は毎月の朔日

齊必有明衣一布。○齊必變食。居必遷坐。○食不厭精。○食不厭細。○食而肉敗不食。○色惡不食。○臭惡不食。○失饪不食。○不時不食。○割不正不食。○不得其醬不食。○肉雖多不使勝食氣。○唯酒無量。不飲酒。沽酒市脯不食。不食薑食。不多食。祭於公。不宿肉。祭肉不出。

齊すれば必ず明衣ありて布す。○齊すれば必ず食を變ず。居には必ず坐を遷す。○食は精を厭はず、膾は細を厭はず。食の饒して餲せる、魚の餒したると肉の敗れたるとは食はず。色の悪しきは食はず。臭の悪しきは食はず。饪を失へば食はず。時ならざるは食はず。割くこと正しからざれば食はず。其醬を得ざれば食はず。肉多しと雖も食氣に勝たしめず。唯酒は量なく、亂に及ばず。沽酒市脯は食はず、薑を撤せずして食す。多食せず。公に祭れば肉を宿めず。祭肉は三日を出さず。三日を出せば、之を食せざるなり。食ふに語らず、寢るに言はず、蔬食菜羹瓜と雖も、祭る、必ず齊如たり。○席正しからざれば坐せず。○郷人と酒を飲むに、杖者出れば斯に出づ。○郷人の讎には、朝服して陣階に立つ。○人を他邦に問はしむれば、再拜して之を送る。康子藥を饋くる。拜して之を受く。曰く、丘未だ達せず、敢へて嘗めず。○麻焚けたり。子朝より退く。曰く、人を傷けたると、馬を問はざりき。○君食を賜へば、必ず席

三日一出三日一不食之矣。食不語。寢不言。雖蔬食菜羹瓜祭。必齊如也。○席不正不坐。○鄉人飲酒。杖者出。斯出矣。○鄉人餼朝服而人讎朝服而立於阼階。○問二人他邦再拜而送之。康子饋藥。拜而受之。曰。丘未達。不敢嘗。○麻焚。子退朝。曰。傷人乎。不問馬。○君賜食必正席先

を正して先づ之を嘗む、君賜を賜へば、必ず熟して之を薦む。君生を賜へば、必ず之を畜ふ。君に侍食するに、君祭れば先づ飯す。疾あるに君之を視れば、東首して、朝服を加へ、紳を拖く。君命じて召せば、駕を俟たずして行く。○大廟に入れば事毎に問ふ。○朋友死して、歸する所無れば、曰く、我に於て殯せよと。朋友の饋は、車馬と雖も、祭肉に非れば拜せず。○寢に尸せず、居に容せず。○齊衰者を見れば、狎れたりと雖も必ず變ず。冕者と警者とを見れば、褻れたりと雖も必ず貌を以てす。凶服者には之に式し、負販者に式す。盛饌有れば、必ず色を變じて作つ。迅雷風烈には必ず變ず。○車に升れば、必ず正立して綬を執る。車中には内顧せず、疾言せず、親指せず。○色すれば斯に卑がる。翔して而る後に集る。曰く、山梁の雌雉、時なるかな時なるかなと。子路之を共す。三嗅し、而して作つ。

● 神を祭るあり ● 潔白なる布の衣服 ● 齊戒する時は常食と異なる物を用ひ常居處に居らず ● 飯は

背之。君賜。腥。必。熟。而。薦。之。君賜。生。必。畜。之。侍。食。於。君。君。祭。先。飯。疾。君。視。之。東。首。加。朝。服。拖。紳。君。命。召。不。俟。駕。行。矣。○入。大。廟。每。事。問。○朋。友。死。無。所。歸。曰。於。我。殯。○朋。友。之。饋。雖。車。馬。非。祭。肉。不。拜。○寢。不。尸。居。不。容。見。齊。衰。者。雖。殯。必。變。見。冕。者。與。晉。者。雖。喪。必。以。貌。凶。

白き程よく膾は細かく切りたる程善きなり。 ① 臭氣を殺するなり。 ② 味の細くなるなり。 ③ 魚鮓を饌といふ。 ④ 生熟其の時を得ざるなり。 ⑤ 季節の物にあらざるなり。 ⑥ 魚は鱗を以て調理せざれば食はず。 ⑦ 肉は多くありとも之を食ふに飯より過ぎざらしむ。 ⑧ 外にて買ひた酒と脯となり、酒脯は自家にて作りしものを用ひて外にて買ひたるを用ひず。 ⑨ 辛味多くして香ある一種の菜。 ⑩ 公祭の肉は一夜を過ぎずして其の日に處分し、家の祭肉は則ち三日を過ぎずして皆以て分賜す、蓋し三日を過ぎれば肉必ず敗れればなり。 ⑪ 膾が曲れるを云ふにあらず、士は一重に鋪き、大夫は二重に鋪くを禮とす。 ⑫ 士に二重ハ夫三重の禮を用意することなどあれば孔子はかゝる不正の禮には坐せず。 ⑬ 郷人相會して長老を上坐とし其の他年齢によつて坐し酒を飲むの儀あり、此の時年少者は長老を尊敬せざるべからざるに、酒脯にして其禮せば長幼別亂る、は往々免れざる所とす。然るに孔子はかゝるときにも禮を守りて備たり、杖を用ふる長老出でて後出づ、それまでは坐にありて禮を守る。 ⑭ 支那、風俗に距離云ふものあり、儀々の變をなしては鬼を追ひ拂ふなり日本の鬼拂の風俗は之より來れりと云ふ。 ⑮ 先祖の廟の東階なり。 ⑯ 他國の人の所に使を遣りて物を贈り、其の起居などを尋ぬるとき孔子は自分が遣る使を再拜して返る、先刀を敬するによる。 ⑰ 人の贈進を受くるときは、食すべきの物は必ず先づ嘗めて之を謝す、孔子未だ歸の禮にせず故へて先づ嘗めず。 ⑱ 孔子自身の厭なり。 ⑲ 魯の朝より來歸するなり。 ⑳ 君の恩恵の有り難さを敬して先づそれを嘗めて見るなり。 ㉑ 生肉なり。 ㉒ 魯の朝より供ふるなり。 ㉓ 生は生物なり。 ㉔ 君がれば已れ先づ飯す、其の意石の爲めに海味をなすなり。 ㉕ 章指、病氣中君主見舞ひに來たるときは頭面を東に向ひ、禮服を夜具の上に加へ大帶を引きて見ゆるなり、東は陽氣なり首を東にするに生を欲する意なり。 ㉖ 章指、君主來れと命せば車に馬の附くを俟たずして急いで徒らにて出掛く。 ㉗ 殯はかりもがりと別子假事となり、他國の人に於て殯るべき無きへが死せば自分の所にて假事をなせと

服者式之。式二。百版者。有盛饌。必變色而作。迅雷風烈必變。立執綏。車中不內顧。不疾言。不親指。○色斯舉矣。翔而後集。曰。山梁雌雉。時哉時哉。子路共之。三嗅而作。

いふなり。 ① 贈り物なり。 ② 朋友は財を共通して相助くもの義あり、故に祭肉を贈らざれば神を敬する意味にて拜して受くれども、其の他は車馬の如き高價の贈物にても拜せず。 ③ 手足を布展して死人の如く僵臥せざるをいふ。 ④ 一本には居に客せざるをよるとす、閑居には客の如く窮屈にして居らざりて居るをいふ。 ⑤ 喪服をつけ居る者。 ⑥ 親交あるをいふ。 ⑦ 顔色を易へて正しくするをいふ。 ⑧ 度々相避ひたるをいふ。 ⑨ 姿勢だけを正すをいふ。 ⑩ 死を送る者の服を着たる人。 ⑪ 車前にある横木にて之に手かかけて頭を下げて敬禮するを式といふ。 ⑫ 君に上るべき一國の戸嚮を持つて人。 ⑬ 人に招かれたる時、立派なる馳走が出れば、主人の盛意に對して敬禮する爲めに起立す。 ⑭ 雷鳴甚だしく風烈しき時は夜でも起きて衣冠を着けて坐す、萬一の變事有らんことを慮してなり。 ⑮ 乗車るときは歩いて上に升る禮。 ⑯ 車内を見廻はすなり。 ⑰ 早口に物言ふなり。 ⑱ 白く人又は物を指すなり。 ⑲ 橋上に雌雉あり、鴈を見て能く動く、橋樑樺かちざれば飛び揚りて去る。 ⑳ 同列審視して而後下り止まる。 ㉑ 孔子之を獲て曰く。 ㉒ 梁は橋なり。 ㉓ 去就の時を知らるる。 ㉔ 共は拱秋の義にてとちへんとの意なり。 ㉕ 子路が之を捕へんとて食物を與へたるに三たび嗅きて食はずして去れり。



卷六

先進第十一

子曰。先進於禮樂。野人也。後進於禮樂。君子也。如用之。則吾從先進。○子曰。從我於陳蔡者。皆不及門也。德行。顏淵。閔子騫。冉伯牛。仲弓。言語。宰我。子貢。政事。冉有。季路。文

子曰く、先進の禮樂に於けるは野人なり。後進の禮樂に於けるは君子なり。如し之を用ひば、則ち吾は先進に従はん。○子曰く、我に陳蔡に従ふ者、皆門に及ばざるなり。○德行には顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語には宰我・子貢、政事には冉有・季路、文學には子游・子夏。○子曰く、回や我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於て説ばざる所なし。○子曰く、孝なるかな閔子騫、人其父母昆弟の言を聞せず。○南容白圭を三復す、孔子其兄の子を以て之に妻はす。○季康子問ふ、弟子孰れか學を好むと爲す。孔子對へて曰く、顏回といふ者有り、學を好む、不幸短命にして死せり、今や則ち亡し。○顏淵死す。顏路子の

子游。子夏。○子曰。回也。非助我者也。於吾言無所不說。○子曰。孝哉閔子騫。人不問於其父母昆弟之言。○南容三復白圭。孔子以其兄之子妻之。○季康子問。弟子孰爲好學。孔子對曰。有顏回者。好學。不幸短命死矣。今也則亡。○顏淵死。顏路請以車之。以爲

車以て之が櫛を爲らんと請へり。子曰く、才も不才も、亦各其子と言ふ。○鯉や死せしとき、棺有りて櫛無かりき。吾れ徒行して以て之が櫛を爲らざりしは、吾れ大夫の後に從ひて、徒行す可からざるを以てなり。○顏淵死す。子曰く、噫、天予を喪せり、天予を喪せり。○顏淵死す。子之を哭して慟す。從者曰く、子慟せり。曰く慟する有るか、夫の人の爲めに慟するに非ずして、而して誰が爲にせん。○顏淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。子曰く、不可なり。門人厚く之を葬る。子曰く、回や予を視ること猶ほ父のごとくせり、予の視ること猶ほ子のごとくするを得ざるや、我に非ざるなり、夫の二三子なり。○季路鬼神に事ふるを問ふ、子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉ぞ能く鬼に事へん。曰く、敢て死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉ぞ死を知らん。○閔子側に侍す。閔閭如たり。子路行如たり。冉有子貢侃侃如たり。子樂む。曰く、由が若きは其の死然を得ざらん。○魯人長府を爲る。閔子騫曰く、舊貫





曰。求也退。故進之。由也兼人。故退之。○子畏於匡。顔淵後。子曰。吾以女爲死矣。曰。子在。回何敢死。○季子然問。仲由冉求可謂大臣與。子曰。吾以子爲異之問。曾由與求之間。所謂大臣者。以道事君。不可則止。今由與求也。可謂具臣矣。曰。然則從之者與。子曰。弑父

然の後學びたりと爲さん。子曰く、是の故に夫の佞者を惡む。○子路・曾皙・冉有・公西華侍坐。子曰く、吾が一日爾より長ざるを以て、吾を以てする毋れ。居れば則ち曰ふ、吾を知らざるなりと、如し或は爾を知らば、則ち何を以てせんや。子路率爾として對ふ。曰く、千乘の國、大國の間に攝し、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てす。由や之を爲めば、三年に及ぶ比ひ、勇有り且つ方を知らしむべきなり。夫子之を晒ふ。求爾は何如。對へて曰く、方六七十、如しくは五六十。求や之を爲めば、三年に及ぶ比ひ、民を足らしむ可し、其の禮樂の如きは、以て君子を俟ん。赤爾は何如。對へて曰く、之を能くすと曰ふに非れども、願はくは學ばん、宗廟の事、如しくは會同には、端章甫して、願はくは小相たらん。點爾は何如。瑟を鼓すること希みて、鐸爾として瑟を舍きて作つ。對へて曰く、三子者の撰に異なり。子曰く、何ぞ傷まん、亦各其の志を言ふ。曰く、莫春には春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂

與君亦不從也。○子路使子羔爲費宰。子曰。賊夫人之子。子路曰。有民人焉。有社稷焉。何必修書然後爲學。子曰。是故惡大夫俊者。○子路曾皙。冉有。公西華侍坐。子曰。以三晉一日長乎爾。母吾以也。居則曰。不吾知也。如或知爾。則何以哉。子路率爾而對。曰。千乘之國。

に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん。夫子喟然として歎じて曰く、吾は點に與せん。三子者出づ。曾皙後る。曾皙曰く、夫の三子者の言は何如。子曰く、亦各其の志を言ふのみ。曰く、夫子何ぞ由を晒ふや。曰く、國を爲むるには禮を以てす。其言讓らず。是の故に之を晒ふ。唯求は則ち邦に非ざる。與。安んぞ方六七十如しくは五六十にして邦に非ざる者を見ん。唯赤は則ち邦に非ざるか。宗廟會同、諸侯に非ずして何ぞ。赤や之れが小たらば、孰れか能く之れが大たらん。

● 顏回は其れ聖人の城に近い。 ● 近なり。 ● 祿命を受けず又貧乏せざるを以て隱々然とす。 ● 孔子の弟子。 ● 孔子の弟子。 ● 善人は天資。 ● 子路の名。 ● 命なり即ち富貴なるべき天命。 ● 徳は意もて度るなり。 ● 孔子の弟子。 ● 善人は天資。 ● 良にて未だ學ばざる者、迹は古人の迹。 ● 聖人の室。 ● 曾論の篤實なるのみを以て之に與せば其の人の君子たるか將た色莊たるかを知らず故に言貌のみにて人を取るべからず必ず其の行と心とを見るべしと也。 ● 色莊者とは顔色を作る者即ち君子を疑ふ者にて所謂偽て非なる君子なり。 ● 子路は其の師孔子に問ふ。 ● 事を問ふ。 ● 山は子路のかば即時に之を發行せんと欲す如何と孔子對て曰く父兄あれば先づ其れに相談して爲すべしと。 ● 山は子路の名。 ● 求は冉有の名。 ● 赤は公西華の名なり。 ● 章指、孔子匡に於て雖に過へり時に顔淵をくれたり孔子



攝乎大國之閒。加之。以二師旅。因之。以二機。由也。爲之。比及三年。可使有勇。且知方也。夫子晒之。求爾何如。對曰。方六七十。如五六十。求也爲之。比及三年。可使足民。如其禮樂。以俟。何如。對曰。非曰能之。願學焉。宗廟之事。如會同。端章甫。願爲小相焉。點爾

喜んで曰く吾れは汝既に死せりと思へり。顔淵曰く夫子在世なり。同何ぞ敢て死するをせんと。長すとは危難の畏るべきものに遭遇する意。孔子の容貌態度に似たるが爲めに誤りて匡人に囚まれたる時のことなり。季氏の子弟なり。他事を問ふならんと思ひしに乃ち由・求の事にてありしかとの義。曾は乃なり。臣の數に列するに過ぎざるもの義。之に従ふとは事ふる人の命のまゝに従ふをいふ。子路季氏の宰たる時に子羔を以て賈邑の宰となすされど子羔は年少くして學短せず。而して實際事に當らしむ。これ反りて其の身の徳を累せんことを孔子は憂へたるなり。社は土の神、稷は五穀の神なり。書を讀まざれば學ばずと爲すにも及ぶまじと也。口爾ある者、子路を指す。曾子の父にして名は鮑。蓋し此章は四人の門人が師の面前に於て志を告白せし所にして各人の風乎以て録ふべし。先づ孔子四人のものに向つて曰く吾汝等より一日の年長者なるの故を以て敢て遊學すること勿れ汝等は常に世人の已を知らざるを歎せり。若し汝等を知りて用ふるものあらば如何なることをなすかと。にはかに立ちて對ふるなり。大國なり。小さくちがまつてをること。二千五百人を師となし五百人を旅となす、戰争でつかれたるをいふ。義理に向はしむるなり。小國なり。富足るなり。赤狄は何如と促され、口を開きて曰くそれ出來ると申す譯には非ざれども吾が願は此の如し。即ち宗廟の祭事の時や諸侯會見の時、玄端を衣、章甫を冠りて警蹕する小役となりたしと、玄端は禮服、章甫は禮冠、相は君の禮をたすくる者、小といふは謙辭。時に點は飽にありし琴を取りて之を鼓してありしが、ひきやみて鐘爾と音をなして瑟を置き立つて恭しく答へて曰く、吾汝する所は前の三人とは其の器を異にす、孔子之を勵まして曰く各々其志を達するなれば決して苦しからずと、是に於て點其の志を達して曰く、春の衣服もちやんと出來、壯者五六人と小兒六七人と相提擣して沂水に至りて沐浴し舞舞に至りて涼しき風に吹かれ詩を誦じて歸りたしと、莫春は暮春なり、舞樂は天を祭り雨乞などする處にて埴あり樹木あり、涼

何如。鼓瑟希。鏗爾舍瑟而作。對曰。異乎三子者。又何傷乎。子曰。何傷乎。亦各言其志也。曰。莫春者。春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂。風乎舞雩。詠而歸。夫子喟然歎曰。吾與點也。三子者出。曾皙後。曾皙曰。夫三子者之求。則非邦也與。安見方六七十如五六十。而非邦也者。唯赤則非邦也與。宗廟會同。非諸侯而何。赤也爲之。小。孰能爲之。大。

風に當るによし。詠は歌なり。點は優游徳を養ふの志あり故に孔子は其志を賞して點に與せんと云へるなり。喟然は溜息をつくこと。晒ふは笑ふなり。國家を治むるには禮を以てせざるべからず。而して禮は讓を以て根本とせざるに子路の言ふ所は其だ禮讓を缺く是れ笑ふ所以なり。曾皙又問を發して曰く然らば求も亦邦を治むることを望めるにあらずや何如と。孔子答へて曰く成程然り六七十或は五六十里の小國と雖も邦國にあらずらんやと。曾皙又問ひて曰く然らば赤も亦邦國を治むるを望めるにあらずやと。孔子答へて曰くそれも然ることなり。宗廟會同も諸侯の國のことにあらずらんや。而して赤が小相たらば誰が能く大相たらんと。蓋し三千各其の志を言ひ與に國を治むるを目的とす。而して孔子皆その能を許すも、而も子路獨り言辭謙遜ならざりしを以て之を笑ふの意自ら明かなり。

顏淵第十二

顏淵、仁を問ふ。子曰く、己に克ちて禮を復むを仁と爲す。一日己に克ち

曰。克己復禮。爲仁。一日克己復禮。天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。顏淵曰。請問其目。子曰。非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿言。非禮勿動。顏淵曰。回雖不敏。請事斯語矣。○仲弓問仁。子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。已所不欲。勿施於人。在邦無怨。在家無怨。仲

て禮を復めば、天下仁に歸す。仁を爲すは己に由る、人に由らんや。顏淵曰く、其目を請ひ問ふ。子曰く、非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れ。顏淵曰く、回不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせん。○仲弓仁を問ふ。子曰く、門を出でては大賓を見るが如くし、民を使ふには大祭に承くるが如くす、己の欲せざる所をば、人に施す勿れ。邦に在りても怨み無く、家に在りても怨み無し。仲弓曰く、雍不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせん。○司馬牛仁を問ふ。子曰く、仁とは其の言ふや、曰く、其の言ふや、曰く、斯に之を仁と謂ふか。子曰く、之を爲すは難し、之を言ふに、謂ふ無きを得んや。○司馬牛君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず懼れず。曰く、憂へず懼れざる、斯に之を君子と謂ふか。子曰く、内に省みて疚しからずんば、夫れ何ぞ憂へ何ぞ懼れん。○司馬牛憂ふ。曰く、人皆兄弟有り、我獨り亡し。子夏曰く、商之を聞く、死生命有り、富貴天に在り、君子は敬して失ふこと無く、人と恭して禮有らば、四海

弓曰。雍雖不敏。請事斯語矣。○司馬牛問仁。子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。已所不欲。勿施於人。在邦無怨。在家無怨。仲

の内、皆兄弟たり。君子何ぞ兄弟無きを患へん。○子張明を問ふ。子曰く、澁潤の語、膚受の愬、行れざるは、明と謂ふ可きのみ。浸潤の語、膚受の愬、行れざるは、遠きと謂ふ可きのみ。○子貢政を問ふ。子曰く、食を足し兵を足し、民は之に信にす。子貢曰く、必ず己むを得ずして去らば、斯の三者に於て何をか先せん。曰く、兵を去らん。子貢曰く、必ず己を得ずして去らば、斯の二者に於て何をか先せん。曰く、食を去らん。古より皆死有り、民は信無くんば立たず。○棘子成曰く、君子は質のみ。何ぞ文を以て爲ん。子貢曰く、惜しいかな夫子の君子を説くや、駟も舌に及ばず、文は猶ほ質の如きなり、質は猶ほ文の如きなり。虎豹の鞞は猶ほ犬羊の鞞のごとし。○哀公有若に問ひて、曰く、年饑えて用足らず、之を如何せん。有若對へて曰く、盍ぞ徹せざる。曰く、二も吾猶ほ足らず、之を如何んぞ其れ徹せんや。對へて曰く、百姓足らば、君孰れと與に足らざらん。百姓足らずんば、君孰れと與に足らん。○子張徳を崇うし惑を辨する

夏曰商開之矣。死生有命。富貴在天。君子敬而無失。與人恭而有禮。四海之內。皆爲兄弟也。君子何患乎無兄弟也。○子張問。明子曰。沒潤之謂。膚受之黜。不行焉。可謂明也。已矣。沒潤之謂。膚受之黜。不行焉。可謂遠也已矣。○子貢問政。子曰。足食。足兵。民信之矣。

を問ふ。子曰く、忠信を主とし、義に従ふは、徳を崇めざるなり。之を愛しては、其生を欲し、之を惡みては其死を欲す。既に其生を欲し、又其死を欲するは、是れ惑なり。誠に以て富ます、亦祇に以て異なり。○齊の景公、政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、君は君たり、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり。公曰く、善きかな、信に如し君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子子たらずんば、粟有りとも雖も、吾得て諸を食はんや。

① 私慾に克ちて禮を履み行ふなり ② 復は履むなり朱註には反(カ)とす ③ 在位の君子一日でも能く己の私慾に克ち禮を履むときは天下の民皆之に歸往す ④ 仁 爲すは己に由るにて能く他人 預るべきにあらざるなり ⑤ 非禮の事は己の私なり ⑥ 禁止の辭 ⑦ 孔子の弟子冉雍の字 ⑧ 大賈とは公侯の使臣なり朝聘會同の時の賓客をいふ ⑨ 大祭とは禘郊の祭をいふ、禘とは宗廟の祭、郊とは郊外に天地の神を祭るもの、門を出て公卿に事へては大賈に接する時の如く謹慎し民を使ふには禘郊の祭をなすが如くよく謹むべしとなり ⑩ 孔子の弟子名は犁なり ⑪ 前は難きなり其言輕難に出でざるをいふ ⑫ 孔子司馬牛の間に答へて曰く行ふ所言ふ所の相當らざるは仁道にあはざるなりこれ仁は言ふこと 難き所以也 ⑬ 司馬牛は其兄桓魋の亂をなさんとするを知り大に憂懼す故に前には仁を問ひ後には君子を賢す是を以て孔子は樂へず懼れずを以て答へたるなり ⑭ 汝は病也、内に省みて罪愆なくば憂懼す可き無きなり ⑮ 兄の悪行の爲に大に憂懼し又兄の死戚期の近きにあ

子貢曰。必不得已而去。於斯三者。何先。曰。去兵。子曰。必不得已而去。於斯二者。何先。曰。去食。自古皆有死。民無信不立。○棘子成曰。君子質而已矣。何以文爲。子貢曰。惜乎夫子之說。君子也。驕而不實。猶文也。及香。文猶實也。質猶文也。虎豹之鞞。猶犬羊之鞞。○哀公問。於有

らんことを察し我獨り兄弟なしと歎ぜしなり ① 子夏の名 ② 子夏之を開き歸まして云ふ、死生富貴は天命にして人力の何如ともすべきに非ず故に汝は憂懼するに足らず、又君子は敬自ら持し之を守りて失ふことなく且つ善を盡くし禮を以て人と交すれば人皆敬服して親しむ四海皆同胞なり故に君子は決して兄弟なきを惡まずと ③ 孔子の弟子顔孫師のこと ④ 此の明は人君につきていふ ⑤ 天子能く近臣をして其禮節を用ひざらしめば其の體は明、其の意は遠と云ふべし、没潤、膚受共に體骨てなく自然自然に日月を以て進むものをいふ、明とは心の明なり、没潤とは土の火に漏れよこと、膚受とは垢の皮膚に滲ること。一説に膚受は終始身に切なるの謂といふ ⑥ 謂は禮なり ⑦ 謂は詐なり ⑧ 施政者は民に信を以て臨むなり ⑨ 兵備 ⑩ 經濟政術なり ⑪ 若しも上に信なくは民心動搖して其境に安んぜず、兵災ありと雖も之を如何ともするなりん、故に曰く民は信なくんば立たずと ⑫ 衛の大夫 ⑬ 質素なり孝悌忠信をいふ ⑭ 文は文飾なり詩書、樂をいふ ⑮ 謂は四馬也四顧引の車をいふ言詰一たび口より出づれば驥を以て追ふとも卒に及ぶ可からず其失言を惜む也 ⑯ 文質相等し偏去すべからず若し女を去りて質のみを存せば虎豹の革と犬羊の革と區別し得ざるが如く君子と小人とを何によりて辨別せん ⑰ なめしがは ⑱ 國用 ⑲ 敬は通なり通乎十分の一の年貢を納むるを云ふ、哀公今十分の二を徵すに有若對して何ぞ徵せざるやと曰ふなり ⑳ 孰は誰なり ㉑ 辨別すること ㉒ 義を見ては則意を徙して之に従ふなり ㉓ 人を變態するより其の生死を欲するに至るは物に惑はざる、ものなれば論まざる可からず ㉔ 此二句古來錯簡なりとし季氏第十六の齊景公有馬千疇の首領なるべしと云へり從ふべきが如し、今姑く舊本の體に従ふ ㉕ 時に齊國亂れ道廢し君臣父子の道も行はず故に偶々齊の景公政を問へるに對して孔子此の如く述べて各其道を守るべきをいふ ㉖ 粟はもみごめなり、こ、にてはひろく米穀の類

若曰。年饑用不足。如之何。有若對曰。盡徹乎。曰。吾猶不足。如之何其徹也。對曰。百姓足。君孰與不足。百姓不足。君孰與足。○子張問。崇德辨惑。子曰。主忠信。徙義崇德也。愛之欲其生。惡之欲其死。既欲其生。又欲其死。是惑也。誠不以富。亦祇以異。○齊景公問政於孔子。孔子對曰。君君。臣臣。父父。子子。公曰。善哉。信如君不君。臣不臣。父不父。子不子。雖有粟。吾得而食諸。

子曰。片言可以折獄者。其由也與。子路無宿諾。○子曰。聽訟。吾猶人也。必也使無訟乎。○子張問政。子曰。居之無倦。行之以忠。○子曰。博學於文。約之以禮。亦可以弗畔矣。

子曰く、片言以て獄を折む可き者は、其れ由なるか。子路諾を宿むるなし。○子曰く、訟を聴くは吾猶ほ人のごときなり。必ずや訟なからしめんか。○子張政を問ふ。子曰く、之に居りて倦むなく、之を行ふに忠を以てす。○子曰く、博く文を學び、之を約するに禮を以てせば、亦以て畔かざる可きか。○子曰く、君子は人の美を成して、人の惡を成さず。小人は是に反す。○季康子政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、政は正なり。子帥るるに正を以てせば、孰れか敢て正しからざらん。○季康子盜を患へて孔子に問ふ。孔子對へて曰く、苟も子不欲ならば、之を賞すと雖も竊まじ。○季康子政を孔子に問うて、曰

夫。○子曰。君不成人之美。不成人之惡。小人反是。○季康子問政於孔子。孔子對曰。政者。正也。子帥以正。孰敢不正。○季康子患盜。問於孔子。孔子對曰。苟子之不欲。雖賞之不竊。○季康子問政於孔子。曰。如殺無道。以就有道。何如。孔子對曰。子爲政焉。用殺。子欲

く、如し無道を殺して、以て有道を就さば、何如。孔子對へて曰く、子政を爲す、焉んぞ殺を用ひん。子善を欲れば、民善なり。君子の徳は風なり、小人の徳は艸なり。艸之に風を尙ふれば、必ず偃す。○子張問ふ。士は何如なる斯に之を遠と謂ふ可き。子曰く、何ぞや爾が所謂達とは。子張對へて曰く、邦に在りても必ず聞え、家に在りても必ず聞ゆ。子曰く、是れ聞なり、達に非ざるなり。夫れ達なる者は、質直にして義を好み、言を察して色を觀、慮つて以て人に下る。邦に在りても必ず達し、家に在りても必ず達す。夫れ聞なる者は、色仁を取り、行は違ふ、之に居て疑はず。邦に在りても必ず聞え、家に在りても必ず聞ゆ。○樊遲從ひて舞雩の下に遊ぶ。曰く、敢て徳を崇うし惡を脩め惑を辨するを問ふ。子曰く、善きかな問や。事を先にして得るを後にするは、徳を崇うるに非ずや。其惡を攻めて、人の惡を攻むる無きは、惡を脩むるに非ずや。一朝の忿に、其身を忘れて、以て其親に及すは、惑に非ずや。○樊遲



善而民善矣。君子之德風。小人之德草。艸尚之風。必偃。○子張問。士何如斯可謂之達矣。子曰。何哉。爾所謂達者。子張對曰。在邦必聞。在家必聞。子曰。是聞也。非達也。夫達也者。質直而好義。察言而觀色。慮以下人。在邦必達。在家必達。夫聞也者。色取仁而行違。居

仁を問ふ。子曰く、人を愛す。知を問ふ。子曰く、人を知る。樊遲未だ達せず。子曰く、直きを舉げて諸を枉るに錯けば、能く枉れる者をして直からしむ。樊遲退き子夏を見て、曰く、郷きに吾夫子に見えて知を問ふ、子曰く、直きを舉げて諸を枉るに錯けば、能く枉れる者をして直からしむと。何の謂ひぞや。子夏曰く、富めるかな言や、舜天下を有つや、衆に選びて臯陶を舉げ、不仁者遠さかる。湯天下を有つや、衆に選びて、伊尹を舉げ、不仁者遠さかる。○子貢友を問ふ。子曰く、忠告して之を善道し、不可なれば止めよ。自ら辱めらるゝ毋れ。○曾子曰く、君子は文を以て友を會す、友を以て仁を輔く。

● 子路の一言にして人之に服するをいふ ● 折は斷するなり ● 子路は語しては直ちに之を實行す ● 民の訟を聽き之を裁斷するに於ては他人に等し、吾れ民を治めば民をして訟ふるをからしめん ● 子張の政を問へるに答へて身政事に居りて能まらず常に傾けて事を行ひ政を民に行ふには思を以てするにありと ● 道に違はざるべきかか意、この章重出、痛也篇に見ゆ ● 君子は人の善を誘ひ奨励してよくその事を成就せしめ、人の惡あるをば彼をして自省してそれを成し遂げざらしむるを期す小人は之に反て、人の惡を成し美を傷 ● 魯の上卿なり ● 師は率なり自ら身を率ふるに正を以てせば人皆正しからん、子は季康子なり、師以正、魯本「而正師」に作る

之不疑。在邦必聞。在家必聞。○樊遲從遊於舞雩之下。曰。敢問崇德。脩慝。辨惑。子曰。善哉。問先事後得。非崇德與。攻其惡。無攻人之惡。非脩慝與。一朝之忿。忘其身。以及親。非惑與。○樊遲問。仁。子曰。愛人。問知。子曰。知人。樊遲未達。子曰。舉直錯諸枉。能使枉者直。樊遲退。見子夏。曰。鄉也。吾見於夫子。而問知。子曰。舉直錯諸枉。能使枉者直。何謂也。子夏曰。富哉。言乎。舜有天下。選於衆。舉臯陶。不仁者遠矣。湯有天下。選於衆。舉伊尹。不仁者遠矣。○子貢問友。子曰。忠告而善道之。不可則止。毋自辱焉。○曾子曰。君子以文會友。以友輔仁。

● 季子康專橫厚斂にして不義の富を致せり下民之に徴ひて盜むものあるは固より當然なりとす若し上に於て欲を節し民を惠まば竊むものに實を與ふとも民敢て盜まじ ● 不欲は無欲とは異なり不欲は欲を制して散て肆にせざるなり無欲は之を絶ちて復心に存せざるなり ● 無道の者を殺して有道の者を成風し之を位に於けり ● 上と下との感應速かにして下民は必ず上の爲す所に效ふをいふ ● 加ふるなり ● 止すなり ● 遠は質直にして義を好む人の言語顔色を察してその欲する所を知り其の心常に人に下る此の如きものは居る所に従ひ必ず達す ● 問は外貌に仁を假りて實行は仁に合はず其の偽に居りて自ら疑はす此の如きものは居る所に隨ひ其名聞ゆとなり。達者は實、聞者は名なり ● 孔子の弟子、名、須、勞力を先にして其の報を後にするは徳を高くするにあらずや ● 己れの惡を責め一人の惡を責むるなきは難を悟むるにあらずや、腹は心の内にかくれたる惡 ● 又一時の忿怒の爲めに己の身を忘れ禍を父母に及ぼすは惡にあらずや ● 直き者を擧げて枉れる者の上に置けば枉れる者も皆自然に直となる、蓋し不、矯むるの驗、此則爲政にも見ゆ ● 包含する所の廣大なるを歎するなり ● 人皆化せられて仁と爲り不仁者あるを見ず ● 友道を、眼目と交はるる道をいふ ● 誠心をもて告ぐるなり ● 善く導くなり ● 交遊を絶つなり ● 詩書禮樂 ● 相互に切磋して共に善に進むを云ふ

卷之七

子路第十三

子路問政。子曰。先之勞之。請益。曰。無倦。○仲弓爲季氏宰。問政。子曰。先有司。赦小過。舉賢才。曰。焉知賢才。而舉之。曰。舉爾所知。爾所不知。人其舍諸。○子路曰。衛君待子而

子路政を問ふ。子曰く、之を先んじ之を勞す、益を請ふ。曰く、倦む無れ。○仲弓季氏の宰と爲り政を問ふ。子曰く、有司を先にす、小過を赦して、賢才を舉げよ。曰く、焉ぞ賢才を知つて之れを舉げん。曰く、爾が知る所を舉げよ。爾が知らざる所は、人其れ諸を捨てんや。○子路曰く、衛君、子を待つて政を爲す。子將に奚をか先にせんとなす。子曰く、必ずや名を正さんか。子路曰く、是れ有るかな子の迂なる、奚ぞ其れ正さん。子曰く、野なるかな山や。君子は其の知らざる所に於て、蓋し闕如するなり。名正しからざれば、則ち言順ならず。言順ならざれば、則ち事成らず。事成らざれば、則ち禮樂興らず。

爲政。子將奚先。子曰。必也正名乎。子路曰。有是哉。子之迂也。奚其正。子曰。野哉。由也。君子於其所不知。蓋闕如也。名不正。則言不順。事不成。禮樂不興。則禮樂不興。刑罰不中。則民無所措手足。故君子名之必可言也。言之必可行也。

禮樂興らざれば、則ち刑罰中らず。刑罰中らざれば、則ち民手足を措く所無し。故に君子之を名づくれば、必ず言ふ可くす。之を言へば、必ず行ふ可くす。君子は其言に於て、苟もする所無きのみ。○樊遲稼を學ばんと請ふ。子曰く、吾老農に如かず。圃を爲ぐるを學ばんと請ふ。曰く、吾れ老圃に如かず。樊遲出づ。子曰く、小人なるかな樊須や。上禮を好めば、則ち民敢て敬せざる莫し。上義を好めば、則ち民敢て服せざるなし。上信を好めば、則ち民敢て情を用ひざるなし。夫れ是の如くば、則ち四方の民、其子を襁負して而して至らん。焉ぞ稼を用ひん。○子曰く、詩三百を誦すれども、之に授くるに政を以てして達せず、四方に使用して、專對する能はずんば、多しと雖も亦奚を以て爲ん。○子曰く、其身正しければ、令せずして行はれ、其の身正しからずんば、令すと雖も從はず。○子曰く、魯衛の政は兄弟なり。○子、衛の公子荆を謂ふ、善く室に居ると。始め有るに、曰く、苟に合へり。少しく有るに曰く、苟に

君子於其言無所苟而已矣。○樊遲請學稼。子曰吾不如老農。請學爲圃。曰吾不如老圃。樊遲出。子曰小人哉。樊須也。上好禮則民莫敢不敬。上好義則民莫敢不服。上好信則民莫敢不用情。夫如是則四方之民襁負其子而至矣。焉用稼。○子曰。詩三百。授之

完し。富に有るに曰く、苟も美なりと。○子衛に適く、冉有僕たり。子曰く、庶なるかな。冉有曰く、既に庶なり、又何をか加へん。曰く、之を富さん。曰く、既に富めり。又何をか加へん。曰く、之を教へん。○子曰く、苟も我を用ふる者有らば、朞月にして己に可なり。三年成る有らん。○子曰く、善人邦を爲むること百年ならば、亦以て殘に勝ち殺を去る可しと。誠なるかな是の言や。○子曰く、如し王者有りと、必ず世にして後に仁ならん。○子曰く、苟も其の身を正しくせば、政に従ふに於て何か有らん、其の身を正しくする能はずんば、人を正すことを如何せん。○冉子朝を退く。子曰く、何ぞ晏きや。對へて曰く、政有り。子曰く、其れ事ならん。如し政有らば、吾を以ひすと雖も、吾其れ之を與り聞かん。

● 政治の要は民事を先にしよく民を慰勞するにありと。或は「之に先んじ」と訓じ、身を以て民に先んじ率先して事を爲すと解す。● 其答餘りに單簡なるを怪みて其の餘を問へるなり。是に於て孔子は上の二事を極む事なく行へと答へたり、益とは増補の意。● 仲弓は孔子の弟子冉雍の字。● 政を極すには有司を擇ぶを先務とす有司

以政不達。仲二於四方不能。專對。雖多亦奚以爲。○子曰。其身正。不令而行。其身不正。雖令不從。○子曰。魯衛之政。兄弟也。○子謂。衛公子蒯。善居室。始有曰。苟合矣。少有曰。苟完矣。富有曰。苟美矣。○子曰。衛。冉有僕。子曰。庶矣哉。冉有曰。既庶矣。又何加焉。曰。富之曰。

を擇ぶには其小過を救し、其の用ふるに足るを取るべし。● 衛君とは出公執政をいふ是の時孔子は楚より往て反れり。● 孔子。● 先とは爲政上の第一着子の義。● 名實の乖れたる正す。● 世事に注意なきこと。● 名野人のごときなり。● 國知は言を諷くなり知らざる所は敢て言はざるものと其華國安んずる也。● 名其の實に當らざれば言順ならざるなり。● 言順ならざれば以て其の實を考ふるなくし。● 事成らず。● 君子は序を得る之を語といひ物其の和を得る之を樂といふ。事成らざれば和なくして和なくして故に稱與らず。● 君子は名づくるところ。事は必ず言ふべくし言ふところの必ず行ふ可くす言をかりせむにすこと無し。● 樊遲民の貧困にして田圃の荒廢せるを見之を告げて其貧困を救はんとせり故に此の間あり。● 五穀を種うるをいふ。● 誠知。● 種うるをいふ。● 誠實なるなり。● たすきにて赤子を養ふことなり。● 詩三百五篇は人心自然の誠情の感發する所、その眞精神を了悟せば、政を爲して必ず達すべく四方に使して君命を辱しめざるべし、若し然らずして詩を誦しながら政治には通ぜず使節となりて大受を取るか如き事あれば多く詩を學べりと雖も稱するに足らざるなり。● 全權を委任せられてや渉に當るなり。● 令は教令なり。● 章指、魯の先周公と衛の先康叔とは兄弟なり今日の魯衛の政治も亦兄弟にて相似て同じく亂れたりとの嘆也。● 善く家を理むるをいふ。● 其初めは産少許ありしときは之にて間に合へりといひ、其後少しく財産の増殖するや曰く之にて十分なりと。● 大に財産となれば時に乃ち曰く之に一善と、蓋し其足るを知るを稱して善く家を理むと評したる也。● 民の樂きを歡美せるなり。● 一年より一年にして政教かなりに行はるべく三年にして功成らん。● 古言に善人世を治め政を執ること百年ならば亂臣賊子自ら亡び刑殺を用ふるを要せざるに至るべしとありこの言誠に然り。● 章指、今日の如く亂れはてたる昭宣時代にありては、よしや王者の起るありとも、民の愚習を化して一新せんとするには相當の時を要す故に必ず三十年にして仁澤始めて天下に遍れん。● 世とは三十年。● 冉

既富矣。又何加焉。曰。教之。

○子曰。苟有用我者。非三月而可也。三年有成。○子曰。善人爲邦百年。亦可勝殘去殺矣。誠哉是言也。○子曰。如有王者。必世而後仁。○子曰。苟正其身矣。於從政乎何有。不能正其身。如正人何。○冉子退朝。子曰。何晏也。對曰。有政。子曰。其事也。如有政。雖不吾以。吾其與聞之。

有は時に季氏の宰たり 國家の政事 季氏の家事 蓋し孔子の意は若し政ありとせば吾は大夫なればよしや用ひられずとも與かり聞かすべき事なるに善之に與らざるよりすれば故の今日譲せるものは政にあらざして家事なるべしといひて、以て暗に名分を正し權臣を抑ふるの意を再有に諷諭せるなるべし

定公問。一言而可以興邦。有諸。孔子對曰。言不可。以若是其幾也。人之言曰。爲君難。爲臣不易。如知爲君之難也。不幾乎。一言而興邦乎。曰。一言

定公問ふ。一言にして以て邦を興す可きこと諸れ有るか。孔子對へて曰く、言は以て是の若く其れ幾すべからざるなり。人の言に曰く、君爲るは難し、臣爲るは易からずと。如し君爲るの難きを知らば、一言にして而して邦を興すに幾せざらんや。曰く、一言にして而して以て邦を喪ふこと、諸れ有るか。孔子對へて曰く、言は以て是の若く其れ幾すべからざるなり。人の言に曰く、予君爲るを樂む無し、唯其れ言うて予に違ふ莫きなりと。若し其れ善にして、而して之に違ふ莫きや、亦善かちすや。若し不善にして而して之に違ふ莫きや、一言にして而し

而喪邦有諸。孔子對曰。言不可。以若是其幾也。人之言曰。予無樂乎爲君。唯其言而莫予聽也。如其善而莫之違也。不亦善乎。如不善而莫之違也。不幾乎。一言而喪邦乎。○葉公問政。子曰。近者說遠者來。○子夏爲莒父宰。問政。子曰。無欲速。無見小利。欲速則不

て邦を喪ふに幾せざらんや。○葉公政を問ふ。子曰く、近き者説べば、遠き者來る。○子夏莒父の宰と爲り政を問ふ。子曰く、速ならんことを欲する無し。小利を見る無し。遠ならんことを欲せば、則ち達せず。小利を見れば、則ち大事成らず。○葉公孔子に語りて曰く、吾が黨に直躬といふ者有り。其父羊を攘みて、而して子之を證す。孔子曰く、吾が黨の直き者は、是れに異なり。父は子の爲めに隠し、子は父の爲めに隠す。直きこと其中に在り。○樊遲仁を問ふ。子曰く、居處恭に、事を執りて敬に、人と忠なるは、夷狄に之くと雖も、棄つ可からざるなり。○子貢問ふ。曰く、何如なる斯れ之を士と謂ふ可き。子曰く、己を行ふに恥あり、四方に使して、君命を辱めざる。士と謂ふ可し。曰く、敢て其次を問ふ。曰く、宗族孝を稱し、鄉黨弟を稱す。曰く、敢て其の次を問ふ。曰く、言へば必ず信、行へば必ず果、確然として小人なるかな、抑亦以て次と爲す可きか。曰く、今の政に従ふ者は如何に。子曰く、噫、斗



達見小利則大事不成。○葉公語孔子曰。吾黨有直躬者。其父攘羊而子證之。孔子曰。吾黨之直者異於。是父爲子隱。子爲父隱。直在其中矣。○樊遲問曰。子曰。居處恭。執事敬。與人忠。雖之夷狄不可棄也。○子貢問曰。何如斯可謂之士矣。子曰。行己有恥。使於四

笱の人、何ぞ算ふるに足らんや。○子曰く、中行を得て之に與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進んで取り、狷者は爲さざる所有るなり。○子曰く、南人言へる有り。曰く、人にして恆無くんば以て巫醫を作す可からずと。善いかな。其徳を恆にせずんば、或は之に羞を承むと。子曰く、占はざるのみ。○子曰く、君子は和して同せず。小人は同して和せず。○子貢問ふ。曰く、郷人皆之を好せば、何如ん。子曰く、未だ可ならざるなり。郷人皆之を惡まば、何如ん。子曰く、未だ可ならざるなり。郷人の善者之を好し、其不善者之を惡むに如かず。○子曰く、君子は事へ易くして説ばせ難し。之を説ぶるに道を以てせざれば、説ばざるなり。其の人を使ふに及びてや、之を器にす。小人は事へ難くして説ばせ易し。之を説ぶるに道を以てせずと雖も説ぶなり。其の人を使ふに及びてや、備はらんことを求む。○子曰く、君子は泰にして驕ならず、小人は驕にして泰ならず。○子曰く、剛毅木訥は仁に近し。○子路問ふ。曰く、何如なる斯れ

方。不辱君命。可謂士矣。曰。取問其次。曰。宗族稱孝焉。鄉黨稱弟焉。曰。敢問其次。曰。言必信。行必果。硜硜然小人哉。抑亦可。以爲次矣。曰。今之從政者何如。子曰。噫。斗筭也。○何足算也。○子曰。不得中而行而與之。必也狂狷乎。狂者進取。狷者有所不爲也。○子曰。南人

之を士と謂ふ可きか。子曰く、切切惇惇怡怡たり、士と謂ふ可し。朋反には切切惇惇たり、兄弟には怡怡たり。○子曰く、善人民を教ふる七年ならば、亦以て戎に即かしむ可し。○子曰く、教へざる民を以て戦ふは、是れ之を棄つと謂ふ。

● 魯君 一言にして邦を興すを期望するが如き譯には行かざれども、下文の如き亦以て期望すべからざるやと也 ● 君たることは別に樂しきことは無けれども何事を言ひても人が一言も反對せぬことは君位に居らざるに及ぶ近き善徳澤を被りて悦ばば遊業者其の徳風を聞きて慕ひ來らん ● 魯の邑名 ● 車功の強かじあるをいふ ● 直者其の名を弱といふ者 ● 父子相隱すは人情の自然なり此人情の内直の實自存す ● 魯は魯を主とし魯は外に見れば魯は中にまたり ● 行爲をなすに當り深く謙辱の心を持て、不義を恥じて道を守る ● 郷は村、黨は折衝 ● 行はんと欲する所を敢行すること ● 堅くして論議の遠く因襲たること ● 斗筭は竹に作り少量を容る器、以て小人物に喩ふ ● 中道を行ひある人 ● 狂者及び狷者 ● 狂者は志大にして心に古人を慕ひ之に倣はんとするもの ● 狷者は介然として操守有り汗行を惡む故に不義を爲さざる者は何とも仕方なきもの也 ● 以下別章とする説あり、易の言に徳常ならざるものは常に恥辱を受くといふことあり孔子其言に就て曰く其性徳常ならざるものは占はば必ず凶なる故に占はずとも吉凶決すと ● 乘展

有言曰。人而無恆。不可三以作。丞醫。善夫。不恆其德。或承之。蓋子曰。不占而已矣。

○子曰。君子而不同。小人同而不和。○子貢問曰。鄉人皆好之何如。子曰。未可也。鄉人皆惡之何如。子曰。未可也。不如鄉人之善者好之。其不善者惡之。○子曰。君子易事而難說也。說之不備焉。○子曰。君子泰而不驕。小人驕而不泰。○子曰。剛毅木訥近仁。○子路問曰。何如斯可謂之士矣。子曰。切切。懇懇。怡怡。如也。可謂之士矣。朋友切切。兄弟怡怡。○子曰。善人教民七年。亦可以即戎矣。○子曰。以不教民戰。是謂棄之。

の心なきなり 同は雷同なり 君子はそれく人の材能を察して各人の長所に因りて之を用ふ即ち之を器にするなり、故に人事へ易し 小人は人を用ふるに備はることを一人に求む故に事へ難し 泰然安舒即ち精神的自由を得たるをいふ 驕は人に驕りなり 剛毅木訥は巧言令色の反対なり質朴剛毅にして言辭に拘なる人なり、此の如き人は義を守ること固く實行を重んず故に仁に近しと云ふ 切々懇々は互に善を賣むるの貌 和順の貌なり 善人とは君子に次ぐ人 兵役につき戦闘に従ふこと 之を棄つは民を棄つるなり

憲問第十四

憲問。恥。子曰。

憲恥を問ふ。子曰く、邦道あれば殺す。邦道無くして殺するは恥なり。○克

邦有道。穀。邦無道。穀。恥也。○克伐怨欲不行焉。不可二以爲仁矣。子曰。可二以爲難矣。仁則吾不知也。○子曰。士而懷居。不足二以爲士矣。○子曰。邦有道。危言危行。邦無道。危行言孫。○子曰。有德者必有言。有言者不必有德。仁者必有勇。勇者不必有仁。○南宮适問於孔

伐怨欲行はれずんば、以て仁と爲す可きか。子曰く、以て難しと爲すべし。仁は則ち吾知らざるなり。○子曰く、士にして居を懷へば、以て士と爲すに足りず。○子曰く、邦道あれば、言を危うし行を危うす。邦道なければ、行を危うし言は孫ふ。○子曰く、徳ある者は、必ず言あり。言ある者は、必ずしも徳有らず。仁者は必ず勇有り。勇者は必ずしも仁有らず。○南宮适孔子に問ふ、曰く、辨は射を善くし、辨は舟を濫す、俱に其死然を得ず、禹稷躬稼して、天下を有つと。夫子答へず。南宮适出づ。子曰く、君子なるかな。若き人。徳を尙ぶかな。若き人。○子曰く、君子にして不仁なる者有らんか。未だ小人にして仁なる者あらざるなり。○子曰く、之れを愛す、能く勞せしむる勿らんや。忠す、能く誨ふる勿らんや。○子曰く、命を爲る、神謀之を草創し世叔之を討論し、行人子羽之を脩飾し、東里の子産之を潤色す。○或ひと子産を問ふ、子曰く、惠人なり。子西を問ふ、曰く、彼れをや彼れをや。管仲を



之勇。冉求之  
藝。文之以禮  
樂。亦可。以爲  
成人。矣。曰。今  
之成人者。何  
必然。見利思  
義。見危授命。  
久要不忘。平  
生之言。亦可  
以爲成人。矣。  
○子問公叔  
文子於公明  
賈。曰。信乎。  
夫子不言。笑  
不取乎。公明  
賈對曰。以告  
者過也。夫子  
時然後言。人  
不厭其言。樂  
然後笑。人不

高峻にするの義 孫は是顧なり 徳あるものは必ず善言あり、言は善言也 魯の大夫なり 古の  
射を善くする人 古の多力の人 覆へずなり 天壽自然の死を得る能はざりしを云ふ 冉  
は力を灌漑の便を興ふるに盡し所獲は民に授けの事を教へたり故に射に縁すといふ 適の心竊に孔子を偶獲  
に比せり故に孔子は謙遜して答へず 君子は仁に志すも其徳未だ圓満完全と云ふべからず故に時として不仁  
亦免れず 人を愛して而も之を勞せしむるが眞の愛といふもの也 又人に忠を養ふも教誨するなくば十  
分忠と稱すべからざるなり 韋指、此章は鄒國が外交の辭令に意を用ふるの周旋するを稱したるものなり  
神龍以下四人は皆鄭の大夫なり 草稱を起すなり 其可否を評議するなり 使を掌る官なり  
蓋愛ある人 齒牙にかくるに足らざるの義 此の人と云ふが如し 伯氏罪あり當時管仲齊に  
相たりしが伯氏の領地野邑三百家を奪へり伯氏は己の罪あるを知り管仲を懇みず生涯貧困にて身を終はりて懇みず  
管仲は人心を服せしむるだけの器量ありし人物なりとなり 伯氏がなり 韋指、人貧困なれば天を懇み  
人を怨むる、これ人情の免れざる所、その難きに比しては、富貴にして驕奢に耽らざるは左程難き所にあらず也  
魯の大夫にして、蘇武清原なれども才能に乏しき人か 家老 餘裕あるなり蓋し趙魏の家老となれ  
ば其職繁ならず只隲直下を掌めれば是る賸餘の二國は小國なれども大夫なれば職務煩雜を極む是れ孔子孟公綽を評  
して趙魏の家老たらしむべけれども賸餘の大夫たらしむべからずといへる所以ならん 學びて徳を成就せし人  
魯の大夫 公綽も魯の大夫 寡欲にして貪らざ 卞莊子も魯の大夫 孔子の弟子 衛の大夫 衛人なり  
舊約なり舊約して當時の言を忘れず之を踐み行ひ、平生は宿昔 孔ナ 衛の大夫 衛人なり  
孔子聞きて曰く汝の説く所正に然るべし、世に傳ふる三事の如き豈をれ然らんやと。其言を然りと許して而も其美  
に過ぐるを疑ふとなす亦一解 或武仲は隣に遇ひて出奔し防といふ地に至り魯公に子孫を防に封せられんこと

厭其笑。義然  
後取。人不厭  
其取。子曰。其  
然。豈其然乎。  
○子曰。臧武  
仲以防求爲  
後於魯。雖曰  
不要君。吾不  
信也。○子曰。  
晉文公諱而  
不正。齊桓公  
正而不諱。○  
子路曰。桓公殺  
公子糾。如其  
仁。如其仁。○  
子貢曰。管仲  
非仁者。與。  
桓公殺公子  
糾。不能死。又  
相之。子曰。  
管仲相桓公。羅  
諸侯。匡天下。  
民到于今。受  
其賜。微管仲。  
吾其披髮左  
衽矣。豈若匹  
夫匹婦之爲諒  
也。自經於溝  
瀆。而莫之知  
也。○公叔文  
子之臣大夫  
僕與文子同  
升。諸公。子聞  
之曰。可以爲  
文矣。

を求めたり 強ひてもとむ 魯の文公名は重耳、齊の桓公名は小白、諱は讓にて正道に由らざるをいふ  
二君共に窮苦にして再狄を擯ひ周室を尊べしもの、二者共に王道にはあはれども、其行ふ所を史に徴するに、魯  
の文公は詐諱を以てし、衛の桓公は義を守りて諱ならず 齊の桓公の亂に鮑叔牙は公子小白を奉じて宮に奔り  
管仲及び召忽は公子糾を奉じて魯に逃が裏公執せらる、や小白魯より入りて立つ之を桓公となす、齊人公子糾を殺  
す召忽之に死し管仲は囚はれて野に入り遂に桓公を相けて天下に覇たらしむ管仲は糾の爲めに死せずして却て其敵  
たる桓公を相くるが如き以て仁と謂ふ可からず故に子路此問ありなり 糾合なり 兵甲を用ひ殺伐す  
ることを避けるは亦仁道に悞れりと云ふ可からず 邪は把なり王者の政教を把持するの意 天下を匡  
正す 波髮左衽共に夷狄の風なり 小信を守りて溝瀆の中に自ら隠れて死し世之を知るものなきが如き  
小人の信とは別也 犬死の義 家臣なり 公は公朝なり之を賜めて己れと同進し公朝の臣となる  
なり原文の「諱」は「於」也 文といふ美諱にふさはしと也

子言衛靈公

子衛の靈公の無道を言ふ、康子曰く、夫れ是の如くんば、奚ぞ喪びざる。孔子曰



之無道也。康子曰。夫如是。奚而不喪。孔子曰。仲叔圍治賓客。祝鮀治宗廟。王孫賈治軍旅。夫如是。奚其喪。○子曰。其言之不作。則爲之也難。○陳成子弑簡公。孔子沐浴而朝。告於哀公曰。陳恆弑其君。請討之。公曰。告夫三子。孔子曰。以吾從大夫之後。不敢不告也。

く、仲叔圍賓客を治め、祝鮀宗廟を治め、王孫賈軍旅を治む、夫れ是の如し、奚ぞ其れ喪びん。○子曰く、其の之を言うて作らず、則ち之を爲す難し。○陳成子簡公を弑す。孔子沐浴して朝し、哀公に告げて、曰く、陳恆其君を弑す、請ふ之を討たん。公曰く、夫の三子に告げよ。孔子曰く、吾大夫の後に従ふを以て、敢て告げずんばあらず。君曰く、夫の三子者に告げよと。三子に之きて告ぐ。可かず。孔子曰く、吾大夫の後に従ふを以て、敢て告げずんばあざるなり。○子路君に事ふるを問ふ。子曰く、欺く勿れ、而して之を犯せ。○子曰く、君子は上達し、小人は下達す。○子曰く、古の學者は己の爲にし、今の學者は人の爲にす。○蘧伯玉人を孔子に使す。孔子之と坐して問ふ、曰く、夫子何をか爲す。對へて曰く、夫子其過を寡くせんと欲して、未だ能はざるなりと。使者出づ。子曰く、使なるかな、使なるかな。○子曰く、其位に在らざれば、其政を謀らず。○曾子曰く、君子は思ふこと其位を出でず。○子曰

子曰。告夫三子者。不可。孔子曰。以吾從大夫之後。不敢不告也。○子路問事君。子曰。勿欺也。而犯之。○子曰。君子上進。小人下達。○子曰。古之學者爲己。今之學者爲人。○蘧伯玉使人入於孔子。孔子與之坐而問焉。曰。夫子何爲對曰。夫子欲寡其過而未

く、君子は其言の其行に過ぐるを恥づるなり。○子曰く、君子の道なる者三、我能くする無し、仁者は憂へず、知者は惑はず、勇者は懼れず。子貢曰く、夫子自ら道ふなり。○子貢人をかぶ。子曰く、賜や賢なるかな、夫れ我は則ち暇あらず。○子曰く、人の己を知らざるを患へず、其の能ざるを患ふ。○子曰く、詐を逆へず、不信を億からず、抑々亦先覺する者は是れ賢か。○微生畝孔子に謂ひて曰く、丘何ぞ是の柄柄たる者を爲す、乃ち佞を爲す無からんか。孔子曰く、敢て佞を爲すに非ざるなり、固を疾めばなり。○子曰く、驥は其力を稱せず、其徳を稱するなり。○或ひと曰く、徳を以て怨に報いば、何如と。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨に報い、徳を以て徳に報いん。○子曰く、我を知る莫きか、子貢曰く、何ぞ其れ子を知る莫しと爲す。子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知る者は其れ天か。○公伯寮子路を季孫に懇ふ。子服景伯以て告ぐ。曰く、夫子固より公伯寮に感志有り、

能也。使者出。子曰。使乎。使其位。不謀。其政。○曾子曰。君子思不出其位。○子曰。君子恥其行。言而過。其行。○子曰。君子道者三。我無能焉。仁者不愛。知者不惑。勇者不懼。子曰。夫。子貢道也。○子貢方人。子曰。賜也。賢乎哉。夫我則不暇。○子曰。不患三人

吾が力猶ほ能く諸を市朝に肆さん。子曰く、道の將に行はれんとするや命なり、道の將に廢れんとするや命なり、公伯寮其れ命を何如せん。○子曰く、賢者は世を辟く、其次は地を辟く、其次は色を辟く、其次は言を辟く。○子曰く、作つ者七人。○子路石門に宿す。晨門曰く、奚よりすと。子路曰く、孔氏よりすと。曰く、是れ其不可を知りて之を僞す者か。○子路を衛に撃つ。糞を荷ひて孔氏の門を過ぐる者有り、曰く、心有るかな馨を撃つや。既にして曰く、鄙なる哉。磔磔乎たり、己を知る莫きなり、斯れ己まんのみ、深ければ則ち厲し、淺ければ則ち揭す。子曰く、果なるかな、之れ難き末し。○子張曰く、書に云ふ、高宗諒陰三年言はふと、何の謂ぞ。子曰く、何ぞ必ずしも高宗のみならん、古の人皆然り、君薨すれば百官己を總べて、以て冢宰に聽くこと三年なり。○子曰く、上禮を好めば、民使ひ易し。○子路君子を問ふ。子曰く、己を脩めて以て敬す。曰く、斯の如きのみか。曰く、己を脩めて以て人を安んず。曰く、斯の如きのみか。曰

之不己知。患其不能也。○子曰。不逆詐。不億不信。抑亦先覺者是賢乎。○微生畝謂孔子曰。丘何爲是。栖栖者。與。無乃爲佞乎。孔子曰。非敢爲佞也。疾固也。○子曰。驥不稱其力。稱其德也。○或曰。以德報怨。何如。子曰。何以報德。以直報怨。以德報德。○子曰。莫我知

く、己を脩めて以て百姓を安んず。己を脩めて以て百姓を安んずるは、堯舜も其れ猶ほ諸を病めり。○原壤夷して俛つ。子曰く、幼にして孫弟ならず、長じて述ぶる無く、老て死せず、是を賊と爲すと。杖を以て其脛を叩てり。○闕黨の童子命を將ふ。或ひと之を問うて、曰く、益する者か。子曰く、吾其の位に居るを見る、其の先生と並び行くを見る、益を求むる者に非ざるなり、速に成らんと欲する者なり。

●孔子 ●位を失ふをいふ ●仲叔圍能く賓客を治むれば隨國との好を失はず ●能く宗廟を治むれば君王の貴きを失はず ●能く軍旅を治むれば民心を失はず ●内に賓有れば之を言に發して難す ●賓を稱むことは爲し易からず ●齊の大夫名は恆 ●齊君なり ●魯君 ●哀公專斷にて事を決す能はず故に孔子をして季孫、孟孫、叔孫の三家に告げしむ ●孔子退きて人に語りて曰ふなり ●討つ事をき、入れざりし也 ●誠心誠意君に事へて決して欺く事勿れ ●若し君に過失あらば諷を犯して諫むべきなり ●君子は常に心の修養を怠らずして上へ上へと進み、上の極に達し、小人は利を求むるに急にして上へ下へと進みて下の極に達す、君子益々君子にして小人益々小人なり。この章異說殊に紛々 ●己の身に道徳がツつむなり ●口にいひて人に聞かせ其誠にはこりて身の徳に益なし ●衛の大夫 ●蘧伯玉のこと ●讒辭なり ●原文而「鼠本」之に作るに従つて訓ず ●孔子自身がそつくりそのまゝと也 ●人を比較評論するなり

也夫。子貢曰。何爲其莫知也。子曰。不怨天。不尤人。下學而上達。知我者其天乎。○公伯察愬子路於季孫。子服景伯以告曰。夫子固有惑志於公伯察。吾力猶能肆諸市朝。子曰。道之將行也與。命也。道之將廢也。與。命也。公伯察其如命。○子曰。賢者辟世。其次

賜は子貢の名 人を比較論評する餘裕探あちざるなり。賜に子貢を賞揚して却りて深く之を仰よるの深意を見る 人が己を欺くならんとて豫め之を察する如き事なく 人の己を信ぜざらん事を思ひて兼々より心配する如き事なし 逆へず傲せずして人の情偏自然に我が心に先づ覺るは是れ察也 孔子と同郷の先賢なるべし 東奔西走して居に安せず 口才なり 固とは執滞通ぜざるなり固陋に世を思ひ切りて隠居其身を善くするを謂ふ 善馬なり其力能く遠きに至るを以て稱せられ其進退節あり歩趨度有り、又よく斷良すべきを以て稱せらる人亦才より徳を尚ぶとの意を寓す 徳を以て怨に報ゆるは老子の唱ふる所、孔子は之を取らざる也 孔子は世主の己を知らず用ひて以て道を行はしめざるを歎せしなり 卑近の事を學びて以て高邁の道に超し、遂によく天命の然るを知る、則ち眞に我を知るものはそれ天かとも 魯人なる公伯察は子路を季孫に讒言す 此事を孔子に告げしなり子服景伯は魯の大夫子服何なり 季孫惑ひて讒言を信じて子路を疑へり 吾が力にて公伯察を誅し其戸を閉じ市朝に肆し子路の讒を解くとを得んと 道全く行はざれば世を避けて出でず、程子の説に、其次々々といふは大小の次第を以ていふも而も優劣に非ず境遇の不同のみと 亂國を去りて他にゆくなり 禮説の護へたるを見て去るなり 起つて隱居する者をいふ一説この一章を訓章に併す 地名なり 朝門を開く者、門番なり、蓋し賢人の斯る卑役に身を降せるものなるべし 孔子の所より來れりとの意、孔子四方を遊歴し外に在ること久しき故に子路を疑に歸して家事を視しむる途次の事、門番はその餘りに早きを訝み何所より來れるかを問ふ、子路答へて孔氏の所より來れりといへば、門番は汝が謂ふ所の孔子に時の不可なるを知りつ、而も尚ほ己能はざるものかといひて之を嘲りぬと也 孔子 樂器 草器なり、もつこ 狹なる心 己を信する固くして世に従つて變するを知らざるなり 衣の裾をからぐるに篋以上に及ぶを厲といひ篋以下なるを搨といふ、これ詩經葛風勉且苦

辟地。其次辟色。其次辟言。○子曰。作者七人矣。○子路宿於石門。晨門曰。奚自。子曰。自孔氏。曰。是知其不可而爲之者與。○子擊磬於衛。有荷蕢而過孔氏之門者。曰。有心哉。擊磬乎。既而曰。鄙哉。硜硜乎。莫己知也。斯已而已矣。深則厲。淺則揭。子曰。果哉。末之難矣。○子張曰。書云。高宗諒陰。三年不言。何謂也。子曰。何必高宗。古之人皆然。君薨。百官總己以聽於冢宰。三年。○子曰。上好禮。則民易使也。○子路問。君子曰。脩己以敬。曰。如斯而已乎。曰。脩己以安人。曰。如斯而已乎。曰。脩己以安百姓。脩己以安百姓。堯舜其猶病諸。○原壤夷俟。子曰。幼而不孫弟。長而無述焉。老而不死。是爲賊。以杖叩其脛。○闕黨童子將命。或問之曰。益者何也。曰。益者。或問之曰。益者何也。子曰。吾見其居位也。見其與先生並行也。非二求益者也。欲速成者也。

堯舜の語也、蓋し世孔子を知らず孔子は宜しく止むべきに然かも止めず詩經に水を渉るにその深淺に隨ひて門揭宜しきに適するを云へるが如くなる能はずとて譏りたるなり 上くも思ひ切りたる事かな、斯る行爲に出でん事は疑ふことなし、末は無也 殷の高宗は前帝の喪中三年間物を言はず乃ち號令を發せざりき、該は信なり諒陰は信に陰に居るの義也ある間をいふ 百官は己の職務を行ふに君の命令を待たずして應ふまよめて 蓋しは大宰のこと 其命令を聽く 君臣上下の分、國家社會の間凡て正しき故也 己の身を修め敬自ら持するなり 己を情めて人を安んずとは己の身を修め遠に人をも教誨誘掖して安ぜしむるなり 己の身を情め遠に人民を教導して其の安堵を得するなり 孔子の故舊にて他人 うちづくる 從順 稱するなきなり 足得なり 五百家を黨といふ間は黨名なり五百家ある間といふ村といふが如し 取次ぎなり 學問が進益したるか 位は座席なり童子は座席なく座席に居るを禮とす然るに此童子は位に居るなり 童子は大人の後に隨ひ行くは禮なるにこの童子は大人と並んで行けり

卷之八

衛靈公第十五

衛靈公問陳於孔子。孔子對曰。俎豆之事。則嘗聞之矣。軍旅之事。則未之學也。明日遂行。在陳。網罟從者。病。莫能與。子路慍見曰。君子亦有窮乎。子曰。君子固窮。小人窮斯濫矣。○子曰。賜

衛の靈公陳を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、俎豆の事は則ち嘗て之を聞けり、軍旅の事は未だ之を學ばざるなりと。明日遂に行る。陳に在りて糧を絶つ。從者病み、能く興つ莫し。子路慍み見て曰く、君子も亦窮する有るか。子曰く、君子固より窮す、小人窮すれば斯に濫す。○子曰く、賜や、女子を以て多く學んで之を識る者と爲すか。對へて曰く、然り、非なるか。曰く、非なり、予れ一以て之を貫く。○子曰く、由、徳を知る者は鮮し。○子曰く、無爲にして治まる者は其れ歿か、夫れ何を爲さんや、己を恭しくし正しく南面するのみ。○子張行はるゝを問ふ。子曰く、言忠信、行篤敬ならば、蠻貊の邦と雖

也女以予爲多學而識之者與。對曰。然非與。曰。非也。予一以貫之。○子曰。由。知徳者鮮矣。○子曰。無爲而治者其舜也與。夫何爲哉。恭己正南面而已矣。○子張問。行。子曰。言忠信、行篤敬。雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬。雖州里行乎哉。立則見其參於前也。

も行はれん。言忠信ならず、行篤敬ならずんば、州里と雖も行はんれや。立てば則ち其前に參たるを見、輿に在りては、則ち其術に倚る見る、夫れ然る後に行はれん。子張諸を紳に書す。○子曰く、直なるかな史魚、邦道有れば矢の如く、邦道無きも矢の如し。君子なるかな蘧伯玉、邦道有れば、則ち仕へ、邦道無れば、則ち卷いて之を懐にす可し。○子曰く、輿に言ふ可くして、而して之と輿に言はされば、人を失ふ、輿に言ふ可からずして、而して之と輿に言へば、言を失ふ。知者は人を失はず、亦言を失はず。○子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無し、身を殺して以て仁を成す有り。○子貢仁を爲すを問ふ。子曰く、工其事を善せんと欲せば、必ず先づ其器を利にす。是の邦に居るや、其大夫の賢者に事へ、其士の仁者を友とす。○顔淵邦を爲むるを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、般の輅に乗り、周の冕を服し、樂は則ち韶舞し、鄭聲を放ち、佞人を遠けよ。鄭聲は淫に、佞人は殆し。○子曰く、人遠き慮無ければ、必ず近



在與則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。○子曰。直哉史魚。邦有道如矢。邦無道如矢。君子哉蘧伯玉。邦有道則仕。邦無道則卷而懷之。○子曰。不可與言而不與之言。失人。不可與言而與之言。失言。知者不失人。亦不失言。○子曰。志士仁人。無求生以害仁。

き憂あり。○子曰く、己ぬるかな、吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を  
見ざるなり。○子曰く、臧文仲は其れ位を竊むものか、柳下惠の賢を知りて、而  
も與に立たざるなり。○子曰く、躬自ら厚くして、薄く人を責むれば、則ち怨  
に遠ざかる。○子曰く、之を如何せん、之を如何せんと曰はざるものは、吾之を  
如何ともする末きのみ。○子曰く、蔡居終日、言義に及ばず、好んで小慧を行  
ふ、難いかな。○子曰く、君子は義以て質と爲し、禮以て之を行ひ、孫以て之  
を出し、信以て之を成す、君子なるかな。○子曰く、君子は能なきを病む 人の  
己を知らざるを病まざるなり。

陳は陣に同じく陣法のこと ① 俎・豆は共に祭器、禮儀といふ義 ② 軍事なり、魯公は結道の君故に孔子は  
殊に知らざるを以て答へられしなり ③ 明日夫り陳國に行く、時に吳陳を伐ち國內大に亂れたれば食物を得る  
こと能はず ④ 興は起なり ⑤ 放縱なり ⑥ 孔門の秀才子貢の名 ⑦ 終始一貫の理即ち忠恕之れなり ⑧  
子路の名也、由とて孔子が子路を呼びかけられしなり ⑨ 人才位に在らば天子は無爲にして天下治まらん猶の  
時人才多しと雖も洪水あり四凶あり未だ無爲なること能はず舜に至りて洪水既に治まり四凶皆去りよく無爲にして  
治まる ⑩ 南は陽なり明なり南面とは天子の政を聽く位置をいふ ⑪ 違と同意なり己れ自身が世人に用ひら

有殺身以成仁。○子貢問爲仁。子曰。工欲善其事。必先利其器。居是邦也。事其大夫之賢者。友其士之仁者。○顏淵問爲邦。子曰。行夏之時。乘殷之輅。服周之冕。樂則韶舞。放鄭聲。遠佞人。鄭聲淫。佞人殆。○子曰。人無遠慮。必有近憂。○子曰。已矣乎。吾未見下好徳如

れんことを聞へる也 ① 兇狄の國のこと ② 州は一萬二千五百家、里は二十五家なり ③ 立ちて居る時は  
は忠信篤敬が己の前に行參するが如く、車に乗りて居る時は忠信篤敬が車の衡に倚りて居るが如く、常に拳拳服膺し  
て如何なる時にも忘れざるなり ④ 車上の横木 ⑤ 大節の垂るものなり ⑥ 史は官名、魚は魯の大夫に  
して其名は鮒なり ⑦ 直なるをいふ、即ち行正直にして決して曲りたる事無しと也 ⑧ 己の意見を包蔵して  
時に忤はざるを云ふ ⑨ 章指、與に言ふべき人と云ひ與に言へばからざる人といはざるは、智者にして始めて之を  
能くすべし ⑩ 百工たるものが其仕事を ⑪ 百工の用ふる器械 ⑫ 各時代の禮樂の長を取り、之を損益  
因革して當世に行ふべきをいふ ⑬ 夏の世の禮なり夏曆は建寅の月を正月とし田獵祭祀播種に最も便なり、夏  
の時を行ふは農業に注意する所以なり ⑭ 輅は天子の乗りもの、殷の輅は質樸儉素なり ⑮ 冕は禮冠をい  
ふ、周冕は文ありて備はれり之れ禮を重んずる所以なり ⑯ 節は舞の創むる所の舞樂にして一善を盡し美を盡せるも  
のなり ⑰ 鄭國の歌曲、淫靡なり ⑱ 佞人は口才ある者なり ⑳ 人にして遠き思慮なきときは ㉑ 遠  
に有徳の君を見ざるの歎なり ㉒ 苟も公卿にある者は宜しく私情を去り賢才あるは直ちに之を擧げ野に遺棄な  
からしむべし然るに戚文仲は柳下惠の賢なるを知りながら遂に之を擧用すること能はざりき之れ位を竊むものにし  
て不仁の甚しき者といふべし ㉓ 己を買むること厚きなり ㉔ 朋友相集りて一日談ずる所遊戯娛樂のみにし  
て榮も義に及ばざるなり ㉕ 小才を弄し小知を翫ぶなり ㉖ 章指、人と交際せんには義を以て行爲の本質と  
なし之を行ふに禮を以てし遜順を以て食葉を出し而して信義を守りて始めて成るなり、此の四事を以て人に接する  
ものは君子なるかな ㉗ 才能 ㉘ 養ふるなり



之必察焉。○子曰。人能弘道。非道弘人。○子曰。過而不改。是謂過矣。○子曰。吾嘗終日不食。終夜不寢。以思。無益。不如學也。○子曰。君子謀道不謀食。耕也。饒在其中。學也。祿在其中。○子曰。一不愛貧。○子曰。知及之。仁不能守之。雖得之。必失之。知及之。仁能

つては師に譲らず。○子曰く、君子よ貞にして諒ならず。○子曰く、君に事へて其事を敬し、而して其食を後にす。○子曰く、教有りて類なし。○子曰く、道同じからざれば、相爲めに謀らず。○子曰く、辭は達するのみ。○師冕見ゆ、階に及ぶ。子曰く、階なり。席に及ぶ。子曰く、席なり。皆坐す。子之に告げて曰く、某は斯に在り、某は斯に在り。師冕出づ。子張問うて曰く、師と言ふの道か。子曰く、然り、固より師を相くるの道なり。

● 身を修ふる道 ● 名は實の實、實あれば名の伴ふべきを以て也。玉璣明は稱をカナフの義とす ● 章指、君子は己を賣めて人を賣めず小人は人を賣めて己を賣めず ● 矜は莊嚴なるなり、人莊嚴なれば和氣少きの弊あり故に争鬪をなすものなり、然るに君子は莊嚴なれども和氣を失はず故に争鬪をなすことなし ● 君子は群居して親相するも義を以てする故に私情を以て相親する事なし ● 善く言ふもの必ずしも善く行はず故に君子は其人の言ふ所のみによりて之を擧用せず、又小人にも善言あることあり故に君子は小人なればとて其言ふ所の善なるをば排斥せず ● 己を推して人に及ぼすなり ● 吾は我りに人を毀譽せず若し譽むるあらば先づ其實あるかを試論して譽むるなり ● 今人も夏殷周三代の世の人民と同じく良心あり徳性あり故に之を毀譽し良民たらしむべし豈に妄に毀譽毀辱すべきものならんや ● 昔自分の経験したる時代に比して今時の風俗の更にいたく衰頹せるを嘆ずる也 ● 史官 ● 疑はしきを聞く也、及べりは吾猶はその如き時代に生れたりきの意 ● 己に馬

守之。不莊以泄之。則民不敬。知及之。仁能守之。莊以泄之。動之不。以禮未善也。○子曰。君子不可。小知。而可。大受。也。小人不可。小知。而可。大受。也。○子曰。民之於仁也。甚於水火。水火吾見蹈而死者。矣。未見蹈仁而死者也。○子曰。當仁不讓於師。○子曰。君子貞而不諱。○子曰。事君敬。其事而後食。○子曰。有教無類。○子曰。道不同。不相爲謀。○子曰。辭達而已矣。○師冕見。及階。子曰。階也。及席。子曰。席也。皆坐。子告之曰。某在斯。某在斯。師冕出。子張問曰。與師言之道與。子曰。然。固相師之道也。

あるも服習するも能はざるときは人の能く服習するものに借して己に代りて之を闡らすを云ふ ● 今日に於いては之れなしとて歎ぜられしものなり ● 巧言は徳言にまぎれる ● 小事を成へしよ事能はざれば ● 有徳の人ありて道始めて天下に弘まるものなり ● 涓涓に成るをいふ ● 蓋し本章孔子少時の経験を送べて此事あり今小子の爲めに教誡せしなり ● 假令辨すとも論に凶荒ある爲め飢饉自ら至る事あり ● 求めずして蔵自ら至る也 ● 君子が治民に當りて知その位に當るに足るも ● 其位を守ること ● 泄むは臨むなり ● 民を使用するに ● 君子は小事を以て之を知る可からず ● 任するに大事を以てすべし愛は任なり ● 人君の仁徳 ● 水火は人民の生活上日常必要のものであるが人君の仁徳には及ばない ● 章指、人仁を行ふに當ては何の恐ることかあらん師にも讀る所ある可からず ● 貞は正しくし堅固なるなり ● 諒とは小信をいふ ● 臣が君に事へては其職務を專一にして其貞節も偉績の事は後にす ● 章指、人の本氣にはもと善惡の類なし、そのこれあるは習俗の然らしむるものなり故に君子教を設けて之を善導す、教育宜しきを得ば愚は智に至らしむ可く、愚は美に至らしむべし、即ち教の如何はあれども人に善惡の類なれと也 ● 章指、當時諸侯辭命を作る多く文飾を務め虚偽多く兩國の情好を破ること多し故に孔子は其意達するは辭命の本質なるを以て戒となせる也、辭を一般の言語文章と解する説亦通ず ● 師は言人にて音聲者なり、聲は石 ● 階堂に上るべきはしなり ● 名を紹介するなり

○子曰く、君子よ貞にして諒ならず。○子曰く、君に事へて其事を敬し、而して其食を後にす。○子曰く、教有りて類なし。○子曰く、道同じからざれば、相爲めに謀らず。○子曰く、辭は達するのみ。○師冕見ゆ、階に及ぶ。子曰く、階なり。席に及ぶ。子曰く、席なり。皆坐す。子之に告げて曰く、某は斯に在り、某は斯に在り。師冕出づ。子張問うて曰く、師と言ふの道か。子曰く、然り、固より師を相くるの道なり。

### 季氏第十六

季氏將伐顓臾。冉有季路見於孔子曰。季氏將有事於顓臾。孔子曰。求無乃爾是過與。夫顓臾昔者先王以爲東蒙主。且在邦域之中矣。是社稷之臣也。何以伐爲。冉有曰。夫子欲之。吾二臣者皆不欲也。孔子曰。求。周任有言。

季氏將に顓臾を伐たんとす。冉有・季路、孔子に見えて、曰く、季氏將に顓臾に事有らんとす。孔子曰く、求乃ち爾是れ過つ無きか。夫れ顓臾は、昔先王以て東蒙の主と爲す、且つ邦域の中に在り、是れ社稷の臣なり、何ぞ伐を以て爲ん。冉有曰く、夫子之を欲す、吾二臣の者は皆欲せざるなり。孔子曰く、求、周任言へる有り、曰く力を陳べて、列に就く、能はざれば止むと。危くして持せず、顓して扶けずんば、則ち將た焉ぞ彼の相を用ひん。且つ爾の言過てり。虎兇押より出で、龜玉橫中に毀れば、是れ誰の過か。冉有曰く、今夫の顓臾は、固くして費に近し、今取らざれば、後世必ず子孫の憂を爲さん。孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すと曰ふを舍いて、必ず之が辭を爲すを疾む、丘や聞く、國を有ち家を有つ者は、寡きを患へずして、均しからざるを憂ふ、貧を患へず

曰。陳力就列。不能者止。危而不持。顓而不扶。則將焉用彼相矣。且爾言過矣。虎兇出於柙。龜玉毀於椽中。是誰之過與。冉有曰。今夫顓臾固而近於費。今不取。後世必爲子孫憂。孔子曰。求。君子疾夫舍曰欲之。而必爲之辭。丘也聞有國有家者。不患寡而患不均。不

して、安からざるを患ふ。蓋し均しければ貧しきこと無く、和すれば寡きこと無く、安ければ傾くこと無し。夫れ是の如し。故に遠人服せざれば、則ち文徳を脩めて以て之を來す。既に之を來せば、則ち之を安んず。今由と求と、夫子を相け、遠人服せずして來す能はざるなり、邦分崩離析して、守る能はざるなり。而して干戈を邦内に動かすを謀る。吾、季孫の憂、顓臾に在らずして、而して牆の内に在るを恐る。○孔子曰く、天下道有れば、則ち禮樂征伐天子より出で、天下道無ければ、則ち禮樂征伐諸侯より出づ。諸侯より出づれば、蓋し十世失はざるは希なり。大夫より出づれば、五世失はざるは希なり。陪臣國命を執れば、三世失はざるは希なり。天下道あれば、則ち政、大夫に在らず、天下道有れば、則ち庶人議せず。○孔子曰く、祿の公室を去ること五世、政、大夫に違ふこと四世、故に夫の三桓の子孫微なり。○孔子曰く、益者三友、損者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり、便辟を友とし、善柔を友と



患貧而患不  
安。蓋均無貧。  
和無寡安無  
傾。夫如是。故  
遠人不服。則  
脩文德以來  
之。既來之則  
安之。今由與  
求也。相天子  
遠人不服。而  
不能來也。邦  
分崩離析而  
不能守也。而  
謀動于戈。於  
邦內。吾恐季  
孫之憂。不在  
顯矣。而在蕭  
牆之內也。○  
孔子曰。天下  
有道。則禮樂

し、便佞を友とするは損なり。○孔子曰く、益者三樂、損者三樂、禮樂を節するを樂み、人の善を道ふを樂み、賢友多きを樂むは益なり、驕樂を樂み、佚遊を樂み、宴樂を樂むは損なり。○孔子曰く、君子に侍するに、三愆あり、言未だ之に及ばずして言ふ、之を躁と謂ふ、言之に及んで言はざる、之を隱と謂ふ、未だ顔色を見ずして言ふ、之を瞽と謂ふ。○孔子曰く、君子に三戒有り、少き時は、血氣未だ定まらず、之を戒むる色に在り、其壯なるに及んでや、血氣方に剛なり、之を戒むる剛に在り、其老ゆるに及んでや、血氣既に衰ふ、之を戒むる得にあり。

- ① 當時樂の附屬國たり
- ② 相讓に來れるなり、冉有季路は共に孔子の弟子にして其時は共に季氏の臣たればなり
- ③ 夫れ顯矣は昔周のとき先王之を東蒙の主と爲めて山川の祭を主らしめしもの而して魯の邦城の中に在り乃ち已に魯に屬して社稷の臣たり季氏之を伐つべき理由なしと也
- ④ 周任は古の良史なり
- ⑤ 列は位なり、蓋し己の才力の限りをのべしきて以て其の位に就き、若し力能はざれば止めて其位を退く
- ⑥ 虎や野牛
- ⑦ 押は強なり
- ⑧ 箱の中
- ⑨ 費は季氏の邑
- ⑩ 心に利を欲しながちそれを開きさまに云はすして色々と口實を設くる者

征伐自天子出。天下無道。則禮樂征伐自諸侯出。自諸侯出。蓋十世希不失矣。自大夫出。五世希不失矣。陪臣執國命。三世希不失矣。天下有道。則政不在大夫。天下有道。則庶人不議。

疾むとなり 政教の均平 安樂 政教平かされば貧ならず上下和合すれば寡きことを患へず安樂なれば危きことなし 邦は公室より公室は四分し家臣は斃きてなり 干は所戈は戟、即ち兵事のこと 屏内即ち一家内の中 失とは政を失ひ國家を滅すをいふ 蓋し十世とは事實につきていひたるにあらずらん 陪は重なり大夫の家臣なり 民間の處士國政の是非を議することなし也 章指、徳藏が君たる公室より出てずして臣たる大夫より出づるやうになりてより五世、又政權が臣たる大夫に移りしより四世となれり、此の如く漸々世は遷りたりしを以て三桓の子孫の微弱なるは當然の理なり 威儀に習ひて直ならざるをいふ 外面のみ義和にして内心則ち所謂令色の人也 便佞は口巧にして其實なきなり 晉ヲク、樂むの義なり。或は晉ガワ、好み望むの義とす、亦通ず 禮を行ひ樂をなすに皆其度を失はざるをいふ 尊貴を鼻にかけ器に樂むを云ふ 安逸を樂みて度なし 長者先輩に侍するときに犯し易き過失三ヶ條あり 愆は過失なり 君子未だ之に讒語を仕向けざるに與者過みて言ふを諱と云ふ 情實を隠して諱まざる意 三十歳以前主に二十前後をいふ 女色なり 三十歳以上をいふ 五十歳以上なり 得とは物を得んと欲るなり

○孔子曰く、政逮於大夫四世矣。故夫三桓之子孫微矣。○孔子曰く、益者三友、損者三友。直友、諒友、多聞益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣。○孔子曰く、益者三樂、損者三樂。節禮樂、樂道、人之善、樂多賢、友益矣。樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣。○孔子曰く、侍於君子有三愆。言未及之而言、謂之躁。言及之而不言、謂之隱。未見顔色而言、謂之瞽。○孔子曰く、君子有三戒。少之時、血氣未定、戒之在色。及其壯也、血氣方剛、戒之在剛。及其老也、血氣

既衰。戒之在得。

孔子曰。君子有三畏。畏天命。畏大人。畏聖人之言。小人不知天命而不畏也。狎大人。侮聖人之言。孔子曰。生而知之者上也。學而知之者次也。困而學之。又其次也。困而不學。民斯爲下矣。○孔子曰。君子有九思。視思明。聽思聰。色思溫。

孔子曰く、君子に三畏有り、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして、畏れざるなり、大人に狎れ、聖人の言を侮る。○孔子曰く、生れながらにして之を知る者は、上なり、學んで之を知る者は、次なり、困んで之を學ばば、又其次なり、困んで學ばざるは、民斯を下と爲す。○孔子曰く、君子に九思有り、視は明を思ひ、聽は聰を思ひ、色は溫を思ひ、貌は恭を思ひ、言は忠を思ひ、事は敬を思ひ、疑は問を思ひ、忿は難を思ひ、得ては義を思ふ。○孔子曰く、善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯を探るが如くす、吾其人を見、吾其の語を聞けり。隱居して以て其の志を求め、義を行うて以て其の道を達す、吾其の語を聞けども、未だ其の人を見ざるなり。○齊の景公馬千駟有り、死するの日、民徳として稱する無し、伯夷叔齊首陽の下に餓す。民今に到るまで之を稱す、其れ斯れの謂か。○陳亢伯魚に問ふ、

貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。見得思義。○孔子曰。見善如不及。見不善如探湯。吾見其人矣。吾聞其語矣。隱居以求其志。行義以達其道。吾聞其語矣。未見其人矣。○齊景公有馬千駟。死之日。民無德而稱焉。伯夷叔齊餓于首陽之下。民到于今稱之。其

曰く、子も亦異聞有るか。對へて曰く、未し。嘗て獨り立てり。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を學びたるか。對へて曰く、未し。詩を學ばずんば、以て言ふ無し。鯉退いて詩を學べり。他日又獨り立てり。鯉趨りて庭を過ぐ。曰く、禮を學びたるか。對へて曰く、未し。禮を學ばずんば、以て立つ無し。鯉退いて禮を學べり。斯の二者を聞けり。陳亢退いて喜びて曰く、一を問うて三を得たり、詩を聞き、禮を聞き、又君子の其子を遠くるを聞けり。○邦君の妻、君之を稱して、夫人と曰ふ。夫人自ら稱して、小童と曰ふ。邦人之を稱して、君夫人と曰ふ。諸を異邦に稱して、寡小君と曰ふ。異邦人之を稱して、亦君夫人と曰ふ。

- 君子は常に謹嚴身を持し修養して怠らず、從つて凡そ其長備する所多しと雖も左の三事を主なるものとせず
- 天命とは人事を超越したる宇宙自然の賦命也
- 現世に於ける大人即ち一世に師表たる現存の大人物
- 過去に於ける聖人の言なり
- 預指、生れながらにして知るは聖人なり、學んで知るは賢人なり、困んで知るは常人なり、困んで而も學ばざるは下愚の人なり
- 事を行ふに恭敬自ら持てることを思ふなり
- 一朝の忿怒の爲めに確を人に及ぼすことあるを思ふなり
- 得るあれば義に附ふや否やを思ふなり
- 湯を探るが如く

斯之謂與。○陳亢問於伯魚曰。子亦有異聞乎。對曰。未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰。學詩乎。對曰。未也。不學。詩無以言。鯉退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰。問一得三。聞詩。聞禮。又聞君子之遠其子也。○邦君之妻。君稱之曰夫人。夫人自稱曰小童。邦人稱之曰君夫人。稱之。亦曰君夫人。

役れて遂に不善を去るなり。聖人の道に其志を求めて。千鎊とは馬四千頭のこと。蓋し諸侯には馬二千あるが普通なるに四千頭も有せるは富なりといふべし。伯夷叔齊は周の粟を食はずして首陽山に餓死したる人。朱子に其れ斯れの謂ひかの前に一誠に實を以てせず亦誠に實を以てすの詩の句が脱落し之が筆順となりて簡潔に入れるなりとせり今之れに従ふ。孔子の子、鯉の字。伯魚は孔子の子なれば其の聞く所他人と異なるものあるを疑ひて問ひしなり。孔子の獨り立てるなり。詩を云々の句は孔子の伯魚に告げたる語なり。人と應答談話すべからざるをいふ。身を立てて世に處する能はざるをいふ。父自ら其の子を教へざるをいふ。寡は寡徳の義にして諷解なり。

卷之九

陽貨第十七

陽貨欲見孔子。孔子不見。歸孔子豚。孔子時其亡也。而往拜之。遇諸塗。謂孔子曰。來予與爾言。曰。懷其寶而迷其邦。可謂仁乎。曰。不可。好從事而亟失時。可謂知乎。曰。不可。日月逝矣歲

陽貨孔子を見んと欲す、孔子見えず。孔子に豚を歸る。孔子其亡きを時として、而して往きて之を拜す。諸に塗に遇ふ。孔子に謂ひて曰く、來む、予爾と言はん。曰く、其實を懷きて而して其邦を迷はす、仁と謂ふ可きか。曰く、不可。事に從ふを好みて而して亟々時を失す、知と謂ふ可きか。曰く、不可。日月逝きぬ、歳我と與ならず。孔子曰く、諾、吾將に仕へんとす。○子曰く、性相近きなり、習相遠きなり。○子曰く、唯上知と下愚とは移らず。○子曰く、武城に之き、弦歌の聲を聞く、夫子莞爾として笑ふ、曰く、難を割くに、焉ぞ牛刀を用ひん。子游對へ曰く、昔偃や、諸を夫子に聞けり、曰く、君子道を學べば、則ち

不我與。孔子曰。諾。吾將仕矣。○子曰。性相近也。習相遠也。○子曰。唯上知與下愚不移。○子之武城。聞弦歌之聲。夫子莞爾而笑。曰。割雞焉用牛刀。子曰。對曰。昔者偃也聞之。夫子曰。君子學道則愛人。小人學道則易使也。子曰。二三子。偃之言是也。前言戲之耳。○

人を愛し、小人道を學べば、則ち使ひ易きなりと。子曰く、二三子よ、偃の言是なり、前言は之に戯れたるのみ。○公山弗擾、費を以て畔く。召ぶ、子往かんと欲す。子路説ばず、曰く、之く未きのみ、何ぞ必ずしも公山氏に之れ之かん。子曰く、夫れ我を召ぶ者は、豈に徒ならんや、如し我を用ふる者あらば、吾其れ東周を爲さんか。○子張仁を孔子に問ふ。孔子曰く、能く五者を天下に行ふを仁と爲す。之を請ひ問ふ。曰く、恭、寛、信、敏、惠、恭なれば則ち侮られず、寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち人任、敏なれば則ち功有り、惠なれば則ち以て人を使ふに足る。○佛肸召ぶ、子往かんと欲す。子路曰く、昔由や諸を夫子に聞く、曰く、親ら其身に於て不善を爲す者は、君子は入らざるなりと。佛肸中牟を以て畔けり。子の往くや、之を如何。子曰く、然り、是の言有るなり、堅しと曰はずや、磨すれども磷せず、白しと曰はずや、涅すれども緇せず。我豈に匏瓜ならんや、焉ぞ能く繋りて食はれざらん。○子曰く、由や女六言六蔽を聞く

公山弗擾以費畔。子曰。欲往。子曰。未之也。曰。必也公山氏之召我者。而豈徒哉。如有用我者。吾其爲東周乎。○子張問。仁於孔子。孔子曰。能行五者於天下。爲仁矣。請問之。曰。恭、寬、信、敏、惠。恭則不侮。寬則得衆。信則人任焉。敏則功。惠則足以

か。對へ曰く、未し。居れ、吾女に語らん。仁を好んで學を好まずんば、其蔽や愚。知を好んで學を好まずんば、其蔽や蕩。信を好んで學を好まずんば、其蔽や賊。直を好んで學を好まずんば、其蔽や絞。勇を好んで學を好まずんば、其蔽や亂。剛を好んで學を好まずんば、其蔽や狂。○子曰く、小子何ぞ夫の詩を學ぶ莫き。詩は以て興す可し、以て觀るべし、以て羣す可し、以て怨む可し、之を遠くしては父に事へ、之を遠くしては君に事ふ、多く鳥獸草木の名を知る。○子、伯魚に謂ひて曰く、女、周南・召南を爲めたるか、人にして周南・召南を爲めずんば、其れ猶ほ正しく牆に面して立つが如くなるか。○子曰く、云ひ禮記と云ふ、玉帛と云はんや。樂と云ひ樂と云ふ、鐘鼓と云はんや。○子曰く、色厲にして内荏なるは、諸を小人に譬ふれば、其れ猶ほ穿窬の盜のごときか。

● 陽貨名は虎、本は季氏の家臣なりしが季子之を擧げて大夫となせり孔子はその時は士の身がにして大夫にてはあぢざりし也 ● 孔子の徳を聞き面會せんと欲すれども孔子會はず即ち一箴を發し孔子の不在のときを見計りて脈を續れり凡そ大夫士に物を賜ふ時は士拜して之を受く若し家に在らざるに物を賜はらば大夫の家に至りて



使<sub>レ</sub>人。○佛<sub>レ</sub>辟  
召<sub>レ</sub>子欲往。子  
路曰昔者由  
也。問<sub>レ</sub>諸夫子  
曰。親<sub>レ</sub>於其身  
爲<sub>レ</sub>不善者。君  
子不入也。佛  
辟以<sub>レ</sub>中牟。畔  
子之往也如  
之何。子曰。然  
有<sub>レ</sub>是言也。不  
曰。堅<sub>レ</sub>乎。磨而  
不<sub>レ</sub>縞。不<sub>レ</sub>曰。白  
乎。涅<sub>レ</sub>而不<sub>レ</sub>緇。  
吾豈<sub>レ</sub>匏瓜也。  
哉。焉<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>繫<sub>レ</sub>而  
不<sub>レ</sub>食。○子曰。  
由也女。問<sub>レ</sub>六  
言六蔽<sub>レ</sub>矣乎。  
對曰。未也。居

謝<sub>レ</sub>是れ當時の禮なり。歸<sub>レ</sub>は積<sub>レ</sub>なり。謙<sub>レ</sub>したるものをわくろを云ふ。○ 途<sub>レ</sub>は途<sub>レ</sub>なり。○ 暗<sub>レ</sub>は孔子の才徳を懐  
きて政治に圖<sub>レ</sub>與<sub>レ</sub>セ<sub>レ</sub>國家を治めざるを指して云ふ。○ 孔子の言なり。○ 歲月はどしどしとたつ早く仕へよとい  
ふ而して孔子小人と争ふを欲せず但唯々諸々たり。○ 人の天性はお互に相近きものなり。○ 韋<sub>レ</sub>指<sub>レ</sub>、昔に漢り  
應<sub>レ</sub>に移るは常人皆然り但上智者は應<sub>レ</sub>に移ること難し。○ 孔子。○ 武城は邑名。子路  
之が宰たり教化行はる。○ 詩を樂<sub>レ</sub>に合せて歌ふなり。○ につこりと笑ふこと。○ 牛刀の譬は才を以  
て小邑を治むると大道を用ひて以て小邑を治むるとの二義を兼ぬ孔子は子路が大才を以て小邑を治むるを惜みて言  
へり、然るは子路は只一途に小邑を治むるに大道を用ふるを要せずと言はれたりと答へ嘗て孔子に問きしところを  
駁<sub>レ</sub>りて答ふ、孔子は面のあたり汝が大才を以て小邑を治むるを惜み一言へるなりとも言へざる故に、唯だ從者を顧  
みて今の言は戲言なりと云ひしのみ。○ 公山弗擾は魯人、季氏の宰たり、魯の定公の五年(或云九年)陽虎と共に  
季相子を捕へ季氏の邑賈に據りて叛く、孔子を召して仕へしめんとす。○ 徒<sub>レ</sub>に我を召すものならんや。○ 意<sub>レ</sub>  
この言ありしにも係らず孔子遂に行かざりしは子路の非難に因りしにあらず公山の爲すあるに足らざるを知りし故  
なり。○ 基とは心に留む所ありて自ら容貌にあらはる。態度をいふ。○ 信とは人に對して言ふ所を守りて背  
かざるなり。○ 敏とは行事迅速なること、事に應じて疾ければ功を成すこと多し、愚とは慧感深きをいふ。○  
佛<sub>レ</sub>辟は魯大夫結簡子の邑宰なり。○ 孔子を聘するなり。○ 由は子路の名。○ 夫子は孔子のこと。○  
中牟は邑名、佛<sub>レ</sub>辟は之に據りて以て叛く。○ 縞くならず。○ 涅は水中にある黒土にしてくろきぬを染むるに  
用ふ。○ 黒くならず。○ 屏の名なり故にひさごと同名なれども天にかゝりて食ふ可からず、繫は天竺に懸る  
なり共に當時の俗言なり、引用の意は我は則ち匏瓜に非ず、道<sub>レ</sub>を明にし世を濟ふ者なり、焉<sub>レ</sub>能く天に繫りて食はれ  
ざるが如くなるべき我は招きに應じて往いて治政を爲さんとする也といふにあり。○ 六言とは下の仁知信直勇

吾語<sub>レ</sub>女。好<sub>レ</sub>仁  
不好<sub>レ</sub>學。其蔽  
也愚。好<sub>レ</sub>知不  
好<sub>レ</sub>學。其蔽也  
蕩。好<sub>レ</sub>信不好  
學。其蔽也賊。  
好<sub>レ</sub>直不好<sub>レ</sub>學。  
其蔽也絞。好<sub>レ</sub>  
勇不好<sub>レ</sub>學。其  
蔽也亂。好<sub>レ</sub>剛  
不好<sub>レ</sub>學。其蔽  
也狂。○子曰。  
小子何莫<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>  
夫詩。詩可以興。可以觀。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸草木之名。○子  
謂<sub>レ</sub>伯魚曰。女爲<sub>レ</sub>周南召南矣乎。人而不爲<sub>レ</sub>周南召南。其猶<sub>レ</sub>正牆面而立也與。○子曰。禮云  
禮云。玉帛云乎哉。樂云樂云。鐘鼓云乎哉。○子曰。色厲而內荏。譬<sub>レ</sub>諸小人。其猶<sub>レ</sub>穿窬之盜  
也與。

剛なり六蔽とは下の愚蕩賊絞亂狂なり。蔽は蔽はれて自ら其過を見ざる意。○ 子路起ちて答へたるを以て復座  
せよといはる。○ 仁を好んで學を好まざれば物を愛して分別なし故に人に陥れられ人に陥る愚なり。○ 蕩  
とは遵守する所なきなり。○ 賊はそこなふなり。○ 絞は繩を以て頸を扼する意にして假借する所な  
きをいふ。○ 剛とは性加柔ならざるなり。○ 狂とは能く人と衝突するなり。○ 小子とは弟子を呼びていふ  
意。○ 詩には各方面の事を含むを以て讀まざる可からざる書となせり。○ 邇志を感發するなり。○ 國家の盛  
衰人事の得失を觀るべし。○ 人と親しく交際するを得べし。○ 國家の政治を調判するなり。○ 伯魚は孔  
子の子、名は鯉。○ 周南召南の詩は修身齊家の事を謂へり。○ 國家を治め難きこと恰も牆に向つて立ち一物も  
見えざり歩も行かれざるが如し。○ 禮禮といへど玉帛とは言はず、聖人のいふ所は禮の形式に非ずして其精神  
なり。○ 音樂に於ては鐘鼓同より缺く可からずと雖もそは樂の本なり其本は移風易俗にあり今人本を愛して末  
を取るは何ぞと也。○ 色は外に表はる、所即ち外面の義、厲は威嚴なり荏は柔弱なり、内柔外剛の小人は外面  
大に威嚴ありて見ゆれども内心常に危懼を懐くなり。○ 穿は壁を穿つなり窬は隙を指ゆるなり、こそく、泥桶

子曰く、卿原は徳の賊なり。○子曰く、道に聽いて塗に説くは、徳を之れ棄つ

之賊也。○子曰。道聽而塗說。德之棄也。○子曰。鄙夫可與事君也。與哉。其未得之也。患得之。既得之。患失之。苟患失之。無所不至矣。○子曰。古者民有三疾。今也。或是之亡也。古之狂也。今之狂也。也。古之矜也。今之矜也。也。直。今之愚也。詐而已矣。

るなり。○子曰く、鄙夫は與に君に事ふ可きならんや。其の未だ之を得ざるや、之を得んことを患へ、既に之を得れば、之を失はんことを患ふ。苟も之を失はんことを患へば、至らざる所無し。○子曰く、古者民に三疾有り、今や是れあるじきなり。古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戾。古の愚や直、今の愚や詐のみ。○子曰く、巧言令色、鮮し仁。○子曰く、紫の朱を奪ふを惡む。鄭聲の雅樂を亂るを惡む。利口の邦家を覆へず者を惡む。○子曰く、予言ふ無らんと欲す。子貢曰く、子如し言はずんば、則ち小子何をか述べん。子曰く、天何をか言ふや、四時行はれ、百物生る、天何をか言ふや、○孺悲孔子を見んと欲す。辭するに疾を以てす。命を將ふ者戸を出づ。瑟を取りて歌ひ、之をして之を聞かしむ。○宰我问ふ、三年の喪は、期已に久し。君子三年禮を爲さずんば、禮必ず壞れん。三年樂を爲さずんば、樂必ず崩れん。舊穀既に没し、新穀既に升る、饗を鑽り火を改む、期にして已む可し。子曰く、夫

○子曰。巧言令色鮮矣仁。○子曰。惡紫亂鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。○子曰。子欲無言。子貢曰。小子如不言。則小子何述焉。子曰。天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。○孺悲欲見孔子。辭以疾。將命者出戶。取瑟而歌。使二之聞之。○宰我问。

の稻を食ひ、夫の錦を衣る、女に於て安きか。曰く安し。曰く、女安くば則ち之を爲せ。夫の君子の喪に居る、旨を食へども甘からず、樂を聞けども樂まず、居處安からず、故に爲さざるなり。今女安くば則ち之を爲せ。宰找出づ。子曰く、予の不仁なるや。子生れて三年、然る後父母の懐を免る。夫れ三年の喪は、天下の通喪なり。予や其父母に三年の愛あるか。○子曰く、飽食終日、心を用ふる所無くば、難いかな。博奔といふ者有らざるか、之を爲すは猶ほ已むに賢れり。○子路曰く、君子は勇を尙ぶか。子曰く、君子は義以て上と爲す。君子勇有りて義無ければ、亂を爲す、小人勇有りて義無ければ、盜を爲す。○子貢曰く、君子も亦惡むこと有るか。子曰く、惡むこと有り。人の惡を稱する者を惡む。下流に居りて上を誦る者を惡む。勇にして禮なき者を惡む。果敢にして窒がる者を惡む。曰く、賜も亦惡むこと有るか。微めて以て知と爲す者を惡む。不孫にして以て勇と爲す者を惡む。託いて以て直と爲す者を惡む。○

三年之喪。期已久矣。君子三年不爲禮。禮必壞。三年不爲樂。樂必崩。舊穀既沒。新穀既升。鑽燧改火。期可已矣。子曰。食夫稻。衣夫錦。於女安乎。曰。安。女安則爲之。夫君子之居喪。食旨不甘。聞樂不樂。居處不安。故不爲也。今女安則爲之。宰我出。子曰。予之不仁也。子

子曰く、唯女子と小人とは養ひ難しと爲す、之を近くれば則ち不孫なり、之を遠くれば則ち怨む。○子曰く、年四十にして惡まる、其れ終らんのみ。

● 章指、流俗に同じくし以て世に諂ふ所の趨問の律義者は、一見有徳の人に似て其言なし、故に之を徳の贖といふ  
● 章指、當時人情澆薄已れ習はずして人に仰ふるの惡風あり即ち道路に聽き其ま、道路にて人に説き聞かざるなり此の如きものは己れの徳を棄つるなり  
● 鄒夫は腹中只利あるのみ利のある所に走り利盡くれば去る故に共に君に事へ政に従事すること能はず  
● 好策至らざる所なし  
● 古へは氏に三惡辭ありしが今は其れさへもなし。三惡辭とは狂、矜、尪なり  
● 罪とは言はんを欲する所をいひ爲さんと欲する所をなし小節に拘らざる  
● 放蕩  
● 罪はかどのあること  
● 詐偽  
● 此章は學而篇と同じ  
● 問色の紫が正色の朱を奪ふは惡むべし  
● 鄒味は淫聲の義に用ふ  
● 雖は正なり雅樂は正樂なり  
● 利口の人巧に言ひ君に諂ひ遂に國家を傾覆するは最も惡むべし  
● 孔子門人を教訓するの理想を述べて曰く予門人を言にて教訓すると無く身を以て靡る行を以て教へたしと  
● 春夏秋冬の四時なり  
● 哀公の臣、孔子に面言せんとせし時孔子之を見るを故せざりし也  
● 案内者が戶外に出でたる時孔子は瑟を取りて歌ひ眞の病氣にあらず其言はざるは無禮なるを以てなることを知らしめ以て將來を警告せり  
● 父母の喪を三年とするは長きに失せずや  
● 一年にて舊米盡き新米實る  
● 春夏秋冬火を銷るに各木を異にす故に火を改むといふ  
● 初は一年  
● 喪中は粥を食ふ法なるが汝は白米を食ひ心安しとなすか喪中は喪服を衣ることなるが汝は錦を衣て心安しとなすか  
● 美味  
● 閑居の際飽食して終日心を用ふる所なく事を思ふなきやうては成徳の人となる事難し  
● 今の賭博とは異なり

生三年。然後免於父母之懷。夫三年之喪。天下之通喪也。予也有三年之愛。於其父母乎。○子曰。飽食終日。無所用心。難矣哉。不有博奕者乎。爲之猶賢乎已。○子路曰。君子尚勇乎。子曰。君子義以爲上。君子有勇而無義爲亂。小人無義而無勇爲盜。○子貢曰。君子亦有惡乎。子曰。有惡。惡稱人之惡者。惡居下流而誦上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。曰。賜也。亦有惡乎。惡以爲知者。惡不孫以爲勇者。惡下計以爲直者。○子曰。唯女子與小人爲難養也。近之則不孫。遠之則怨。○子曰。年四十而見惡焉。其終也已。

● 博奕六の類なり  
● 何もせずにあるよりまだし也  
● 在位の君子なり  
● 勝るなり  
● 斷然行つて道に適はざる事をなすなり  
● 賜は子貢の名以下は子貢の言なり  
● 微は何事なり人の意中の事を伺察するなり  
● 人の秘密を洩き世間に觸れ廻るなり  
● 召使の女と召使の男  
● 孫は孫なり  
● 章指、人  
● 生四十は不惑の年にして人格整へ徳成り人に敬服せらるべき時なるに若し人に惡まる、如き人ならば到底弱みなき人なり

微子第十八

微子去之。箕子爲之奴。比干諫而死。孔

微子之を去る、箕子之が奴と爲り、比干は諫めて死す。孔子曰く、殷に三仁有り。○柳下惠士師と爲り、三たび黜けらる。人曰く、子以て去る可からざるか。

子曰股有三  
仁焉。○柳下  
惠爲士師。三  
黜人曰。子未  
可以去乎。曰。  
直道而事人。  
焉往而不三  
黜。枉道而事  
人。何必去。父  
母之邦。○齊  
景公待孔子。  
曰。若季氏則  
吾不能。以季  
孟之間待之。  
曰。吾老矣。不  
能用也。孔子  
行。○齊人歸  
女樂。季桓子  
受之。三日不  
朝。孔子行。○

曰く、道を直くして人に事へば、焉くに往くとして三黜せられざらん、道を枉けて人に事へば、何ぞ必ずしも父母の邦を去らん。○齊の景公孔子を待つて、曰く、季氏の若くするは、則ち吾能はず、季孟の間を以て之を待たん。曰く、吾老いたり、用ふる能はざるなり。孔子行る。○齊人女樂を歸る。季桓子之を受けて、三日朝せず。孔子行る。○楚の狂接輿歌うて孔子を過ぐ。曰く、鳳や鳳や、何ぞ徳の衰へたるや、往者は諫むべからず、來者は猶ほ追ふべし、已まん已まん、今の政に従ふ者は殆しと。孔子下りて、之と言はんと言はんと欲す。趨つて之を辟け、之と言ふを得ず。○長沮・桀溺、耦して耕す。孔子之を過ぐ。子路をして津を問はしむ。長沮曰く、夫の輿を執る者は誰と爲す。子路曰く、孔丘と爲す。曰く、是れ魯の孔丘か。對て曰く、是れなり。曰く、是れならば津を知らん。桀溺に問ふ。桀溺曰く、子は誰と爲す。曰く、仲由と爲す。曰く、是れ魯の孔丘の徒か。對て曰く然り。曰く、滔滔たる者天下皆是なり、而うして誰か以て之を易へん、且つ而

楚狂接輿歌  
而過孔子。曰。  
鳳兮鳳兮。何  
德之衰。往者  
不可諫。來者  
猶可追。已而  
已。面今之從  
政者。殆面。孔  
子下欲與之。  
言趨而辟之。  
不得與之言。  
○長沮桀溺  
耦而耕。孔子  
過之。使子路  
問津焉。長沮  
曰。夫執與者  
爲誰。子路曰。  
爲孔丘。曰。是  
魯孔丘與。曰。  
是也。曰。是知

其の人を辟るの士に従はんより、豈に世を辟くるの士に従ふに若かんやと。擾して輟あす。子路行いて以て告ぐ。夫子撫然たり。曰く、鳥獸は與に羣を同じくす可からず、吾斯の人の徒と與にするに非ずして、誰と與にせんや。天下道有らば、丘與に易へざるなり。

○ 微子名は啓、紂の庶兄たり、紂の暴逆を見て去る ○ 箕子は紂の諸父、數々紂を諫むれども聽かれず、乃ち髮を被り伴り狂して奴となる ○ 比干亦紂の諸父、苦諫して去らず紂怒つて曰く聖人の胸に七竅ありと予之を見んとて終に其胸を剖く ○ 屍比三仁有りしに紂之を用ひて天下を治むるを知らずして、或は夫り或は奴となり或は死せしめたるは惜むべきことなりとの意 ○ 士師は刑を取り行ふ役人にして今の判事の如きもの ○ 成人が而下悪の度々しりぞける、を氣の毒に思ひ此邦を去りて他邦に行きては如何と問へるなり ○ 待は待過なり時比魯に於て季氏は上卿たり孟氏は下卿たり季氏の待遇を以てする能はざれども孟氏以上に待遇すべしとなり ○ 齊の景公の書を讀したる言と見るべし ○ 章瑨、定公十四年孔子魯に任へて大司寇たり政を亂す者少正卯を誅し三月にして國政大に壞り道に潰ちたるを拾はず四方の密諜に歸する者多し齊人聞きて大に懼れて曰く孔子政を爲さば必ず歸たらん然らば齊地必ず先づ併吞せられん速かに孔子の施設を沮害せざる可からずと乃ち國內の美女八十人を探びて美服を衣せ魯の城門の外に陳ねて康樂を舞はしむ季桓子定公に勸めて之を受けしめ君臣共に歡樂して朝禮を廢するること三日孔子遂に去れり ○ 狂者、接輿といふ名もの ○ 鳳は孔子をさす、鳳凰や鳳凰や鳳凰は聖世に非ざれば出てず今此亂世に翔舞して賢主を求めんとて周行せり鳳凰の徳も此に至りて衰へたるかな



津矣。問於桀  
溺桀溺曰子  
爲誰曰爲仲  
由曰是魯孔  
丘之徒與對  
曰然曰酒滔  
者天下皆是也而誰以易之且而與三辟人之士也豈若從三辟世之士哉棧而不輟子  
路行以告夫子憮然曰鳥獸不可與同羣吾非斯人之徒與而誰與天下有道丘不與易  
也。

○將來の事は猶ほ何とかし得べし速に亂を避けて隱居せよ ○今の政に従ふ者は夫れ危きかなと ○下  
るは堂を下るなり ○共に隱者の名 ○楫は二つすきにて楫ひ新すなり ○渡船場 ○馬車の手綱を  
とるなり ○酒々は周流の貌、おしなべてといふ意 ○酒々たる天下の亂、誰か將に之を變易せんとする、  
遂に變易すべからずとなり ○仕ふ可き人を擇びて東奔西走する士、即ち孔子を指す ○棧とは種を蒔きて  
上に土を覆ふこと ○二人の己の志を知らざるを惜む也 ○天下道なければこそ余其俗を變易せんとする也

子路從而後。  
遇丈人以杖  
荷篠子路問  
曰子見夫子  
乎丈人曰四  
體不動五穀  
不分孰爲夫  
子植其杖而  
芸子路拱而

子路從而後。丈人の杖を以て篠を荷ふに遇ふ。子路問うて曰く、子夫子  
を見たるか。丈人曰く、四體勤めず、五穀分たず、孰れをか夫子と爲すと。其杖  
を植てて芸ぎる。子路拱して立つ。子路を留めて宿せしめ、雞を殺し黍を爲  
りて之に食はしめ、其二子を見えしむ。明日、子路行きて以て告ぐ。子曰く、  
隱者なりと。子路をして反つて之を見しむ。至れば則ち行れり。子路曰く、仕へ

立止子路宿。  
殺雞爲黍而  
食之見其二  
子焉明日子  
路行以告子  
曰隱者也使  
子路反見之  
至則行矣子  
路曰不仕無  
義長幼之節  
不可廢也君  
臣之義如之  
何其廢之欲  
潔其身而亂  
大倫君子之  
仕也行其義  
也道之不行  
已知之矣○  
逸民伯夷叔  
齊虞仲夷逸

ざれば義無し、長幼の節は廢す可からざるなり、君臣の義は、之を如何して其れ  
之を廢せん、其身を潔くせんと欲して、大倫を亂る、君子の仕ふるや、其の義  
を行ふなり、道の行はれざるは、己に之を知れり。○逸民には、伯夷・叔齊・虞  
仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。子曰く、其志を降さず、其身を辱めざるは、伯  
夷・叔齊か。柳下惠・少連を謂ふ、志を降し身を辱む、言は倫に當り、行は  
感に中る、其れ斯れのみ。虞中・夷逸を謂ふ、隱居言を放にす、身は清に中  
り、廢して權に中たる。我は則ち是に異なり、可も無く、不可も無し。○大師擊  
は齊に適き、亞飯干は楚に適き、三飯紼は蔡に適き、四飯缺は秦に飯き、鼓方叔  
は河に入り、播鼓武は漢に入り、少師陽・擊磬襄は海に入る。○周公魯公に謂ひて  
曰く、君子は其親を施へず、大臣をして以ひざるを怨ましめず、故舊に大放無けれ  
ば、則ち棄てざるなり、備はるを一人に求むる無れ。○周に八士有り、伯達・伯  
适・仲突・仲忽・叔夜・叔夏・季隨・季駒。

朱張。柳下惠少連。子曰。不降其志。不辱其身。伯夷叔齊與。謂柳下惠少連。降志辱身矣。言中倫。行中慮。其斯而已矣。謂虞仲夷逸。隱居放言。身中清。廢中權。我則異於是。無可無不可。○大師擊適齊。亞飯干適楚。三飯繚適蔡。四飯缺適秦。鼓方叔入于河。播鼗武入于漢。少師陽擊磬。襄入于海。○周公謂魯公曰。君子不施其親。不使大臣怨乎不以。故舊無大故。則不棄也。無求備於一人。○周有八士。伯達。伯适。仲突。仲忽。叔夜。叔夏。季隨。季騫。

● 丈人とは老人なり。老人が杖をつき。藜といふ田器を荷へるに。行遇ひて。● 五穀の苗分けをする義、又五穀の辨別も出来ずとも解すべし。● 杖を立ててそれを力に身をよせる也。● 拱は手こまぬきて捲ぐる。こと支那の禮なり。● 飯を炊ぐなり。● 老人不在なりきとの意。● 丈人不在なりしを以て。子路が孔子の言を二兒に向ひて言ひ違したるものなり。● 君臣の道。● 遺逸の民又は超逸の民の義。氏は位無き人をいふ。一説には此七人は。魯國の作者(オコルモノ)七人なりといふ。● 柳下惠は過に仕へて。用違の史となり。三たび黜けられて去らず。これ志を屈し身を辱しむる者なり。されど其言ふ所。倫理に中れり。● 少連の行ひは思慮に中れり。● 一説に。禮は得て作るべしとす。● 道の權衡を得たるなり。● 豫。魯國の禮樂増進して。樂師四方に散去するを言ふ。大師は樂師の官。擊は名。● 古は天子諸侯。故毎に樂を奏す。亞飯。三飯。四飯は。食時に奏する樂官。干。繚。缺は皆名。● 鼓は鼓手。方叔は名。● 播鼗は。よりツツミ、武は名。● 少師は樂官、陽は名。● 磬を打つ樂手、襄は名。● 魯公とは。周公の子伯禽なり。魯に封ぜらる。● 其親む所を易へざるをいふ。● 大故は。大事故にして。假逆の事を指す。● 周の盛時一家八名士を出す、二名ツツを一句とし。竹節韻を押す、自然の妙といふべし。

卷之十

子張第十九

子張曰。士見危致命。見得喪。思義。祭思敬。思哀。其可已矣。○子張曰。執德不弘。信道不篤。焉能爲有。焉能爲亡。○子夏之門人問交。於子張。子張曰。子夏云何。對曰。子夏曰。

子張曰く、士は危きを見ては命を致し、得るを見ては義を思ひ、祭には敬を思ひ、喪には哀を思ふ、其れ可なるのみ。○子張曰く、徳を執ること弘からず、道を信すること厚からずんば、焉んか能く有りと爲し、焉んか能く亡しと爲さん。○子夏の門人、交を子張に問ふ。子張曰く、子夏は何と云へる。對へて曰く、子夏曰く、可なる者は之に與して、其不可なる者は之を拒くと。子張曰く、吾が聞く所に異なり、君子は賢を尊び衆を容れ、善を嘉して不能を矜む、我の大賢なるか、人に於て何ぞ容れられざる所あらん、我の不賢なるか、將に我を拒がんとす、之を如何ぞ其れ人を拒がん。○子夏曰く、小道と雖も、必ず觀る可き

可者與之。其不可者拒之。子張曰。異乎吾所聞。君子尊賢而容衆。嘉善而矜不。能。我之大賢與。於人何所不容。我之不賢與。將我拒人也。○子夏曰。雖小道。必有可觀者焉。致遠恐泥。是以君子不爲也。○子夏曰。日知其所亡。月無忘其所學。可謂好學。

者有らん、遠きを致すには恐くは泥まん、是を以て君子は爲めざるなり。○子夏曰く、日に其の亡き所を知り、月に其能くする所を忘るゝ無くんば、學を好むと謂ふ可きのみ。○子夏曰く、博く學んで篤く志し、切に問うて近く思へば、仁其の中に在り。○子夏曰く、百工は肆に居りて以て其事を成し、君子は學びて以て其道を致す。○子夏曰く、小人の過ちや、必ず文る。○子夏曰く、君子に三變あり、之を望めば儼然たり、之に即くや溫、其言を聽くや厲。○子夏曰く、君子信ぜられて、而る後に其民を勞す、未だ信ぜられざれば、則ち以て己を厲すと爲せばなり。信ぜられて而る後に諫む、未だ信ぜられざれば、則ち以て己を誘ると爲せばなり。○子夏曰く、大徳閑を踏えずんば、小徳は出入すとも可なり。○子游曰く、子夏の門人小子は、洒掃應對進退に當りては、則ち可なり、抑々末なり。之を本づけば、則ち無し。之を如何。子夏之を聞いて曰く、噫、言游過てり、君子の道は、孰れをか先に傳へ、孰れをか後に倦まん、諸を草木の區にして以て別

也已矣。○子夏曰。博學而篤志。切問而近思。仁在其中矣。○子夏曰。百工居肆以成其事。君子學以致其道。○子夏曰。小人之過也必文。○子夏曰。君子有三變。望之儼然。即之也溫。聽其言也厲。○子夏曰。君子信而後勞。其民未信則以爲厲己也。信而後諫。未信

あるに譬ふ、君子の道は爲んぞ誣ふ可けん、始め有り卒有る者は、其れ唯聖人か。○子夏曰く、仕へて而うして優なれば、則ち學ぶ、學んで而うして優なれば、則ち仕ふ。○子游曰く、喪は哀を致して止む。○子游曰く、吾が友張や、能くし難しと爲す、然れども未だ仁ならず。○曾子曰く、堂堂たるかな張や、與に並びて仁を爲し難し。○曾子曰く、吾語を夫子に聞く、人未だ自ら致す者有らざるなり、必ずや親の喪か。

- 孔子の弟子にして姓は顔は名は師。士は有徳にして官に在る人を指す。
- 斯る人には眞に道徳ありや無しや疑ふべし。
- 諸子百家の學、即ち異端と云ふ。
- 恐くは雜泥進ぜざるに至らん。
- 爲は治なり學といふが如し。
- 未だ知らざる所なり。
- 已に學びたる所なり。
- 日といひ月といふは相對していふのみ。
- 篤く之を心に記すなり。
- 切に問ふとは己れの學びて未だ悟らざる事を熱心に問ふなり。
- 近く己の身に適切に工夫す。
- 衆多の職工。
- 工場。
- 貌の莊なるなり。
- 溫は溫和なるなり。
- 厲は嚴格なるなり。
- 勞すとは民を使役するなり。
- 厲は病の如し。
- 大徳にして法を備えずば小徳は一出一入すとも可なり。
- 先づ大なるものを立つれば小なるものは成は理に合はずとも可なり。
- 小子は弟子の年齒き者。
- 洒掃は拭掃除のこと。
- 噫は不平の聲。
- 言游は子游のことにして言は其姓なり。
- 倦みて教へざるんや。
- 是れ譬へば草木の類を異にするものを區別するが如し若し才器を測らざして一概に大なるもの深きものを教へんには能は

則以爲誇己也。○子夏曰。大德不踰閑。小德出入可也。○子游曰。子夏之門人。小子當洒掃應對進退。則可矣。抑末也。木之則無。如之何。子夏聞之曰。噫。言游過矣。君子之道。孰先傳焉。孰後倦焉。譬諸草木。區以別矣。君子之道。焉可誣也。有始有卒者。其惟聖人乎。○子夏曰。仕而優則學。學而優則仕。○子游曰。喪致乎哀而止。○子游曰。吾友張也。爲難能也。然而未仁。○曾子曰。堂堂乎張也。雖與竝爲仁矣。○曾子曰。吾聞諸夫子。人未有自致者也。必也親喪乎。

ざるを以て能くしと爲すことあり耐けて人を誦よるに至るなり ① 始めは洒掃應對の類を云ひ卒は治國平天下をいふ ② 仕(て)餘裕がある ③ 此章は衆に居るの情を云ふ ④ 致は哀の至極を致すなり ⑤ 章指、吾友子夏は威風堂々、他人の到臨企て及ぶ所にあらずされど外面のみ重くして實質を務め仁は未だしとなり ⑥ 子夏は禮儀堂々と盛んなる人かな ⑦ 禮儀教の助を備はず人の本心より湧き出て人をし自然に誦歌の極に至らしむるものは其れ親の喪ならんか

曾子曰。吾聞諸夫子。孟莊子之孝也。其他可能也。其不改父之臣與。父政是難。

曾子曰く、吾諸を夫子に聞く、孟莊子の孝や、其他は能くす可し、其父の臣と父の政とを改めざる、是れ能くし難きなりと。○孟氏陽膚をして士師爲らしめ曾子に問ふ。曾子曰く、上其道を失ひ、民散すること久し、如し其情を得ば、則ち哀矜して喜ぶ勿れ。○子貢曰く、紂の不善は、是の如く之れ甚しか

能也。○孟氏使陽膚爲士師。問於曾子。曾子曰。上失其道。民散久矣。如得其情。則哀矜而勿喜。○子貢曰。紂之不善不如是之甚也。是以君子惡居下流。天下之惡皆歸焉。○子貢曰。君日月之食。過也。人皆見之。更也。人皆仰之。○衛公孫朝問於子

らざるなり、是を以て君子は下流に居るを惡む、天下の惡皆焉に歸す。○子貢曰く、君子の過ちや、日月の食の如し、過つや、人皆之を見る、更むるや、人皆之を仰ぐ。○衛の公孫朝子貢に問うて曰く、仲尼焉んか學びたる。子貢曰く、文武の道、未だ地に墜ちずして、人に在り、賢者は其大なる者を識し、不賢者は其小なる者を識す、文武の道有らざる莫し、夫子焉にか學ばざらん、而して亦何の常師か之れ有らん。○叔孫武叔大夫に朝に語りて曰く、子貢は仲尼より賢る。子服景伯以て子貢に告ぐ。子貢曰く、之を宮牆に譬ふれば、賜の牆や肩に及べり、室家の好きを窺ひ見るべし、夫子の牆は數仞、其門を得て入らざれば、宗廟の美、百官の富を見ず、其門を得る者は或は寡し、夫子の云ふこと、亦宜ならずや。○叔孫武叔、仲尼を毀る。子貢曰く、爲すを以てする無かれ、仲尼は毀る可からざるなり、他人の賢者は丘陵なり、猶ほ踰ゆ可し、仲尼は日月なり、得て踰ゆる無し、人自ら絶たんと欲すと雖も、其れ何ぞ日月を傷ぶらんや。



賈曰。仲尼焉。學。子貢曰。文武之道。未墜於地。在。賢者識其大者。不賢者識其小者。莫不有文武之道焉。夫子焉不學而亦何常師之有。○叔孫武叔語曰。夫於朝。曰。子貢賢於仲尼。子服景伯以告。子貢曰。賜之牆也及肩。窺見室家之好。夫子之牆

多。其の量を知らざるを見すなり。○陳子禽、子貢に謂つて曰く、子の恭を爲すや、仲尼も豈に子より賢ならんや。子貢曰く、君子は一言を以て知と爲し、一言を以て不知と爲す、言は慎まざる可からざるなり。夫子の及ぶ可からざるや、猶ほ天の階して升る可からざるがごときなり、夫子にして邦家を得ば、所謂之を立つれば斯に立ち、之を導けば斯に行き、之を緩んずれば斯に來り、之を動かせば斯に和するなり、其生や榮、其死や哀、之を如何ぞ其れ及ぶ可けんや。

○魯の大夫、名は想。其父は歡子にして名は蕪なり、歡子賢徳ありて而して莊子能く其臣を用ひ其政を守る故に彼には他に差行の稱す可き有りと雖も而も皆此事の難と爲すには若かざるなり。○陽膚は魯子の弟子。○士師は司獄の官なり。○民心取縮れなくされること。○罪人を取らば其情實を白状せしむ得たりとて政びなどするは以て外の事也。○哀矜は斯る罪を犯すに至らしめたるを不憫に思ふ也。○是の故に在位の君子は身に不徳ありて下流に比すべき不善の立場に在る可からざる若し不徳ありて下流に居らば業惡は水の低きに就くが如く皆之れに歸すべし。○日蝕月蝕の義。○魯の大夫なり。○文王、武王の道即ち聖人の道。○論は記論也。○魯の大夫にして名は州仇。○大夫等に朝して西り。云ふなり。○景伯も魯の大夫。○宅園にして即ちかきをいふ。○賜は子貢の名。○七尺を例といふ。○武叔をいふ。○孔子のこと。○以て外のことなりとの意。○孔子の徳を傷けて糞棄するなり。○己れに分財を知らずとの意。○諸國あるも蓋し孔子

數仞。不得其門而入。不見宗廟之美。百官之富。得二其門者或寡矣。夫子之云不亦宜乎。○叔孫武叔毀仲尼。子貢曰。無以爲也。仲尼不可毀也。他人之賢者丘陵也。猶可踰也。仲尼日月也。無得而踰焉。人雖欲自絶。其何傷於日月乎。多見其不知量也。○陳子禽謂子貢曰。子爲恭也。仲尼豈賢於子乎。子貢曰。君子一言以爲知。言以爲不知。言不可不慎也。夫子之不可及也。猶天之不可階而升也。夫子之得邦家者。所謂立之斯立。道之斯行。綏之斯來。動之斯和。其生也榮。其死也哀。如之何。其可及也。

○弟子陳亢なりん。○他のことは知らねどあなたの恭といふ點に於ては。○孔子を掛り一昇ること。○民は其德に化し義を知り。○確固たる立場を得て惡風に動かされざるなり。○民は孔子の徳くま、に行くをいふ。○民を安んずれば豫人も徳を慕ひて來るなり。○民をして事を爲すに必ず禮によらしむ故に民能く和するをいふ。○生きて世に在るときには第名あるをいふ。○死するや天下の人物之を尊悼するを云ふ。

堯曰第二十

堯曰。咨爾舜。天之曆數在爾躬。允執其中。四海困窮。天祿永終。舜

堯曰く、咨爾舜、天の曆數は爾の躬に在り、允に其中を執れ、四海困窮せば天祿永く終へん、舜も亦以て禹に命ず、曰く、予小子履、敢へて左牡を用て、敢へて昭に皇皇たる后帝に告ぐ、罪有るは敢へて赦さず、帝臣蔽はず、簡ぶこと

亦以命禹曰。予小子履敢用支牡。敢昭告于皇皇后帝。有罪不敢赦。帝臣不蔽。簡在帝心。朕躬有罪。無以万方。無以罪。罪在朕躬。周有大賚。善人是富。雖有周親。不如仁人。百姓有過。在予一人。謹權量。審法度。脩廢官。四方之政行焉。興滅國。繼絕世。舉逸民。天下

帝の心に在り、朕が躬罪有れば、萬方を以てする無れ、萬方罪有れば、罪朕が躬に在らんと。周に大賚有り、善人は是れ富む。周親有りと雖も、仁人に如かず。百姓過有らば、予一人に在りと。權量を謹み、法度を審にし、廢官を脩めば、四方の政行はる。滅國を興し、絶世を繼ぎ、逸民を舉げば、天下の民心を歸す。重んずる所は民食喪祭。寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任す。敏なれば則ち功有り、公なれば則ち民説ぶ。

- あ、世舜上の意
- 天位列次皆御身の一身にあり
- 中は中庸の義
- 四海の庶民若し困窮することあるに悉く御身の罪にして天葬位長へに終滅せん
- 舜の禹に位を譲る時にも堯と同じ辭を以て禹に命じたりと
- 曰く予以下萬方罪有れば朕が躬に在らんまでは殷の湯王の言
- 小子とは日神の謙辭、履は湯王の名なり
- 犠牲の黒牛、皇々たる后帝とは大なる天帝といふ義にて天に誓ふ辭也
- 帝臣即ち官に在る者に善あり
- 已れ敢へて隠蔽せず
- 以上二事を簡ぶことは上帝の心にあり上帝必ず悉知せらるるとなり
- 萬民を罪するなれ
- 以下武王討つに當りての誓辭、或曰「百姓過あれば予一人に在り」のみを武王の辭と解する説もあり
- 大賚は大なる賜、周親は親し親戚の義、蓋し周の文王武王は列に偏せず雖も仁是れ親より故に善人に富めるなり
- 權ははかり量はます
- 夏殷の後を封じたるなり
- 賢人の後の絶えたるを立てて祭祀を承けしめたるなり
- 民間の賢才を拔擢すること
- 一に「民の食喪祭」と解す亦通す、食を重んずるは民の

之民歸心焉。所重民食喪祭。寬則得衆。信則民任焉。敏則有功。公則民説。

生命を重んず、所以、喪を重んずるは哀を盡す所以、祭を重んずるは敬を致す所以なり

子張問於孔子曰。何如斯可以從政矣。子曰。尊五美。屏四惡。斯可以從政矣。子張曰。何謂五美。子曰。君子惠而不費。勞而不怨。欲而不貪。泰而不驕。威而不猛。子曰。何謂惠而不費。子曰。子張曰。何謂

子張孔子に問うて曰く、何如にせば斯に以て政に従ふ可きか。子曰く、五美を尊び、四惡を屏げば、斯に以て政に従ふ可し。子張曰く、何をか五美と謂ふ。子曰く、君子は惠にして費さず、勞して怨みず、欲して貪らず、泰にして驕らず、威にして猛ならず。子張曰く、何をか惠にして費さずと謂ふ。子曰く、民の利する所に因りて之を利す、斯に亦惠にして費さざるにあらずや。勞すべきを擇んで之を勞す、又誰をか怨みん。仁を欲して仁を得、又焉んぞ貪らん。君子は衆寡と無く、小大と無く、敢て慢する無し、斯に亦泰にして驕らざるにあらずや。君子は其衣冠を正し、其瞻視を尊くし、儼然として人望んで之を畏る、斯に亦威にして猛ならず。子張曰く、何をか四惡と謂

利而利之。斯不亦惠而不費乎。擇可勞而勞之。又誰怨。欲仁而得仁。又焉貪。君子無衆寡。無小大。無敢慢。斯不亦泰而不驕乎。君子正其衣冠。尊其瞻視。儼然人望而畏之。斯不亦威而不猛乎。子張曰。何謂四惡。子曰。不教而殺。謂之虐。不戒視成。謂之暴。慢令致期。

ふ、子曰く、教へずして殺す、之を虐と謂ふ。戒めずして成を視る、之を暴と謂ふ。令を慢にして期を致す、之を賊と謂ふ。猶しく之れ人に與ふるなり、出納の吝なる、之を有司と謂ふ。○子曰く、命を知らざれば、以て君子たる無きなり、禮を知らざれば、以て立つ無きなり、言を知らざれば、以て人を知る無きなり。

● 地方の状況に應じて民を利し之を安んずるをいふ ● 勞役に堪ふる度に應じて之を使ふなり ● 君子は衆大を以て寡小々あなどることなし ● 泰は容る、所あるにて寛大なるなり ● 威貌を崩さざるなり 瞻視とは正視の義 ● 戒は戒防、ることなり、君の臣を使ふに臣に不善あらば豫め之を戒防し若し之に従はざる時は乃ち之を責むべし、然るに豫め戒むることなくして成績を買むるものを暴といふ ● 暴は急卒の義にして暴虐の義にはあらず ● 始め命令を嚴にせずしてよい加減になし置き、従つて民も御聞せるに、急に制限を定めてきびしく取立て等を爲し、能くせざる言は之を刑す、斯の如きは民を賤するものなり ● どの道人に配分すべきものなるに之を吝むが如きは君主のすべきことにあらざり自衛共のすることなり ● 命は事物の自然に窮達する所、即ち天命なり、天命を知つて進退し天命によりて世に處してこそ君子と稱すべけれ ● 人は禮によらずんば自ら身を持して立つ能はず ● 又言は心の表現なれば其人を知らんと欲せば先づ其言を知らざる可からず、若し其言の得失を知り得ざれば其の人物を知る能はずと也

謂之賊。猶之與人也。出納之吝。謂之有司。○子曰。不知命。無以爲君子也。不知禮。無以立也。不知言。無以知人也。

論語終

孟子

朱熹集註序說

史記列傳曰孟軻趙氏曰孟子字子車一說字子與趙人也本軻國也受業子思之門人子思孔子之

云王助以人為衍字而趙氏註及孔叢子等書亦皆云孟子親受業於子思未知是否道既通趙氏曰孟子通五經尤長於詩書程子曰孟子曰可以止

者也故知易者莫如孟子又曰王者之遊樂而詩亡詩亡然後春秋作又曰春秋無義戰又曰春秋天子之事也知春秋者莫如孟子尹氏曰以此而論則趙子謂孟子長於詩書而已豈知孟子者哉游事齊

宣王宣王不能用適梁梁惠王不果所言則見以為迂遠而闕於事情按史記梁惠王之三十五年

王二十三年孟軻為齊王十年丁未齊人伐趙而孟子在齊以古史謂孟子先舉齊宣王後乃見梁惠王襄王

而後至齊見宣王梁惠王與史記荀子等書皆不合而通鑑以傳燕之盛為宣王十九年則是孟子先遊梁

亦難他據又未知孰是也當是之時秦用商鞅楚魏用吳起齊用孫子田忌天下方務於合從

連衡以攻伐為賢而孟軻乃述唐虞三代之德是以所如者不合退而與萬章之徒序詩書

述仲尼之意作孟子七篇趙氏曰凡二百六十一章三萬四千六百八十五字韓子曰堯以是傳之舜舜以是傳之禹禹以是傳之湯湯以是傳之文武周公文武周公傳



之孔子。孔子傳之孟軻。軻之死不得其傳焉。荀與揚也擇焉而不精。語焉而不詳。程子曰：軻子非孟軻所傳，不知言所傳者何事。○又曰：孟氏醇乎醇者也。荀與揚大醇而小疵。程子曰：軻子非孟軻所傳，不知言所傳者何事。○又曰：孔子之道大而能博，門弟子不能備觀而盡識也。故學焉而皆得其性之所近。其後離散分處諸侯之國，又各以其所能授弟子。源遠而未益分。惟孟軻師子思而子思之學出於曾子。自孔子沒，獨孟軻氏之傳得其宗。故求觀聖人之道者，必自孟子始。程子曰：孔子言參也魯，然子思後得聖人之道者，曾子也。○又曰：揚子雲曰：古者楊墨塞路，孟子辭而闢之，廓如也。夫楊墨行正道廢，孟子雖賢聖，不得位。空言無施，雖切何補。然賴其言而今之學者，尙知宗孔氏崇仁義，貴王賤霸而已。其大經大法皆亡滅而不救，壞爛而不收。所謂存十一於千百，安在其能廓如也。然向無孟氏，則皆服左袵而言侏離矣。故愈嘗推尊孟氏，以爲功不在禹下者爲此也。

或問於程子曰：孟子還可謂聖人否？程子曰：未敢便道他是聖人。然學已到至處。愚按：至字當作聖字。○程子又曰：孟子有功於聖門，不可勝言。仲尼只說一箇仁字，孟子開口便說仁義。仲尼只

說一箇志，孟子便說許多養氣出來，只此二字其功甚多。○又曰：孟子有大功於世，以其言性善也。○又曰：孟子性善養氣之論，皆前聖所未發。○又曰：學者全要識時，不足以言學。顏子陋巷自樂，以有孔子在焉。若孟子之時，世既無人，安可不以道自任？○又曰：孟子有些英氣，才有英氣，便有圭角。英氣甚害事。如顏子便渾厚不同。顏子去聖人只毫髮間。孟子大賢亞聖之次也。或曰：英氣見於甚處？曰：但以孔子之言比之，便可見。且如冰與水精，非不光比之玉，自是有溫潤含蓄氣象，無許多光耀也。

揚子曰：孟子一書，只是要正人心。教人存心養性，收其放心。至論仁義禮智，則以惻隱羞惡辭讓是非之心爲之端。論邪說之害，則曰生於其心，害於其政。論事君，則曰格君心之非。一正君而國定，千變萬化，只說從心上來。人能正心，則事無不足爲者矣。大學之脩身齊家治國平天下，其本只是正心誠意而已。心得其正，然後知性之善。故孟子遇人便道性善。歐陽永叔卻言聖人之教人，性非所先，可謂誤矣。人性上不可添一物。堯舜所以爲萬世法，亦是率性而已。所謂率性循天理是也。外邊用計用數，假饒立得功業，只是人欲之私。與聖賢作

孟子 卷之一

梁惠王章句上

孟子見梁惠王。王曰。叟不遠千里而來。亦將有以利吾國乎。孟子對曰。王何必曰利。亦有仁義而已矣。王曰。何以利吾國。大夫曰。何以利吾家。士庶人曰。何以利吾身。上下

孟子梁の恵王に見ゆ。王曰く、叟千里を遠しとせずして來る。亦將に以て吾が國を利する有らんとするか。孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利と曰ん、亦仁義有るのみ。王は何を以て吾が國を利せんと曰ひ、大夫は何を以て吾が家を利せんと曰ひ、士庶人は何を以て吾が身を利せんと曰ひ、上下交り利を征りて國危し。萬乘の國、其君を弑する者は、必ず千乘の家なり。千乘の國、其君を弑する者は、必ず百乘の家なり。萬に千を取り、千に百を取らば、多からずと爲さず。苟に義を後にして利を先にするを爲さば、奪はずんば暨かず。未だ仁にして其親を遺する者は有らざるなり。未だ義にして其君を後にする者は有らざるなり。

交征<sup>レ</sup>利<sup>レ</sup>而國  
危矣<sup>レ</sup>萬乘之  
國弒<sup>レ</sup>其君<sup>一</sup>者  
必千乘之家  
千乘之家必  
其君<sup>一</sup>者必百  
乘之家萬取  
千焉<sup>レ</sup>千取百  
焉<sup>レ</sup>不爲<sup>レ</sup>不爲  
矣<sup>レ</sup>苟爲<sup>レ</sup>後<sup>レ</sup>義  
而先<sup>レ</sup>利<sup>一</sup>不奪  
不<sup>レ</sup>賢<sup>一</sup>未<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>仁  
而遺<sup>レ</sup>其親<sup>一</sup>者  
也<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>義而  
後<sup>レ</sup>其君<sup>一</sup>者上<sup>レ</sup>  
王亦曰<sup>レ</sup>仁義<sup>一</sup>  
而已矣<sup>レ</sup>何必  
曰<sup>レ</sup>利<sup>一</sup>  
孟子見<sup>レ</sup>梁惠  
王<sup>一</sup>王立<sup>レ</sup>於沼

り。王亦仁義と曰はんのみ。何ぞ必ずしも利と曰はん。

● 孟は好、子は男子の美稱 ● 魏侯魯なり、隠して惠といふ、大梁に都す、故に梁の惠王といふ、其三十五年禮を卑くし幣を厚くして以て賢者を招けり ● 嬰は長老の稱 ● 利とは蓋し富國強兵の類なり、對ふは尊長に敬みて答ふる意 ● 仁とは慈愛の徳にして義とは事の宜しきなり、此の仁義の説は孟子の學說の一大特徴にして、蓋し當時の時勢に憤慨して殊に仁義の二大字を高揚せしならん、本文中、亦有仁義而已矣と云へるは、古の帝王の如く今王も仁義を行はんのみとの意也 ● 家老 ● 大夫以下の者 ● 平民 ● 上位の者は下位の者から利を征らんとし、下位の者は上位の者から利を征らんとす ● 古は戦に車を用ひたり、故に封地の大小を車數に一示す、兵車一乘は士三人卒七十二人なり、而して萬乘の國は周制によれば元來天子の位なるも當時制度亂れて大諸侯の意に用ひたり、即ち當時の大國齊楚の如きを云ふ ● 千乘の家とは周制によれば天子の公卿及び諸侯をいふ、されど當時にては大諸侯の家老 ● 千乘の國とは小諸侯の意 ● 小諸侯の家老 ● 萬、千、百は上文の萬乘千乘百乘を受けていふなり、大國の萬乘中に於て家老は其千乘を取らざらん、即ち十分の一を受け取らば、不足はあるまい筈だとの意 ● 苟は誠なり ● 利と云ふ事を先行條件とするなれば、與へられるのみでは満足出來ずして春ひ取らねば飽き足るまい ● 遺すとは其利を棄つるなり、後にはすとは其君を輕んずるなり

孟子梁の惠王に見ゆ。王沼の上に立ち、鴻鴈麋鹿を顧みて曰く、賢者も亦此を樂むか。孟子對へて曰く、賢者にして而る後此を樂む。不賢者は此れ有りとし

上<sup>レ</sup>顧<sup>レ</sup>鴻鴈麋  
鹿<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>賢者亦  
樂<sup>レ</sup>此乎<sup>一</sup>孟子  
對<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>賢者而  
後<sup>レ</sup>樂<sup>レ</sup>此<sup>一</sup>不賢  
者雖<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>此不  
樂<sup>レ</sup>也<sup>一</sup>詩云<sup>レ</sup>經  
始<sup>レ</sup>靈臺<sup>一</sup>經之  
營<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>庶民攻<sup>レ</sup>  
之<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>成<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>  
經始<sup>レ</sup>勿<sup>レ</sup>廢<sup>一</sup>庶  
民<sup>一</sup>子來<sup>レ</sup>王在<sup>レ</sup>  
靈<sup>レ</sup>囿<sup>一</sup>鹿<sup>レ</sup>鹿<sup>レ</sup>飲<sup>レ</sup>  
伏<sup>レ</sup>鹿<sup>レ</sup>濯<sup>レ</sup>濯<sup>一</sup>  
白<sup>レ</sup>鳥<sup>レ</sup>鶴<sup>レ</sup>鶴<sup>レ</sup>王  
在<sup>レ</sup>靈<sup>レ</sup>沼<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>物  
魚<sup>レ</sup>躍<sup>レ</sup>文<sup>レ</sup>王<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>  
民<sup>レ</sup>力<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>臺<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>  
沼<sup>一</sup>而<sup>レ</sup>民<sup>レ</sup>歡<sup>レ</sup>樂<sup>一</sup>  
之<sup>一</sup>謂<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>臺<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>

も樂まざるなり。詩に云ふ、靈臺を經始し、之を經し之を營す。庶民之を攻む、日ならずして之を成す。經始亟にするなれば、庶民のごとく來る。王靈囿に在れば、鹿鹿伏す飲、鹿鹿濯濯たり。白鳥鶴鶴たり。王靈沼に在れば、於物ちて魚躍ると。文王民の力を以て、臺を爲り、沼を爲る。民之を歡樂す。其臺を謂ひて靈臺と曰ひ、其沼を謂ひて靈沼と曰ふ。其樂鹿魚鼈有るを樂む。古の人は民と偕に樂む。故に能く樂むなり。湯誓に曰く、時の日害か喪びん、子女と偕に亡びんと。民之と偕に亡びんと欲せば、臺池鳥獸有りとし雖も、豈に能く獨り樂まんや。

● 沼は池なり ● 鴻は雁に似て大なるもの、麋は鹿に似て大なるものなり ● 而後は初めてと同じ ● 詩經大雅靈囿篇の詩、靈臺は文王の臺の名なり ● 經始は度り始むるなり、蓋し鐘磬を爲すなり ● 衆民 ● 亟は速なり、言は文王亟にする勿れと戒むるなり ● 子供の來りて親の用を爲す如く樂み來る ● 靈囿の下には靈あり、靈囿といふ鳥獸を放牧する所を囿といふ ● 鹿は牝鹿なり ● 其所に安じて靈物やざるなり ● 肥澤の貌 ● 潔白の貌 ● 於は欽美の辭 ● 物は滿なり ● 周の文王をいふ ● 湯誓は尚書篇名なり、時は是なり、日は夏の樂王を指す、實は何なり、樂王嘗て自ら言ひて曰く、吾天下を有つ天の日を有つが如

し、日亡びば吾乃ち亡びんのみと。民其の處に困しみ其自言に因りて而して之を目して曰く、此の日何時か亡びん、若し亡びは則ち我輩も之と與に亡びんと、蓋し其亡ぶるを欲するの甚しきなり

靈臺謂其沼一曰靈沼樂其有麋鹿魚鼈古人之與民偕樂故能樂也湯誓曰時日害喪予及女偕亡民欲與之偕亡雖有靈池鳥獸豈能獨樂哉

梁惠王曰寡人之於國也盡心焉耳矣河內凶則移其民於河東移其粟於河內河東凶亦然察鄰國之政無如寡人之用心者鄰國之民不加少寡人之民不加多何也

梁の惠王曰く、寡人の國に於けるや、心を盡くすのみ。河内凶なれば、則ち其民を河東に移し、其粟を河内に移す。河東凶なるも亦然り。鄰國の政を察するに、寡人の心を用ふるが如き者無し。隣國の民少きを加へず、寡人の民多きを加へざるは何ぞや。孟子對へて曰く、王戰を好み、兵を曳いて走る。或は百歩へん。填然として之に鼓し、兵刃既に接し、甲を棄てて兵を曳いて走る。或は百歩にして而る後に止まり、或は五十歩にして而る後に止る。五十歩を以て、百歩を笑はば、則ち何如。曰く、不可なり。直百歩ならざるのみ、是れ亦走るなり。曰く、王如し此を知らば、則ち民の鄰國より多きを望む無れ。農の時に違はざ

孟子對曰王好戰詩以戰喻填然鼓之甲刃既接棄或百步而後止或五十步而後止以五十步笑百步則何如曰不可直不百步耳是亦走也曰王如知此則無望民之多於鄰國也不遑農時穀不可不勝食也數罟不入洿池魚鼈不可勝食也斧斤

れば、穀勝けて食ふ可からざるなり。數罟洿池に入らざれば、魚鼈勝けて食ふ可からざるなり。斧斤時を以て山林に入れば、材木勝けて用ふ可からざるなり。穀と魚鼈を勝けて食ふ可からず、材木勝けて用ふ可からざるは、是れ民をして生を養ひ死を喪して憾み無からしむるなり。生を養ひ死を喪して憾みなきは、王道の始なり。五畝の宅、之に樹うるに桑を以てせば、五十の者以て帛を衣る可し、雞豚狗彘の畜、其時を失ふなくば、七十の者以て肉を食ふ可し。百畝の田、其時を奪ふ勿くば、數口の家、以て飢うるなかる可し。庠序の教を謹み、之に申ぬるに孝悌の義を以てせば、頌白の者、道路に負戴せず、七十の者帛を衣肉を食ひ、黎民飢えず寒えずして、然して王たらざる者は、未だ之れ有らざるなり。狗彘人の食を食して檢するを知らず。塗に餓殍有りて發するを知らず。人死すれば則ち曰く、我に非ざるなり歳なりと。是れ何ぞ人を刺して之を殺し、我に非ざるなり兵なりと曰ふに異ならん。王、歳を罪することなくば、斯に天下の民至らん。



以時入山林。材木不可勝用也。殺與魚鼈不可勝食。材木不可勝用。是使民養生喪死無憾也。養生喪死無憾。王道之始也。五畝之宅。樹之以桑。五十者可衣。五十者可食。雞豚狗彘之畜。無失其時。七十者可食肉矣。百畝之田。勿奪其時。數口之家。可以無飢矣。謹庠序之教。申之以孝悌之義。頒白者不負戴於道路矣。七十者衣帛食肉。黎民不飢不寒。然而王者未之有也。狗彘食人食而不知檢。塗者餓殍。而不知發。人死。則曰。非我也。歲也。是何異於刺人而殺之。曰。非我也。兵也。王無罪歲。斯天下之民至焉。

① 諸侯自ら稱して寡人といふ、之れ徳の寡き義にて謙辭なり ② 河内河東共に魏の領地 ③ 河東の粟なり ④ 減少せず ⑤ 獵は或普通なり、戰は初に鼓を擊ちて戰鬪を開始し、金を擊ちて戰鬪を終止す ⑥ 兵は兵器なり ⑦ 歩とは普通六尺をいへども、此所にては唯五十歩百歩と人の歩賦に見れば可なり ⑧ 百歩でないといふは、けである ⑨ 民を使ふに農時のひまなきに便ひ、農の時を違はざる様にす ⑩ 食ひ盡す事は出来ぬ、 ⑪ 目の細き網をいふ ⑫ 水の聚まる所 ⑬ 伐材の具、大なる斧と云ひ、小なる斧と云ひ ⑭ 落葉の時節 ⑮ 生命を養ひ死後の養を引ひ始末する ⑯ 天下に王たる道 ⑰ 井田の制一井田九百畝を百畝宛九區に分け、其一を公田とし、餘を八家に分與して耕さしめ時を以て其田を易ふるなり、之に對して又別に各家屋を建て野菜果樹等を種うるの地を給し、此は不易とす、之を五畝の宅といふ ⑱ 銅物 ⑲ 犬や人のことをいふ、畜は養ひ ⑳ 上農天は九人、上の次は八人、中は七人、下の次は六人、下は五人を養ふの別あり、此には上四下を通じて言ふ、故に單に數口といふなり ㉑ 今日の所謂學校教育、殷には庠といひ、周には序といふに據る ㉒ 父母に事ふるを孝といひ、兄に事ふるを悌といふ ㉓ 顔は班なり、顔髪が白黒半ばするをいふ、即ち老人のこと ㉔ 物を背負ひ又は頭に載くこと ㉕ 粟なり ㉖ 狗彘に人の食ふべきものを食はしめて之れを養ひ直歸る事を知らず ㉗ 路上に餓死者ありても倉庫を開きて民を救ふことを知らず

梁惠王曰。寡人願安承教。孟子對曰。殺人以挺與刃。有以異乎。曰。無以異也。以刃與政。有以異乎。曰。無以異也。曰。庖有肥肉。廄有肥馬。民有飢色。野有餓莩。此率獸而食人也。獸相食。且人惡之。爲民父母。行政。不免於率獸而食人。惡在其爲民父母也。仲尼曰。始作

梁の惠王曰く、寡人願くは安じて教を承けん。孟子對へて曰く、人を殺すに挺を以てすると刃と以て異なる有るか。曰く、以て異なるなきなり。刃を以てすると政と以て異なるあるか。曰く、以て異なる無きなり。曰く、庖に肥肉有り、廄に肥馬有り、民に飢色有り、野に餓莩有り。此れ獸を率ゐて人を食ましむるなり。獸相食むすら、且つ人之を惡む。民の父母と爲り、政を行うて獸を率ゐて人を食まするを免れず。惡ぞ其の民の父母たるに在らん。仲尼曰く、始めて桶を作る者は、其れ後なからんかと。其の人に象りて之を用ふるが爲めなり。之を如何ぞ、其れ斯の民をして飢ゑて死なしめん。

① 諸侯の自稱にして寡徳の人の義 ② 意を安んじて ③ 刃を以てするとの義 ④ 政を以てするとの義 ⑤ 豎所 ⑥ 餓死者 ⑦ 君主は民が父母とも恃む所なり ⑧ 桶は卵のときに用ふる木偶人なり、古の葬には草を束ねて人と爲し以て從偏となし之を駕馭といへり、略人形に似たるのみ、中古之に易ふるに桶を以てせし爲め面目醜ありて大だ人に酷似せり故に孔子其不仁を惡まれしなり。禮記檀弓下參照 ⑨ 子孫を云ふ ⑩ 桶の形の人に似たるを云ふ

備者其無後乎。爲其象人而用之也。如之何其使斯民飢而死一也。

梁惠王曰。晉國天下莫強焉。叟之所知也。及寡人之身。東敗於齊。長子死焉。西喪地於秦。七百里。南辱於楚。寡人恥之。願比死者一洒之。如之何則可。孟子對曰。地方百里而可以王。王如施仁政於民。省刑罰。薄稅斂。深耕易

梁の惠王曰く、晉國は天下より強き莫きは、叟の知れる所なり。寡人の身に及び、東は齊に敗られ長子死す。西は地を秦に喪ふ七百里。南は楚に辱しめらる。寡人之を恥づ。願くは死するるときまでに堂たび之を洒がん、之を如何にせば則ち可ならん。孟子對へて曰く、地方百里にして而して以て王たる可し。王如し仁政を民に施し、刑罰を省き稅斂を薄くし、深く耕し易め耨り、壯者は暇日を以て、其孝悌忠信を脩め、入りては以て其父兄に事へ、出でては以て其長上に事へば、梃を制して以て秦楚の堅甲利兵を撻たしむ可し。彼は其民の時を奪ひ、耕耨して以て其父母を養ふを得ざらしむ。父母凍餓し、兄弟妻子離散す。彼は其民を陷溺す。王往きて之を征せば、夫れ誰か王と敵せん。故に曰く、仁者は敵無しと。王請ふ疑ふ勿れ。

魏鑑は本管の大夫魏斯が韓氏魏氏と共に晉地を分ち歸して三晉と曰ふ、故に惠王は猶ほ自ら自國を晉國と謂

耨。壯者以暇日。脩其孝悌。忠信。入以事其父兄。出以事其長上。可使制梃以撻秦楚之堅甲。利兵矣。彼奪其民時。使不得耕耨以養其父母。父母凍餓。兄弟妻子離散。彼陷溺其民。王往而征之。夫誰與王敵。故曰。仁者無敵。王請勿疑。

孟子見梁襄王。出語人曰。望之不見。入君就之而不見。所長焉。卒然問曰。天下

孟子梁の襄王に見ゆ。出でて人に語りて曰く、之を望むに人君に似ず。之に就きて畏るゝ所を見ず。卒然として問うて曰く、天下惡にか定らん。吾對へて曰く、一に定まらん。孰か能く之を一にせん。對へて曰く、人を殺すを嗜まざる者能く之を一にせん。孰か能く之に與せん。對へて曰く、天下與せざる莫き

ふ ① 長老の稱、孟子を指して云へるなり ② 惠王三十年に馬陵の役に敗れ、太子申生麴となりて死せり ③ 秦の孝公衛鞅をして梁を伐たしむ ④ 楚のために七邑を失へるを曰ふ ⑤ 一に死者の比(タメ)にと訓ず ⑥ 以上の三の恥辱を稱く ⑦ 百里四方を云ふ、周の文王の百里の地を以て天下に王たるに至れる先例あり ⑧ 小過失は咎めず ⑨ 舟楫を薄くするは仁政の大目なり ⑩ 易は治なり、易め難るは穀物の間の草を十分にとること。或は(タヒラカニ)と訓ず、一面上よく手入の届く義也 ⑪ 歳三十以上の壯者を仕事の餘暇の日に教育す ⑫ 家庭に入りては ⑬ 家庭を出ては ⑭ 制は掣なり、杖をひつぎてそれで以て秦楚の強兵をたつきつける事が出来る ⑮ 敵國を云ふ ⑯ 田畑の收穫を得ること ⑰ 附は耕に附るなり、霜は水に留り、なり ⑱ 征は正なり、彼の其民を暴虐する罪を正して征伐すること ⑲ 古語を引く

惡乎定。吾對曰。定于。一。孰能一之。對曰。不嗜殺人者能一之。孰能與之。對曰。天下莫不與也。王知夫苗乎。七八月之間旱則苗槁矣。天油然作雲。沛然下雨。則苗浡然興之矣。其如是。孰能禦之。今夫天下之人牧。未有不嗜殺人者也。如有不嗜殺人者。則天下之民皆引領而望之矣。誠如是也。民歸之。由水之就下。沛然誰能禦之。

なり。王、夫の苗を知るか。七八月の間、旱すれば則ち苗槁る。天油然として雲を作し、沛然として雨を下せば、則ち苗浡然として之に興る。其れ是の如くば、孰か能く之を禦めん。今夫れ天下の人牧、未だ人を殺すを嗜まざる者あらざるなり。如し人を殺すを嗜まざる者あらば、則ち天下の民皆引領をひきて、之を望まん。誠には是の如くならば民の之に歸する、由ほ水の下に就き沛然たるがごとし。誰か能く之を禦めん。

● 樂の惠王の子、名は赫 ● 儼然たる威儀なればなり ● 輕卒なる狀 ● 亂れたる天下を何人が平定するやの意 ● 天下の必ず一統せらるべきをいふなり ● 雲の盛なる貌 ● 雨の盛なる貌 ● 輿起の貌 ● 禁止するなり ● 人君なり ● 首を長くして ● 歸服す

齊宣王問曰。

齊の宣王問うて曰く、齊桓・晉文の事、聞くを得べきか。孟子對へて曰く、仲尼

齊桓晉文之事可得聞乎。孟子對曰。仲尼之徒無道桓文之事者。是以後世無傳焉。臣未之聞也。無以則王乎。曰。德何如則可以王。曰。保民而王。莫之能禦也。曰。若寡人之可以保民乎哉。曰。可。曰。何由知吾可也。曰。臣聞之胡牴曰。王坐於堂上。有牽牛而過堂下。

の徒は、桓文の事を道ふ者なし。是を以て後世傳ふるなし。臣未だ之を聞かざるなり。以むなくんば則ち王か。曰く、徳何如なれば、則ち以て王たる可き。曰く、民を保んじて王たらば、之を能く禦く莫きなり。曰く、寡人の若き者以て民を保んず可きか。曰く、可。曰く、何に由りて吾が可なるを知るや。曰く、臣之を胡牴に聞く、曰く、王堂上に坐す。牛を牽いて堂下を過ぐる者あり。王之を見て曰く、牛何くに之。對へて曰く、將に以て鐘に響らんとすと。王曰く、之を舍け。吾其の穀棘として罪無くして死地に就くが若くなるに忍びず。對へて曰く、然らば則ち鐘に響るを廢せんか。曰く、何ぞ廢す可けん。羊を以て、之に易へよと。識らず諸ありや。曰く、之れ有り。曰く、是心以て王たるに足る。百姓皆王を以て愛しむと爲すなり。臣は固より王の忍びざるを知る。王曰く、然り。誠に百姓なる者あり。齊國褊小と雖も、吾何ぞ一牛を愛まんや。即ち其穀棘として罪なくして死地に就くが若くなるに忍びず。故に羊を以て之に易ふるな

者王見之曰。牛何之對曰。將以豐鐘。王曰。舍之吾不忍。其穀解若無罪而就死地。對曰。然則廢鐘與。曰。何可廢也。以羊易之。不識有諸。曰。有之。曰。是心足以王矣。百姓皆以王爲愛也。臣固知王之不忍也。王曰。然誠有百姓者。齊國雖褊小。吾何愛一牛。卽不忍其

り。曰く、王百姓の王を以て愛むと爲すを異しむ無れ。小を以て大に易ふ、彼れ惡んぞ之を知らん。王若し其の罪無くして死地に就くを隠まば、則ち牛羊何ぞ擇ばん。王笑ひて曰く、是れ誠に何の心ぞや。我其財を愛んで、而して之に易ふるに羊を以てするに非ざるなり。宜なるかな、百姓の我を愛むと謂ふや。曰く、傷むなきなり。是れ乃ち仁の術なり。牛を見て未だ羊を見ざればなり。君子禽獸に於けるや、其生を見ては、其死を見るに忍びず。其聲を聞けば其肉を食ふに忍びず。是を以て君子は庖厨を遠ざくるなり。

● 姓は田氏、名は辟疆 ● 齊の桓公の文公の勳たの業 ● 弟子 ● 王道を稱する歸家は文武周公の道を願すと雖も五刑に及べば之を購しむ、故に歸家は之を傳道するになし ● 御答へしなればならぬとちらば王道を説かんととの義 ● 保安 ● 防ぎ止む ● 王左右の近臣なり ● 新に鐘を鑄て成りしにより之に牲血を塗りて祭るなり ● 恐懼の貌 ● 止む ● 果して此の機事がありましか ● 牛は大、羊は小なるを以て百姓は王が財を惜みて牛に代ふるに羊を以てしたりと云ふ ● ほんとは百姓などいふ者は自らのさもしい心からせんを考へ方もしよう ● 怪なり ● 王の心術 ● 隱は斯なり ● 牛も羊も二色はない ● 百姓の言ありと雖も實と爲さざるなり ● 仕力なり ● 其の鳴聲なり、又一説に死ぬる時の聲と

殺棘若無罪而就死地。故以羊易之也。曰。王無異於百姓之以王爲愛也。以小易大。彼惡知之。王若隱其無罪而就死地。則牛羊何擇焉。王笑曰。是誠何心哉。我非愛其財。而易之也。羊也。宜乎百姓之謂我愛也。曰。無傷也。是乃仁術也。見牛未見羊也。君子之於禽獸也。見其生不忍見其死。聞其聲不忍食其肉。是以君子遠庖厨也。

王說曰。詩云。他人有心。予忖度之。夫子之謂也。夫我乃行之。反而求之。不得吾心。夫子言之。於我心有戚戚焉。此心之所三以合於王。者何也。曰。有復於王者曰。吾力足以舉三。百鈞。而不三。以舉二。羽。明

王說んで曰く、詩に云ふ、他人心有り、予之を忖度すとは、夫子の謂ひなり。夫れ我乃ち之を行ひ、反つて之を求めて、吾が心に得ず。夫子之を言ひ、我が心に於て戚戚焉たるあり。此心の王に合ふ所以の者は何ぞや。曰く、王に復す者有り。曰く、吾が力以て百鈞を擧るに足る、而して以て一羽を擧ぐるに足らず、明は以て秋毫の末を察するに足る、而して輿薪を見ずと。則ち王之を許さんか。曰く、否。今恩は以て禽獸に及ぶに足り、而して功は百姓に至らざるは、獨り何ぞや。然らば則ち一羽の擧らざるは、力を用ひざるが爲めなり。輿薪の見えざるは、明を用ひざるが爲めなり。百姓の保んぜられざるは、恩を用ひざるが爲めなり。故に王の王たらざるは爲さざるなり。能はざるに非ざるなり。



足<sup>三</sup>以<sup>二</sup>察<sup>一</sup>秋毫之末<sup>二</sup>而不<sup>レ</sup>見<sup>一</sup>典<sup>三</sup>薪<sup>二</sup>則<sup>レ</sup>王<sup>一</sup>許<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>乎<sup>二</sup>曰<sup>一</sup>否<sup>二</sup>今<sup>一</sup>恩<sup>三</sup>足<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>一</sup>禽獸<sup>三</sup>而<sup>レ</sup>功<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>至<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>百<sup>二</sup>姓<sup>一</sup>者<sup>二</sup>獨<sup>一</sup>何<sup>レ</sup>與<sup>二</sup>然<sup>一</sup>則<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>羽<sup>二</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>舉<sup>二</sup>爲<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>力<sup>一</sup>形<sup>二</sup>與<sup>一</sup>薪<sup>三</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>爲<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>明<sup>一</sup>焉<sup>二</sup>百<sup>一</sup>姓<sup>三</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>保<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>用<sup>二</sup>恩<sup>一</sup>焉<sup>二</sup>故<sup>レ</sup>王<sup>一</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>王<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>一</sup>也<sup>二</sup>非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>也<sup>二</sup>曰<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>一</sup>者<sup>二</sup>形<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>者<sup>二</sup>與<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>者<sup>二</sup>形<sup>一</sup>何以<sup>レ</sup>異<sup>一</sup>曰<sup>レ</sup>挾<sup>二</sup>太<sup>一</sup>山<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>

曰く、爲さざる者と能はざる者との形は、何を以て異なる。曰く、太山を挾み以て北海を超えんと。人に語りて曰く、我能はずと。是れ誠に能はざるなり。長者の爲めに枝を折す。人に語りて曰く、我能はずと。是れ爲さざるなり。能はざるに非ざるなり。故に王の王たらざるは、太山を挾みて以て北海を超ゆるの類に非ざるなり。王の王たらざるは、是れ枝を折するの類なり。吾が老を老として、以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として、以て人の幼に及ぼさば、天下は掌に運す可し。詩に云ふ、寔妻を刑し、兄弟に至り、以て家邦を御すと。言ふは斯の心を擧げて、諸を彼に加ふるのみ。故に恩を推せば、以て四海を保んずるに足り、恩を推さざれば、以て妻子を保んずるなし。古の人、大いに人に過ぐる所以の者他なし。善く其の爲す所を推すのみ、今恩は以て禽獸に及ぶに足り、而して功は百姓に至らざるは、獨り何ぞや。權ありて然る後に輕重を知り、度ありて然る後に長短を知る。物皆然り。心を甚しと爲す。王請ふ之を

度れ。

● 悅に同じ ● 詩經小雅巧言篇の詩 ● 人の心を推しはかること ● 夫子(孟子をいふ)の如き人の事なり  
 ● 感則の貌 ● 王道に合するなり ● 復は日なり ● 一鈞は三十斤にして百鈞とは至重舉げ難きなり  
 ● 毛は秋に至りて末銳に小にして見え難きなり ● 車に載せたる薪也、大にして見易きものの例なり  
 ● 爲せば出来ぬ事をせぬのである、するだけの能力がないと云ふのではない ● 支那御承知なさいませうか ● 爲せば出来ぬ事をせぬのである、するだけの能力がないと云ふ朱注にては草木の五穀の一、寔妻の剛境に在り ● 齊の近海の海邊をいふ ● 枝は肢也、按摩をするを云ふ ● 雜作も枝を折るとす ● 自分の老者を敬し引き及ぼして他人の老者を敬す ● 幼として愛するなり ● 雜作もなく治められる ● 詩經大雅思齊篇の詩 ● 儀範を閭門に施し以て兄弟に至り、又此道を以て家邦の人に接す ● 其の意味は ● 寔妻兄弟を待する心 ● 推飯 ● 秤のかりなり ● 物尺なり ● 心を量る事最も緊要なりと、或は心を量る事困難なりと其他説あり

超<sup>二</sup>北<sup>一</sup>海<sup>二</sup>語<sup>一</sup>人<sup>二</sup>曰<sup>一</sup>我<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>是<sup>二</sup>誠<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>也<sup>二</sup>爲<sup>一</sup>長<sup>二</sup>者<sup>一</sup>折<sup>レ</sup>枝<sup>二</sup>語<sup>一</sup>人<sup>二</sup>曰<sup>一</sup>我<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>是<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>爲<sup>一</sup>也<sup>二</sup>非<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>一</sup>也<sup>二</sup>故<sup>レ</sup>王<sup>一</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>王<sup>二</sup>非<sup>レ</sup>挾<sup>一</sup>太<sup>二</sup>山<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>超<sup>二</sup>北<sup>一</sup>海<sup>二</sup>之<sup>一</sup>類<sup>一</sup>也<sup>二</sup>王<sup>一</sup>之<sup>一</sup>不<sup>レ</sup>王<sup>二</sup>是<sup>レ</sup>折<sup>レ</sup>枝<sup>二</sup>之<sup>一</sup>類<sup>一</sup>也<sup>二</sup>老<sup>一</sup>吾<sup>レ</sup>老<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>一</sup>人<sup>二</sup>之<sup>一</sup>老<sup>一</sup>幼<sup>二</sup>吾<sup>レ</sup>幼<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>一</sup>人<sup>二</sup>之<sup>一</sup>幼<sup>一</sup>天<sup>二</sup>下<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>運<sup>二</sup>於<sup>一</sup>掌<sup>二</sup>詩<sup>一</sup>云<sup>二</sup>刑<sup>一</sup>于<sup>二</sup>寡<sup>一</sup>妻<sup>二</sup>至<sup>一</sup>于<sup>二</sup>兄<sup>一</sup>弟<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>御<sup>一</sup>于<sup>二</sup>家<sup>一</sup>邦<sup>二</sup>言<sup>一</sup>舉<sup>レ</sup>斯<sup>二</sup>心<sup>一</sup>加<sup>二</sup>諸<sup>一</sup>彼<sup>二</sup>而<sup>一</sup>已<sup>二</sup>故<sup>レ</sup>推<sup>レ</sup>恩<sup>二</sup>足<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>保<sup>二</sup>四<sup>一</sup>海<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>推<sup>レ</sup>恩<sup>二</sup>無<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>保<sup>二</sup>妻<sup>一</sup>子<sup>二</sup>古<sup>一</sup>之<sup>二</sup>人<sup>一</sup>所<sup>二</sup>以<sup>レ</sup>大<sup>一</sup>過<sup>レ</sup>人<sup>二</sup>者<sup>一</sup>無<sup>レ</sup>他<sup>二</sup>焉<sup>一</sup>善<sup>二</sup>推<sup>一</sup>其<sup>二</sup>所<sup>一</sup>爲<sup>二</sup>而<sup>一</sup>已<sup>二</sup>矣<sup>一</sup>今<sup>レ</sup>恩<sup>二</sup>足<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>及<sup>一</sup>禽<sup>二</sup>獸<sup>一</sup>而<sup>レ</sup>功<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>至<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>百<sup>二</sup>姓<sup>一</sup>者<sup>二</sup>獨<sup>一</sup>何<sup>レ</sup>與<sup>二</sup>然<sup>一</sup>後<sup>二</sup>知<sup>一</sup>輕<sup>二</sup>重<sup>一</sup>度<sup>二</sup>然<sup>一</sup>後<sup>二</sup>知<sup>一</sup>長<sup>二</sup>短<sup>一</sup>物<sup>二</sup>皆<sup>一</sup>然<sup>二</sup>心<sup>一</sup>爲<sup>レ</sup>甚<sup>二</sup>王<sup>一</sup>請<sup>レ</sup>度<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>

抑々王甲兵を興し、士臣を危くし、怨を諸侯に構へ、然る後、心に快きか。王曰く、否、吾何ぞ是を快しとせん。將に以て吾が大いに欲する所を求めんとす

快於心與。王曰。否。吾何快於是。將以求三晉所大欲也。曰。王之所大欲。可得聞與。王笑而不言。曰。爲肥甘不也。足於口與。輕煖不足於體與。抑爲采色不足視於目與。聲音不足聽於耳與。便嬖不足使令於前與。王之諸臣。皆足以供之。而王豈爲是哉。曰。否。吾不爲是也。

るなり。曰く、王の大きいに欲する所は、聞くを得べきか。王笑ひて言はず。曰く、肥甘の口に足らざるが爲めか、輕煖體に足らざるか、抑々采色目に視るに足らざるが爲めか、聲音耳に聽くに足らざるか、便嬖前に使令するに足らざるか、王の諸臣皆以て之を供するに足れり。而して王豈に是が爲ならんや。曰く、否、吾是れが爲めならざるなり。曰く、然らば則ち王の大きいに欲する所知る可きのみ。土地を辟き、秦楚を朝し、中國に莅みて四夷を撫せんと欲するなり。若く爲す所を以て、若く欲する所を求むるは、猶ほ木に緣りて魚を求むるがごときなり。王曰く、是の若く其れ甚しきか。曰く、殆んど焉より甚しき有り。木に緣りて魚を求むるは、魚を得ずと雖も、後災なし、若く爲す所を以て、若く欲する所を求めば、心力を盡して、之を爲すも、後必ず災あらん。曰く、聞くを得べきか。曰く、鄰人と楚人と戦へば、則ち王以て孰れか勝と爲す。曰く、楚人勝たん。曰く、然らば則ち小は固より以て大に敵す可からず。寡は固より

曰。然則王之所欲大欲可知也。已。欲辟土地朝秦楚莅中國而撫四夷也。以若所爲。求若所欲。猶緣木而求魚也。王曰。若是其甚與。曰。殆有甚焉。緣木求魚。雖不得魚。無後災。以若所爲。求若所欲。則小固不可敵大。寡固不可敵強。海內之地。方千里者。九齊集有其一。以一服八。何以異於鄰敵。楚哉。蓋亦反其本一矣。

以て衆に敵す可からず。弱は固より以て強に敵す可からず。海内の地、方千里なる者九、齊は集めて其一を有つ。一を以て八を服するは、何を以て鄰の楚に敵するに異ならんや。蓋ぞ亦其本に反らざる。

● 抑は發語の辭なり、甲兵はよるひと武命、即ち取争のこゝ ● 自ら好んで作り出すの義 ● 大變に欲求し居る所、即ち土地なり、然かも王は殊更に輒田に云ひしなり ● 肥へて甘き食物 ● 軽くして煖かなる衣服にて船形鐵鑊の類をり ● 色彩ある立派なるもの、采は彩也 ● 龍位なり ● 開闢にするなり ● 朝は來朝せしむるなり ● 被は臨むなり ● 目的に對する手段の甚だ矛盾して船を得難きを云へるなり ● 中上ぎた比喩よりもまだ甚しいと申しませう ● 後日の災難 ● 領地を集めても其の一にしか相當しません ● 蓋は蓋に通ず ● 根本即ち王道の方法を云ふ

孟子 梁惠王上

今王發政施仁。使天下仕者皆欲立於仁。王曰。善。臣請爲之。曰。然則小固不可敵大。寡固不可敵強。海內之地。方千里者。九齊集有其一。以一服八。何以異於鄰敵。楚哉。蓋亦反其本一矣。

今王政を發し仁を施さば、天下の仕ふる者をして皆王の朝に立たんと欲せしめ、耕す者をして皆王の野に耕さんと欲せしめ、商賈をして皆王の市に藏めんと

王之朝。耕者皆欲耕於王之野。商賈皆欲藏於王之市。行旅皆欲出於王之塗。天下之欲疾其君者。皆欲赴愬於王。其若之。孰能禦之。王曰。吾嘗不能進於矣。願夫子輔吾志。明以教我。我雖不敏。請嘗試之。曰。無恆產。則無恆心。無恆心。則無土。無土。則無財。無財。則無義。無義。則民無

欲せしめ、行旅をして皆王の塗に出でんと欲せしめ、天下の其君を疾まん欲する者をして、皆王に赴き愬へんと欲せしむ。其れ是の如くば、孰れか能く之を禦めん。王曰く、吾れ憐くして是に進むこと能はず。願くは夫子吾が志を輔け、明かに以て我を教へよ。我れ不敏と雖も、請ふ之を嘗試せん。曰く、恆産無くして恆心有る者は、惟士のみ能くするを爲す。民の若きは則ち恆産無ければ、因て恆心無し、苟も恆心無ければ、放辟邪侈、爲さざる無きのみ。罪に陥るに及び、然る後從うて之を刑す。是れ民を罔するなり。焉ぞ仁人位に在る有り、民を罔するを而も爲す可けんや。是の故に明君は民の産を制し、必ず仰いで以て父母に事ふるに足り、俯して以て妻子を畜ふに足り、樂歲には終身飽き、凶年には死亡に免れしめ、然る後騙りて善に之かしまむ。故に民の之に従ふや輕し。今や民の産を制し、仰いで以て父母に事ふるに足らず、俯して以て妻子を畜ふに足らず。樂歲にも終身苦み、凶年には死亡に免れず。此れ惟死を救うて瞻らざるを恐る。奚ぞ禮

恆心、苟無恆心、放辟邪侈、無不爲已。及陷於罪、然後從而刑之。是罔民也。焉有仁人在位、罔民而可爲也。民之故明君制之。使民之產。必使仰足以事父母。俯足以畜妻子。樂歲終身飽。凶年免於死亡。然後驅而之善。故民之從之也輕。今也制民之產。仰不足。以事父母。俯不足。以畜妻子。樂歲終身苦。凶年不免於死亡。此惟救死而恐不贖。奚暇治

儀を治むるに暇あらんや。王之行はんと欲せば、則ち蓋そ其本に反へらざる。五畝の宅、之に樹うるに桑を以てせば、五十の者以て帛を衣る可し。雞豚狗彘の畜、其時を失ふ無くば、七十の者以て肉を食ふ可し。百畝の田、其時を奪ふ勿くば、八口の家以て飢うる無かる可し。庠序の教を謹み、之に申ぬるに孝悌の義を以てせば、頒白の者道路に負載せず。老者は帛を衣肉を食ひ、黎民飢ゑず寒えず。然り而して王たらざる者は未だ之れ有らざるなり。

① 政令を頒發するなり ② 仁は慈愛の徳 ③ 町賦 ④ 旅人 ⑤ 塗は道路なり ⑥ 疾患、一説に疫(ヤ)ましめん欲すと訓じて君を苦しむる意とす ⑦ 天下の實業の皆王に歸するをいふ ⑧ 訴ふるなり ⑨ 俯は皆と同じ ⑩ 純物 ⑪ こゝろむるなり ⑫ 一定の産業 ⑬ 則字は「どうか」といふにそれは云々といふが如き意味含ひなり ⑭ 不正の行爲をなし、金錢を徒消するをいふ ⑮ 罔は網に同じ、無網を張つて不意にその中に追ひ込めり ⑯ 仰俯の二字にて長上及び目下に對する義を示す ⑰ 豐年 ⑱ 輕易なり ⑲ 足るなり ⑳ 王者の仕方即ち古の制度 ㉑ 五畝の宅云々は民の産を制するの法なり、井田の法は孟子の高唱せし所にして既に同文出でたり、こゝは王道の根本にして是を前文の甲兵を興し怨を誘はば構ふと兩面對し來れば王道と斷道との利害亦自ら分明なる

禮義一哉。王欲行之。則盍反其本矣。五畝之宅。樹之以桑。五十者可衣。帛矣。雞豚狗彘之畜。無失其時。七十者可食肉矣。百畝之田。勿奪其時。八口之家。可以無飢矣。謹庠序之教。申之以孝悌之義。頭白者不負戴於道路矣。老者衣帛食肉。黎民不飢不寒。然而不王者。未之有也。

卷之二

梁惠王章句下

莊暴見孟子。曰。暴見於王。王語暴以好樂。暴未有以對也。曰。好樂何如。孟子曰。王之好樂甚。則齊國其庶幾乎他日見於王。曰。王嘗語莊子以好樂。有諸。王變乎色。曰。寡人

莊暴、孟子に見えて曰く、暴、王に見ゆ。王、暴に語るに樂を好むを以てす。暴未だ以て對ふる有らざるなり。曰く、樂を好む何如。孟子曰く、王の樂を好むと甚しければ、則ち齊國其れ庶幾からんか。他日王に見えて、曰く、王嘗て莊子に語るに樂を好むを以てす。諸れ有るか。王、色を變じて、曰く、寡人能く先王の樂を好むに非ざるなり。直世俗の樂を好むのみ。曰く、王の樂を好むこと甚しければ、則ち齊國其れ庶幾からんか。今の樂は由ほ古の樂のごときなり。曰く、聞くを得可きか。曰く、獨り樂して樂むと、人と樂して樂むと、孰れか樂しき。曰く、人と與にするに若かず。曰く、少と與に樂して樂むと、衆と與



非能好先王之樂也。直好世俗之樂耳。曰。王之好樂甚。則齊其庶幾乎。今之樂由古之樂也。曰。可得聞與。曰。獨樂樂。與人樂樂。孰樂。曰。不若與人。曰。與少樂樂。與衆樂樂。孰樂。曰。不若與衆。臣請爲王言樂。今王鼓樂於此。百姓聞之。鐘鼓之聲。管籥之音。舉疾首蹙頰。

もに樂して樂むと、孰れか樂しき。曰く、衆と與にするに若かざるなり。臣請ふ王の爲めに樂を言はん。今王此に鼓樂せん。百姓王の鐘鼓の聲、管籥の音を聞き、衆な首を疾ましめ頰を蹙めて相告けて曰く、吾が王の鼓樂を好む、夫れ何ぞ我をして此極に至らしむるや。父子相見ず、兄弟妻子離散すと。今王此に田獵せん。百姓王の車馬の音を聞き、羽旄の美を見て、衆な首を疾ましめ頰を蹙めて相告けて曰く、吾が王の田獵を好む、夫れ何ぞ我をして此極に至らしむるや。父子相見ず、兄弟妻子離散すと。此れ他無し。民と與に樂を同じくせざるなり。今王此に鼓樂せん。百姓王の鐘鼓の聲、管籥の音を聞き、衆な欣欣然として喜色有り。而して相告けて曰く、吾が王庶幾くは疾病無きか、何ぞ以て能く鼓樂するや。今王此に田獵せん。百姓王の車馬の音を聞き、羽旄の美を見て、衆な欣欣然として喜色有り。而して相告けて曰く、吾が王庶幾くは疾病無きか、何を以て能く田獵するや。此れ他なし。民と與に樂を同じくすれ

ばなり。今王百姓と與に樂みを同じくせば、則ち王たらん。

① 莊暴は齊の臣なり ② 音樂なり ③ 治まるに近からんの義 ④ 莊暴の事 ⑤ 寡人とは王侯自稱の謙辭 ⑥ 舜の韶、周武王の大武の如き先王の定めし樂 ⑦ 世俗に流行する樂、所謂節樂なり ⑧ 由は猶に同じ、古今の音樂其性質は異なれども民と娛樂を同じくせば其價值は同一なり ⑨ 少は少人數なり ⑩ 音樂なり、齊樂を爲すに樂器を鼓するより云ふ ⑪ 鐘鼓管籥は皆樂器なり、管は三孔の笛、籥は六孔の笛なり ⑫ 樂は皆なり ⑬ 頰は頰なり ⑭ 蹙は聚なり ⑮ 此愁痛の極に至らしめたるかとの怨言を出すなり ⑯ 窮蹙なり ⑰ 羽旄とは鳥の羽のつける旗 ⑱ 彩ぶ状 ⑲ 王の斯く鼓樂せるは疾病なき故ならんと思はする意なり

而相告曰。吾王之好鼓樂。夫何使我至於此極也。父子不相見。兄弟妻子離散。今王田獵於此。百姓聞之。車馬之音。見羽旄之美。舉疾首蹙頰。而相告曰。吾王之好田獵。夫何使我至於此極也。父子不相見。兄弟妻子離散。今王鼓樂於此。百姓聞之。鐘鼓之聲。管籥之音。舉疾首蹙頰。而相告曰。吾王之好鼓樂也。今王田獵於此。百姓聞之。車馬之音。見羽旄之美。舉欣欣然有喜色。而相告曰。吾王庶幾無疾病與。何以能鼓樂也。今王田獵於此。百姓聞之。車馬之音。見羽旄之美。舉欣欣然有喜色。而相告曰。吾王庶幾無疾病與。何以能田獵也。此無他與。民同樂也。今王與百姓同樂。則王矣。

齊の宣王問うて曰く、文王の囿は、方七十里と。諸れ有るか。孟子對へて曰く、傳に於て之れ有り。曰く、是の若く其れ大なるか。曰く、民は猶ほ以て小と爲すなり。曰く、寡人の囿は、方四十里、民は猶ほ以て大と爲すは、何ぞや。曰く、

傳有之。曰若其大乎。曰民猶以爲小也。曰寡人之圃方四十里。民猶以爲大。何也。曰文王之圃方七十里。鄒莒者往焉。雉兔者往焉。與民同之。民以爲小。不亦宜乎。臣始至於境。問國之大禁。然後敢入。臣聞郊關之內有圍方四十里。殺其麋鹿一者如殺人之罪。則是方四十

文王の圃は、方七十里、鄒莒の者往き、雉兔の者往く、民と與に之を同じくす。民以て小と爲すも亦宜ならずや。臣始めて境に至り、國の大禁を問うて、然る後敢へて入る。臣聞く、郊關の内に、圍方四十里あり。其麋鹿を殺す者は、人を殺すの罪の如しと。則ち是れ方四十里にして、（一） 阱を國中に爲るなり。民以て大と爲すも、亦宜ならずや。

● 圃は動物を放牧せる所にて游覽狩獵の所なり、周の文王の圃をいふ ● 雉は傳文なり ● 鄒は莒、莒は鄒なり、牧童と樵夫とをいふ。鄒の字朱註には晉、シヨとセリ ● 雉兔の者とは樵夫なり ● 罽に國に入りて而して禁を問ふとあり、こゝに所謂國とは野國なり ● 郊關とは野の四境の郊に皆開有り、其國の内を郊關の内といふ ● 麋は鹿に似て脚より大なり ● 獸類を捕獲するに陷阱を造る如く人民を罪する處所を作る

齊宣王問曰。交鄰國有道乎。孟子對曰。

齊の宣王問うて曰く、隣國に交るに道あるか。孟子對へて曰く、有り。惟仁者のみ能く大を以て小に事ふるを爲す。是の故に湯は葛に事へ、文王は混夷に事

有。惟仁者爲能。以大事小。是故湯事葛。文王事昆夷。惟智者爲能。以小事大。故大王事纘。纘句踐事吳。以大事小者、樂天者也。以小事大者、畏天者也。樂天者、保其國。詩云。畏天之威。手時保之。王曰。大哉言矣。寡人有疾。寡人好勇。對曰。王請無好小。

ふ。惟智者のみ能く小を以て大に事ふるを爲す。故に大王は纘纘に事へ、句踐は吳に事ふ。大を以て小に事ふる者は、天を樂む者なり。小を以て大に事ふる者は、天を畏る者なり。天を樂む者は天下を保つ。天を畏る者は其國を保つ。詩に云ふ、天の威を畏れ、時に于いて之を保つ。王曰く、大なるかな言、寡人疾有り、寡人勇を好む。對へて曰く、王請ふ小勇を好む無れ。夫の劍を撫で疾み視て、曰く、彼れ惡んぞ敢て我に當らんやと、此れ匹夫の勇にして、一人に敵する者なり。王請ふ之を大にせよ。詩に云ふ、王赫として斯に怒り、爰に其旅を整へ、以て莒に狙くを過め、以て周の祐を篤くし、以て天下に對す。此れ文王の勇なり。文王一たび怒りて天下の民を安んず。書に曰く、天、下民を降し、之が君と作し、之が師と作す、惟れ其の上帝を助くるを曰うて、之を四方に施す。罪有る罪無き惟れ我在り。天下曷ぞ敢へて厥の志を越す有らん。一人天下に衡行するは、武王之を恥づ。此れ武王の勇なり。而して武王亦一たび怒りて而して天下の民を

勇。夫撫劔疾視曰。彼惡敢當我哉。此匹夫之勇。敵一人者也。王詩大之。詩云。王赫斯怒。爰整其旅。以遏徂莠。以對天下。此文王之勇也。文王一怒而安天下之民。書曰。天降下民。作之君。作之師。惟曰。其助上帝。寵之四方。有罪無罪。惟我在。天下曷敢有越厥志。一人衡行於天下。武王恥之。此武王之勇也。而武王亦一怒而安天下之民。今王亦一怒而安天下之民。民惟恐王之不好勇也。

安んず。今王亦一たび怒りて而うして天下の民を安んぜば、民惟王の勇を好まざるを恐るゝなり。

● 彼我の分を忘れて専ら天の徳を樂むものなり ● 殷の湯王なり即ち仁者にして大を以て能く小に事へたるものなり ● 國名 ● 西戎の國名 ● 能く自己の分を守りて天の威を畏るゝものなり ● 文土の祖父、古公亶父をいふ ● 北狄にして而も強なるものなり ● 趙王句踐なり ● 天命 ● 詩經周頌我將篇の詩 ● 賢者は時を察りて天を畏る故に能く其國を保つ即ち大王句踐の如きは是れなりとの意 ● 以下王の自ら短とする所によりて之を誦頌啓發し以て道に入らしめんとす孟子得意の論法なり ● つまらぬ男の頭 ● 詩經大雅皇矣篇の詩 ● 言は文王赫然として斯に怒り是に於て其師旅を整へ以て往きて莠を伐つ者を遏止し以て周家の福を廣くして天下の仰望に當ふ之れ文王の勇なり ● 福なり ● 書經周書秦誓篇、但し文に少異あり意は天が世の人民を降生するや、其拔萃なるものを選んで之が君師となす、天は其君師となりたるものを能く天帝を助け民を安んずと云ひて特待し又尊寵す、其君主たるものは凡そ國民の罪あるも罪なきも予此にありて賢師の大權を握り居れば汝等國民は決して免任を恐れて其志氣を失墜することなかるべしと民に告ぐと云ふ義なり ● 龍は尊寵なり ● 龍は墜なり、かすと訓ず ● 一人とは殷の紂王を指す ● 横行に同じ

齊宣王見孟子於雪宮。王曰。賢者亦有此樂乎。孟子對曰。有。人不得則非其上矣。不得而非其上者非也。爲民上而不與民同樂者亦非也。樂民之樂者民亦樂之。憂民之憂者民亦憂之。愛民以天下。愛以天下。然而不王者。未之有也。昔者齊景公問於晏子曰。

齊の宣王、孟子を雪宮に見る。王曰く、賢者も亦此樂み有るか。孟子對へて曰く、有り、人得ざれば則ち其上を非る。得ずして而して其上を非る者は非なり。民の上と爲り而して民と樂みを同じくせざる者も亦非なり。民の樂みを樂む者は、民も亦其樂みを樂む。民の憂を憂ふる者は、民も亦其憂を憂ふ。樂むに天下を以てし、憂ふるに天下を以てす。然り而うして王たらざる者は、未だ之れ有らざるなり。昔者齊の景公、晏子に問うて、曰く、吾轉附朝儀を觀て、海に遼ひ而うして南琅邪に放らんと欲す。吾何を脩めて而うして以て先王の觀に比す可き。晏子對へて曰く、善きかな問や。天子諸侯に適くを巡狩と曰ふ。巡狩とは守る所を巡るなり。諸侯天子に朝するを述職と曰ふ。述職とは職とする所を述ぶるなり。事に非る者なし。春は耕を省みて而うして足らざるを補ひ、秋は斂るを省みて而うして給らざるを助く。夏の諺に曰く、吾が王遊ばずんば、吾れ何を以て休せん。吾が王豫せずんば、吾れ何を以て助からん。一遊

吾欲觀於朝。而南放于瑗。邪。吾何脩而可。以比於先王。觀也。晏子對曰。善哉。問也。天子適諸侯。曰巡。狩。巡守也。諸侯朝於天子。曰述。職。述職者。述所職也。無非事者。春省耕而補不足。秋省斂而助不給。夏諫曰。吾王不遊。吾何以休。吾王不豫。

一豫、諸侯の度と爲ると。今や然らず。師行いて而して糧食す。飢者は食はず、勞者は息はず。晴暘として胥ひ讒り、民乃ち愿を作す。命を方し民を虐す。飲食流るゝが如く、流連荒亡、諸侯の憂となる。流に從ひ下りて而して反るを忘る、之を流と謂ふ。流に從ひ上り而して反るを忘る、之を連と謂ふ。獸に從ひ厭くなき、之を荒と謂ふ。酒を樂み厭くなき、之を亡と謂ふ。先王は流連の樂荒亡の行なし。惟君の行ふ所なり。景公説び、大いに國に戒め、出でて郊に舍し、是に於て始めて興發し足らざるを補ふ。大師を召して曰く、我が爲めに君臣相説ぶの樂を作れと。蓋し徵招・角招是れなり。其詩に曰く、君を畜する何ぞ尤めん。君を畜するとは君を好するなり。

● 離宮の名なり ● 王は宮中に苑囿壑池以下の樂多きを以て此樂と稱せし也 ● 上文を承けていふ民は樂を得ざる者は其君を非る ● 然れども民の上たる君となりて ● 其は君の代名詞なり ● 野の大夫、名は嬰 ● 轉附は今の山東省の芝罘なり、胡傅は成山即ち召石なり、共に野の境内にあり ● 野の東南境に在る地名 ● 放は至るなり ● 觀は遊觀なり、蓋し先王が地方の人民に歡迎せられたるが如くに美はしき遊觀に比すべきの意な

吾何以助。一遊一豫爲二語。然。師行而糧食。飢者弗食。勞者弗息。明謂胥讒。民乃作慝。方命虐民。飲食如流。流連荒亡。爲二諸侯憂。從流而下而忘反。謂之流。從流上而忘反。謂之連。從獸無厭。謂之荒。樂酒無厭。謂之亡。先王無流連之樂。荒亡之行。惟君所行也。景公説。大戒於國。出舍於郊。於是始興發。補不足。舊大師曰。爲我作二君臣相説之樂。蓋徵招角招是也。其詩曰。畜君何尤。畜君者。好君也。

古の儀式制度 ● 同上 ● 事無くして空しく行くにあらざるなり ● 物質の不足 ● 斂は收獲なり ● 勞力の不給 ● 休息 ● 豫は樂なり ● 諸侯も天子に法りて春秋に其境内を巡回するをいふ ● 人君師を興し軍を行り其の上に糧食を徵發す ● 民をして糧食を運輸せしめ、民の飢えたる者も飽満するを得ず、勞したる者も休息する得ず ● 官員は同僚互に目を働いて相讒る ● 其結果人民心中に惡事を爲すに至る ● 方は君命を放棄するなり、朱註にては方逆なり、君命にさからふなりと ● 其意下文に明なり ● 先王の行は惟君の當に行ふべきところなりとの義、朱註にては先王の行を行ふも又或は流連荒亡するも御心次第ですと解す ● 景公の爲さんと欲す之意を國中に告げしむ ● 將に身親も賑給せんとするにより民の困窮を憂ふるを示すなり ● 惠政を興し米庫を開く ● 樂師なり ● 君臣とは已と晏子となり ● 作る所の樂章の名なり、招は詔を通ず、詔は射の樂なり、大師其聲に効ひ一樂を作る、其調を徵と角とにせり、故に徵招・角招と云ふ ● 畜は養なり ● 之れは孟子が上の君を畜するの語句を解釋せるなり

齊宣王問曰。人皆謂我毀明堂。毀諸已。孟子對曰。曰。夫れ明堂は、王者の堂なり。王、王政を行はんと欲せば、則ち齊の宣王問うて、曰く、人皆我に明堂を毀てと謂ふ。諸を毀たんか、已めんか。孟子對へて曰く、夫れ明堂は、王者の堂なり。王、王政を行はんと欲せば、則ち





以爰方啓行。王如好貨與百姓同之。於王何有王曰。

寡人有疾。寡人好色。對曰。昔者大王好色。愛厥妃。詩云。古公亶父。來朝走馬。率四水。濟于岐下。爰及姜女。聿來胥宇。當是時也。內無怨女。外無曠夫。王如好色。與百姓同之。於王何有。

【註】字は周なり、齊は相なり、蓋し此詩は周の先祖古公亶父即ち大王が戎狄の難を避けて西水の流に沿ひて岐山下に至り、其妃と共に居るべき所を見たり、孟子は此詩を以て大王色を好むとせり。【註】夫を得ざる女。【註】妻を得ざる男なり。

孟子謂齊宣王曰。王之臣有託其妻子於其友而之楚遊者。比其反也。則凍餒其妻子。則如之何。王曰。棄之。曰。士師不能治士。則如之何。王曰。已之。曰。四境之內。不治。則如之何。王顧左右而言他。

孟子齊の宣王に謂ひて曰く、王の臣、其妻子を其友に託して而して楚に之き遊ぶ者あらん。其の反るに比びて、則ち其妻子を凍餓せしめば、則ち之を如何せん。王曰く、之を棄てん。曰く、士師士を治むる能はずんば、則ち之を如何せん。王曰く、之を已めん。曰く、四境の内治まらずんば、則ち之を如何せん。王左右を顧みて他を言ふ。

● 比は及ぶなり ● 其の友道に反するを以て棄てせんの意 ● 士師は獄官更なり ● 免官せしめん ● 王顧みて答ふる無く他事を言ふ

孟子見齊宣王曰。所謂故國者。非謂有喬木之謂也。有世臣之謂也。王無親臣矣。昔者所進。今日不知其亡也。王曰。吾何以識其不才而舍之。曰。國君進賢如不得已。將使卑論。疏論。或可不慎與。左右皆曰。賢未可也。諸大夫皆曰。賢未可也。國人皆曰。賢。然後察之。曰。實。然後察之。

孟子齊の宣王に見えて曰く、所謂故國とは、喬木あるの謂を謂ふに非ざるなり。世臣あるの謂なり。王は親臣無し。昔者進むる所、今日は其亡を知らざるなり。王曰く、吾何を以て其不才を識りて而して之を捨てん。曰く、國君賢を進むる已むを得ざるが如くす。將に卑をして尊に踰え疏をして戚に踰えしめんとす、慎まざる可けんや。左右皆曰ふ、賢と。未だ可ならざるなり。諸大夫皆曰ふ、賢と。未だ可ならざるなり。國人皆曰く、賢と。然る後之を察し、賢なるを見て、然る後之を用ふ。左右皆曰ふ、不可と。聽く勿れ。諸大夫皆曰ふ、不可と。聽く勿れ。國人皆曰ふ、不可と。然る後之を察し、不可なるを見て、然る後之を去る。左右皆曰ふ、殺す可しと。聽く勿れ。諸大夫皆曰ふ、殺す可しと。聽く勿れ。國人皆曰ふ、殺す可しと。然る後之を察し、殺す可きを見て、然る後之を殺す。故に曰ふ、國人之を殺すと。此の如くして、然る後以て民の父母たる可し。

● 故は舊なり ● 高き木 ● 世臣とは累世傳徳の臣、禮代の臣 ● 親任すべき臣 ● 昔日進むところの



人彫琢之。至三於治國家。則曰。姑舍女。所學而從我。則何以異於教王。人彫琢玉一哉。

疾に從へと云ふも善道に之を肯んぜんやとの心底なり

齊人伐燕。勝之。宣王問曰。或謂寡人勿取之。以萬乘之國。伐五旬而學之。人力不取。於此。不取必有天殃。取之何如。孟子對曰。取之而燕民悅。則取之古之人有行之者。武王是也。取之而

齊人燕を伐ち之に勝つ。宣王問うて曰く、或ひとは寡人に取らざるべしと謂ふ。或ひとは寡人に之を取れと謂ふ。萬乗の國を以て、萬乗の國を伐つ、五旬にして而して之を擧ぐ。人力は此に至らず。取らざるは必ず天殃有らん。之を取る何如。孟子對へて曰く、之を取りて而して燕の民悦ばば、則ち之を取れ。古の人之を行ふ者有り。武王是れなり。之を取りて而して燕の民悦ばざるば、則ち取る勿れ。古の人之を行ふ者あり。文王是れなり。萬乗の國を以て、萬乗の國を伐つ、簞食壺漿して、以て王師を迎ふるは、豈に他あらんや、水火を避けんとすればなり、水の益々深きが如く、火の益々熱きが如くならば、亦運らんのみ。

取て自分の領地にする 五十日 破る 天の與へし所なりとの意なり 天のとがめなり 之を取り領有せんと思ひますが、先生の御考へは如何ですか 周の武王が紂の地を取りて庶人に喜ばれしを

燕民不悅。則勿取。古之人有行之者。文王是也。以萬乘之國。伐萬乘之國。簞食壺漿。以迎王師。豈有他哉。避水火一也。如水益深。如火益熱。亦運而已矣。

いふ ① 周の文王が勢力を有しながら殷周人の悦ばざるを以て終生紂王に事へしをいふ ② 簞食は飯を竹器に入れ壺漿は飲物を飲器に入るゝなり ③ 別段他に深い理由があるのではありません只々 ④ 水火の苦みを避けんとするが故なり ⑤ 然るに之に反して民をして反りて苦しましむるならば民は轉じて野を去り他に歸せんのみ益を取るも益なしとの意 ⑥ 若し民が益々苦む如きに至らば民人は新しき所の領有地より運行して他の土地に行き去るに定まつて居ますと也

齊人伐燕。取之。諸侯將謀救燕。宣王曰。寡人者。何以待之。孟子對曰。臣聞七十里。爲政於天下者。湯是也。未聞下以千里

齊人燕を伐ち之を取らんとす。諸侯將に燕を救ふことを謀らんとす。宣王曰く、諸侯寡人を伐つを謀る者多し。何を以て之を待たん。孟子對へて曰く、臣聞く、七十里にして、政を天下に爲す者は、湯是れなり。未だ千里を以て人を畏るゝ者を聞かざるなり。書に曰く、湯一めて征する葛より始む。天下之を信ず。東面して征すれば、西夷怨み、南面して征すれば、北狄怨む。曰く、奚爲れぞ我を後にすと。民之を望むこと大旱の雲霓を望むが若きなり。市に歸する者止まず、耕す者變ぜ



畏人者也。書曰：湯一征自葛始。天下信之。東面而征，西夷怨；南面而征，北狄怨。曰：奚爲後我？民望之。若大旱之望雲霓也。歸市者不止，耕者不墾。誅其君而弔其民，若時雨降，民大悅。書曰：後我。后來其蘇。今燕虐其民，王往而征之。民以爲將拯己於水火之中也。

す、其君を誅し、而して其民を弔し、時雨の降るが若く、民大いに悦ぶ。書に曰く、我が后を従つ。后來らば其れ蘇せんと。今燕其民を虐す。王往きて之を征す。民以て將に己を水火の中に拯はんとすと爲すや、簞食壺漿して以て王師を迎へん。若し其父兄を殺し、其子弟を係累し、其宗廟を毀ら、其重器を遷さば、之を如何ぞ其れ可ならん。天下固より齊の強を畏るゝなり。今又地を倍して而して仁政を行はずんば、是れ天下の兵を動かさん。王速に令を出し、其旆を反し、其重器を止め、燕の家謀り、君を置きて而して後に之を去らば、則ち猶ほ止むに及ぶ可きなり。

● 殷の湯王 ● 暗に齊王を指すなり ● 書經商書仲虺之誥篇、但し文小異あり ● 一は初なり ● 國名 ● 信とは其志民を救ふにありて義をなすにあらざるを信ずるなり ● 覽は則なり ● 市に行きて營業する者は業を休まず ● 常の通りに仕業す ● 書經前文の續き ● 后は君なり ● 待つなり ● 嚴生するなり ● 前出 ● 縛結なり ● 重器は寶器なり ● 今又齊は燕の一倍の地を併有して仁政を行はずばの意なり ● 天下の諸國は齊を恐れ天下の兵を助して齊を伐たんとせん ● 旆は老人倪は小兒なり。加捕

單食壺漿。以迎王師。若殺其父兄。係累其子弟。毀其宗廟。遷其重器。如之何。其可也。天下固畏齊之強也。今又倍地而不行仁政。是動天下之兵也。王速出令。反其旆。倪止其重器。謀於燕衆。置君而後去之。則猶可及止也。

● 國の老弱 ● 運輸を止め ● 蕃國を去る意 ● 今日でもなほ諸侯の兵を止めるの間に合ふ

鄭與魯問。穆公問曰。吾有三。人而民莫之。死也。誅之。則不可。勝誅。不誅。則疾。視其。長上之。死。而不。救。如之。何。則。可也。孟。子對曰。凶年。饑。歲。君之。民。老。弱。轉。乎。溝。

鄭、魯と問ふ。穆公問うて曰く、吾が有司死する者三十三人、而して民之に死する莫きなり。之を誅せば勝て誅す可からず。誅せざれば則ち其長上にの死を疾視して、而して救はず。之を如何せば則ち可ならん。孟子對へて曰く、凶年饑歲には、君の民、老弱溝壑に轉じ、壯者は散じて四方に之く者、幾千人。而して君の倉廩は實ち、府庫は充つ。有司以て告ぐる莫し。是れ上慢にして而して下を殘するなり。曾子曰く、之を戒めよ、之を戒めよ、爾に出づる者は爾に反るなり。夫れ民今にして而して後之を反すを得たるなり。君尤むること無れ、君仁政を行はば、斯に民其上に親み、其長に死せん。

整。壯者散而之四方者。幾千人矣。而君之倉廩實。府庫充。有司莫以告。是上慢而殘下也。曾子曰。戒之戒之。出乎爾者反乎爾者也。夫民今而後得反之也。君無尤焉。君行仁政。斯民親其上。死其長也。

● 國は國なり。● 師の君なり。● 役人。● 賤せずして不問に附せんとすれば彼等が此の後の其長上の死を疾視し教はざるに至らん故に棄て置きし難きなり、如何なる罪に當すべきか。● 轉とは飢餓の極まるびまるんで死するなり。● 之は行なり。● 米庫。● 金庫。● 有司。● 慢は驕慢なるなり。● 積密。● 孔子の弟子、名は參。● 平日の有司の不親切を民が此場合に始めて返報するを得たるなり、有司にありては自分に出でたるものが自分に返りたる譯なれば民を鈍むるに及ばず。● 長上のためなり。

滕文公問曰。滕小國也。聞於齊楚。事齊乎。事楚乎。孟子對曰。是謀非吾所不能及也。無已。則有一焉。擊斯池也。築斯城也。與民守之。效

滕の文公問うて曰く、滕は小國なり。齊楚に聞す。齊に事へんか、楚に事へんか。孟子對へて曰く、是の謀は吾が能く及ぶ所に非ざるなり。已む無くんば則ち一あり。斯の池を擊ち、斯の城を築きて民と與に之を守り、死を效すも民去らざれば、則ち是れ爲す可きなり。

● 滕は國名。● 齊楚共に難き國なれば我は何回に事ふべきかを定める事が出来ぬ。● 一は一譯あるの意。● 危難に臨みて民去らざるは平日徳を以て民心を得たるの效なり、此には結果の方をいひて其原因を言外に示せるなり。● 徳を以てすれば小國ながら獨立が出来る。

死而民弗去。則是可爲也。

滕文公問曰。齊人將築薛。吾甚恐。如之何。則可。孟子對曰。昔者大王居邠。狄人侵之。去之岐山之下。居焉。非擇而取之。不得已也。苟爲善。後世子孫必有王者一矣。君子創業垂統。爲可繼也。若夫成功。則天也。君如彼何哉。強爲善而已矣。

滕の文公問うて曰く、齊人將に築かん。とす。吾甚だ恐る。之を如何にせば則ち可ならん。孟子對へて曰く、昔者大王邠に居る。狄人之を侵す。去りて岐山の下に之き居る。擇びて之を取るに非ず、已を得ざるなり。苟も善を爲さば、後世子孫、必ず王者有らん。君子業を創め統を垂る、繼く可きを爲す、夫の成功の若きは則ち天なり。君彼を如何せんや。強めて善を爲さんのみ。

● 薛は、滕の鄰國の名なり、齊其の地を取りて、城を築かん。とす。● 大王とは古公賈父のこと、邠は幽に同じ。● 仕方なしにする。● 人君を指す。● 基業を始むるなり。● 統緒を傳ふるなり。● 繼續すべからしむるなり。● 一統の功を成就する天命なり。● 君は彼の齊を如何にせらるべき不問に附すべしとの意なり。● 力めて善を行ふなり。

滕文公問曰。滕小國也。竭力以事大國。則不得免焉。如之何則可。孟子對曰。昔者大王居邠。狄人侵之。事之以皮幣。不得免焉。事之以犬馬。不得免焉。事之以珠玉。不得免焉。乃屬其耆老。而告之曰。狄人之所欲者。吾土地也。吾聞之也。君子不以天下其所養人者上害。

滕の文公問うて曰く、滕は小國なり。力を竭して以て大國に事ふとも、則ち免るゝを得ず、之を如何にせば則ち可ならん。孟子對へて曰く、昔者大王邠に居る。狄人之を侵す。之に事ふるに皮幣を以てすれども、免るゝを得ず。之に事ふるに犬馬を以てすれども、免るゝを得ず。乃ち其耆老を屬めて之に告げて曰く、狄人の欲する所の者は吾が土地なり、吾之を聞く、君子は其の人を養ふ所以の者を以て人を害せずと。二三子何ぞ君無きを患へん。我之を去らんとすと。邠を去り梁山を踰え、岐山の下に邑し、居る。邠人曰く、仁人なり、失ふ可からずと。之に従ふ者市に歸するが如し。或ひと曰く、世の守りなり。身の能く爲す所に非ざるなり。死を效すも去る勿れと。君請ふ斯の二者に擇べ。

● 骨を折りて ● 左様の次第なれば小國なれば侵辱を免るゝことを得ず ● 徒勞をまぬかれ得べきか ● 皮は、虎豹麋鹿の皮なり、幣は、絹帛なり ● 珠は海より出づる玉、玉は山より出づるを玉なり ● 年六十を

人。二三子何患乎。無君。我將去之。去邠。踰梁山。邑于岐山之下。居焉。邠人曰。仁者。吾土地也。吾聞之也。君子不以天下其所養人者上害。

人。不可失也。從之者如歸市。或曰。世守也。非三身之所能爲一也。效死勿去。君

雷といふ ● 密せ集むる也 ● 物を生じて人を養ふべきもの即ち土地なり ● 耆老を指す、汝等といはわが如し ● 邠を去らん ● 郡邑を替むるなり ● 代々守りて、失はぬなり ● 歸手にするなり ● 領土を捨てて人民を守るか、人民を捨て、領土を守るかの二者なり

魯平公將出。嬖人臧倉者請曰。他日君出則必命有司所之。今乘輿已駕矣。有司未知所之。敢請。公曰。將見孟子。曰。何哉。君所爲輕身以先於匹夫者。以爲賢。

魯の平公將に出でんとす。嬖人臧倉なる者請うて曰く、他日君出づれば、則ち必ず有司に之く所を命す。今乘輿已に駕せり。有司未だ之く所を知らず。敢て請ふ。公曰く、將に孟子を見んとすと。曰く、何ぞや、君身を軽くして以て匹夫に先だつを爲す所の者は、以て賢と爲すか。禮儀は賢者より出づ。而して孟子の後の喪は前の喪に踰ゆ。君見る無れ。公曰く、諾。樂正子入り見えて、曰く、君奚爲れぞ孟軻を見ざる。曰く、或ひと寡人に告げて曰く、孟子の後の喪は前の喪に踰ゆ、是を以て行きて見ざるなり。曰く、何ぞや、君の所謂踰ゆとは、前には

乎。禮義由三喪者出。而孟子之後喪。論前公曰。諾。樂正子入見曰。君奚爲不見孟軻也。曰。或告寡人曰。孟子之後喪。踰前見也。曰。何哉。君所謂踰者。前以士。後以大夫。前以三鼎。而後以五鼎。與。曰。否。謂棺槨衣衾之美也。曰。非所謂踰也。貧富

士を以てし、後には大夫を以てし、前には三鼎を以てし、而して後には五鼎を以てするか。曰く、否、棺槨衣衾の美を謂ふなり。曰く、所謂踰ゆるに非ざるなり。貧富同じからざればなりと。樂正子孟子に見えて、曰く、克、君に告ぐ、君來り見んと爲せり。嬖人臧倉なる者有り、君を沮む。君是を以て來るを果さざるなり。曰く、行くは或は之をせしむ。止まるは或は之を尼む。行止は人の能くする所に非ざるなり。吾の魯侯に遇はざるは天なり。臧氏の子、焉んぞ能く予をして遇はざらしめんや。

- 氣に入りの近臣 ● 平常、いつもなり ● 役人 ● 仰せ出ださる ● 馬車にもはや馬をつけたり ● 御出先をお伺ひ致します ● 身分の賤しき者が先に御伺ひをすべき筈であるに俟らず、まづ先に御尋ねになる、此夫は孟子を指す ● 孟子を賢者なりと御尋ねになりての事ですか ● 母の喪なり ● 父の喪なり ● 成程さうだ承知せりの意 ● 孟子の弟子なり、樂正は姓なり、子は男子の通稱なり、時に魯の臣たり ● 父の喪には士の禮を以てし母の喪には大夫の禮を以てするの義 ● 祭りの供物を盛る器、士の身分の者は其の數三つを用ひ、大夫の身分の者は其の數五つを用ひる ● 二重の棺の、内なるを棺といひ、外なるを槨といふ ● 死入に着する衣類なり ● 樂正の姓なり ● 邪魔をす ● 其の人を行かしむることあり ● 其の人を止

不同也。樂正子見孟子曰。克告於君。君爲來見也。嬖人有臧倉者。沮君。君是以不果來也。曰。行或使之。止或尼之。行止。非入所能也。吾之不遇魯侯。天也。臧氏之子。焉能使予不遇哉。

むることあり ● 面會のことなり、一に、遇ひて用ひられぬ意とす ● 臧倉のことを鄙みたる言態なり



卷之三

公孫丑章句上

公孫丑問曰。夫子當路於齊。管仲晏子之功。可復許乎。孟子曰。子誠齊人也。知管仲晏子而已矣。或問。子與西路孰賢。曾西曰。然則吾先子之所畏也。曰。然則

公孫丑問うて曰く、夫子路に齊に當らば、管仲・晏子の功復た許す可きか。孟子曰く、子は誠に齊人なり。管仲・晏子を知るのみ。或ひと曾西に問うて曰く、吾子と子路と孰れか賢れると。曾西曰く、然として曰く、吾が先子の畏るゝ所なり。曰く、然らば則ち吾子と管仲と孰れか賢れる。曾西曰く、然として悦ばずして曰く、爾何ぞ曾ち子を管仲に比する、管仲は君を得ること、彼が如く其れ專たるなり。國政を行ふこと、彼が如く其れ久しきなり。功烈は彼が如く其れ卑しきなり。爾何ぞ曾ち子を是れに比する。曰く、管仲は曾西の爲さざる所なり。而るを子、我が爲めに之を願ふか。曰く、管仲は其君を以て勦た

吾子與管仲孰賢。曾西曰。爾何曾比子於管仲。管仲得君如彼。其罪也。行乎國政也。如彼其久也。功烈如彼。其卑也。爾何曾比子於是。曰。管仲。曾西之所謂不爲也。而子爲我願之乎。曰。管仲以其君霸。晏子以其君顯。管仲晏子猶不足爲與。曰。以齊王由反手

らしめ、晏子は其君を以て顯はれしむ。管仲・晏子は猶ほ爲すに足らざるか。曰く、齊を以て王たるは、由ほ手を反すがごときなり。曰く、是の若くんば、則ち弟子の惑滋々甚し。且文王之徳、百年にして而る後崩するを以てしてすら、猶ほ未だ天下に洽からず。武王・周公之に繼ぎ、然る後に大に行はる。今王たるを言ふと、然し易きが若し。則ち文王は法るに足らざるか。曰く、文王は何ぞ當る可けん。湯より武丁に至るまで、賢聖の君六七作り、天下般に歸する久し。久しければ則ち變じ難きなり。武丁諸侯を朝し、天下を有つ、猶ほ之を掌に運らすがごとし。紂の武丁を去る未だ久しからざるなり。其故家遺俗流風善政、猶ほ在る者あり、又微子・微仲・王子比干・箕子・膠鬲あり、皆賢人なり。相與に之を輔相す。故に久しうして而る後に之を失ふなり。尺地も其有に非ざる莫きなり。一民も其臣に非ざる莫きなり。然り而して文王は猶ほ方百里にして起る。是を以て難きなり。齊人言へる有り。曰く、智慧有り雖も、勢に乗するに如かず。

也。曰。若。是。則。弟。子。之。惑。滋。甚。且。以。文。王。之。德。百。年。而。後。崩。猶。未。洽。於。天。下。武。王。周。公。繼。之。然。後。大。行。今。言。王。若。易。然。則。文。王。不。足。法。與。曰。文。王。何。可。當。也。由。湯。至。於。武。丁。賢。聖。之。君。六。七。作。天。下。歸。殷。久。矣。久。則。難。變。也。武。丁。朝。諸。侯。有。天。下。猶。運。之。掌。也。紂。之。去。武。丁。

鐵基ありと雖も、時を待つに如かず。今の時は則ち然し易きなり。夏后殷周の盛なる、地未だ千里に過ぐる者あらざるなり、而して齊其地を有てり。雞鳴狗吠相聞えて四境に達す。而して齊其民を有てり。地改め辟かず。民改め聚めず、仁政を行つて王たらば、之を能く禦むる莫きなり。且つ王者の作らざるは、未だ此時より疏き者有らざるなり。民の虐政に憔悴するは、未だ此時より甚しき者有らざるなり。飢者は食を爲し易く、渴者は飲を爲し易し。孔子曰く、徳の流行する。置郵して命を傳ふるより速なり。今の時に當り、萬乗の國仁政を行はば民の之を悦ぶこと、猶ほ倒懸を解くがごとし。故に事は古の人に半にして、功は必ず之に倍せん。惟此時を然りと爲す。

● 孟子の弟子、姓は公孫、名は丑といふ、齊の人なり ● 孟子要路に立ちて、政事を執らば ● 齊の大夫名は夷吾といふ、相公を輔佐して諸侯に歸たらしむ ● 齊の大夫、名は嬰、景公に相なり、 ● 再び復たなり、其功復た必ず期すべし、許は期に同じ ● 管仲晏子の外に人ありとは知らぬであらう ● 曾子の子なるべし

未。久。也。其。故。家。遺。俗。流。風。善。政。猶。有。在。者。又。有。微。子。微。仲。王。子。比。干。箕。子。膠。鬲。皆。賢。人。也。相。與。輔。之。故。久。而。後。失。之。也。尺。地。莫。非。其。有。也。一。民。莫。非。其。臣。也。然。而。文。王。猶。方。百。里。起。是。以。難。也。齊。人。有。言。曰。雖。有。智。慧。不。如。乘。勢。雖。有。鐵。基。不。如。待。時。今。時。則。易。然。也。夏。后。殷。周。之。盛。地。未。有。過。千。里。者。上。也。而。齊。有。其。地。矣。雞。鳴。狗。吠。相。聞。而。達。乎。四。境。而。齊。有。其。民。矣。地。不。改。辟。矣。民。不。改。聚。矣。行。仁。政。而。王。莫。之。能。禦。也。且。

● 曾西を云ふ、御身といふに同じ ● 孔子の弟子、姓は微、名は由といふ、子路は其の字なり ● 安んぜざる貌 ● 父をいふ即ち曾西の父曾子 ● 腹立たしきさま ● 乃と同じ ● 主君の信任を得るなり ● 一人にて専ら事を執るなり ● 功業のすぐれたること ● 夷吾なり、即ち王道を行はぬ意 ● 管仲を指す ● 諸侯の旗頭なり ● いと容易なり然るに爲さずの意 ● 公孫丑の自稱 ● 文王は九十七にて崩じたり、百年は大數をもていへるなり ● 徳化の行き渡ることなり ● 武王の弟の周公旦なり ● 行ひ易きなり ● 手本とする ● 文土の時は功を爲し難し故に言當らずとの意 ● 高宗の名なり ● 木甲、太戊、祖乙、盤庚などの如き賢聖の君、六七人起こりたり ● 教化をいふ、水の流れ風の吹くやうに、行き渡る意なり ● 管仲王の同姓の賢臣なり ● 管仲の賢臣なり ● 輔佐す ● 天下 ● 由と通ず ● 富貴の勢ひに居るなり ● 器具なり、鋤の大なるものをいふ ● 稱時きの時節 ● 夏后氏なり、后は君なり ● 都より四方の國境まで届くなり ● 新規に開闢するなり ● 其間の水引くをいふ ● 困苦す ● 喉の乾くなり ● 傳馬を設け置くなり、一説には置は置は置なりと解す ● 官の文書を傳ふるなり ● 手足を縛られて、倒しに木の枝に懸けられたる者を、解きおろして遺るなり、其非常なる勞苦を救ひたるを喜ぶと也 ● 文王を指す

王者之不作、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>疏<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>者也。民之憔悴於<sub>二</sub>虐政<sub>一</sub>、未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>甚<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>此時<sub>一</sub>者也。飢者易<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>食、渴者易<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>飲。孔子曰、德之流行、速<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>置郵<sub>一</sub>、而傳<sub>レ</sub>命。當<sub>二</sub>今<sub>一</sub>之時、萬乘之國、行<sub>二</sub>仁政<sub>一</sub>、民之悅<sub>レ</sub>之、猶解<sub>レ</sub>倒懸<sub>一</sub>也。故事半<sub>二</sub>古<sub>一</sub>之人、功必倍<sub>レ</sub>之。惟此時爲<sub>レ</sub>然。

公孫丑問曰、夫子加<sub>二</sub>齊之卿相<sub>一</sub>、得<sub>レ</sub>行道焉、雖<sub>二</sub>由此<sub>一</sub>霸王、不<sub>レ</sub>異矣。如此則、動<sub>レ</sub>心否乎。孟子曰、否。我四十不動<sub>レ</sub>心。曰、若是則、夫子過<sub>二</sub>孟賁<sub>一</sub>遠矣。曰、是不難。告子先<sub>レ</sub>我、不動<sub>レ</sub>心。曰、不動<sub>レ</sub>心、有道乎。曰、有。北宮黝

公孫丑問うて曰く、夫子に齊の卿相を加へ、道を行ふを得ば、此に由りて霸王たりと雖も、異ます。此の如くなれば、則ち心を動かすや否や。孟子曰く、否、我四十にして心を動かさず。曰く、是の若くんば、則ち夫子は孟賁に過ぐるこゝと遠し。曰く、是れ難からず。告子我に先だちて心を動かさず。曰く、心を動かさざるに道あるか。曰く、有り。北宮黝の勇を養ふや、膚撻せず、目逃せず、一毫を以て人に挫るゝを思ふこと、之を市朝に撻るゝが若し。褐寬博にも受けず、亦萬乗の君にも受けず。萬乗の君を刺すを視ること、褐夫を刺すが若し。諸侯を嚴るゝ無く、惡聲至れば、必ず之を反へす。孟施舍の勇を養ふ所や、曰く、勝たざるを視る猶ほ勝つがごときなり。敵を量りて後に進み、勝を慮りて後に

之養<sub>レ</sub>勇也。不<sub>レ</sub>膚撻<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>目逃<sub>一</sub>。思<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>一毫<sub>一</sub>挫<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>人<sub>一</sub>上<sub>レ</sub>者、撻<sub>レ</sub>之於<sub>二</sub>市朝<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>褐寬博<sub>一</sub>、亦不<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>萬乘之君<sub>一</sub>。視<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>萬乘之君<sub>一</sub>、若<sub>レ</sub>刺<sub>レ</sub>褐夫<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>嚴<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>。惡<sub>レ</sub>聲<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>反<sub>レ</sub>之。孟施舍之所<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>勇也。曰<sub>レ</sub>、視<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>猶<sub>レ</sub>勝也。量<sub>レ</sub>敵<sub>レ</sub>而後<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>、慮<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>而後<sub>レ</sub>會<sub>レ</sub>。是<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>三軍<sub>一</sub>者也。舍豈能<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>勝<sub>レ</sub>哉。能<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>懼<sub>レ</sub>而已。

會<sub>レ</sub>す。是れ三軍を畏るゝ者なり。舍は豈に能く必ずしも勝つを爲さんや。能く懼るゝなきのみ。孟子舍は曾子に似たり。北宮黝は子夏に似たり。夫の二子の勇は、未だ其孰れか賢れるを知らず。然り而して孟施舍は守約なり。昔者曾子、子襄に謂うて曰く、子勇を好むか、吾嘗て大勇を夫子に聞けり。自ら反して縮からずんば、褐寬博と雖も吾懼れざらんや。自ら反して縮ければ、千萬人と雖も吾往かん。孟施舍の氣を守るは、又曾子の守の約なるに如かざるなり。曰く、敢て問ふ。夫子の心を動かさざると、告子の心を動かさざると、聞くを得べきか。告子曰く、言に得ざれば、心に求むる勿れ、心に得ざれば、氣に求むる勿れと。心に得れば氣に求むる勿れとは可なり。言に得ざれば心に求むる勿れとは不可なり。

- 授けらるゝなり ● 卿相の位を以て君と相けて ● 霸王の大業を成就すとも。霸王と併稱する戦國時代の常語なり ● 不思議とは存じませぬ ● 責任の重大なることを感ずる結果心を動かす事はなきか ● 昔の





夫子惡乎長。曰。我知言。我善養吾浩然之氣。敢問。何謂浩然之氣。曰。難言也。其爲氣也。至大至剛。以直養而無害。則塞于天地之間。其爲氣也。配義與道。無是候也。是集義所生者。非二義襲而取之也。行有不慊於心。則慊矣。我故曰。告子未嘗知義。以其外之也。必有

る有れば、則ち餒う。我れ故に曰く、告子は未だ嘗て義を知らずと。其之を外にするを以てなり。必ず事とする有れ。正めする勿れ。心に忘るゝ勿れ。助けて長ずる勿れ。宋人の若く然かする無れ。宋人其苗の長ぜざるを闕へて、而して之を擷く者あり、世に然として歸り、其人に謂つて曰く、今日病る。予れ苗を助けて長ぜしむと。其子趨りて往きて之を視れば、苗則ち槁る。天下の苗を助けて長ぜしめざるもの寡し。以て益なしと爲して之を舍つる者は、苗を耘らざる者なり。之を助けて長ぜしむる者は、苗を擷く者なり。徒に益なきのみに非らず、而して又之を害す。何をか言を知ると謂ふ。曰く、諛辭は其蔽はるゝ所を知る。淫辭は其陷る所を知る。邪辭は其離るゝ所を知る。遁辭は其窮する所を知る。其心に生ずれば、其政を害し、其政に發すれば、其事を害す。聖人復起るも必ず吾が言に従はん。

● 志は氣の將帥なりと、心の向ふことを志といふ、志は一身を支配して、氣を引き廻すものなれば斯くいへるなり

事焉。而勿正。心勿忘。勿助長也。無若宋人然。宋人有闕其苗之不長而掘之者。芒芒然歸。謂其人曰。今日病矣。予助苗長矣。其子趨而往視之。苗則槁矣。天下之不助苗長者寡矣。以爲無益而舍之者。不耘苗者也。助之長者。揠苗者也。非徒無益而又害之。何謂知

り、即ち志情れば日中猶ほ睡きが如く君父危難なれば連夜睡眠を思はざるが如く志氣關係の適切なるを見る。氣は一身に充滿して喜容を爲すものなり。志此に向ひ至れば、氣は此に附き隨ふといふことなり、一説には志は至りて重きものにして、氣は二の次ぎのものなりといふ。其の志を堅固に持ちて其の氣を害するなかれと。● 專一なり、志と氣との關係を記す。● 氣固して自ら持する能はざる故なり。● 其の結果として反つて心を動かす。● 他人の言葉の是非得失を悉く理會す。● 大なる氣なり。● 極めて大に極めて強きなり。● 正直をもて養ふなり。● 充滿するなり。● 義と道との二つとする配偶なり。● 浩然のなれば腹の減りたるやうに氣が畏れ縮むと也。一説「是れ餘る無し」と訓じ、是氣道義に配する時は彌漫充塞して餘る事なしと解す。● 己れの心に義を求めて事々物々に間斷なく義を行ふなり。● 闕は掩ひ取るなり、外に在る義をもて闕ひて此の氣を取る也。一説此義は義足の義にて假に外より借用し來る意と解す。● 快き也。● 蛇度己れの心に義を求めて事々物々に間斷なく義を行はむことを事とすべしといふことなり。● 正は豫め期すなり、其の效驗を見むことを心の中に豫め期すまじきなりといふことなり。● 其の事あることを忘却すまじきなり。● 其の氣を強ひて助けて長ぜしめむとすまじきなり。● 心配するなり。● 引き延ばすなり。● 氣拔けのしたるさまなり。● 草臥るゝなり。● 投げ遣りに捨ておくなり。● 偏固なる言葉なり。● 私意に惑り隔てるなり。● 放蕩なる言葉なり。● 惡道にはまり込むなり。● 邪僻なる言葉なり。● 正理に離れぬくなり。● 逃げ口上なり。● 行き詰まるなり。● 不心得の條々が人君の心に説すれば

言曰。誠辭知其所蔽。淫辭知其所陷。邪辭知其所離。遁辭知其所窮。生於其心。害於其政。發於其政。害於其事。聖人復起。必從吾言矣。

宰我。子貢。善爲說辭。冉牛。閔子。顏淵。善言。德行。孔子兼之。曰。我於辭命。則不能也。然則夫子既聖矣乎。曰。惡。是何言也。昔者子貢問於孔子。曰。夫子聖矣乎。孔子曰。聖則吾不能。我學不厭。而教不倦。子貢曰。學

宰我・子貢は善く說辭を爲し、冉牛・閔子・顏淵は善く德行を言ふ。孔子之を兼ぬ。曰く、我れ辭命に於ては則ち能はざるなりと。然らば則ち夫子既に聖なるか。曰く、惡是れ何の言ぞや。昔者子貢、孔子に問ひて曰く、夫子は聖なるかと。孔子曰く、聖は則ち吾れ能はず。我は學んで厭はず、教へて倦まざるなり。子貢曰く、學んで厭はざるは、智なり。教へて倦まざるは、仁なり。仁にして且つ智なり。夫子既に聖なりと。夫れ聖は孔子すら居らず。是れ何の言ぞや。昔者竊かに之を聞けり。子夏・子游・子張、皆聖人の一體あり。冉牛・閔子・顏淵は、則ち體を具へて微なりと。敢て安んずる所を問ふ。曰く、姑く是を捨て。曰く、伯夷・伊尹は如何。曰く、道と同じうせず。其君にあらざれば事へず、其民にあらざれば使はず。治まれば則ち進み、亂るれば則ち退くは、伯夷なり。何れに

不厭智也。教不倦仁也。仁且智。夫子既聖矣。夫聖孔子不居。是何言也。昔者竊聞之。子夏。子游。子張。皆有聖人之一體。冉牛。閔子。顏淵。則具體而微。敢問所安。曰。姑舍是。曰。伯夷。伊尹。何如。曰。不同道。非其君不事。非其民不使。治則進。亂則退。伯夷也。何事非君。何使

事ふるも君にあらざらん。何れを使ふも民にあらざらん。治まるも亦進み、亂るるも亦進むは、伊尹なり。以て仕ふ可くんば則ち仕へ、以て止む可くんば則ち止み、以て久しうす可くんば則ち久しうし、以て速かにす可くんば則ち速かにするは、孔子なり。皆古の聖人なり。吾未だ行ふ有る能はず。乃ち願ふ所は則ち孔子を學ばん。伯夷・伊尹の孔子に於けるは、是の若く班たる乎。曰く、否。生民ありてより以來、未だ孔子あらざるなり。曰く、然らば則ち同じきこと有るか。曰く、有り。百里の地を得て而して之に君たらば、皆能く以て諸侯を朝して天下を有たん。一の不義を行ひ一の不幸を殺して、而して天下を得るは皆爲さざるなり。是れ則ち同じ。曰く、敢て其異なる所以を問ふ。曰く、宰我・子貢・有若は、智は以て聖人を知るに足る。汙なるも其好む所に阿ねるに至らず。宰我曰く、予を以て夫子を觀れば、堯舜に賢ること遠し。子貢曰く、其禮を見て、而して其政を知り、其樂を聞いて、而して其徳を知る。百世の後由り、百世

非民治亦進。亂亦進。伊尹也。可以止則止。可以久則久。可以速則速。孔子也。皆古聖人也。吾未能有行焉。乃所願則學孔子也。伯夷伊尹於孔子。若是班乎。曰。否。自有生民以來。未有如孔子也。曰。然則有同與。曰。有。得百里之地。而君之。皆能以朝諸侯。有

の王を等するに、之に能く違ふこと莫きなり。生民より以來、未だ夫子あらざるなり。有若曰く、豈に惟だ民のみならんや。麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、泰山の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類なり。聖人の民に於けるも亦類なり。其類より出で、其萃を抜く。生民より以來、未だ孔子より盛なる有らざるなり。

● 孔子の弟子なり、姓は宰、名は予、字は子我といふ ● 孔子の弟子なり、姓は端木、名は賜、字は子貢といふ ● 言語應對なり ● 孔子の弟子なり、姓は冉、名は耕、字は伯牛といふ ● 孔子の弟子なり、姓は閔、名は損、字は子禽といふ ● 孔子の弟子なり、姓は顔、名は回、字は子淵といふ ● 道徳の行ひに長じたることなり ● 言語命令なり、使者の口上なり ● 孟子の自ら孔子に比せんと欲するを知りて云ふと、或は公孫丑孟子が聖人も吾が言葉に同意すべしといひたるを疑ひて、さらば夫子は最早聖人なるかの意にて云ふといひ、又は孟子は養氣知言を得たり、辭命にも達せる故に聖人なるかの語の諸説あり ● 驚き歎する聲 ● 聞くといふ、謙辭 ● 孔子の弟子なり、姓は偃、字は子將といふ ● 孔子の弟子なり、姓は顔、名は師、字は子張といふ ● 一部分なり ● 全體を具へたれどもまだ聖人程には大ならぬなり ● 孟子の地位の落も著かん處なり ● 此事は先づ問ふを止めよ ● 孤竹の君の長子なり、弟の叔齊と共に國を去り、殷の紂王の亂を避け、隠居し、周の文王の徳を聞きて之れに歸し、武王の紂王を伐つに及びて去りて首陽山に餓死にせり ● 有

天下行一不義殺一不辜。而得天下。皆不爲也。是則同。曰。敢問其所以異。曰。宰我。子貢。有若。智足以知聖人。汗不至阿。其所好。宰我曰。以予觀於夫子。賢於堯舜遠矣。子貢曰。見其禮而不知其政。聞其樂而不知其德。由百世之後。等百世之王。莫之能違也。自生民以來。未有夫子也。有若曰。豈惟民哉。麒麟之於走獸。鳳凰之於飛鳥。泰山之於丘垤。河海之於行潦。類也。聖人之於民。亦類也。出於其類。拔乎其萃。自生民以來。未有盛於孔子也。

● 帝の處士なり、殷の湯王之れを度々夏の桀王に薦めしも、桀王用ひず、遂に湯王を輔佐して、桀王を伐つてり ● どうですかと二子に對する孟子の意見を徴し、因て暗に孟子の安んずる所を知らんとする也 ● 二子は道學なり。或はいふ、子と其道を同じうせずの意 ● 等列なるなり ● 人間なり ● 罪なき善なり ● 孔子の弟子なり、姓は有、名は若、字は子有といふ ● 大言を吐くこと、一説に見識の奥きことなり ● 語ふなり ● 宰我の名なり ● 帝堯、帝舜なり ● 品定めす ● いかゞ釣り人間の分同類ありとせむ物には總べて同類ありといふことなり ● 牝を雌といひ、牡を雌といふ、獸類の長なり ● 鳥類の長なり、鳳凰とは雄雌の別なり ● 小高き岡なり、一説には埴は樂の塔なり ● 河は黄河なり、海は大海なり ● 道端を流る、雨水なり ● 其の同類の中より超え出づるなり ● 其の群集の中より抜き上がるなり

孟子曰く、力を以て仁を假る者は霸たり。霸は必ず大國を有つ。徳を以て仁を行ふ者は王たり。王は大を待たず、湯は七十里を以てし、文王は百里を以てす。力を以て人を服する者は、心服に非ざるなり。力贖らざるなり。徳を以て

以七十里。文王以百里。以力服人者。非心服也。力不瞻也。以德服人者。中心悅而誠服也。如七十子之服孔子也。詩云。自西自東。自南自北。無思不服。此之謂也。

人を服する者は、中心悦びて而して誠に服するなり。七十子の孔子に服するが如きなり。詩に云ふ、西より東より、南より北より、思つて服せざるなしと。此れ之れを謂ひなり。

● 精力をもて仁の名目を借り用ひるなり ● 足らざるなり ● 心の中より ● 孔子の弟子の三千人の中に六巻に通じたる七十二人の者 ● 詩經大雅の文王有聲篇の詩

孟子曰。仁則榮。不仁則辱。今惡辱而居不仁。是猶惡濕而居下也。如惡之莫如。如貴德而尊士。賢者在位。能者在職。國家

孟子曰く、仁なれば則ち榮え、不仁なれば則ち辱らる。今辱らるゝを惡んで、而して不仁に居るは、是れ猶ほ濕を惡んで下に居るが如し。如し之を惡まば、徳を貴んで而して士を尊むに如くは莫し。賢者は位に在り。能者は職に在り。國家閒暇是の時に及んで、其政刑を明にせば、大國と雖も必ず之を畏れん。詩に云ふ、天の未だ陰雨せざるに迫んで、彼の桑土を徹り、牖戸を網

閒暇。及是時。明其政刑。誰大國。必畏之矣。詩云。迨天之未陰雨。彼桑土。罔不備。牖戶。今此下民。或敢侮予。孔子曰。爲此詩者。其知這乎。能治其國家。誰敢侮之。今國家閒暇。及是時。一般樂怠。敖是自求禍也。禍福無不自己求之。者。詩云。永言配命。自求多福。大甲曰。天

總す。今此下民、敢て予を侮るあらんやと。孔子曰く、此詩を爲る者は、其れ道を知るか。能く其國家を治めば、誰か敢て之を侮らん。今國家閒暇、是の時に及んで一般樂怠敖せば、是れ自ら禍を求むるなり。禍福已れより之を求めざる者なし。詩に云ふ、永く言命に配し、自ら多福を求むと。大甲に曰く、天の作せる孽は猶ほ遠く可し。自ら作せる孽は活く可からずとは、此れ之れを謂ひなり。

● 道徳ある人を大切にす ● 士を大切にす ● 賢明なる者、輔佐の位に在るなり ● 才能ある者、それらの役に在るなり ● 政教刑律なり ● 詩經國風鴛鴦篇の詩 ● 暑りて雨降るなり ● 及びなり ● 桑の根の皮なり ● 取らるなり ● 鳥の巢の風抜き穴なり ● 鳥の巢の出入り口なり ● 補ひ縫ふなり ● 鳥の巢の下に居る人なり ● 鳥の自らいへるなり ● 大に樂むなり、殿は大なり ● 政事を怠りて遊び散らすなり ● 詩經大雅文王篇の詩 ● 長く念ふなり、常々心掛くるなり ● 天命に配合するなり、天命に背かぬなり ● 書經の商官の篇名 ● 爲と同じ ● 災難なり ● 遠は避くるなり ● 生くるなり



作孽猶可逭。自作孽不可活。此之謂也。

孟子曰。尊賢使能。俊傑在位。則天下之士皆悅而願立於其朝矣。市廛而不征。法而不廛。則天下之商皆悅而願藏於其市矣。關譏而不征。則天下之旅皆悅而願出於其路矣。耕者助而不稅。則天下之農皆悅而願耕於其

孟子曰く、賢を尊び能を使ひ、俊傑位に在れば、則ち天下の士は皆悦んで而して其朝に立たんことを願はん。市は廛して征せず、法して廛せずんば、則ち天下の商は、皆悦んで而して其市に藏めんことを願はん。關は譏して征せずんば、則ち天下の旅皆悦んで、而して其路に出でんことを願ふ。耕者は助して税せずんば、則ち天下の農は皆悦んで、而して其野に耕さんことを願はん。廛に夫里の布なければ、則ち天下の民は皆悦んで、而し之れが氓たらんことを願はん。信に能く此五者を行はば、則ち鄰國の民は之を仰ぐこと父母の若けん。其子弟を率ゐて、其父母を攻むるは、生民有りてより以來、未だ能く濟す者あらざるなり。此の如くんば、則ち天下に敵なし。天下に敵なき者は天吏なり。然して王たらざる者は未だ之れ有らざるなり。

才徳の勝れたる者 ① 店の税を取ること ② 貨物の税を取らず ③ 市場の規則なり ④ 店の税を取

野矣。廛無二夫里之布。則天下之民皆悅而願爲之氓矣。信能行此五者。則鄰國之民仰之。若父母矣。率其子弟攻其父母。自生民以來。未有能濟者也。如此則無敵於天下。無敵於天下者。天吏也。然而不王者。未之有也。

ぬなり、一説には、店の坪敷を計りて、或る程度までは其の税を取らぬなりと曰ち今日の所謂免稅なりと云ふ ① 市に持ち行きて商賣せんと欲す ② 關所の役人は豫番のみして物品に税を課せず ③ 公田を助け耕さしむるなり ④ 私田の税を取らぬなり ⑤ 一般の人民の居宅なり ⑥ 布は織なり、夫の布と、里の布となり、兩者共に今日の附加税の或種のものに當る ⑦ 新附の民なり ⑧ 成就するなり ⑨ 上帝の意に叶ひたる天の役人なり

孟子曰。人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心。斯有不忍人之政矣。以不忍人之心。行不忍人之政。治天下可運之掌上。所以謂

孟子曰く、人皆人に忍びざるの心あり。先王人に忍びざるの心ありて、斯に人に忍びざるの政あり。人に忍びざるの心を以て、人に忍びざるの政を行へば、天下を治むること、之を掌上に運らす可し。人皆人に忍びざるの心ありと謂ふ所以は、今人乍ち孺子の井に入らんとするを見れば、皆怵惕の心あらん。交を孺子の父母に内るゝ所以に非らざるなり。譽を郷黨朋友に要むる所以に非るなり。其聲を惡んで然るに非るなり。是に由つて之を觀れば、惻

人皆有二不忍  
入之心者、今  
人乍見孺子  
將入於井、皆  
有二怵惕惻隱  
之心。非四所  
內交於孺子  
之父母也。非  
所以要譽於  
鄉黨朋友也。  
非惡其聲而  
然也。由是觀  
之。無惻隱之  
心。非人也。無  
羞惡之心。非  
人也。無辭讓  
之心。非人也。  
無是非之心。  
非人也。惻隱  
之心。仁之端

隱の心なきは人に非るなり。羞惡の心なきは、人に非るなり、辭讓の心無き  
は、人に非るなり。是非の心なきは、人に非るなり。惻隱の心は仁の端なり、  
羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。人  
の是の四端有るや、猶ほ其四體あるが如きなり。是四端ありて、而して自ら能  
はずと謂ふ者は自ら賊する者なり。其君能はずと謂ふ者は、其君を賊する者なり。  
凡そ我に四端ある者は、皆擴めて之を充たすを知る。火の始めて然え、泉の始  
めて達するが若し、苟も能く之を充てば、以て四海を保んずるに足り、苟も  
之を充たさざれば、以て父母に事ふるに足らず。

- 人に惡を加ふるに忍びざる心
- 其の容具なる意
- 忽ちなり、不意にたり
- 小兒
- 驚きあそぶること
- 憐み痛むなり
- 納と通ず、交際を結ぶなり
- 名譽を求むるなり
- 近村の人々の威、原義は
- 一萬二千五百を屬といひ、五百家を屬といふ
- 小兒を見殺しにせりと云ふ惡評判を給れて歎ふに非ず
- 己れの不祥を恥ぢ、人の不祥を憎むなり
- 辭讓し、人に推し讓るの心
- 縁口なり
- 善き事、是なりとし、惡しき事を非なりとする心
- 兩手兩足なり
- そこなふこと
- 仁義禮智の縁口を有しなが

也。羞惡之心。  
義之端也。辭  
讓之心。禮之  
謂不能者。自  
火之始然。泉  
也。羞惡之心。  
義之端也。辭  
讓之心。禮之  
謂不能者。自  
火之始然。泉

孟子曰く、矢人は豈に他人より不仁ならんや、矢人は唯人を傷けざらんことを恐れ、他人は唯人を傷けんことを恐る。巫匠も亦然り。故に術は慎まざるべからざるなり。孔子曰く、仁に里るを美と爲す。擇んで仁に處らざるば、焉んぞ智を得ん。夫れ仁は、天の尊爵なり、人の安宅なり。之を禦むること莫くして、不仁なるは、是れ不智なり。不仁不智、無禮無義は、人の役なり。人の役にして役を爲すを恥づるは、可人にして可を爲るを恥ぢ、矢人にして矢を爲るを恥づるがごときなり。如し之を恥ぢば、仁を爲すに如くは莫し。仁者は射の如し。射る者は己を正しくして然る後に發す。發して中らずとも、己に勝つ者を怨み

- 多仁義禮智を行ふこと能はぬなり
- 推し廣むるなり
- 樂と同一
- 流れ通るなり

孟子曰く、矢人  
豈不仁に於  
人哉。矢人唯  
恐不傷人。函  
人唯恐傷人。  
巫匠亦然。故  
術不可不慎  
也。孔子曰。里  
仁爲美。擇不  
處仁。焉得智  
也。夫仁天之尊  
爵也。人之安  
宅也。莫之禦

孟子曰く、矢人は豈に他人より不仁ならんや、矢人は唯人を傷けざらんことを恐れ、他人は唯人を傷けんことを恐る。巫匠も亦然り。故に術は慎まざるべからざるなり。孔子曰く、仁に里るを美と爲す。擇んで仁に處らざるば、焉んぞ智を得ん。夫れ仁は、天の尊爵なり、人の安宅なり。之を禦むること莫くして、不仁なるは、是れ不智なり。不仁不智、無禮無義は、人の役なり。人の役にして役を爲すを恥づるは、可人にして可を爲るを恥ぢ、矢人にして矢を爲るを恥づるがごときなり。如し之を恥ぢば、仁を爲すに如くは莫し。仁者は射の如し。射る者は己を正しくして然る後に發す。發して中らずとも、己に勝つ者を怨み

而不仁。是不智也。不仁不智。無禮無義。人役也。人役而恥爲役。由弓人而恥爲弓。矢人而恥爲矢也。如恥之。莫如爲仁。仁者如射。射者正己而後發。發而不中。不怨。勝己者。反求諸己而已矣。

す、諸を己に反求するのみ。

- 矢を作る人 ● 具足を作る人 ● 祈禱者なり、一説には、農者なりと ● 邪其屋なり ● 技術なり
- 里は居るなり、仁の徳に居るを何より結構なること、す、論語里仁爲美 ● 居處を選擇して ● 里と同じく居るなり ● 天より授けられたる尊き爵位なり ● 人の安心して居るべき住居なり ● 惡事を防ぎ止めぬなり ● 仁智禮儀なき者は人に使役せらるゝ者なり ● 矢を放つなり ● 的にあらざるも、的を射外したる其理由を自己に顧みて探求す

孟子曰。子路人告之以有過。則喜。禹聞善言。則拜。大舜有大焉。善與人同。舍己從人。樂取於人以爲善。自耕稼陶漁。以

孟子曰く、子路は人之に告ぐるに、過あるを以てすれば則ち喜ぶ。禹は善言を聞けば則ち拜す。大舜は禹より大なる有り。善は人と同じくす。己を捨てて人に従ふ。人に取りて以て善を爲すを樂む。耕稼陶漁より、以て帝と爲るに至るまで、人に取りて非る者無し。諸を人に取りて以て善を爲す。是れ人と善をなす者なり。故に君子は人と善を爲すより大なるは莫し。

- 夏禹王なり ● 舜帝なり ● 天下の善事に當りては、人と我れとの隔てなく、共同のものとするなり

- 人に善あれば己れを忘れて、其の善に従ふなり、● 人を手本とするなり ● 耕は、田地をたがやすこと、● 稼は、穀物の苗を植うることにて、農業を營むことなり、● 歷山に耕せしをいふ ● 機軸物をするなり、● 河濱に陶せしを云ふ ● 魚を捕るなり、● 山源に漁せしを云ふ ● 人と共に

至爲帝。無非取於人。一者取諸人。一以爲善。是與入爲善者也。故君子莫大乎與人爲善。

孟子曰。伯夷非其君不事。非其友不立。於惡人之朝。不與。惡人一言。不立。於惡人之朝。與。惡人一言。如下。以朝衣朝冠。坐於塗炭。推惡惡之心。思與。鄉人立。其冠不正。望望然去。

孟子曰く、伯夷は其君に非れば事へず。其友に非れば友とせず。悪人の朝に立たず、悪人と言はず。悪人の朝に立ち、悪人と言ふは、朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如し。悪を惡むの心思を推すに、郷人と立ち、其冠正しからざれば、望望然として之を去る、澆されんとするが若し。是の故に諸侯其辭命を善くして而して至る者ありと雖も、受けざるなり。受けざる者は、是れ亦就くを肩しとせざるのみ。柳下惠は汚君を羞ぢず、小官を卑しとせず、進で賢を隠さず、必ず其道を以てす。遺佚して怨みず、阨窮して憫へず。故に曰く、爾は爾を爲せ、我は我を爲さん。我が側に袒裼裸裎すと雖も、爾焉んぞ能く我を澆さ

之。若將<sup>レ</sup>洩焉。是故諸侯。雖有善<sup>レ</sup>其辭命。而不至者。不受也。不受也者。是亦不<sup>レ</sup>屑就。已<sup>レ</sup>柳下惠不<sup>レ</sup>差<sup>レ</sup>汚君。不<sup>レ</sup>卑<sup>レ</sup>小官。進<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>隱賢。必以<sup>レ</sup>其道。遺佚而不<sup>レ</sup>怨。阨窮而不<sup>レ</sup>懼。故曰。爾爲<sup>レ</sup>爾。我爲<sup>レ</sup>我。雖<sup>レ</sup>袒裼裸裎<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>我側。爾焉能<sup>レ</sup>洩我哉。故由<sup>レ</sup>然與<sup>レ</sup>之。僭而不自<sup>レ</sup>失<sup>レ</sup>焉。援而止<sup>レ</sup>之。而止<sup>レ</sup>之。而止<sup>レ</sup>者。是亦不<sup>レ</sup>屑去<sup>レ</sup>已。孟子曰。伯夷隘。柳下惠不<sup>レ</sup>恭。隘與<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>恭。君子不由<sup>レ</sup>也。

んやと。故に由<sup>レ</sup>然として之と僭にして、而して自ら失はず。援きて而して之を止むれば止る。援きて而して之を止むれば止る者は、是れ亦去るを屑しとせざるのみ。孟子曰く、伯夷は隘、柳下惠は不恭、隘と不恭とは、君子由らざるなり。

- 明れの衣冠なり
- 襪は、泥なり、泥も、糞も、きたなき物なり
- 伯夷の心
- 伯夷の心を孟子が推量するなり
- 村里の名もなき者
- 郷人の冠なり
- 黜黜の節、面目からぬさまなり
- 身を汗されるやうに思ふ
- 其の口上を丁塚にす
- 招待を承知せぬ
- 安に仕ふることを心持ちよく思はぬなり
- 魯の公族にして、大夫なり、師は歴名は授、字は高といふ、知行を柳下といふに受く、兼は其の門なり
- 行ひの汚れたる君
- 軽き投目なり
- 己れの賢才を蔽ひ隠さぬなり
- 人に振り棄てらるゝなり
- 困窮するなり
- 憂へぬなり
- 肌を脱ぐなり
- 丸裸になるなり
- 自得満足せるさまなり
- 一所に居るなり
- 満足せざることなきなり
- 引くなり
- 了簡の狭きなり
- 恭敬ならぬなり
- 日當てにせぬたり
- 伯夷及び柳下惠の行が俱に中庸の道を得ず以て黜黜の道に反するを以てなり

### 卷之四

#### 公孫丑章句下

孟子曰。天時不如<sup>レ</sup>地利。地利不如<sup>レ</sup>人和。三里之城。七里之郭。環而攻之而不<sup>レ</sup>勝。夫環而攻之。必有<sup>レ</sup>得天時者矣。然而不<sup>レ</sup>勝者。是地利也不如<sup>レ</sup>地利也。城非<sup>レ</sup>不高也。池非<sup>レ</sup>不深也。

孟子曰く、天の時<sup>（一）</sup>は地の利<sup>（二）</sup>に如かざるなり。地の利は人の和<sup>（三）</sup>に如かざるなり。三里の城<sup>（四）</sup>、七里の郭<sup>（五）</sup>、環りて之を攻めて、而して勝たず。夫れ環りて之を攻むれば、必ず天の時<sup>（六）</sup>を得る者あり。然り而して勝たざる者は、是れ天の時<sup>（七）</sup>、地の利<sup>（八）</sup>に如かざるなり。城高からざるに非ざるなり。池深からざるに非ざるなり。兵革<sup>（九）</sup>に堅利ならざるに非ざるなり。米粟多からざるに非ざるなり。委して之を去るは、是れ地の利は人の和に如かざるなり。故に曰く、民を域るに封疆<sup>（十）</sup>の界を以てせず、國を固むるに山谿<sup>（十一）</sup>の險を以てせず、天下を威すに兵革<sup>（十二）</sup>の利を以てせず、道を<sup>（十三）</sup>得る者は助け多く、道を失ふ者は助け寡し。助け寡きの至りは、新威<sup>（十四）</sup>之に畔<sup>（十五）</sup>



兵革非不堅利也。米粟非不多也。委而去之。是地利不如人和也。故曰。域民不以封疆之界。固國不以山川之險。威天下不以兵革之利。得道者多助。失道者寡助。寡助之至。親戚畔之。多助之至。天下順之。以天下之所順。攻親戚之所畔。故君子有不戰。戰必勝矣。

● 聖賢、朝夕の如き宇宙の變の類なり、一説に、時日、方角などの吉凶をいへるなりと ● 山河、城池の固めなり ● 人心の和合するなり ● 周囲の三里ばかりなる内曲輪なり ● 周囲の七里ばかりなる外曲輪なり、一里は凡そ我が六町なれば、三里とは、其の小さきことを云ふ、一説には、三里七里は、城池の深高なりといふ ● 取り巻くなり以て圍ふこと ● 攻圍して居ればそのうちに必度天時を得る事がある ● 兵は朝戦なり、革は鎮なり、革にて作らるが故にいふ ● 鎮は堅固に武器は銳利 ● 兵糧なり、糧を去りたるを米といひ、糧を去らざるを粟といふ ● 埽池、兵革、米粟を築つるなり ● 人民の他國へ移住せざらむやうに仕切りをするなり ● 土を盛り上げて日印とする、領分の界 ● 山谷の險阻 ● おそれしむる ● 兵革の堅利に同じ ● 人心を和合せしむる仕方なり ● 加勢なり ● 報き去らるなり ● 従ひ附くなり ● 徳あり位ある人を指す、君子は欺はざない事があるが然し、戰へば必度勝つ

孟子將朝王。王使人來曰。寡人如就見

下之所順。攻親戚之所畔。故君子有不戰。戰必勝矣。

孟子將に王に朝せん。王、人をして來らしめて、曰く、寡人如ち就き見んとせる者なり。寒疾有り、以て風す可からず。朝すれば將に朝に視んとす。識らず

者也。有寒疾。不可以風朝。將視朝。不識可使寡人得見乎。對曰。不幸而有疾。不能造朝。明日出。申於東郭氏。公孫丑曰。昔者辭以病。今日弔。或者不可乎。曰。昔者疾。今日愈。如之何。不弔。王使二人問疾。醫來。孟仲子對曰。昔者有王命。有采薪之憂。不能造朝。今病小愈。

寡人をして見るを得しむべきか。對へて曰く、不幸にして疾あり、朝に造る能はずと。明日出でて、東郭氏に弔す。公孫丑曰く、昔者辭するに病を以てし、今日弔す。或は不可ならんか。曰く、昔者疾み、今日癒ゆ。之を如何ぞ弔せざらん。王、人をして疾を問ひ、醫をして來らしむ。孟仲子對へて曰く、昔者王命あり。采薪の憂あり、朝に造ること能はず。今病少しく愈ゆ。趨りて朝に造りぬ。我れ識らず、能く至るや否や。數人をして路に要せしむ。曰く、請ふ必ず歸る無くして、而して朝に造れと。己むを得ずして景丑氏に之き宿す。景子曰く、内は則ち父子、外は則ち君臣、人の大倫なり。父子は恩を主とし、君臣は敬を主とす。丑王の子を敬するを見る、未だ王を敬する所以を見ざるなり。曰く、惡是れ何の言ぞや。齊人仁義を以て王と言ふ者無し。豈に仁義を以て美ならずと爲さん。其心に曰く、是れ何ぞ與に仁義を言ふに足らんやと、云爾、則ち不敬はより大なるは莫し。我れ堯舜の道に非ざれば、敢へて以て王の前に陳せず。故に齊人は

趙造於朝。我不識能至否乎。使數人要於路。曰。請必無歸。而造於朝。不待已。而之。景丑氏宿焉。景子曰。內則父子。外則君臣。人之大倫也。父子主恩。君臣主敬。丑見王之敬子也。未見所以敬王也。曰。惡。是何言也。齊人無以仁義與王言者。豈以仁義爲不美也。其心

我が王を敬するに如く莫きなり。景子曰く、否、此の謂に非ざるなり。禮に曰く、父召せば諾する無し。君命じて召せば、駕するを俟たずと。固より將に朝せんとするなり。王命を聞き、而して遂に果さず。宜しく夫の禮と相似ざるか若く然るべし。曰く、豈に是を謂ふか。曾子曰く、晉楚の富は、及ぶ可からざるなり。彼は其富を以てし、我は吾が仁を以てす。彼は其爵を以てし、我は吾が義を以てす。吾れ何ぞ嫌せんやと。夫れ豈に不義にして而して曾子之を言はん。是れ或は一道なり。天下に違尊三有り。爵一、齒一、德一。朝廷は爵に如くは莫し。郷黨は齒に如くは莫し。世を輔け民に長たるは德に如くは莫し。惡ぞ其一を有し以て其二を慢するを得んや。故に將に大いに爲す有んとするの君は、必ず召さざる所の臣あり。謀る有らんと欲せば、則ち之に就く。其の德を尊び道を樂むこと是の如くならずんば、與に爲す有るに足らざるなり。故に湯の伊尹に於ける、學びて而して後之を臣とす。故に勞せずして王たり。桓公の管仲に於ける、學びて而

曰、是何足與言仁義也。云爾。則不敬莫大乎是。我非三堯舜之道不三敢以陳於王前。故齊人莫如我敬王也。景子曰、否非此之謂也。禮曰、父召無諾。君命召不俟。駕固將朝也。聞王命而遂不果。宜與大夫禮。若不相似。然曰。豈謂是與。曾子曰。晉楚之富。不可及也。彼以二其

して後之を臣とす。故に勞せずして霸たり。今天下の地醜し德齊し、能く相尙ふる莫きは、他なし、其の教ふる所を臣とするを好み、而して其の教を受くる所を臣とするを好まざればなり。湯の伊尹に於ける、桓公の管仲に於ける、則ち敢て召さず。管仲すら且つ猶ほ召す可からず、而るを況や管仲を爲さざる者をや。

● 齊士の朝廷に出仕せんとす ● 拙者の方より降り出て、面會せん心組でした ● 風邪 ● 若し先生の方より來朝せられむには、拙者は、病氣を推して、朝廷へ出て、面會せむといふことなり、一説に、朝すればは明出仕せられむなりと ● 折り悪しく ● 朝廷へ至る ● 齊の大夫 ● 聘を申ふなり ● 昨日なり ● 不獲す ● 孟子の從兄なり ● 薪を採りて、病ひに感じたるなりとも、病ひの爲めに、薪を採りに往かれぬなりともいふ、即ち病氣を謙讓したる言葉なり ● 待ち受け ● 齊の大夫、景は姓、井は名なり ● 家に在りては父子外に出て君臣は、人たる者の大なる倫理なり ● 恩愛なり ● 恭敬なり ● 孟子をいふ ● 景子の言を指す ● 齊人の心の中に曰ふに好王は與に仁義を言ふに足らずと ● 是の如く云ふ ● 禮記玉藻篇、但同じ小儀あり、論語に全文見ゆ ● 卽座に行く ● 馬車の支度を持たぬなり ● 禮に反するを強固に云ひしなり ● 是の字は、孟子始めて景子の言を合點せし如く、さては、左傳の御考

富。我以吾仁。彼以吾爵。我以吾義。吾何慊乎哉。夫豈不義而曾子言之。是或一道也。天下有達尊三。爵一。齒一。德一。朝廷莫如爵。鄉黨莫如齒。輔世長民莫如德。惡得有其一以慢其二哉。故將大有爲之君。必有所不召之臣。欲有謀焉。則就之。其尊德樂道。不如是。不足與有爲也。故湯之於伊尹。學焉而後臣之。故不勞而王。桓公之於管仲。學焉而後臣之。故不勞而霸。今天下地醜德齊。莫能相尙。無他。好臣其所教。而不好臣其所受教。湯之於伊尹。桓公之於管仲。則不取。召。管仲且猶不可。召。而況不爲管仲者乎。

陳臻問曰。前日於齊。王餽兼金一百。而不受。於宋。餽七十鎰。而受。於薛。餽五十

陳臻問うて曰く、前日齊に於て、王に兼金一百を餽らる。而して受けず。宋に於て七十鎰を餽らる。而して受く。薛に於て五十鎰を餽らる。而して受く。前日の受けざる是ならば、則ち今日の受くる非なり。今日の受くる是ならば、則ち前日の受けざる非なり。夫子必ず一に此に居らん。孟子曰く、皆是なり。宋

へなりしかの意、一説に前の禮記の文を指す、我れは、いかで臣下の常禮をいふべきと、  
① 爵は足らぬやうに思ふなり  
② 曾子はいかて義に合はぬことをいふべき、是れも、一つの道理あることなりといふこと  
③ 何方にも通じ難きものなり  
④ 兩位なり  
⑤ 年齒なり  
⑥ 道徳なり  
⑦ 世を輔佐する  
⑧ 人民の師長となるなり  
⑨ 爵位を指す  
⑩ 年齒と道徳とを指す  
⑪ 無難す  
⑫ 醜は、類なり、領地の醜さの似寄りたるなり  
⑬ 主君の徳の同等  
⑭ 過ぐらなり  
⑮ 管仲の爲す所を爲さざるもの

終。而受。前日之不受。是則今日之受非也。則前日之不受。非也。夫子必居一於此矣。孟子曰。皆是也。當在宋也。予將有遠行。行者必以贖。辭曰。餽。予何爲不。受。當在薛也。曰。聞戒。故爲兵餽之。子何爲不受。若於齊則未有處也。無處而餽之。是貨之也。焉有三君子而可以貨取一乎。

に在るに當つては、予將に遠行あらんとす。行者は必ず贖を以てす。辭に曰く、贖を餽ると。予何爲れぞ受けざらん。薛に在るに當りては、予戒心あり。辭に曰く、戒を聞く、故に兵の爲に之を餽ると。予何爲れぞ受けざらん。齊に於けるが若きは、則ち未だ處する有らざるなり。處するなくして之を餽る、是れ之を貨にするなり。焉ぞ君子にして貨を以て取らる可き有らんや。

① 孟子の弟子、齊の人なり  
② 先頃なり  
③ 好き金なり、其の價、常の者に幾倍するが故に、兼金といふとと相成るべしとの意  
④ 後日に同じ、前日に對していふ  
⑤ 先生の御行動の内孰れか一方は道徳に叶はぬ事と相成るべしとの意  
⑥ 餽別物なり  
⑦ 宋の君の口上  
⑧ 用心なり  
⑨ 薛の君の口上なり  
⑩ 旅行することなく、用心することなく、まだ何の處置する事もあらぬなり、一説に、贖別物の爲めにもあらず、兵備の補助の爲めにもあらず、まだ何の名義もなきなりと  
⑪ 金にて情實を作りて引きしめんとす、一説には、其の金を何の名義もなきに、贈ることなりといへり  
⑫ 其の身を並にて買ひ取る、なり、一説に、何の名義もなき金を、受け取ることあらんやと、この説に従へば「取る可き」と訓す

爲不受。若於齊則未有處也。無處而餽之。是貨之也。焉有三君子而可以貨取一乎。

孟子之平陸。謂其大夫曰。子之持戟之士。一日而三失伍。則去之。否乎。曰。不待三。然則子之失伍也。亦多矣。凶年饑歲。子之民老羸。轉於溝壑。壯者散而之四方者。幾千人矣。曰。此非距心之所不得爲也。曰。今有受二人之牛羊。而爲之牧之者。則必爲之求。牧與芻矣。求

孟子平陸に之き、其大夫に謂ひて曰く、子の持戟の士、一日にして三たび伍を失はば、則ち之を去るや否や。曰く、三を待たず。然らば、則ち子の伍を失ふ、亦多し。凶年饑歲、子の民は、老羸は溝壑に轉じ、壯者は散じて四方に之く者幾千人なり。曰く、此れ距心の爲すを得る所に非ざるなりと。曰く、今人の牛羊を受けて之が爲に之を牧する者あらん。則ち必ず之が爲めに牧と芻とを求めん。牧と芻とを求めて得ざれば、則ち諸を其人に反さんか。抑々亦立ちて其死を視んか。曰く、此れ則ち距心の罪なりと。他日王に見えて、曰く、王の都を爲さむる者、臣五人を知れり。其罪を知る者は惟孔距心のみと。王の爲めに之を誦す。王曰く、此れ則ち寡人の罪なり。

● 齊の邑なり ● 兵を討むる官 ● 戟を持つ士にて、守衛の士なり ● 伍列を外す ● 罷め去るなり ● 晉殿にも失政多しとの意 ● 毀れたるなり ● 己れの一了簡にて取り計らふ譯にはゆかずと、距心とは大夫の名 ● 牛羊を飼ふなり ● 牧場と草となり ● その牛羊を所有主にかへすか、それともその體見殺しにするかと也、以て民を治めて爲す能はずんば何ぞ其罪を致さざるとの意を諷する也 ● 其の後なり ● 文配するなり、都はくなる邑の意 ● 孔は大夫の姓 ● 己れと孔距心との問答を述ぶ

牧與芻而不得。則反詰其人乎。抑亦立而視其死與。曰。此則距心之罪也。他日見於王。曰。王之爲都者。臣知五人焉。知其罪者。惟孔距心爲王誦之。王曰。此則寡人之罪也。

孟子謂蚺鼈曰。子之辭靈丘而請士師。似也。爲其可也。以言矣。未可也。數月矣。未可也。以言與。蚺鼈諫於王而不聽。用致爲臣而去。齊人曰。所以爲蚺鼈則善矣。所以自爲則吾不知也。公都子以告。曰。吾聞之也。有官守者。

孟子蚺鼈に謂つて、曰く、子の靈丘を辭して、而して士師を請ふは、似たるなり。其以て言ふ可きが爲めなり。今既に數月なり。未だ以て言ふ可からざるか。蚺鼈王を諫めて用ひられず。臣爲るを致して去る。齊人曰く、蚺鼈の爲にする所以は、則ち善し。自ら爲にする所以は、則ち吾知らざるなり。公都子を以て告ぐ。曰く、吾之を聞く。官守有る者は、其職を得ざれば則ち去る。言責ある者は、其言を得ざれば則ち去る。我は言責なし。則ち吾が進退は、豈に綽綽然として餘裕のらざらんや。

● 齊の大失 ● 齊の邑なり ● 賦を治する官 ● 道理あるに似たり ● 仕へを返上するなり ● 齊人が孟子を非難して次の如くいふ ● 自己の爲にする所は善ならず ● 孟子の弟子 ● 官に居り職を守るなり ● 君を諫むるの任なり



不得其職則去。有言責者不得其言則去。我無官守。我無言責也。則吾進退豈不綽綽然有餘裕哉。

孟子爲卿於齊。出弔於滕。王使蓋大夫王驪爲輔行。王驪朝暮見。反齊滕之路。未嘗與之言。行事也。公孫丑曰。齊卿之位。不爲小矣。齊滕之路。不爲近矣。反之而未嘗與言。行事何也。曰。夫既或治之。予何言哉。

孟子自齊葬。孟子齊に弔たり。出でて滕に弔す。王蓋の大夫王驪をして輔行たらしむ。王驪朝暮に見ゆ。齊滕の路を反し、未だ嘗て之と行事を言はざるなり。公孫丑曰く、齊卿の位は、小と爲さず。齊滕の路は、近しと爲さず。之を反し、未だ嘗てともに行事を言はざるは何ぞや。曰く、夫れ既に之を治むるあり。予何を言はんや。

孟子自齊葬。孟子齊より魯に葬る。齊に反り、贏に止る。充虞請ひて曰く、前日虞の不肖

- ① 齊の邑なり
- ② 訓使
- ③ 往復するなり
- ④ 使者の用事なり
- ⑤ 孟子を指す、朱註には王驪を指せりと爲せども當らざるに似たり
- ⑥ 既に外に其事を治むる人則ち王驪あり、彼れは疾くに用事を解へたりと即ち暗に王驪の君寵を恃みて專斷なるをいへる也

於魯反於齊。止於贏。充虞請曰。前日不使。虞敦匠事。嚴。虞不敢請。今願竊有請也。木若以美。棺七寸。梓稱之。自天子達於庶人。非直爲觀美也。然後盡於人心。不得。不可。以爲悅。無財。不可以爲悅。得之。爲有財。古之人皆用之。

を知らず。虞をして匠を敦うせしむ。事嚴なり。虞敢て請はざりき。今願くは竊かに請ふ有らん。木以だ美なるが若く然り。曰く、古者は棺椁度なし。中古は棺七寸、梓之に稱ふ。天子より庶人に達す。直に觀の美を爲すに非ず。然して後に人心を盡す。得ざれば、以て悅を爲す可からず。財なければ、以て悅を爲す可からず。之を得て財ありと爲さば、古の人皆之を用ふ。吾何爲れぞ獨り然らざらん。且つ化する比までに、土をして膚に親しからしむるなくば、人心に於て獨り悦き無かんや。吾之を聞く、君子は天下を以て其親に儉せずと。

- ① 母を養ふに魯に歸葬せしなり
- ② 齊の邑
- ③ 孟子の弟子なり
- ④ 愚者といふ意、賢きことの父に似ざる義
- ⑤ 厚く棺を作るなり、一説には、下の事の字までを一句として、敦匠事とす
- ⑥ 費用の事なり、一説には、孟子の喪に居る禮の謹嚴なるなりと
- ⑦ 已と通ず、太だなり
- ⑧ 棺の厚さに釣り合ふ
- ⑨ 厚さの寸法の極まりなし
- ⑩ 周公の禮を別せし時を指す
- ⑪ 棺の厚さに釣り合ふ
- ⑫ 平民なり
- ⑬ 但と同じ
- ⑭ 外見の美
- ⑮ 王制の禁ずる所用ふるを得ざるなり
- ⑯ 七寸の木を購ふ資財なきなり、一説には、財は、材と通じて、棺の材なりと
- ⑰ 禮法の上にて、之れを用ひることを得たるが上に、資財の之れを購ふに足るなり
- ⑱ 中古

吾何爲獨不  
然。且比化者。  
無使士親膚。  
於入心獨無  
伐乎。吾聞之也。君子不以天下儉其親。

以來の人 親の身體の變化するにまで、一説に比は爲なり死者の爲めなり、死者といはずして化者といへば、親の爲めに遠慮せるなり ① 近づくなり ② 快きなり ③ 天下の爲めになるを以て ④ 手薄にする

沈同以二其私  
問曰。燕可伐  
與。孟子曰。可。  
子噲不得與  
人燕。子之不  
得受燕於子  
噲。有仕於此。  
而子悅之。不  
告於王。而私  
與之。吾子之  
祿爵。夫士也。  
亦無王命。而  
私受之。於子

沈同其私を以て問うて、曰く、燕伐つべきか。孟子曰く、可なり。子噲人に燕を與ふるを得ず。子之燕を子噲に受くるを得ず。此に仕ふる有らん。而して子之を悦び、王に告げず、而して私かに之に吾子の祿爵を與ふ。夫の士や、亦王命なくして、而して私かに之を子に受けば、則ち可ならんか。何を以て是れに異ならん。齊人燕を伐つ。或ひと問ひて曰く、齊に勸めて燕を伐しむと。諸れ有るか。曰く、未し。沈同問ふ、燕伐つべきか。吾之に應へて曰く、可なりと。彼然り而して之を伐つなり。彼如し孰れか以て之を伐つ可きと曰はば、則ち將に之に應へて天吏爲らば、則ち以て之を伐つ可しと曰はんとす。今人を殺す者あらん。

則可乎。何以  
異於是。齊人  
伐燕。或問曰。  
勸齊伐燕。有  
諸。曰。未也。沈  
同問。燕可伐  
與。吾應之曰。  
可。彼然而伐  
之也。彼如曰。  
孰可以伐之。  
則將應之曰。  
爲天吏則可。  
以伐之。今有  
曰。爲士師則  
可以殺之。今  
以殺之。今以  
殺之。今以殺  
之。今以殺之。

或ひと之を問ひて曰く、人殺す可きか。則ち將に之に應へて可しと曰はんとす。彼如し孰れか以て之を殺す可きと曰はば、則ち將に之に應へて士師爲らば、則ち以て之を殺す可しと曰はんとす。今燕を以て燕を伐つ。何爲ぞ之を勸めんや。  
● 齊の臣 ① 王命にあらざる個人として ② 燕土なり ③ 燕土の宰相なり、當り燕土の命を以てせず理由なきに魯國を其相子にあらたへ、子之之を受けたり、乃ち與ふべからざるを與へべくべからざるをうくるが如きは大亂の起る所以、天誅を加へて可なりと ④ 沈同をいふ ⑤ 吾子とはおまへなり ⑥ 答と同じ ⑦ 天の便する所のもの即ち王の天意を得たるものを謂ふ ⑧ 罪ある人を殺すなり ⑨ 司獄の吏 ⑩ 結局論と變りなき野に蕪を討つべうな事は、めはしない

燕人畔。王曰。  
吾甚慙於孟  
子。陳賈曰。王  
無患焉。王自

燕人畔く。王曰く、吾甚だ孟子に慙づ。陳賈曰く、王患ふる無かれ。王自ら以て周公と孰れか仁且つ智なりと爲す。王曰く、惡是れ何の言ぞ。曰く、周公管叔をして殷を監せしむ。管叔殷を以て畔く。知つて之を使むれば、是れ不仁

以爲與周公  
孰仁且智王  
曰惡是何言  
也曰周公使  
管叔監殷管  
叔以殷畔知  
而使之是不  
仁也不知而  
使之是不智  
也仁智周公  
未之盡也而  
況於王乎賈  
請見而解之  
見孟子問曰  
周公何人也  
曰古聖人也  
曰使管叔監  
殷管叔以殷  
畔也諸曰  
然曰周公知

なり。知らずして之を使むれば、是れ不智なり。仁智は周公も未だ之を盡さざるなり。而るを況や王に於てをや。賈請ひ見て之を解かん。孟子に見えて問うて曰く、周公は何人ぞや。曰く、古の聖人なり。曰く、管叔をして殷を監せしむ。管叔、殷を以て畔くと、諸れ有るか。曰く、然り。曰く、周公は其の畔かんとするを知りて之を使むるか。曰く、知らざるなり。然らば則ち聖人、且つ過有るか。曰く、周公は弟なり、管叔は兄なり。周公の過、亦宜ならずや。且つ古の君子は、過てば則ち之を改む。今の君子は、過てば則ち之に順ふ。古の君子は、其過や日月の食の如し。民皆之を見る。其更むるに及んでや、民皆之を仰ぐ。今の君子は、豈に徒に之に順ふのみならんや。又従つて之が辭を爲す。

○ 齊の大夫 ○ 名は、薛といふ、武王の弟、周公の兄なり、邑を管に食めり ○ 周公武王を輔佐して紂王の子の武庚を殷に立て、管叔をして之を監督せしむ ○ 武王の崩じたる後に、管叔殷の地に據りて、謀叛せしかば周公之れを誅せり ○ 周公は管叔の謀叛せむことを豫め知りながら、殷を監督せしめしとすれば

其將叱而使  
之與曰不知  
也然則聖人  
且有過與曰  
周公弟也管  
叔兄也周公  
之過也如日  
月之食民皆  
見之及其更  
也民皆仰之  
今之君子豈  
徒順之又從  
而爲之辭

失策を辯解せん ○ 昔の君子即ち眞君子なり ○ 今の君子即ち偽君子なり ○ 其の德に順應して非を改む  
○ 日蝕月蝕 ○ 改むるなり、蝕し畢はりて復た明かになるなり ○ 只にその過に順應して之を推し通すのみならず、色々と言ひ草を作りて之が辯解を爲す也

孟子致爲臣  
而歸王就見  
孟子曰前日  
願見而不可  
得待待同朝  
甚喜今又棄  
寡人而歸不  
識可以繼此  
而得見乎對  
曰不敢請耳  
固所願也他

孟子臣たるを致して歸る。王就いて孟子を見て曰く、前日見るを願ひて得べからず。同朝に侍するを得て甚だ喜ぶ。今又寡人を棄てて歸る。識らずして此に繼ぎて見るを得べきか。對へて曰く、敢へて請はざるのみ。固より願ふ所なり。他日王、時に謂つて曰く、我中國にして孟子に室を授け、弟子を養ふに萬鍾を以てし、諸大夫國人皆矜式する所あらしめんと欲す。子盍ぞ我が爲めに之を言はざる。時子、陳子に因りて以て孟子に告げしむ。陳子、時子の言を以て孟子に告ぐ。孟子曰く、然り。夫の時子、惡ぞ其不可なるを知らん。如し予を

日王謂時子曰。我欲中國而授孟子室。養弟子以萬鍾。使諸大夫國。人皆有所以矜式。子盍爲我言。之。時子因陳子而以告孟子。陳子以時子之言。告孟子。孟子曰。然。夫時子惡。知其不可也。如使予欲富。辭二十萬。而受萬。是爲欲富乎。季孫曰。異哉。子叔疑。使已爲政。不

して富を欲せしめば、十萬を辭して萬を受く、是れ富を欲すと爲さんや。季孫曰く、異なるかな子叔疑。己をして政を爲さしめ、用ひざれば則ち亦已まん。又其子弟をして卿たらしむと。人亦孰れか富貴を欲せざらん。而して獨り富貴の中に於て、龍斷を私する有り。古の市を爲す、其有る所を以て、其無き所に易ふるは、有司は之を治むるのみ。賤丈夫有り。必ず龍斷を求めて之に登り、以て左右に望んで市利を罔す。人皆以て賤と爲す。故に従うて之を征す。商を征するは此賤丈夫より始まる。

● 齊に致仕して剛に歸るなり ● 孟子の未だ齊に仕へざる時 ● 朝辭にて、孟子の朝辭に待座することを得る意、王の諱辭なり ● 此の彼なり ● 齊の臣なり ● 國の中央なり ● 家なり ● 萬鍾は、六萬四千斗の穀なり、一鍾は、六斛四斗なり ● 敬ひ法るなり ● 陳諱なり ● 時子の言は左標の意 ● 齊に留まるべからざるをり ● 卿となりても、十萬鍾の穀を辭して受けざりしなり ● 何人なるか詳ならず、或は曰く、魯の卿の季孫氏なりと ● 合語のゆかぬことである ● 何人なるか詳ならず、一説に此句を「子叔疑」と訓ず ● 子叔疑を指す ● 子叔疑の子弟なり ● 謂は、照と同じ小高き岡なり、斷は、切り立ちたるなり、切り立ちたる小高き岡を岡りにて占む、此文を出而として、利益圖占の意の熟語として用ひたる ●

用則亦已矣。又使其子弟爲卿。人亦孰不欲富貴。而獨於富貴之中有私龍斷焉。古之爲市者。以其所有易其所無者。有司者治之耳。有賤丈夫焉。必求龍斷而登之。以左右望而罔市利。人皆以爲賤。故從而征之。征商自此賤丈夫始矣。

市場にて、品を容易するなり ● 市場の役人なり ● 心の賤しき男 ● 左右を見渡すなり ● 市場の利益を一顧にするなり ● 税を取るなり

孟子去齊。宿於晝。有欲爲王留行者。坐而不言。不應。隱几而臥。客不悅。曰。弟子齊宿而後敢言。夫子臥而不聽。請勿復敢見矣。曰。坐。我明語子。昔者魯繆公。無人

孟子齊を去り、晝に宿す。王の爲めに行を留めんと欲する者あり。坐して言ふ。應へず。凡に隠りて臥す。客悦ばずして曰く、弟子齊宿して而る後に敢て言ふ。夫子臥して聽かず。請勿復敢て見る勿からん。曰く、坐せよ。我明に子に語けん。昔者魯の繆公、子思の側に人無くんば、則ち子思に安する能はず。泄柳・申詳、繆公の側に人無くんば、則ち其身を安する能はず。子長者の爲めに慮りて子思に及ばず。子長者を絶つか、長者子を絶つか。

● 齊の西南の邑 ● 肘突きに寄り掛かるなり ● 客人の諱辭 ● 前後より物忌みをするなり ● 子思の側に己の執事す人の居合せせぬなり、子思は孫子の孫なり、名は俊 ● 泄柳は、魯人なり、申詳は、孔子の弟



乎子思之側一  
則不能安子  
思。泄柳申詳  
無人乎纒公之側。則不能安其身。子爲長者慮而不及子思。子絕長者乎。長者絕子乎。

孟子の子なり、共に賢者なり。① 纒公の側に己一執成一人の別合はせぬなり。② 孟子自らを稱す。③ 吾が爲に疑るも子思に及ばず却て泄柳等の如く我を王に執成さんとす。④ 口裏つるなり。

孟子去齊尹  
士語人曰不可  
以爲湯武則  
是不明也識  
其不可然且  
至。則是于澤  
也。千里而見  
王。不遇故去。  
三宿而後出。  
費是何濡滯  
也。士則茲不  
悅。高子以告。  
曰。夫尹士惡  
知予哉。千里

孟子去齊を去る。尹士人に語りて曰く、王の以て湯武たる可からざるを説らざれば、則ち是れ不明なり。其不可なるを識り然して且つ至るは、則ち是れ澤を干むるなり。千里にして王を見、遇はざる故に去る。三宿して而る後に書を出づ、是れ何ぞ濡滯なる。士は則ち茲に悦ばずと。高子以て告ぐ。曰く、夫の尹士は惡そ予を知らんや。千里にして王を見る、是れ予が欲する所なり。遇はざる故に去る、豈に予が欲する所ならんや。予已むを得ざるなり。予三宿して書を出づるも、予が心に於ては猶ほ以て速なりと爲す。王庶幾くは之を改めよ。王如し諸れを改めば、則ち必ず予を反さん。夫れ書を出で王予を追はざるや、予然る後、浩然として歸志あり。予然りと雖も豈に王を捨てんや。王由ほ用て善

而見王。是予  
所欲也。不遇  
故去。豈予所  
欲哉。予不得  
已也。予三宿  
而出。書於予  
心。猶ほ以爲速  
王庶幾改之。  
王如改諫。則  
必反予。夫出  
書而王不子  
道也。予然後  
浩然有歸志。  
予雖然豈舍  
王哉。王由是  
用爲善。王如用予。則豈徒齊民安。天下之民舉安。王庶幾改之。予日望之。予豈若是小丈夫然哉。諫於其君而不受。則怒悻悻然見於其面。去則窮日之力。而後宿哉。尹士聞之曰。士誠小人也。

を爲すに足る。王如し予を用ひば、則ち豈に徒に齊の民安きのみならん、天下の民舉安らん。王庶幾くは之を改めよと。予日に之を望む。予豈に是の小丈夫の若く然らんや。其君を諫めて受けざれば則ち怒り、悻悻然として其面に見れ、去れば則ち日の力を窮めて而る後に宿せんや。尹士之を聞きて曰く、士は誠に小人なり。

① 齊人なり ② 殷の湯王、周の武王、何れも古への聖人なり ③ 王の湯武たるべからざるなり ④ 恩澤、益をいふ ⑤ 遲滯なり ⑥ 士は尹士のこと其名を自稱するなり、尹士を子の心算を了せず思慮土の恩澤を求むるに在りて爲す、故に其夫ることの遅々たるを陋とするなり ⑦ 齊人にして孟子の弟子 ⑧ 還志なり、水の流れて歸らぬ有様 ⑨ 以てなり ⑩ 怒る聲 ⑪ 日出より日没まで日一ぱい行き得るだけ行き去りて宿泊する義にて去るの速かなをいふ ⑫ 私に成程小人です

孟子去齊。充虞路問曰。夫子若有不豫色然。前日虞君謂夫子曰。君子不怨天。不尤人。曰。彼一時也。此一時也。五百年必有王者興。其間必有二名。世者。由周而來。七百有餘歲矣。以其數則過矣。以其時一考之。則可矣。夫天未欲平治天下也。如欲平治天下。當今之世。舍我其誰也。吾何為不豫哉。

孟子去齊居

孟子齊を去りて休に居る。公孫丑問うて曰く、仕へて祿を受けざるは、古の

孟子齊を去る。充虞路に問ひて曰く、夫子不豫の色有るが若く然り。前日、虞諸を夫子に聞けり。曰く、君子は天を怨みず、人を尤めず。曰く、彼も一時なり、此も一時なり。五百年必ず王者興る有り。其間必ず世に名ある者有り。周よりこのかた、七百有餘歳、其數を以てせば、則ち過ぎたり。其時を以てせば、之を考ふるに、則ち可なり。夫れ天未だ天下を平治せんと欲せざるなり。如し天下を平治せんと欲せば、今の世に當つて、我を捨てて其れ誰ぞ。吾何爲れぞ不豫せんや。

● 途中に於て ● 不愉快の顔色 ● 咎む ● 彼も一時とは、昔高武の出でたるは王者の興るべき一個の時なり、此も一時とは今、亦王者の當に興るべき一個の時なり ● 帝堯より殷の湯王までは、五百八十年なり、湯王より紂王までは、六百二十八年にして、周の文王、武王興れり ● 阜陶、殷、契、伊尹の如き、一世に名望ある者 ● 周の文王、武王より以來なり ● 又と通ず ● 時勢を考へると、亂極まりて治を思ふ時なり ● 今や吾が不豫するは樂國の制止すべからざればなりとの意を含む

休。公孫丑問曰。仕而不受祿。古之道乎。曰。非也。於崇吾得見王。退而有志。不欲變。故不受也。繼而有師命。不可以請。久於齊。非我志也。

道か。曰く、非なり。崇に於て吾王に見ゆるを得たり。退いて去志あり。變ずるを欲せず、故に受けざるなり。繼で師命あり。以て請ふ可からず。齊に久しきは、我が志に非ざるなり。

● 地名 ● 地名 ● 齊を去る志を變せざるなり ● 師命は師旅の命なり、故に去らんことを請ふを得ず

卷之五

滕文公章句上

滕文公爲世子。將之楚。過宋而見孟子。孟子道性善。言必稱堯舜。世子自楚反。復見孟子。孟子曰。世子疑吾言乎。夫道一而已矣。成覲謂齊景公曰。彼丈夫也。吾我丈夫也。吾

滕の文公世子たり。將に楚に之かんとす。宋を過ぎ、而して孟子を見る。孟子性善を道ふ。言へば必ず堯舜を稱す。世子楚より反り、復孟子を見る。孟子曰く、世子吾が言を疑ふか。夫れ道は一つのみ。成覲齊の景公に謂つて曰く、彼も丈夫なり。我も丈夫なり。吾何ぞ彼を畏れんや。顔淵曰く、舜は何人ぞ。予何人ぞと。爲す有る者は亦是の若し。公明儀曰く、文王は我が師なり。周公は豈に我を欺かんや。今滕長を絶ち短を補はば、將に五十里ならんとす。猶ほ以て善を爲す可き國なり。書に曰く、若し藥眩眩せざれば、厥の疾瘳えずと。

● 世祖の太子なり ● 楚に使して ● 天下の道は善を行ふ一筋のみぞ ● 齊の景公の勇臣なり ● 或る勇者を指す、一説には貴人といひ、又聖賢を指すといふ ● 事をするところある者は成覲、顔淵の如く強

何畏彼哉。顔淵曰。舜何人也。予何人也。有爲者亦若是。公明儀曰。文王我師也。周公豈欺我哉。今滕絶長補短。將五十里也。猶可二以爲善國。書曰。若藥不眩眩。厥疾不瘳。

す、一説に顔淵の言葉とす ● 魯の賢者なり ● 文王は我が師として流るべき人なり、周公の言葉はいかて我れを欺くことあらむ、一に文王云々の句を周公の語とし、周公云々の句を公明儀の語とす ● 地面の長き處を絶ち、切りて短き處に繋ぎ足して四角に見積るなり ● 一に「以て善國と爲る可し」と訓ず ● 今の書影商書説命の篇 ● 日舞ひのすることなり ● 其の病氣は直るまじと、蓋し以て世子を賜まし、斯る精神にて放蕩せざれば善は爲すべからずとの意に、此文を引けるなり

滕定公薨。世子謂然友曰。昔者孟子嘗與我言於宋。於心終不忘。今也不幸至於大故。吾欲使子問於孟子。然後行。事。然友之鄉。問於孟子。孟子

滕の定公薨す。世子、然友に謂ひて曰く、昔者孟子嘗て我と宋に言へり。心に於て終に忘れず。今や不幸にして大故に至る。吾、子をして孟子に問はしめ、然る後事を行はんと欲す。然友郷に之き、孟子に問ふ。孟子曰く、亦善からずや。親の喪は固より自ら盡す所なり。曾子曰く、生るには之に事ふるに禮を以てし、死するには之を葬るに禮を以てし、之を祭るに禮を以てす。孝と謂ふ可し。諸侯の禮は、吾未だ之を學ばざるなり。然りと雖も吾嘗て之を聞けり。三年の喪、齊疏の服、飢粥の食は、天子より庶人に達す。三代之を共にす。然友反命し、定めて三年の喪を爲

曰不亦善乎。親喪固所自盡也。曾子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。可謂孝矣。諸侯之禮。吾未之學也。雖然。吾嘗聞之矣。三年之喪。齊疏之服。紆粥之食。自天子達於庶人。三代共之。然友反命。定爲三年之喪。父兄百官皆不欲。曰。晉宗國魯先君莫之行。吾

す。父兄百官皆欲せずして、曰く、吾が宗國魯の先君も之を行ふ莫し。吾が先君も亦之を行ふ莫きなり。子の身に至りて之に反するは不可なり。且つ志に曰く、喪祭は先祖に従ふと。曰く、吾之を受くる所有りと。然友に謂ひて曰く、吾他日未だ嘗て學問せず、好んで馬を馳せ劍を試む。今や父兄百官、我を足れりとせざるなり。其大事を盡す能はざるを怒る。子我が爲めに孟子に問へ。然友復郷に之き孟子に問ふ。孟子曰く、然り、以て他に求む可からざる者なり。孔子曰く、君薨すれば、冢宰に聽き、粥を飲り、而深墨、位に即きて哭す。百官有司敢て哀まざる莫しと。之に先するなり。上、好む者有れば、下必ず焉れより甚しき者有り。君子の徳は風なり。小人の徳は艸なり。艸之に風を尙ふれば必ず偃す。是れ世子に在り。然友反命す。世子曰く、然り、是れ誠に我に在り。五月廬に居り、未だ命戒有らず。百官族人、可とし謂つて知と謂ふ。葬るに至るに及び、四方來り之を觀る。顔色の戚み、哭泣の哀み、弔者大いに悦ぶ。

先君亦莫之行之也。至於子之身而反之。不可。且志曰。喪祭從先祖。曰吾有所受。曰吾他日未嘗學問。好聽馬試劍。今也父兄百官不我足也。恐其不能盡於大事。子爲我問之。鄭問孟子。孟子曰。然。不可以他求者也。孔子曰。君薨聽於冢宰。飲粥而深墨。即位而哭。百官有司莫敢不哀。先之也。上有好者。下必有甚焉者矣。君子之德。風也。小人之德。艸也。艸尙之風。必偃。是在世子。然友反命。世子曰。然。是誠在我。五月居廬。未有命戒。百官族人。可謂曰。知。及至葬。四方來觀之。顔色之戚。哭泣之哀。弔者大悦。

① 世子の守り役の人名 ② 親の喪をいふ、大なる事故の意 ③ 喪の事 ④ 御等はは御結構な事と存じます ⑤ 自身にて心の丈を盡くすなり ⑥ 年回の祭りなり ⑦ 喪服なり ⑧ 衾は濃き粥なり、粥は薄き粥なり ⑨ 夏、殷、周三代 ⑩ 復命なり、君に受けたる命令の返事をするなり ⑪ 一家一族、及び諸役人なり ⑫ 本家の固なり、魯の先祖は、厲公にして、厲の先祖は其の弟の叔纘なればなり ⑬ 記録なり ⑭ 吾は三年間の喪に備ふるべきことを成人より受け傳はりたりと、暗に孟子を指す、一説に先祖より行ふ禮は吾が受け傳はりたることありとの意と、自儘に改むべきものにあらずと ⑮ 我に満足せぬなり ⑯ 大切なる喪の禮を行ふ事なり ⑰ 衆人の異議はさもあるべしと也 ⑱ 他人に望み求むるなり ⑲ 天子諸侯を指す ⑳ 上席の老臣に政事を聽かしむるなり ㉑ 粥を啜るなり ㉒ 面色の甚だ暗くなることなり ㉓ 喪の禮に就きて聲を立て、泣くなり ㉔ 一家一族、及び諸役人に先立つなり ㉕ 位ある人を指す ㉖ 分限の尊下の徳も同じ ㉗ 位なき人 ㉘ 吹き掛くるなり ㉙ 伏すなり ㉚ 孟子の教訓はさもあるべしといふことなり ㉛ 諸侯は五箇月にして葬らる、其の想らぬ間は、嗣君は愉戯に備ふるなり、愉戯とは中門の外、東牆の下に木を倚せ掛けて作りたる廬なり ㉜ 命令教戒なり ㉝ 禮を心得たるなり ㉞ 世子の顔色の痛ましきさまなり ㉟ 弔者 ㊱ 心中にさもあるべしと禮の厚きを満足に思ふ



滕文公問爲國。孟子曰。民事不可緩也。詩云。晝爾于茅。宵爾索綯。亟其乘屋。其始播百穀。民之爲道也。有恆產者有恆心。無恆產者無恆心。苟無恆心。放辟邪侈。無不爲已。及陷乎罪。然後從而刑之。是罔民也。焉有仁人在位。罔民而可爲也。是故賢君必恭儉禮下。

滕の文公國を爲むるを問ふ。孟子曰く、民事は緩くすべからざるなり。詩に云ふ、晝は爾于きて茅れ、宵は爾索綯へよ、亟かに其れ屋に乗れ。其れ始めて百穀を播せんと。民の道たる、恆産ある者は、恆心あり。恆産無き者は、恆心無し。苟も恆心無ければ、放辟邪侈、爲さざる無きのみ。罪に陥るに及びて、然る後從ひて之を刑す。是れ民を罔するなり。焉ぞ仁人位に在る有り。民を罔するを爲すべけんや。是の故に賢君は必ず恭儉にして下を禮し、民に取る制有り。陽虎曰く、富を爲せば仁ならず。仁を爲せば富ます。夏后氏は五十にして貢し、殷人は七十にして助す、周人は百畝にして徹す、其實は皆什が一なり。徹は徹なり。助は藉なり。龍子曰く、地を治むるは助より善きは莫し。貢より善からざるは莫し。貢は數歲の中を授し、以て常と爲す。樂歲には粒米狼戾す。多く之を取れども、虐と爲さず。則ち寡く之を取る。凶年には其田に糞ひて足らざれども、則ち必ず取らば益つ。民の父母と爲り、民をして時時然として將に終歲

取於民有制。陽虎曰。爲富不仁矣。爲仁不富矣。夏后氏五十而貢。殷人七十而助。周人百畝而徹。其實皆什一也。徹者。徹也。助者。藉也。龍子曰。治地莫善於助。莫不善于貢。貢者。校數歲之中。以爲常。樂歲粒米狼戾。多取之。凶年糞取之。凶年糞其田而不不足。

勤動し、以て其父母を養ふを得ざらしむ。又貸を稱して之を益し、老師をして溝壑に轉ぜしむ。惡ぞ其民の父母たるに在らん。夫れ世祿は滕固より之を行ふ。詩に云ふ。我が公田に雨り、遂に我が私に及べと。惟助に公田ありと爲す。此に由つて之を觀れば、周と雖も亦助するなり。

● 農事なり ● 糞糞なり ● 詩經の國風の部の七引の篇なり ● 子は往くなり、往きて茅を刈れといふことなり ● 晝をな一 ● 早くなり ● 屋根に上れ、屋根を修繕せよとの意 ● 色々の穀物の種を蒔くなり ● 常の產業あるものは常の心ありの意、此の前後の文、既に梁惠王上篇に出づ ● 民は課税するに一定のきまりあり ● 勢の季氏の家臣の賜賚なり ● 五十畝の田地を受けて、五畝即ち其の十分の一の收穫を上納するを貢といふ ● 井田地を九區に分かちて一區を七十畝とし、中央の一區を公田とし、四圍の八區を私田とし、八家各私田に表蓋して同じく公田を養ひて其の收穫を上納するを助といふ ● 九十畝の田地を九區に分かちて、一區を百畝とし、中央の一區を公田とし、四圍の八區を私田とし、八家各私田に表蓋して、同じく公田を養ひて其の收穫を上納するなり ● 夏の貢法は、十分の一にして、殷の助法、則の徹法は九分の一なれど精密に計算すれば、其の實際は皆十分の一に止まりたるなり ● 取らざりとも通ずるなりとも解せり、取るなりといへば物を取るとなり、通ずるなりといへば天下の通法のこととなり、八家の力を通じて公田を耕すことともなる

則必取盈焉。爲民父母使民盼然將終歲勤動不怠得三以養其父母。又稱貸而益之。使老穉轉乎溝壑。惡在。其爲民父母也。夫世祿膠固行之矣。詩云。雨我公田。遂及我私。惟助爲有。公田。由此觀之。雖周亦助也。

なり。借るなり、八家の力を借りて公田を耕すことなり。昔の賢人なり。数年の収穫の平均を考へて年貢の高の常數とするなり。惜氣もなく米粒の落ち散りてあるなり。肥料を施すなり。常數に滿たすまで取り立つるなり。うちみ視ること。農家の元手を貸し付けて利息を取りて以て年貢の常數を増加するなり。老人子供より。詩經の小雅大田篇の詩。井田の制に依る公田なり。井田の制に依る私田なり。

設爲庠序學校以教之。庠者養也。校者教也。序者射也。夏曰校。殷曰序。周曰庠。學則三代共之。皆所以明人倫也。人倫

庠序、學校を設け爲し以て之を教ふ。庠とは養なり。校とは教なり。序とは射なり。夏に校と曰ひ、殷に序と曰ひ、周に庠と曰ふ。學は則ち三代之を共にす。皆人倫を明かにする所以なり。人倫上に明かに、小民下に親む。王者起る有れば、必ず來りて法を取らん。是れ王者の師と爲るなり。詩に云ふ、周は舊邦と雖も其命惟れ新たりと。文王の謂ひなり。子之を力行せば、亦以て子の國を新にせ

明於上。小人親於下。有王者起。必來取法。是爲三王者師也。詩云。周雖萬邦。其命維新。文王之謂也。子力行之。亦以新子之國。使畢戰問井地。孟子曰。子之君將行仁政。選擇而使之。子必勉之。夫仁政必自經界始。經界不正。井地不鈞。穀祿不平。是故暴君汙吏。必慢

ん。畢戰をして井地を問はしむ。孟子曰く、子の君將に仁政を行はんとす。選擇して子を使しむ。子、必ず之を勉めよ。夫れ仁政は必ず經界より始る。經界正しからざれば、井地鈞しからず。穀祿平かならず。是の故に暴君汙吏は、必ず其經界を慢にす。經界既に正しければ、田を分ち祿を制すること、坐して定むべきなり。夫れ滕は壤地褊小なれども、將た君子たり。將た野人たり。君子無ければ、野人を治むる莫し。野人無ければ、君子を養ふなし。請ふ野は九が一にして助し、國中は什が一にして自ら賦せ使めん。卿以下には、必ず圭田あり。圭田は五十畝、除夫は二十五畝、死徙郷を出づるなし。郷田は井を同じうす。出入相友とし、守望相助け、疾病相扶持すれば、則ち百姓親睦す。方里にして井す。井は九百畝、其中を公田と爲す。八家皆百畝を私し、同じく公田を養ふ。公事畢り、然る後敢て私事を治む。野人を別つ所以なり。此れ其大略なり。夫の之を潤澤するが若きは、則ち君と子とに在り。

其經界。經界既正。分田制祿。可坐而定也。夫滕壤地彌小。將爲君子焉。將爲野人焉。無君子莫治野人。無野人莫養君子。諺野九一而助。國中什一使自賦。卿以下必有圭田。圭田五十畝。餘夫二十五畝。死徙無出鄉。鄉田同井。出入相友。守望相助。疾病相扶持。則百姓親睦。方里而井。井九百畝。其中爲公田八家。皆私百畝。同養公田。公事畢。然後敢治私事。所以別野人也。此其大略也。若夫潤澤之則在君與臣子矣。

① 國都の學問所即ち所謂大學なり ② 父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、之れを人倫といへり、人倫五常なり ③ 詩經の大雅文王の篇 ④ 新たに天の命令を受けて王となれば、文王の時に始まれりとの意 ⑤ 滕の臣なり ⑥ 井田の法 ⑦ 田地の仕切りなり ⑧ 人民の納むる穀物も臣下の受くる貢賦も不問になるなり ⑨ 食れる役人なり ⑩ 遺り放しにす ⑪ 食糧を制限するなり ⑫ 骨折らずして出来る ⑬ 土地の狭きなり ⑭ 將は亦なり、君子は官吏なり、野人は農夫なり、官吏もあれば農夫もあり ⑮ 郷門以外の地なり ⑯ 郷門以内の地なり ⑰ 士までをいふ ⑱ 士大夫の子孫にして士大夫となること能はざる者に授くる田地なり ⑲ 百畝の田地を受けたる者の子弟にして、十六歳よりなる者なり ⑳ 死者を葬るにも、轉居するにも一郷内を出でぬなり ㉑ 一郷の田地を耕す者は八家づつ一つの井田を共にするなり ㉒ 見張りし助け合ふなり ㉓ 互に世話をす ㉔ 一里四方なり ㉕ 公田の仕事なり ㉖ 私田の仕事をする ㉗ 官吏と農夫との分際を差別するなり ㉘ 財門して人情風土に合ふやうにす

神農の言を爲す者許行あり。楚より滕に之き、門に歸りて文公に告げて曰く、

言者許行。自楚之滕。踵門而告文公。曰。遠方之人。聞君行仁政。願受一廛而爲氓。文公與之處。其徒數十人。皆衣褐。捆履織席。以爲食。陳良之徒陳相與其弟辛。負耒耜而自宋之滕。曰。聞君行聖人之政。是亦聖人也。願爲聖人氓。陳相見許行而大悅。盡棄其學。而

遠方の人、君の仁政を聞く。願くは一廛を受けて氓たらんと。文公之に處を與ふ。其徒數十人、皆褐を衣、履を捆も席を織りて、以て食を爲す。陳良の徒陳相、其弟辛と耒耜を負うて、宋より滕に之き、曰く、君の聖人の政を行ふを聞く。是れ亦聖人なり。願くは聖人の氓たらんと。陳相許行を見て、而して大に悦び、盡く其學を棄てて學ぶ。陳相孟子を見て、許行の言を道ひて、曰く、滕君は則ち誠に賢君なり。然りと雖も、未だ道を聞かざるなり。賢者は民と並び耕して食ひ、饗飧して治む。今や滕に倉廩府庫あり。則ち是れ民を厲して以て自ら養ふなり。安ぞ賢を得ん。孟子曰く、許子は必ず粟を種ゑて而る後に食ふか。曰く、然り。許子は必ず布を織りて而る後に衣るか。曰く、否、許子は褐を衣る。許子は冠するか。曰く、冠す。曰く、奚を冠す。曰く、素を冠す。曰く、自ら之を織るか。曰く、否、粟を以て之に易ふ。曰く、許子は奚爲れぞ自ら織らざる。曰く、耕すに害あり。曰く、許子は釜甑を以て饗き、鐵を以て耕すか。

學焉。陳相見孟子。道許君之言曰。滕君則誠賢君也。雖然未聞道也。賢者與民並耕而食。饗殫而治。今也滕有倉廩府庫。則自養也。而得賢。孟子曰。許子必種粟而後食乎。曰。然。許子必織布而後衣乎。曰。否。許子衣褐。許子冠冠。曰。冠。素。曰。

曰く、然り。自ら之を爲すか。曰く、否、粟を以て之に易ふ。粟を以て械器に易ふる者、陶冶を厲すと爲さず、陶冶も亦其械器を以て粟に易ふる者、豈に農夫を厲すとなさんや。且つ許子は何ぞ陶冶を爲さざる。皆諸を其宮中に取りて之を用ふるを舍めて、何爲れぞ紛紛然として、百工と交易する。何ぞ許子の煩を憚らざる。曰く、百工の事は、固より耕し且つ爲す可からざるなり。然らば則ち天下を治むること、獨り耕し且つ爲す可きか。大人の事あり。小人の事あり。且つ一人の身にして、而して百工の爲す所を備へ、如し必ず自ら爲して而る後に之を用ひば、是れ天下を率ゐて路するなり。故に曰く、或は心を勞し、或は力を勞す。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるゝ者は人を食ひ、人を治むる者は人に食はる。天下の通義なり。堯の時に當り、天下猶ほ未だ平かならず。洪水横流し、天下に氾濫す。艸木暢茂し、禽獸繁殖す。五穀登らず。禽獸人に懼る。獸蹄鳥迹の道、中國に交はる。堯獨り之

自織之與。曰。否。以粟易之。曰。許子奚爲不自織。曰。害於耕。曰。許子以釜鬲爨。以鐵耕乎。曰。然。自爲之與。曰。否。以粟易之。以粟易之。器者。不爲厲。陶冶。陶冶亦以二其械器。易粟者。豈爲厲農夫哉。且許子何不爲陶冶。舍皆取諸其宮中。而用之。何爲紛紛然。與百工交易。

を憂へ、舜を擧げて敷き治めしむ。舜益をして火を掌らしむ。益山澤を烈して之を焚き、禽獸逃れ匿る。禹九河を疏し、濟漯を濬して、諸れを海に注ぎ、汝漢を決し、淮泗を排して、之を江に注ぐ。然る後中國得て食ふべきなり。是の時當つて、禹外に八年、三たび其門を過ぐれども入らず。耕さんと欲すと雖も得んや。后稷民に稼穡を教へ、五穀を樹藝す。五穀熟して民人育す。

- ① 始めて人民に耕作を教へたる炎帝神農氏の道を治むる者なり
- ② 許は姓、行は名なり
- ③ 文公の門に至るなり
- ④ 自分を遠方の人と稱せり
- ⑤ 居處なり
- ⑥ 新附の民
- ⑦ 弟子なり
- ⑧ 貧者の服
- ⑨ 細は叩くなり、草履を編少作り
- ⑩ 冠を織る
- ⑪ 生活の料に供するなり
- ⑫ 楚の鬻者なり
- ⑬ 船は飯にて作りて、土を掘り返すものなり、禾は其の柄なり
- ⑭ 陳良の鬻學を棄てて、許子の唱ふる神農氏の道を學ぶ
- ⑮ 自ら飯を炊ぐこと、爨は胡飯なり、殫は夕飯なり
- ⑯ 人民を治むるなり
- ⑰ 人民を苦め
- ⑱ 麻布なり
- ⑲ 生絹なり
- ⑳ 自ら褐と素とを織るか
- ㉑ 釜は煮る器、鬲は炊ぐ器なり
- ㉒ 飯をたくなり
- ㉓ 鐵の農具にして稻の類なり
- ㉔ 器具を作るか
- ㉕ 道具類なり
- ㉖ 陶は焼物師なり、治は鍛冶屋なり
- ㉗ 許子の自宅の内なり
- ㉘ 止なり、一説には上の句に應じて、陶冶をする處なりといへり
- ㉙ 手取の多きさまなり
- ㉚ 諸職人なり
- ㉛ 上に立つ人なり
- ㉜ 下に立つ人なり
- ㉝ 天下中の人民を引き廻はして此れを



何許子之不憚煩。曰。百工之事。固不可耕且爲也。然則治天下。獨可耕且爲。與有大人之事。有一人之事。而百工之所爲備。知必自爲而後用之。是率天下而路也。故曰。或勞心。或勞力。勞心者治人。勞力者治於人。治於人者食於人。天下之通義也。當堯之時。天下猶未乎洪水橫流。氾濫於天下。艸木暢茂。禽獸繁殖。五穀不登。禽獸逼人。獸蹄鳥跡之道。交於中國。堯獨憂之。舉舜而敷治焉。舜使益掌火。益烈山澤而焚之。禽獸逃匿。禹疏九河。濬濟。濶而注諸海。決汝漢。排淮泗。而注之江。然後中國可得而食也。當此時也。禹八年於外。三過其門而不入。雖欲耕。得乎。后稷教民稼穡。樹藝五穀。五穀熟而民

奮み、彼れを營み、終日道途に奔走せしめて少しの暇もなきに至る。 ① 租税を納めて上の人を養ふなり。 ② 租税を取りて下の人に養はるゝなり。 ③ 世の中一般に通用する道理なり。 ④ 洪水に遭ひて平かならぬなり、一説にはまだ民害の甚く除かれぬことなりといへり。 ⑤ 大水なり。 ⑥ 一體に汎るゝなり。 ⑦ 廣がる。 ⑧ 生ひ茂るなり。 ⑨ 多くなふなり。 ⑩ 稻黍稷麥蕡なり。 ⑪ 成癩せぬなり。 ⑫ 瀕り近づくなり。 ⑬ 獸の足跡、鳥の足跡のつきたる道が人々の住む中國に入り交るなり。 ⑭ 功業を布き水土を治めしむるなり。 ⑮ 舜の臣の名なり。 ⑯ 火政を掌らしむる。 ⑰ 火を熾んにするなり。 ⑱ 幾筋もある黄河を疏通するなり。 ⑲ は取多きことなり。 ⑳ 濟水と滌水とを通ずるなり。 ㉑ 汝と泗とは水の名なり、決はせきを切りて水を流すなり。 ㉒ 淮と泗との水を流すなり。 ㉓ 今の橋、江なり。 ㉔ 八年の間家の外に奔走するなり。 ㉕ 農業の事を掌る役なり、周の先祝の棄といふ人其の役に任じたり。 ㉖ 穀種を植付くると之を取り入るゝをいふ。 ㉗ 植うるなり。 ㉘ 人民なり。

人の道有るや、飽食煖衣、逸居して教なければ、則ち禽獸に近し。聖人之を憂ふるあり。契をして司徒たらしめ、教ふるに人倫を以てす。父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り。放勳曰く、之を勞し、之を來たし、之を匡し、之を直くし、之を輔け、之を翼け、之を自得せしめ、又從つて之を振徳す。聖人の民を憂ふる此の如し。而るを耕すに暇あらんや。堯は舜を得ざるを以て己が憂と爲す。舜は禹・皋陶を得ざるを以て己が憂と爲す。夫れ百畝の易らざるを以て己が憂となす者は農夫なり。人に分つに財を以てする、之を恵と謂ふ。人を教ふるに善を以てする之を忠と謂ふ。天下の爲めに人を得るは之を仁と謂ふ。是の故に天下を以て人に與ふるは易く、天下の爲めに人を得るは難し。孔子曰く、大なるかな堯の君たる。惟天を大と爲す。惟堯之に則る。蕩蕩乎として、民能く名くるなし。君なるかな舜や、繩繩乎として、天下を有つて、而して與からず。堯舜の天下を治むる、豈に其心を用ふる所無からんや。

入之有道也。飽食煖衣。逸居而無教。則近於禽獸。聖人有愛之。使以人倫。父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。放勳曰。勞之。來之。匡之。直之。輔之。翼之。使自得之。又從而振德之。聖人之愛民如此。而暇耕乎。堯以不得舜爲己憂。舜以不

人の道有るや、飽食煖衣、逸居して教なければ、則ち禽獸に近し。聖人之を憂ふるあり。契をして司徒たらしめ、教ふるに人倫を以てす。父子親有り、君臣義有り、夫婦別有り、長幼序有り、朋友信有り。放勳曰く、之を勞し、之を來たし、之を匡し、之を直くし、之を輔け、之を翼け、之を自得せしめ、又從つて之を振徳す。聖人の民を憂ふる此の如し。而るを耕すに暇あらんや。堯は舜を得ざるを以て己が憂と爲す。舜は禹・皋陶を得ざるを以て己が憂と爲す。夫れ百畝の易らざるを以て己が憂となす者は農夫なり。人に分つに財を以てする、之を恵と謂ふ。人を教ふるに善を以てする之を忠と謂ふ。天下の爲めに人を得るは之を仁と謂ふ。是の故に天下を以て人に與ふるは易く、天下の爲めに人を得るは難し。孔子曰く、大なるかな堯の君たる。惟天を大と爲す。惟堯之に則る。蕩蕩乎として、民能く名くるなし。君なるかな舜や、繩繩乎として、天下を有つて、而して與からず。堯舜の天下を治むる、豈に其心を用ふる所無からんや。

得禹臯陶爲己憂天以二百畝之不爲己憂者農夫也。分人以財謂之惠。教人以善謂之忠。爲天下得人者謂之仁。是故以天下與人易。爲天下得人難。孔子曰。大哉堯之爲君。惟天爲大。惟堯則之。蕩蕩乎民無能名焉。君哉舜也。巍巍乎有天下而不與焉。堯舜之

亦耕すに用ひざるのみ。吾夏を用つて夷を變ずる者を聞けり。未だ夷に變ぜらるゝ者を聞かざるなり。陳良は楚の産なり。周公・仲尼の道を悦び、北して中國に學ぶ。北方の學者、未だ之に先んずる或る能はざるなり。彼は所謂豪傑の士なり。子の兄弟、之に事ふるを數十年、師死して遂に之に倍く。昔者孔子没し、三年の外、門人任を治めて將に歸らんとす。入りて子貢に揖し、相繼うて哭す。皆聲を失ふ。然る後に歸る。子貢反りて室を場に築く。獨居すること三年、然る後に歸る。他日、子夏・子張・子游、有若の聖人に似たるを以て、孔子に事ふる所を以て之に事へんと欲し、曾子を強ふ。曾子曰く、不可なり。江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴らす。皜皜乎として尙ふべからざるのみと。今や南蠻・越人、先王の道を非とす。子子の師に倍き、而して之を學ぶ。亦曾子に異なり。吾幽谷より出でて喬木に遷る者を聞く。未だ喬木を下りて幽谷に入る者を聞かず。魯頌に曰く、戎狄は是れ膺ち、荆舒は是れ懲す。周公方に且つ之を膺たんとす。子是

治天下豈無所用其心哉。亦不用於耕耳。吾聞二用夏變夷者。未聞下變於夷者也。陳良楚産也。悅周公仲尼之道。北學於中國。北方之學者。未或能之先也。彼所謂豪傑之士也。子之兄弟事之數十年。師死而遂倍之。昔者孔子没。三年之外。門人治任將歸。入揖於子

に之れ學ぶ。亦善く變ぜずと爲す。許子の道に従はば、則ち市の賈貳せず。國中僞りなし。五尺の童をして市に適かしむと雖も、之を欺く或る莫し。布帛長短同じければ、則ち賈相若く。麻纒・絲絮・輕重同じければ、則ち賈相若く。五穀多寡同じければ、則ち賈相若く。履の大小同じければ、則ち賈相若く。曰く、夫れ物の齊しからざるは、物の情なり。或は相倍蓰し、或は相什百し、或は相千萬す。子比して之を同じうす。是れ天下を亂すなり。巨履小履賈を同じうせば、人豈に之を爲らんや。許子の道に従はば、相率るて僞をなす者なり。惡ぞ能く國家を治めん。

- ① 人には人の道あるなり
- ② 十分に食ひて熾かに着る
- ③ 安逸に暮らす
- ④ 舜の臣の名、殷の先祖なり
- ⑤ 教育を蒙る役
- ⑥ 父子は相親むなり
- ⑦ 君は禮をもて臣を使ひ、臣は忠をもて君に事ふることなり
- ⑧ 夫婦の間にも禮の別あり
- ⑨ 長者と少長とは區別あり
- ⑩ 朋友の交はりは信實にして詐り欺かぬなり
- ⑪ 帝の與
- ⑫ 人民を慰勞して招き寄するなり
- ⑬ 人民の邪曲を正し直すなり
- ⑭ 人民の善を行ふことを輔翼するなり
- ⑮ 自ら性の善なることを口説的の情らしむ
- ⑯ 其の上に又、一説に其の跡に附き従ひて其の

買相鬻而哭。皆失聲。然後歸。子貢反築室於場。獨居三年。然後歸。他日子夏。子張。子游。以有若似聖人。欲以所事孔子車之。曾子曰。不可。江漢以濯之。秋陽以暴之。皜皜乎不可尚已。今也南蠻缺舌之人。井先王之遺。子倍子之師。而學之。亦異於曾子矣。吾

困悶を救ひ直けりなり、善行に注意を加へて振ひ興して、又思慮を加ふるなりと。○ 舜の臣の名なり。○ 治ま  
るなり。○ 孔子曰以下の句論論泰伯篇照但し文章に小異あり。○ 此の道天を手本とするなり。○ 辟く  
遠きさまなり。○ 人君の道を得たることよといふことなり。○ 高く大なるさまなり。○ 其の政を賢人能  
者に任せて自身に手出しをせざるなり、一説には天子の位も舜の徳を益すに足らぬなりといひ、又至尊の位を何と  
も思はぬなりといへり。○ 華なり、滿土の人の自ら其の國を稱して華といふ中國の意。○ 勇歌なり。○  
出生なり。○ 楚は南方の國なるが故に北の方に來るなり。○ 中國の學者なり。○ 上に出づるなり。○  
學徳の業に超えたる士なり。○ 陳良死して。○ 陳良の兄弟の陳州等が許行の學に走るをいふ。○ 三年の  
喪を終はりたる後になり。○ 荷物の支度をするなり。任は行李なり。○ 向ひ合ふなり。○ 塵の粘るゝまで  
泣く。○ 幕前の祭壇なり。○ 孔子を指す。○ 無理に働むるなり。○ 江漢の多き水に洗ひ清しめが如く  
泣く。○ 秋の強き日に晒し乾かすが如く、但し周の世の秋は夏の世の五六月にして、盛暑の頃なり。○ 眞白なま  
まなり。○ 白きを加ふるなり。○ 許行を指す、許行は楚の人、楚は古の南蠻なり。道徳を傷害すること歎の  
舌先の惡聲の惡むべきが如きをいふ。○ 曾子の心に異なるなり。○ 齊き谷なり。○ 高き木なり、詩經の小  
雅伐木篇に伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、濇于高木とあり。○ 詩經魯頌閟宮の篇なり。○ 擊つなり  
○ 刑は楚の本號なり、舒は楚に近き國なり。○ 惡しく變じたるなり、即ち田賦に變ぜられたるなり。○ 市  
中の貨物の所段の一定するなり。○ 國內を通じて掛け賣をいふ者なきなり。○ 十歳位の子供なり。○ 市  
中へ物を買ひに遣る。○ 布は麻布なり、帛は絹布なり。○ 直段の高下なし。○ 麻と麻絲。○ 絹絲と綿

問下出於陶谷。遷于喬木者。未聞下喬木。而入於陶谷者。魯頌曰。狄是晉。荆舒是豳。周公方且贊之。子是學之。亦爲不三善變矣。從許子之道。則市買不貳。國中無僞。雖使五尺之童。適市。莫之或欺。布帛之短同。則買相若。麻絲絲絮輕重同。則買相若。五穀多寡同。則買相若。履大小同。則買相若。曰。夫物之不齊。物之情也。或相倍蓰。或相什伯。或相千萬。子比而同之。是亂天下也。巨履小履同買。人豈爲之哉。從許子之道。相率而爲僞者也。惡能治國家。

墨者夷之、徐辟に因りて、而して孟子を見るを求む。孟子曰く、吾固より見るを願ふ。今吾尚ほ病めり。病愈えば、我且に往いて見んとすと。夷子來らず。他日又孟子を見るを求む。孟子曰く、吾今則ち以て見るべし。直にせざれば、則ち道見れず、我且に之を直にせんとす。吾聞く、夷子は墨者なりと。墨者の喪を治むるや、薄を以て其道と爲す。夷子以て天下を易へんと思ふ。豈に以て是非すと爲して、而して貴ばざらんや。然り而して夷子は其親を葬る厚し。則ち

録 一つの品物にも、粗粗細細の相違あるなり。○ 品物の貨物なり。○ 倍は一倍なり、直は五倍なり。○ 十倍し、百倍す。○ 押し並ぶるなり。○ 大形の草履なり。

不直則道不見。我且直之。吾聞夷子墨者。墨者治喪也。以薄爲其道也。夷子思以易天下。豈以爲非是而不貴也。然而夷子葬其親。厚。則是以所賤事親也。徐子以告夷子。夷子曰。儒者之道古之人若保赤子。此言何謂也。之則以爲愛無差等。施由親始。徐子以告

是れ賤む所を以て親に事ふるなり。徐子以て夷子に告ぐ。夷子曰く、儒者の道は、古の人赤子を保するが若しと。此の言何の謂ひぞや。之は則ち以爲らく、愛に差等無し、施すこと親きより始むと。徐子以て孟子に告ぐ。孟子曰く、夫の夷子は信に人の其兄の子を親むこと、其鄰の赤子を親むが若く爲すと以爲るか。彼は取る有りて爾るなり。赤子匍匐して將に井に入らんとす。赤子の罪に非ざるなり。且つ天の物を生ずる、之をして木を一にせしむ。而るに夷子は木を二つにするが故なり。蓋し上世嘗て其親を葬らざる者あり。其親死す。則ち擧げて之を壑に委てたり。他日之を過ぐれば、狐狸之れを食ひ、螻蛄姑之れを噉ふ。其親泚たる有り、睨して視ず。夫の泚たる、人の爲に泚たるに非ず。中心より面目に達するなり。蓋し歸り糞裡を反して之を掩ふ。之を掩ふこと誠には是ならば、則ち孝子仁人の其親を掩ふこと、亦必ず道有らんと。徐子以て夷子に告ぐ。夷子慨然として問を爲して曰く、之に命ぜり。

孟子曰。孟子曰。夫夷子信以下爲人之親。其兄之子。爲若親。其鄰之赤子乎。彼有取爾也。赤子匍匐將入井。非赤子之罪也。且天之生物也。使之一木。而夷子二木。故也。蓋上世嘗有不葬其親者。其親死。則舉而委之於壑。他日過之。狐狸食之。螻蛄姑噉之。其類有泚。睨而不視。夫泚也。非爲人泚。中心達於面目。蓋歸反糞裡而掩之。誠是也。則孝子仁人之掩其親。亦必有道矣。徐子以告夷子。夷子慨然爲問曰。命之矣。

● 孟子の愛敬説を奉ぜざる者、墨子は蓋し孔子より後、孟子より前の人なるべし ● 人の姓名なり ● 孟子の弟子の名 ● 孟子に斷られたるによりて、夷子來らざりし也、一説に此語まで孟子の語と見て、夷子の來られぬやうにせよとの意とす ● 直言せざれば儒者の奉ずる聖人の道の明にならぬなり、一説には言葉を謙くして、相正すなりといへり ● 天下の風俗を移し易ふるなり ● 親を手厚く葬るは墨者の賤むることなり ● 儒は潔すなり、穢間を久しくすれば水の物を濡す如く、自然に其の身を濡し、徳を成すの義より出づ ● 民を安んずること、慈母、赤子を保護するが如きなり、今の管仲周書康誥の篇に見ゆ ● 之は夷子の自ら其の名をいへるなり ● 愛を施すなり ● 己れの子よりは、稍々疎きものなり ● 天下の赤子よりは稍々近きものなり、是れ差別等級ある意なり ● 彼の古人の言は別だかりてかくは云へるなり ● 腹減ふなり ● 一本よりしれ遊生せしむ ● 渡語の言葉なり ● 上古の世なり ● 持も遊ぶなり ● 棄つるなり ● 納は數なり、凝管にては剛といひ、楚にては賦といふ、姑はむらのこと、助語なりともいへり ● 集まりて食ふなり ● 額なり ● 汗の出づるなり ● 楅目にて見ゆなり ● 土籠の土をうつけかくるなり ● 氣の抜けたるさまなり ● 暫く立つなり ● 命は教ふるなり、教へを受けたりといはわが如し、一説には之は夷子の自ら其の名をいひて、われ教を受けたりと意にていふなりと



### 卷之六

#### 滕文公章句下

陳代曰。不見諸侯。宜若小然。今一見之。大則以王。小則以霸。且志曰。枉尺而直尋。宜若可爲也。孟子曰。昔齊景公田。招虞人以旌。不至。將殺之。志士不忘在溝壑。勇士不忘

陳代曰く、諸侯を見ざるは、宜に小なるが若く然るべし。今一たび之を見る、大なれば則ち以て王たらしめん、小なれば則ち以て霸たらしめん、且つ志に曰く、尺を枉けて尋を直くすと、宜に爲す可きが若くなるべし。孟子曰く、昔齊の景公田す。虞人を招くに旌を以てす。至らず。將に之を殺さんとす。志士は溝壑に在るを忘れず。勇士は其元を喪ふを忘れず。孔子奚を取る。其招くに非ざれば往かざるを取るなり。其招くを待たずして往くが如きは何ぞや。且つ夫れ尺を枉けて尋を直くすとは、利を以て言ふなり。如し利を以てせば、則ち尋を枉け尺を直くして利あらば、亦爲す可きか。昔者趙簡子、王良をして嬖奚と乘らし

喪其元。孔子奚取焉。取非其招不往也。如不待其招而往。何哉。且夫枉尺而直尋者。以利言也。如以利則利亦可爲。與昔者趙簡子使王良與嬖奚乘。終日而不獲一禽。嬖奚反命曰。天下之賤工也。或以告王良。良曰。請復之。朝而獲一禽。

む。終日にして一禽を獲ず。嬖奚反命して曰く、天下の賤工なりと。或ひと以て王良に告ぐ。良曰く、請ふ之を復せん。強ひて而る後可く。一朝にして十禽を獲たり。嬖奚反命して曰く、天下の良工なり。簡子曰く、我女と乗ることとを掌らしめんと。王良に謂ふ。良可かず。曰く、吾之が爲めに我が馳驅を範すれば、終日一を獲ず。之が爲めに詭遇すれば、一朝にして十を獲。詩に云ふ、其馳を失はざれば、矢を舍ちて破るが如しと。我小人と乗るに慣はず、請ふ辭せんと。御者すら射者と比するを羞づ。比して禽獸を得る、丘陵の若しと雖も、爲さざるなり。道を枉けて彼に従ふが如きは何ぞや。且つ子過てり。己を枉ぐる者、未だ能く人を直くする者あらざるなり。

孟子の弟子 ① 先方より招くとも、此方より出向きて謁見せぬことあるは ② 子簡の狭きやうなり ③ 此方より出向きて、諸侯に謁見するなり ④ 再記なり ⑤ 一尺を折り曲げて、八尺を直にするなり、少しく屈して大に伸ぶるの意 ⑥ 田獵なり ⑦ 山澤苑囿を守る役人なり ⑧ 旌は二匹の旗を連ねる旗竿の先に、鳥の羽根を附けたるもの、大夫を招く時に用ふべきものなり、然るに此物を以て虞人を招けり、故に虞人至らず

嬖奚反命曰。天下之良工也。簡子曰。我使掌與女乘。謂王良。良不可。曰。吾爲之。範我馳驅。終日不獲一。爲之。說遇一朝。而獲十。詩云。不失其馳。舍矢弗爲也。如枉道而從。彼何也。且子過矣。枉己者。未有能直人者一也。

景春曰。公孫衍張儀豈不誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼。安居而天下熄。孟子曰。

死後谷底に捨てらるゝの覺悟を失はず ① 戦ひて其の首を失ふ覺悟を失はずの意 ② 何とすへきか ③ 晉の大夫、名は映といふ簡は其の意なり ④ 名高き御者なり ⑤ 氣に入りの家來の樂といふ言 ⑥ 禽獸の意 ⑦ 下手なり ⑧ 再び嬖奚の御者をせむことを簡子に謂へるなり ⑨ 強ひて試みたる彼に趙盾子の承知せるなり、一説には、簡條とともに嬖奚に關するものとす ⑩ 上手なり ⑪ 嬖奚に曰ふ、汝と同樂することを良に學らしめんと ⑫ 我が馬の御し方を規則止しければ ⑬ 御者の法を學して、射手の了簡次第に乘り射すことなり ⑭ 詩經小雅車攻の篇 ⑮ 馬、御し方を失はぬなり ⑯ 矢を射ち、物に射當つること、及物をもちて之れ破るが如く、容易なりと ⑰ 習ふなり ⑱ 何卒御免を蒙りたしとす ⑲ 阿ねること ⑳ 山の如くに多し ㉑ 諸侯を指す

如破。我不貫與小人乘。請辭。御者且差。與三射者比。而得禽獸。雖若丘陵。弗爲也。如枉道而從。彼何也。且子過矣。枉己者。未有能直人者一也。

景春曰く、公孫衍、張儀は豈に誠の大丈夫ならざらんや。一たび怒りて諸侯懼れ、安居して天下熄む。孟子曰く、是れ焉ぞ大丈夫たるを得んや。子未だ禮を學ばざるか。丈夫の冠するや、父之を命じ、女子の嫁するや、母之を命ず。往くに之を門に送り、之を戒めて曰く、往いて女の家に之き、必ず敬し、必

是焉得爲大丈夫乎。子未學禮乎。丈夫之冠也。父命之。女子之嫁也。母命之。往送之門。戒之曰。往之女家。必敬必戒。無違夫子。以順爲正者。妾婦之道也。居天下之廣居。立天下之正位。行天下之大道。得志與民由之。不得志獨行。其道富貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

す戒め、夫子に違ふなかれと。順を以て正と爲す者は妾婦の道なり。天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行ひ、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば獨り其道を行ふ。富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず。此を之れ大丈夫と謂ふ。

- ① 孟子と同時代の人 ② 魏の人、秦王の孫なるを以て公孫といふ、五國の宰相の印を佩びたる卿士なり ③ 魏の人、秦の爲めに、六國の合縱を破る ④ 立派なる男子なり ⑤ 自適して政治に關係せぬこと ⑥ 天下の兵亂終息す ⑦ 元服加冠の禮を行ひて、一人前になるなり ⑧ 言ひ渡すなり ⑨ 嫁に往くなり ⑩ 汝の家なり、婦人は夫の家をもて、己れの家とするが故に、汝の家といへるなり ⑪ 良人なり ⑫ 天下第一の廣き居宅即ち仁に居るなり ⑬ 天下第一の正しき地位即ち禮に立つなり ⑭ 天下第一の大なる道路即ち義を行ふなり ⑮ 衆民と共に仁、禮、義に循ひ由るなり ⑯ 我れのみ獨り仁、禮、義を行ふなり ⑰ 其の心を善かすなり ⑱ 其の節を變ふるなり ⑲ 其の志を挫くなり

周書問曰古之君子仕乎。孟子曰仕傳曰孔子三月無君則皇皇如也出疆必載質。公明儀曰古之人三月無君則弔。不以急乎。曰士之失位也。猶諸侯之失國家也。禮曰諸侯耕助。以供粢盛。夫人蠶繅以爲衣服。犧牲不盛。粢不絜。衣服不備。不

周書問うて曰く、古の君子仕ふるか。孟子曰く、仕ふ。傳に曰く、孔子三月君なければ、則ち皇皇如たり。疆を出づれば必ず質を載す。公明儀曰く、古の人、三月君なければ則ち弔すと。三月君無ければ則ち弔す、以だ念ならずや。曰く、士の位を失ふや、猶ほ諸侯の國家を失ふがごとし。禮に曰く、諸侯は耕助し、以て粢盛に供し、夫人は蠶繅し、以て衣服を爲る。犧牲成らず、粢盛絜からず、衣服備はらざれば、敢て以て祭らず。惟ふに土田無ければ、則ち亦祭らず。牲殺、器皿、衣服備はらざれば、敢て以て祭らず、則ち敢て以て宴せず。亦弔するに足らざるか。疆を出づれば必ず質を載するは何ぞ。曰く、士の仕ふるや、猶ほ農夫の耕すがごとし。農夫豈に疆を出づる爲めに、其耒耜を捨てんや。曰く、晉國も亦仕國なり。未だ嘗て仕ふること此の如く其れ急なるを聞かず。仕ふること此の如く其れ急ならば、君子の仕を難するは何ぞ。曰く、丈夫生れては之が爲めに室有るを願ひ、女子生れては之が爲めに家有るを願ふは父母

敢以祭。惟士無田。則亦不祭。牲殺器皿。衣服不備。不敢以祭。則亦不敢以宴。亦不足弔乎。出疆必載質。何也。曰士之仕也。猶農夫之耕也。農夫豈爲出疆。舍其耒耜哉。曰晉國亦仕國也。未嘗聞仕如此其急也。仕如此其急也。君子之難仕何也。曰丈夫生而願爲之有室。

の心、人皆之れ有り。父母の命、媒妁の言を待たず。穴隙を鑽りて相窺ひ、牆を踰えて相從はば、則ち父母國入皆之を賤まん。古の人未だ嘗て仕を欲せずんばあらず。又其道に由らざるを惡む。其道に由らずして、往く者は、穴隙を鑽ると之れ類するなり。

- 魏の人なり
- 待ち遅く思ふさま
- 其の國境を出づるなり
- 君に謁見する時に差し出だす雜物を車に載するなり、質は著と同じ
- 已と通ず 太だなり
- 禮記の祭義の篇なり
- 諸侯には、藉田の禮とあり、春の初めに、諸侯自身に鋤を執りて、百畝の田地を耕し、人民に農業を勸む、其の助力を信りて、之れを耕し終はらば、之れを耕助といふ
- 耕助によりて、取ッ入れたる粟、稷、稻等の穀物を貯へ置き、宗廟の祭りの時の盛りに供するなり
- 諸侯の輿方なり
- 質を同じ、耒より鎌をつむと出すなり
- 宗廟の祭りに用ふる衣物に供するなり
- 宗廟の祭りに供する家畜の肥えざるなり
- 犧牲の爲めに殺すべき家畜
- 供物を盛る器物
- 酒罍なり
- 魏は、もと晉の國なり
- 士の仕ふべき國柄なり
- 孟子を指す
- 容なく仕へぬなり
- 妻なり
- 夫なり
- 中介人の言筈も待たず
- 壁に穴を明けて、窺ひ合ふなり
- 垣壁を乗り越えて、遊ふなり
- 壁に穴を明くる者と同類なり

女子生而願爲之有家。父母之心。人皆有之。不待父母之命。媒妁之言。鑽穴隙相窺。踰牆相從。則父母國人皆賤之。古之人未嘗不欲仕也。又惡不由其道。不由其道而往者。與鑽穴隙之類也。

彭更問曰。後車數十乘。從者數百人。以傳食於諸侯。不以泰乎。孟子曰。非其道。則一簞食不可受於人。如其道則舜受鈞之天下。不以爲泰乎。曰。否。士無事而食不可也。曰。子不通功易事。以羨補不足。

彭更問うて曰く、後車數十乘、從者數百人、以て諸侯に傳食す。以だ泰ならずや。孟子曰く、其道に非ざれば、則ち一簞の食も人より受く可からず。如其道ならば、則ち舜堯の天下を受くるも、以て泰と爲さず。子以て泰と爲すか。曰く、否。士、事なくして食むは不可なり。曰く、子、功を通じ事を易へ、羨れるを以て不足を補はずんば、則ち農に餘粟あり、女に餘布あらん。子如し之を通ぜば、則ち梓匠輪輿、皆食を子に得ん。此に人有り、入りては則ち孝、出でては則ち悌、先王の道を守り、以て後の學者を待つ。而して食を子に得ず。子何ぞ梓匠輪輿を尊んで、而して仁義を爲す者を輕するや。曰く、梓匠輪輿は、其志將に以て食を求めんとするなり。君子の道を爲すや、其志亦將に

則農有餘粟。女有餘布。子如通之。則梓匠輪輿皆得食於子。於此有入焉。入則孝。出則悌。守先王之道。以待後之學者。而不得食於子。子何尊梓匠輪輿而輕爲仁義者哉。曰。梓匠輪輿。其志將以求食也。君子之爲道也。其志亦將以求食與。曰。子何以其志爲哉。其有功於子。可食而食之矣。且子食志乎。食功乎。曰。食志。曰。有人於此。毀瓦畫墁。其志將以求食也。則子食之乎。曰。否。曰。然則子非食志也。食功也。

以て食を求めんとするか。曰く、子何ぞ其志を以て爲さんや。其の子に功有らば、食せしむべくして之に食せしめん。且つ子志に食せしむるか、功に食せしむるか。曰く、志に食せしむ。曰く、此に人有り。瓦を毀ち、墁に畫く、其志將に以て食を求めんとするなり。則ち子之に食せしむるか。曰く、否。曰く、然らば則ち子志に食せしむるに非ざるなり、功に食せしむるなり。

- 孟子の弟子
- 行列の跡に連なつて供車
- 往く先々にて馳走を受く
- 贅澤なり
- 功なきなり
- 人の功を測じて、其の事を交易するなり
- 餘りなり
- 梓匠は小細工人なり、匠は大工なり、輪は車の輪を作る者なり、輿は車の箱を作る者なり
- 屋根の瓦を葺きながら、之れを破損するなり
- 新たに塗りたる壁を鍍小刀にて疵を付くるなり

萬章問曰。宋

萬章問うて曰く、宋は小國なり、今將に王政を行はんとす。齊楚惡んで之を



小國也。今將行王政。齊楚惡而伐之。則如之何。孟子曰。湯居亳。與葛爲鄰。葛伯放而不祀。湯使人問之曰。何爲不祀。曰。無以供犧牲也。湯使遺之牛。羊。葛伯食之。又不以祀。湯又使人問之曰。何爲不祀。曰。無以供。素盛也。湯使亳衆往爲之耕。老弱饋食。葛伯率其民。

伐たば、則ち之を如何せん。孟子曰く、湯は亳に居り、葛と鄰たり。葛伯にして祀らず、湯人をして之を問はしめて曰く、何爲れぞ祀らざる。曰く、以て犧牲に供するなきなり。湯之れに牛羊を遺らしむ。葛伯之を食ひ、又以て祀らず。湯又人をして之を問はしめて曰く、何爲れぞ祀らざる。曰く、以て素盛に供するなきなり。湯、亳の衆をして往いて之れが爲に耕さむ。老弱食を饋くる。葛伯其民を率る、其の酒食黍稻ある者を要して之れを奪ふ。授けざる者は之れを殺す。童子あり黍肉を以て餉くる。殺して之れを奪ふ。書に曰く、葛伯餉に仇すと。此れ之の謂ひなり。其の是童子を殺す爲にして之れを征す。四海の内皆曰く、天下を富めりとするに非ず、匹夫匹婦の爲めに讎を復するなり。湯始めて征する葛より載む。十一征して、天下に敵なし。東面して征すれば、北狄怨み、南面して征すれば、北狄怨む。曰く、奚爲ぞ我を後にすると。民の之を望むこと、大旱の雨を望むが若きなり。市に歸する者は止まらず、芸る者は變せず、

要其有酒色。黍稻者春之。不授者殺之。有童子以黍肉餉。殺而奪之。書曰。葛伯仇。餉。此之謂也。爲其殺是童子而征之。四海之內皆曰。非富天下也。爲匹夫匹婦復讎也。湯始征自葛載。十一征而無敵於天下。東面而征。四夷怨。南面而征。北狄怨。曰。奚爲後我。民之

其君を誅し、其民を弔し、時雨の降るが如し。民大に悦ぶ。書に曰く、我が后を復つ。后来らば其れ罰なけん。惟れ臣たらざる故あり、東征して厥土女を綏んず。厥玄黄を匪にし、我が周王に紹して休を見る。大邑周に臣附するを惟ふ。其君子は玄黄を匪に實し、以て其君子を迎へ、其小人は簞食壺漿して、以て其小人を迎ふ。民を水火の中に救ひ、其残を取るのみ。太誓に曰く、我が武惟れ揚り、之れが讎を侵す。則ち残を取る。殺伐用て張り、湯に于て光ありと。王政を行はざるのみ。苟も王政を行はば、四海の内、皆首を舉げて之を望み、以て君と爲さんと欲す。齊楚大なりと雖も、何ぞ畏れん。

① 孟子の弟子 ② 湯王の都の地 ③ 葛は、國の名なり、葛伯とは、伯討たるを以てなり ④ 放埒にして、先祖の祭りをせず ⑤ 贈るなり ⑥ 食物を送るをいふ、耕す者の解活を送るなり ⑦ 酒と飯となり ⑧ 穀物のまだ炊かぬもの ⑨ 饋なり ⑩ 今の書經仲虺之語の篇 ⑪ 天下の富みを資するにほあらしとの意 ⑫ 庶民共の爲めに仇を取るなり ⑬ 始むるなり ⑭ 十一箇國を征伐するなり ⑮ 書の遺篇なり ⑯ 暴君の刑罪を免らなむといふことなり ⑰ 紂を助けて惡なしてまだ周の臣とならぬ者あるなり ⑱ 東へ向ひて、殷を征伐すなり ⑲ 其の士民婦女を安んずるなり ⑳ 衣を黒にし、裳を黄にせしが故に、黒と黄との緇地

望之。若大旱之望雨也。歸市者弗止。芸者不變。誅其君。弔其民。如時雨降。民大悅。書曰。後。我后。後來。其無罰。有攸。不惟。

を箱に盛りて、進物にせるなり、匪は箱なり、玄黃は黒と黄との縞地なり。昔は殷に事へしが、今よりは引き續きて、我周王に事へて、善きことを拜見したしと、紹は、繼ぐなり、我が周王は、殷の民の武王を親みたる言葉、休は、遊なり。大邑周は、門を輝けたる言葉なり、周の家來分になることなり。身分ある者なり。満つなり。身分なき者なり。人民を蹂躙せる者を誅戮する。今の書經周書の篇の名。我が武王の武威の高く揚がみなり。殷の境へ攻め入るなり。人民を蹂躙するもの。殺伐の功、大に張るなり。湯王の僕王を征伐せしよりも、光明あるなり。

臣。東征。綏厥士女。匪厥玄黃。紹我周王。見休。惟臣附于大邑周。其君子實玄黃于匪。以迎其君子。其小人箠食壺漿以迎其小人。救民於水火之中。取其殘而已矣。太誓曰。我武惟揚。使于之疆。則取于殘。殺伐用張。于湯有光。不行王政。云爾。荀行王政。四海之內皆舉首而望之。欲以爲君。齊楚雖大。何畏焉。

孟子謂戴不勝曰。子欲子之王之善與。我明告子。有。孟子、戴不勝に謂つて曰く、子は子の王の善を欲するか、我明に子に告げん。此に楚の大夫在らんに、其子の齊語せんことを欲せば、則ち齊人をして諸に傳たらしめんか、楚人をして諸に傳たらしめんか。曰く、齊人をして之れに傳たらし

楚大夫於此。欲其子之齊語也。則使齊人傳諸。使楚人傳諸。曰。使齊人傳之。曰。使一齊人傳之。衆楚人咻之。雖曰撻而求其齊也。不可得矣。引而置之莊嶽之間。數年。雖曰撻而求其楚。亦不可得矣。子謂薛居州善士也。使之居於王所。在於王所。者。長幼卑尊。皆薛居州也。王誰與爲善。一薛居州。獨如宋王何。公孫丑問曰。

めん。曰く、一の齊人之れに傳し、衆楚人之れに咻しければ、日に撻ちて其齊なることを求むと雖も、得べからず。引きて之れを莊嶽の間に置くこと數年ならば、日に撻ちて其楚ならんことを求むと雖も、亦得べからず。子は薛居州を善士なりと謂ひ、之れをして王の所に居らしむ。王の所に在る者、長幼卑尊、皆薛居州ならば、王誰れと與に不善をなさん。王の所に在るもの、長幼卑尊、皆薛居州に非ざるならば、王誰と與に善をなさん。一の薛居州、獨り宋王を如何にせん。

宋の臣なり。齊の言葉を使ふやうにさせんとす。師傳なり、一本には、傳に作りて、教ふるなりといへり。咻しきなり、はたからがやゝと楚語する也。其の子の齊の言葉を使はむことを責め求むるなり。齊の繁華なる市街の名。宋の臣なり。

不見<sub>レ</sub>詰<sub>レ</sub>侯<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>孟子曰古<sub>レ</sub>者不爲<sub>レ</sub>臣不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>段干木踰<sub>レ</sub>垣面辟<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>泄柳閉門而不<sub>レ</sub>內是皆已甚<sub>レ</sub>迫斯可以見<sub>レ</sub>矣陽貨欲<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>孔子而惡<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>禮大夫有<sub>レ</sub>賜<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>士不得<sub>レ</sub>受<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>其家則往<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>其門陽貨<sub>レ</sub>嚮<sub>レ</sub>孔子之亡<sub>レ</sub>也而饋<sub>レ</sub>孔子蒸豚孔子亦<sub>レ</sub>嚮<sub>レ</sub>其亡<sub>レ</sub>也而往<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>之當<sub>レ</sub>是時陽貨先<sub>レ</sub>豈

えず。段干木は垣を踰えて之れを辟け、泄柳は門を閉ちて内れず。是れ皆已甚し。迫ちば斯に以て見るべし。陽貨孔子を見んと欲す。而して禮なきを惡む。大夫士に賜ふあり。其家に受くるを得ざれば、則ち往いて其門に拜す、陽貨孔子の亡きを嚮ひ、而して孔子に蒸豚を饋くる。孔子また其亡きを嚮ひ、而して往いて之れを拜す。是其に當りて隊貨先んぜり。豈に見ざるを得んや。曾子曰く、肩を脅し詔ひ笑ふは、夏畦よりも病る。子路曰く、未だ同じからずして言ふ、其色を觀れば赧然たり。由の知る所に非ざるなり。是に由て之れを觀れば、則ち君子の養ふ所は知るべきのみ。

① 魏の文侯の時の人、段干木は石なり ② 避くるなり ③ 魯の穆公の時の人、既出 ④ 納と同じ ⑤ 餘りにひどい仕向けなり ⑥ 靜退し難き場合には見えるがよい ⑦ 魯の季氏の家臣陽虎なり、貨は、其の字なり ⑧ 漫に言はしては人の已れを禮なしと思はむことを懸念するなり ⑨ 已れの家に在りて自ら受くるにあらざれば ⑩ 大夫の家の門口なり ⑪ 孔子の不在なるを觀ふなり ⑫ 肩を突き上げ、頭を低るゝなり ⑬ 夏 ⑭ 災天に耕作をするよりも草臥るゝなり ⑮ まだ志の合はぬなり ⑯ 意ぢて素面するさま ⑰ 子路の姓名

得<sub>レ</sub>不見<sub>レ</sub>曾<sub>レ</sub>子曰<sub>レ</sub>脊<sub>レ</sub>肩<sub>レ</sub>詔<sub>レ</sub>笑<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>于<sub>レ</sub>夏<sub>レ</sub>畦<sub>レ</sub>子路曰<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>赧<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>養<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>

り知る所に非ずとは惡むことだしきなり ⑱ 平生心掛くることなり

戴盈之曰<sub>レ</sub>什<sub>レ</sub>一去<sub>レ</sub>關<sub>レ</sub>市<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>征<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>茲<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>詩<sub>レ</sub>輕<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>孟<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>攘<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>鄰<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>雞<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>告<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>是非<sub>レ</sub>君<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>請<sub>レ</sub>損<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>月<sub>レ</sub>攘<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>雞<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>斯<sub>レ</sub>速<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>矣<sub>レ</sub>何<sub>レ</sub>待<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>

戴盈之曰く、什が一にして關市の征を去るは、今茲は未だ能はず。請ふ、之れを輕くして以て來年を待ち、然る後に已めん。何如と。孟子曰く、今、人日々に其鄰の雞を攘む者あらん。或ひと之に告げて曰く、是れ君子の道に非ずと。曰く、請ふ之れを損し月に一雞を攘み、以て來年を待ち、然る後に已めんと。如し其の義に非ざるを知らば、斯に速に已めん。何ぞ來年を待たん。

① 宋の大夫なり ② 昔し井田法行はれし當時に收穫十分の一を税として收めしをいふ、即ち十分の一の税を取るなり ③ 關所にて取る旅人の貨物の税と、市場にて取る商人の課税とを廢すること ④ 今年なり ⑤ 止むなり ⑥ 減ず ⑦ こちらへ入り來りたる所を取るなり

公都子曰、外人皆稱夫子好辯、敢問何也。孟子曰、予豈好辯哉。予不得已也。天下之生久矣。一治一亂。當堯之時。水逆行。氾濫於中國。蛇龍居之。民無所定。下者爲巢。上者爲營窟。書曰。降水警余。降者洪水也。禹使禹治之。禹掘地而注之海。驅蛇龍而放之。菑水由

公都子曰く、外人皆夫子辯を好むと稱す。敢て問ふ何ぞや。孟子曰く、予豈に辯を好まんや。予已むを得ざるなり。天下の生は久し、一治一亂す。堯の時に當つて、水逆行して中國に氾濫す。蛇龍之れに居り、民定まる所なし。下なる者は、巢を爲り、上なる者は、營窟を爲る。書に曰く、降水予を警むと。降水とは洪水なり。禹をして之れを治めしむ。禹地を掘りて之れを海に注ぎ、蛇龍を驅りて之れを菑に放つ。水地中より行く。江・淮・河・漢是れなり。險阻既に遠かり、鳥獸の人を害する者消す。然して後人平土を得て之れに居る。堯舜既に没し、聖人の道衰へ、暴君代々作り、宮室を壊ちて以て汗池と爲す。民安息する所なし。田を棄てて以て園圃と爲し、民をして衣食を得ざらしむ。邪説暴行又作り、園圃、汗池、沛澤多くして、而して禽獸至る。紂の身に及び、天下又大に亂る。周公、武王を相けて、紂を誅ち兇を伐つ。三年其の君を討ち、飛廉を海隅に驅りて之れを戮す。國を滅す者五十、虎豹犀象を驅りて之を遠ざけ、天下大

地中行。江淮河漢是也。險阻既遠。鳥獸之害人者消。然後人得土而居之。堯舜既沒。聖人之道衰。暴君代作。壞宮室以爲汗池。民無所安息。葉田以爲園圃。使民不得衣食。邪說暴行又作。園圃汗池沛澤多而禽獸至。及紂之身。天下又大亂。周公相武王。誅紂伐

に悦ぶ。書に曰く、丕に顯なるかな文王の謨、丕に承けるかな武王の烈、我が後人を佑啓し、咸正を以てし缺くるなからしむと。世衰へ道微にして、邪説暴行有作る。臣にして其君を弑する者之れ有り、子にして其父を弑する者之れ有り。孔子懼れて、春秋を作る。春秋は天子の事なり。是故に孔子曰く、我を知る者は、其れ惟春秋か。我を罪する者は、其れ惟春秋かと。聖王作らず、諸侯放恣、處士横議し、楊朱・墨翟の言天下に盈つ。天下の言、楊に歸せざれば則ち墨に歸す。楊氏は我が爲めにす。是れ君なきなり。墨子は兼愛す、是れ父なきなり。父なく君なきは、是れ禽獸なり。公明儀曰く、庖に肥肉有り、廐に肥馬有り、民に飢色有り、野に餓殍有り。此れ獸を率ゐて人を食ましむるなり。楊墨の道息まず、孔子の道著はれず、是れ邪説民を誣ひ、仁義を充塞すればなり。仁義充塞すれば、則ち獸を率ゐて人を食ましむ。人將に相食まんとす。吾此れが爲めに懼れ、先聖の道を閑り、楊墨を距ぎ、淫辭を放ち、邪説者作るを得ざらしむ。其



奄三年討其君。驅飛廉於海隅。而戮之。滅國者五十。驅虎豹犀象而遠之。天下大悅。書曰。丕顯哉文王謨。丕承哉武王烈。伯啓我後人。成以正無缺。世衰道微。邪說暴行有作。臣弑其君。子弑其父。二者有之。孔子懼。作春秋。春秋天子之事也。是故孔子曰。知我

心に作れば其事に害あり、其事に作れば其政に害あり。聖人復起るも、吾が言を易へず。昔者禹洪水を抑めて天下平かに、周公夷狄を兼ね、猛獸を驅りて百姓寧し。孔子春秋を成して、而して亂臣賊子懼る。詩に云ふ我狄は是れ膺ち、荆舒は是れ懲す。則ち我れ敢て承くる莫しと。父なく君なきは、是れ周公の膺つ所なり。我亦人心を正し、邪説を息め、諛行を誑ぎ、淫辭を放ち、以て三聖者を承がんと欲す。豈に辯を好まんや。予己むを得ざるなり。能く言ひて楊墨を距ぐ者は、聖人の徒なり。

- 孟子の弟子
- 世間の人
- 川々の水が逆流するなり
- 定まりたる住居なきなり
- 低地の者は、樹の上の鳥の巢の如きものを作りて、住むなり
- 高城の者は、地に穴を掘りて住むなり
- 今齊國威魯大國の偏
- 天より大水の災を降して、余れを警戒するなり、余は、辨なり、一説には、余は、勇なりといへり
- 川下の藪がりたるを掘り制するなり
- 草が生へたる澤
- 兩岸の間を流る、なり
- 洪水の危險なり
- 上古の聖人の意
- 夏の大庚、孔甲、履癸、殷の乙武の如き、暴虐の君、代はりく、に與るなり
- 人民の居宅を破壊するなり
- 君の魚鼈を養ふ沼池となす
- 安堵休息する
- 人民の田畑を廢棄するなり
- 君の花菓を植ふる園、禽獸を飼ふ園をなす
- 草深き水地なり
- 國の名なり、其の君糾

者。其惟春秋乎。罪我者。其惟春秋乎。聖王不作。諸侯放恣。處士橫議。楊朱墨翟之言。盈天下。天下之言。不歸楊。則歸墨。楊氏爲我。是無君也。墨子兼愛。是無父也。無父無君。是禽獸也。公明儀曰。庖有肥肉。廄有肥馬。民有飢色。野有餓莩。此率獸而食人也。楊墨之道。不先孔子之道。不著。是邪說誣民。充塞仁義也。仁義充塞。則率獸食人。人將相食。吾爲此懼。閑先聖之道。距楊墨。放淫辭。邪說者不得作。作於其心。害於其事。作於其事。害於其政。聖人復起。不吾言矣。昔者禹抑洪水。而天下平。周公兼夷狄。驅猛獸。而百姓寧。孔子成春秋。而亂臣賊子懼。詩云。戎狄是膺。荆舒是懲。則莫我敢承。無父無君。是周公所膺也。我亦欲正人心。息邪説。距

王の暴虐を助けたるを以て仇つ

● 紂王の亂臣

● 今の書經周書君牙の篇

● 大に明かなるなり

● 謀なり

● 繼ぐなり

● 功烈

● 成王、康王を指す

● 助け開くなり

● 皆なり

● 正しき道

● 政治の樹はざるなり

● 聖人の道の明かならざるなり

● 又と通す

● 魯の陳公より、哀公まで、二四二二年間の事を載せたる魯の記録なり

● 褒貶の書法によりて、王法を正し、賢節を明かにせるものなれば、春秋の仕事は天子のすべき仕事なり

● 氣ま

● 家に居仕へざる士

● 勝手に議論するなり

● 楊は、墨と同時の人なり

● 墨の事に就ては本書滕文公上を見よ

● 何事も、我が一身の爲めにするなり利己主なり

● 遠近親疎の差別なく、平等に兼ね愛するなり

● 邪説をして、聖がりて通ぜざらしむるなり

● 斷るなり、一説に對ふなり

● 拒と同じ

● 放し、遠ざくるなり

● 公孫丑の上篇には、生於其心害於其政、發於其事一とあり、彼の處にては、先づ政をいひて、後に事をいひ、此の處にては、先づ事をいひて、後に政をいふ

● 一説には治むるなり、止むるなり

● 變ね并はず

● 滕文公上篇に既出

● 當るなり

● 偏なる行ひなり

● 禹王と周公と孔子となり

● 繼ぐなり

誠行放淫辭。以承三聖者。豈好辯哉。予不得已也。能言距楊墨者。聖人之徒也。

匡章曰。陳仲子豈不誠廉士哉。居於陵三日不食。耳無聞。目無見也。井上有李。蟪食。實者過半矣。旬旬往將食之。三咽然後耳有聞。曰。有見。孟子曰。於齊國之士。吾必以仲子爲巨擘焉。雖然。仲子惡能廉充。仲子之操。則蚓而後可者也。夫

匡章曰く、陳仲子は、豈に誠の廉士ならずや。放陵に居る、三日食はず。耳聞くなく、目見るなきなり。井上に李あり、蟪の實を食ふ者半に過ぐ。旬旬して往きて將に之を食はんとす。三咽して、然る後耳聞くあり、目見るあり。孟子曰く、齊國の士に於て、吾必ず仲子を以て巨擘と爲さん。然りと雖も仲子惡ぞ能く廉ならん。仲子の操を充てば、則ち蚓にして而る後に可なる者なり。夫れ蚓は上橋壤を食ひ、下黄泉を飲む。仲子の居る所の室は、伯夷の築く所か、抑も亦盜跖の築く所か、食ふ所の粟は、伯夷の樹うる所か、抑も亦盜跖の樹うる所か、是れ未だ知る可からざるなり。曰く、是れ何ぞ傷まんや。彼れ身は屨を織り、妻は辟纈して以て之れに易ふるなり。曰く、仲子は齊の世家なり。兄戴が蓋の祿萬鍾、兄の祿を以て不義の祿と爲して食はざるなり。兄の室を以て不義の室と爲して居らざるなり。兄を避け母を離れ、於陵に處る。他日歸れば、則ち

蚓。上食橋壤。下飲黄泉。仲子所居之室。伯夷之所築。與。抑亦盜跖之所築。與。所食之粟。伯夷之所樹。與。抑亦盜跖之所樹。與。是未可知也。曰。是何傷哉。彼身織履。妻辟纈。以易之也。曰。仲子齊之世家也。兄戴蓋祿萬鍾。以兄之祿。而不食也。以兄之室。爲

其兄に生鵝を饋る者あり。己類願して曰く、惡ぞ是親親の者を用つて爲んやと。他日其母是の鵝を殺す。之に與へて、之れを食はしむ。其兄外より至りて曰く、是れ親親の肉なりと。出でて之れを哇く。母を以てすれば則ち食はず、妻を以てすれば則ち之れを食ふ。兄の室を以てすれば則ち居らず、於陵を以てすれば則ち之れに居る。是れ尙ほ能く其類を充つと爲すか。仲子の若き者は、蚓にして而る後に其操を充つる者なり。

- ① 齊の人 ② 齊の人 ③ 廉潔なる士なり ④ 齊の地名なり ⑤ 實に似て、大なるものなり ⑥ 吞むなり
- ⑦ 第一人者、大指の意 ⑧ 所操なり ⑨ 蟪充すなり ⑩ 蚯蚓であつて出来べき事、人として衣食居室を欲すべきに陳仲子の言ふ所を極端まで論ずれば蚯蚓の如くし、こを爲し得んとの意 ⑪ 乾きたる土なり
- ⑫ 地中の水なり、地の色は、黄なるが故に黄泉といふ ⑬ 昔の大塚なり ⑭ 室と粟と ⑮ 出来までも調はずと
- ⑯ 何の不都合があるべきといふことなり ⑰ 麻をうむなり、織は、練りたる麻なり ⑱ 代々家業なり
- ⑲ 兄の名 ⑳ 兄の領地の名 ㉑ 宦家(隨者)をり ㉒ 仲子なり ㉓ 眉を巻むるなり、由來生鵝を饋るが如きは實際上の常體にて別段咎むべきことに非ず、然るに仲子は之を簡略的に行となして想める也 ㉔ 鴿鳥の鳴き聲なり ㉕ 門を出づるなり ㉖ 吐くなり ㉗ 其の居らざる類を蟪充するなり

不義之室而不居也。辟兄離母。處於於陵。他日歸則有饋。其兄生鵝者。已須臾曰。惡用是  
鵝。鵝者爲哉。他日其母殺鵝。是鵝也。與之食之。其兄自外至曰。是鵝。鵝之肉也。出而哇之。以  
母則不食。以妻則食之。以兄之室則弗居。以於陵則居之。是尙爲能充其類也乎。若仲子  
者。則而後充其操者也。

卷之七

離婁章句上

孟子曰。離婁之明。公輪子之巧。不以規矩不能成方員。師曠之聰。不以六律不能正五音。堯舜之道不以仁政不能平治天下。今有仁心仁聞而民不被其澤。不可法於後

孟子曰く、離婁の明、公輪子の巧も、規矩を以てせざれば、方員を成す能はず。  
師曠の聰も、六律を以てせざれば、五音を正す能はず。堯舜の道も、仁政を以  
てせざれば、天下を平治する能はず。今仁心仁聞ありて、而して民其の澤を被  
らず、後世に法とすべからざる者は、先王の道を行はざればなり。故に曰く、  
徒善は以て政を爲すに足らず、徒法は以て自ら行ふ能はず。詩に云ふ、愆ら  
忘れず、舊章に率由すと。先王の法に遵ひ而して過つ者は未だ之れ有らざる  
なり。聖人既に目力を竭し、之れに繼ぐに規矩準繩を以てす。以て方員半直  
を爲る。用ふるに勝ふべからざるなり。既に耳力を竭し、之れに繼ぐに六律を以

世者不行先王之道也。故曰。徒善不足以為政。徒法不能以自行。詩云。不愆不忘。率由舊章。遵先王之法。而過者未之有也。聖人既竭自力。焉繼之以規矩準繩。以為方員平直。不可勝用也。既竭耳力。焉繼之以六律。正五音。不可勝用也。既竭心思。焉繼之以不忍。

てし、五音を正す。用ふるに勝ふべからざるなり。既に心思を竭し、之に繼ぐに人に忍びざるの政を以てす。而して仁天下を覆ふ。故に曰く、高を爲さば必ず丘陵に因る。下を爲さば必ず川澤に因る。政を爲して先王の道に因らざれば、智と謂ふ可けんや。是を以て惟仁者は、宜しく高位に在るべし。不仁にして高位に在るは、是れ其惡を衆に播するなり。上道揆なきなり、下法守なきなり。朝は道を信ぜず、王は度を信ぜず、君子義を犯し、小人刑を犯し、國の存する所の者は幸なり。故に曰く、城郭完からず、兵甲多からざるは、國の災に非ざるなり。田野辟けず、貨財聚らざるは、國の害に非ざるなり。上禮なく下學なければ、賊民興り、喪ぶると日なけん。詩に云ふ、天の方に斷く、然く泄泄する無かれと。泄泄は猶ほ沓沓のごときなり。君に事へて義なく、進退禮なく、言へば則ち先王の道を非る者は、猶ほ沓沓のごときなり。故に曰く、難きを君に責むる、之れを恭と謂ふ。善を陳べ邪を閉づる、之れを敬と謂ふ。吾君能はずと、之れを賊と謂ふ。

人之政而仁覆天下矣。故曰。爲高必因丘陵。爲下必因川澤。爲政不因先王之。道可謂智乎。是以惟仁者。宜在高位。不仁而在高位。是播其惡於衆也。上無道揆也。下無信守也。朝不信道。工不信度。君子犯義。小人犯刑。國之所存者幸也。故曰。城郭不完。兵甲不多。非國之災也。田野不辟。貨財不聚。非國之害也。上無禮。下無學。賊民興。喪無日矣。詩云。天之方蹶。無然泄泄。泄泄猶沓沓也。事君無義。進退無禮。言則非。

● 昔の黃帝時代の明目の人 ● 目のよく見ゆること ● 魯の上手なる細工人也、魯の昭公の子ならんかといふ ● 細工の上手なるなり ● ぶんまはし、曲尺なり ● 四角、尺は、圓きなり ● 魯の平公の時の普律に委しき樂人なり ● 耳のよく聞こゆるなり ● 六律陰陽なり、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、黃鍾をいふ ● 宮、商、角、徵、羽の五つの音聲なり、宮は、最も濁れる音、羽は、最も清める音にして、商、角、徵は、其の中間の音 ● 魯の聖と同じ ● 仁心ありとの評判なり ● 思深なり ● 後世の人君の手本 ● 其心の善なるも先王の道に由らぬ ● 詩經大雅假樂の篇 ● 過まらぬなり ● 先王の定めたる舊來の典章に循ひ依るなり ● 水鏡りと、器圖となり ● 用法際限なし ● 君たる者の、道理をもて、物事一度り定むること ● 臣たる者の、法度をもて、其の身を守ること ● 朝廷中の人々の、道理を信仰せざるなり ● 諸職人の、規矩準繩の如き制度の具を信用せざるなり、樂人として六律を信用せざることをも疑ぬ ● 位ある人を指す ● 位なき人を指す ● 德悖なり ● 開樂するなり ● 詩經の大雅板の篇 ● 天は、王者をいふ、天步風雅といはむが如し、國家の困難なるなり、一説には天の周室を顛覆せむと欲するなりと ● わだ口をさくさまなり ● 笑ひささめくさま ● 講るなり ● 行ひ難き事を君に責り察みて、行はしめて、君を難辨たらしめむとするなり ● 善道を開陳して、君の邪念を閉塞するなり





不親反其仁。治人不治反其智。禮人不禮反其敬。行有不得者皆反求諸己。其身正而天下歸之。詩云永言配命。自求多福。

孟子曰。人有恆言。皆曰。天下國家。天下之本在國。國之本在家。家之本在身。孟子曰。爲政不難。不得罪於巨室。巨室之所慕。一國

ば其の智に反れ。人を禮して答へずんば其敬に反れ。行うて得ざる者有れば、皆諸れを己に反求す。其身正しうして而して天下之れに歸す。詩に云ふ、永く言命に配し、自ら多福を求む。

● 立ち返るなり、乃ち我が至らざる故なりと反省せよとなり ● 此詩公孫丑上篇に詩出づ ● 言は我なり、永く我は天命に應ふ體にして自ら多福を求む人

孟子曰く、人恆言あり、皆曰く、天下國家と。天下の本は國に在り、國の本は家に在り、家の本は身に在り。

● 常語、日常談する語

孟子曰く、政を爲すこと難からず。罪を巨室に得ざれ。巨室の慕ふ所は、一國之を慕ひ、一國の慕ふ所は、天下之を慕ふ。故に沛然として徳教四海に溢る。

● 世臣大家なり、乃ち魯の三桓、晉の六卿、齊・陳田の如き權門家、譜代の家老 ● 大なる貌

慕之。一國之所慕。天下慕之。故沛然徳教溢乎四海。

孟子曰。天下有道。小德役大德。小賢役大賢。天下無道。小役大。弱役強。斯二者天也。順天者存。逆天者亡。齊景公曰。既不能令。又不受命。是絶物也。涕出而女於吳。今也小國師大國。而恥受命焉。是猶弟子而恥受命於先師也。如恥之。莫

孟子曰く、天下道あれば、小徳、大徳に役せられ、小賢、大賢に役せられ、天下道無ければ、小大に役せられ、弱強に役せらる。斯の二者は天なり。天に順ふ者は存し、天に逆ふ者は亡ぶ。齊の景公曰く、既に命する能はず、又命を受けざれば、是れ物を絶つなりとて、涕出でて而して吳に女したり。今や、小國は大國を師として、而して命を受くるを恥づ。是れ猶ほ弟子にして命を先師に受くるを恥づるがごとし。如し之れを恥ぢば文王を師とするに若くは莫し。文王を師とすれば、大國は五年、小國は七年、必ず政を天下に爲さん。詩に云ふ、商の孫子、其の麗億のみならず。上帝既に命じ、侯れ周に于て服せしめ、侯れ周に于て服せしむ。天命は常靡し、殷士膺敵なるも、京に裸將すと。孔子曰く、仁には衆を爲すべからず。夫れ國君仁を好めば、天下に敵なし。今や天下に敵なからんと欲し、而して仁を以てせず、是れ猶ほ熱を執りて以て濯せざるがごとし。詩に

若師二文王一。師二文王一。大國五年。小國七年。必爲三政於天一。下レ矣。詩云。商之孫子。其麗不レ億。上帝既命。侯于周服。侯服于周。股士膚敏。裸將于レ京。孔子曰。仁不可レ爲レ衆也。夫國君好仁。天下無レ敵。今也欲無レ敵於天。

云ふ、誰れか熱を執り、逝に以て濯せざらん。  
 小人物 ① 大人物 ② 使役せらる ③ 小國、大國なり、土地をもていふ ④ 弱國、強國なり ⑤ 天  
 齊自然の勢ひといふ ⑥ 弱國となりて他國に命令すること能はず ⑦ 他國からの命令を受けざれば ⑧ 實際  
 上の事を絶つなり、一説には、物は、人といはむが如しといへり ⑨ 己れの姫を魯の魯王の嫁に遣りたるなり  
 ⑩ 勝、歸等の類をいふ ⑪ 齊、楚の國をいふ ⑫ 見習ふ ⑬ 學生 ⑭ 詩經大雅文王の篇 ⑮ 子孫  
 ⑯ 敢なり ⑰ 非常に多いこと ⑱ 惟れなり ⑲ 服従するなり ⑳ 常なきなり、一定不變のものに  
 ありぬ意 ㉑ 唐の遺臣 ㉒ 魏活の立派、才智の鋭敏 ㉓ 周の京師なり ㉔ 宗廟の祭に、饗應の酒を地  
 に灌ぎて、神を祭るしをすることなり ㉕ 仁には、殷の子孫の十萬の衆も、敵對せられぬなりといふ意 ㉖ 大  
 國の命令を受くることを恥づることなり、即ち天下を自分に自由にせんと欲するなり ㉗ 熱き物を執り持つな  
 り ㉘ 先に水にて其の手を洗へば濯のたゞ手を寄するなし、然かも之を爲さざるに似たり ㉙ 詩經の大雅の  
 卷柔の篇 ㉚ 又、こゝに「謂て酒辭なり」

下。而不以仁。是猶執熱而不以濯也。詩云。誰能執熱。逝不以濯。

其當樂其所。以亡者不仁。而可與言。則何亡國敗家之有。有孺子歌曰。滄浪之水清兮。可以濯我纓。滄浪之水濁兮。可以濯我足。孔子曰。小子聽之。清斯濯足矣。濁斯濯足矣。人必自侮。然後人侮之。家必自毀。而後人毀之。國必自伐。而後人伐之。太甲曰。天作孽。猶不可活。此之謂也。

亡し家を敗る之れ有らん。孺子あり、歌うて曰く、滄浪の水、清まば、以て我が纓を濯ふべし、滄浪の水、濁らば、以て我が足を濯ふ可しと。孔子曰く、小子之れを聴け、清まば斯に纓を濯ひ、濁らば斯に足を濯ふ、自ら之れを取るなり。夫れ人必ず自ら侮りて、然る後人之れを侮る。家必ず自ら毀ちて、而して後人之れを毀つ。國必ず自ら伐ちて、而る後人之れを伐つ。太甲に曰く、天の作せる孽は猶ほ違ふ可し、自ら作せる孽は活くべからずと。此れ之れ之の謂ひなり。

① 一所に物をいふ事は出来ぬ ② 其の危きことを知らずして、安んじ ③ 富は、災と同じ、其の災難の來るべきことを知らずして、利益なりと思ふなり ④ 荒淫無慮などの如き、其の滅亡を招くべきけあひのものを樂むなり ⑤ 童子なり ⑥ 川の名 ⑦ 冠の紐 ⑧ 弟子どもの意 ⑨ 纓を濯ひ足を濯ふも水の清濁によりて水自らが招けるなり ⑩ 自ら輕侮するなり、身について云ふ ⑪ 自ら破壊するなり、家についていふ ⑫ 自ら征伐するなり、國について云ふ ⑬ 書經の句なり、解は公孫丑の上篇に出づ

孟子曰。桀紂

孟子曰く、桀紂の天下を失ふや、其民を失ふなり。其民を失ふとは、其心を

之失天下也。失其民也。失其心也。得天下有道。得其民。斯得天下矣。得其心。斯得其民矣。得其心。有以道。所欲與之。聚之所。惡勿施。爾也。民之歸仁也。猶水之就下。獸之走圜也。故為淵。歐魚者。類也。為叢。歐爵者。鷓也。為湯。武。歐民者。桀與紂也。今

失ふなり。天下を得るに道あり。其民を得れば斯に天下を得、其民を得るに道あり。其心を得れば斯に民を得。其心を得るに道あり。欲する所は之れを與へ之れを聚め、惡む所を施す勿きのみ。民の仁に歸する、猶ほ水の下に就き、獸の圜に走るがごとし。故に淵の爲めに魚を歐る者は類なり、叢の爲めに爵を歐る者は鷓なり、湯武の爲めに民を歐る者は桀と紂となり。今天下の君、仁を好む者あらば、則ち諸侯皆之れが爲めに歐らん。王たるなきを欲すと雖も、得べからざるのみ。今の王たらんと欲する者は、猶ほ七年の病に三年の艾を求むるがごとし。苟も畜へざるをなさば、終身得ず。苟も仁に志さずんば、終身憂辱して以て死亡に陥らん。詩に云ふ、其れ何ぞ能く淑からん。載ち胥及に渉ると。此れ之の謂ひなり。

● 人民の欲す所のものを聚めて與ふ ● 廣野 ● 淵に魚あるやうに淵のために魚を歐る者は類なり、即ち淵にあらずんば魚は類に害せらる ● 鴈と同じく其の樂しむ所に行かじむる意 ● かはうそ ● 雀と通ず ● 鷹の類なり ● 長頸ひなり ● 三年も乾かしたる艾なり、艾を、灸に用ゐるは、ふるきもの程き、めありとい

天下之君。有仁者。諸侯皆之。歐矣。雖欲無王。不可得已。今之欲王者。猶七年之病。求三年之艾也。苟爲不畜。終身不得。苟不志於仁。終身憂辱。以陷於死亡。詩云。其何能淑。載胥及溺。此之謂也。

よ。畜は蓄と同じ ● 時經の大雅卷第 ● 善きなり ● 則と同じ ● 相與にかり

孟子曰。自暴者。不可與有言也。自棄者。不可與有爲也。言非禮義也。言非禮義。謂之自暴也。吾身不能居仁由義。謂之自棄也。仁人之安宅也。義人之正路也。曠安宅而弗居。舍正路而不由。哀哉。

孟子曰く、自ら暴する者は、與に言ふある可からざるなり。自ら棄つる者は、與に爲す有るべからざるなり。言禮儀に非ざる、之れを自暴と謂ふ。吾が身は仁に居り義に由る能はざる、之れを自棄と謂ふ。仁は人の安宅なり。義は人の正路なり。安宅を曠しくして居らず。正路を捨てて由らず、哀しいかな。

● 自ら其の身を害ふ ● 自ら其の身を棄つるなり ● 合はぬ。一説詳なり ● 完全なる居所 ● 空虛にす ● 正當に履み行くべき道路なり ● 棄つるなり

孟子曰。道在爾。而求諸遠。事在易。而求

孟子曰く、道は爾きに在り。而して諸を遠きに求む。事は易きに在り、而して諸を難きに求む。人人其親を親み、其長を長とせば、天下平かなり。



諸難。人人親其親。長其長。而天下平。孟子曰。居下位而不獲於上。民不可得而治也。獲於上有道。不信於友。弗獲於上矣。信於友有道。事親弗悅。弗於信於友矣。悅親有道。反身不誠。不悅於親矣。誠身有道。不明乎善。不誠其身矣。是故誠者天之道也。思誠者人之道也。至誠而不動者。未之有也。不誠未有能動者一也。

孟子曰く、下位に居りて上に獲られざれば、民得て治む可からざるなり。上に獲らるゝに道あり。友に信ぜられざれば上に獲られず、友に信ぜらるゝに道あり。親に事へて悦ばれざれば、友に信ぜられず、親に悦ばるゝに道あり。身に反して誠あらざれば、親に悦ばれず。身を誠にするに道あり。善に明ならざれば、其身に誠あらず。是の故に誠は天の道なり。誠にせんと思ふは人の道なり。至誠にして動かされざる者は、未だ之れ有らざるなり。誠ならずして未だ能く動かす者は有らざるなり。

● 臣下の地位 ● 君上の思召に叶はぬ ● 誠は人の性なる故に云ふ ● 學びて以て誠にす故に人の道と云ふ、其の身を誠實にせむと思ふなり ● 至誠を以て人に動かすれば人必ず感動す

孟子曰。伯夷辟紂。居北海之濱。聞文王作興。曰。盍歸乎來。吾聞西伯善養老者。東海之濱。聞文王作興。曰。盍歸乎來。吾聞西伯善養老者。二老者天下之大老也。而歸之。是天下之父歸之也。天下之君歸之。其子焉往。諸侯有行。文王之政。七年之內。必爲政於天下。一矣。

孟子曰く、伯夷は紂を辟け、北海の濱に居る。文王作興すと聞き、曰く、盍ぞ歸せざる。吾聞く、西伯は善く老を養ふ者と。太公紂を辟け、東海の濱に居る。文王作興すと聞く。曰く、盍ぞ歸せざる。吾聞く、西伯は善く老を養ふ者と。二老は天下の大老なり。而して之れに歸す。是れ天下の父之れに歸するなり。天下の父之れに歸せば、其子焉くに往かん。諸侯、文王の政を行ふ者あらば、七年の内、必ず政を天下に爲さん。

● 殷の紂王の亂を避く ● 北海の海濱の意 ● 作興の作は其勢を謂ふ、文王起つなり、興は其德を謂ふ、王道を興すなりト。朱註にては聞文王作興曰。と訓じ文王の起り、伯夷の起つとす ● 何ぞ早く往きて歸せざるといふことなり、來は、助語 ● 西方の諸侯の旗幟なり、文王を指す ● 太公望呂尚なり ● 伯夷と、太公望 ● 年齢といひ、德望といひ、天下第一の長老たるなり ● 孟子は時勢を観察しかく考へしならん

孟子曰く、求は季氏の宰となり、能く其徳を改むるなく、而して粟を賦す

爲季氏宰。無能改於其德。而賦粟倍他日。孔子曰。求非我徒也。小子鳴鼓而攻之可也。由此觀之。君不行仁政而富之。皆棄於孔子者也。況於爲之強戰。爭地以戰。殺人盈野。爭城以戰。殺人盈城。此所謂率土地而食人肉。罪不容於死。故善戰者服上刑。連諸侯者

る他日に倍す。孔子曰く、求は我が徒に非ざるなり。小子鼓を鳴して之れを攻めて可なりと。此れに由りて之れを觀れば、君仁政を行はずして、之れを富すは、皆孔子に棄てらるゝ者なり。況や之れが爲めに強戰し、地を争ひて以て戰ひ、人を殺して野に盈ち、城を争ひて以て戰ひ、人を殺して城に盈つるに於てをや、此れ所謂土地を率ゐて人肉を食まするなり。罪死に容れず。故に善く戰ふ者は上刑に服せしむ。諸侯を連ぬる者は之れに次ぐ。草萊を辟き土地に任する者は之れに次ぐ。

- 孔子の弟子の冉求 ● 魯の卿なり ● 執事なり ● 季氏の德を改め直す事なく ● 年貢米を取り立つること、前年に倍す ● 我が仲間にあらぬなり ● 弟子を指す ● 攻め太鼓を鳴らして、冉求の罪を責めよ
- 論語先進篇に、季氏富于周公、而求也爲之聚斂而附之、子曰、非吾徒也、小子鳴鼓攻之可也、と見ゆ ● 其の君を富ます ● 其の君の爲めに ● 私が兼ねがねハム所の、土地の爲めに人を殺すので、此に似たる言孟
- 子書中の隋所に見ゆ ● 其の罪極めて重大なり ● 孫子、吳子の徒をいふ ● 一等重き死刑を加へ
- 諸侯を連合せしむるなり、盟衆、張儀の如きもの ● 荒れ地を開墾するなり ● 人民に地面を割り付けて、耕作の爲めに任せしめ課税せしむるなり

次之。辟草萊。任土地者。次之。

孟子曰。存乎人者。莫良於眸子。眸子不能掩其惡。昏中則眸子眊焉。正則眸子眊焉。聽其言也。觀其眸子。人焉廋哉。孟子曰。恭者不侮人。儉者不奪人。侮奪人之君。惟恐不順焉。惡得爲恭。儉。豈可以聲言笑貌爲哉。

孟子曰く、人に存する者は、眸子より良きは莫し。眸子は其惡を掩ふ能はず。昏中しければ、則ち眸子眊なり、昏中正しからざれば則ち眸子眊し。其言を聽き、其の眸子を觀れば、人焉んぞ廋さんや。

- 人の身體に存在する者 ● 眼中の瞳子はほど、人の心の善く分かるものなし ● 心の内なり ● 清みて明かなり ● 蓋して居ること ● 匿すなり

孟子曰く、恭者は人を侮らず。儉者は人より奪はず。人を侮辱するの君は、惟順はざるを恐る。惡んぞ恭儉を爲すを得ん。恭儉は豈に聲音笑貌を以て爲す可けんや。

- 人の己れに順はざらむことを氣遣ふなり、一説に、人の意に順ふことなり ● 眞の恭儉は心なり、言葉の調子と顔つきに出来べき事にあらず

淳于髡曰男女授受不親禮與孟子曰禮也曰嫂溺則援之以手乎曰嫂溺不援是豺狼也男女授受不親禮也嫂溺援之以手者權也曰今天下溺矣夫子之不援何也曰天下溺援之以道嫂溺援之以手欲三手授天下一乎

公孫丑曰君子之不教子何也孟子曰教勢不行也教

淳于髡曰、男女授受するに親せざるは禮か。孟子曰く、禮なり。曰く嫂溺るれば則ち之れを援くに手を以てせんか。曰く、嫂溺れて援かざるは是れ豺狼なり。男女授受するに親せざるは禮なり。嫂溺れ之れを援くに手を以てするは權なり。曰く、今天下溺る、夫子の援けざるは何ぞや。曰く、天下溺るれば之れを援くるに道を以てし、嫂溺るれば之れを援くに手を以てす、子手もて天下を援げんと欲するか。

- 姓は淳于、髡は名なり、齊の辯士なり
- 物を手渡しせぬ
- 兄嫂の水に溺る、なり
- 教ふなり
- 射は、やまいぬなり、殘忍なる獸なり
- 臨機應變の處置なり、權也なり

公孫丑曰く、君子の子を教へざるは何ぞや。孟子曰く、勢行はれざるなり。教ふる者は必ず正を以てす。正を以てして行はれざれば、之れに繼ぐに怒を以てす。之れに繼ぐに怒を以てすれば、則ち反りて夷ふ。夫子我に教ふるに正を

者必以正。以正不行。繼之以怒。繼之以怒則反夷矣。夫子教我以正。夫子未出於正也。則是父子相夷也。父子相夷則惡矣。古者易子而教之。父子之間不責善。責善則離。離則不祥。莫大焉。

孟子曰。事孰爲大。事親爲大。守身爲大。不守其身而能事其親者。吾聞之矣。失其

以てす。夫子未だ正に出でざるなりと。則ち是れ父子相夷ふなり。父子相夷へば則ち惡し。古は子を易へて之れを教ふ。父子の間は善を責めず。善を責むれば則ち離る。離るれば則ち不祥焉れより大なるは莫し。

- 自身に子供を教へず
- 行はれざる事情あり
- 父子の情を害ふなり
- 父を指す
- 許さずせむ
- ことを責め置むなり
- 愛情の離る、なり
- 不吉なり
- 非常に大なる意

孟子曰く、事ふる孰れか大と爲す。親に事ふるを大と爲す。守る孰れか大と爲す。身を守るを大となす。其身を失はずして能く其親に事ふる者は、吾れ之れを聞けり。其身を失うて能く其親に事ふる者は、吾れ未だ之れを聞かざるなり。孰れか事ふると爲さざらん。親に事ふるは事ふるの本なり。孰れか守ると爲さざらん。身を守るは守るの本なり。會子、會稽を養ふに、必ず酒肉あり。將に徹

親者吾未之聞也。孰不爲事。事親事之本也。孰不爲守。守身守之本也。曾子養曾皙必有三酒。將徹必問所與。問有餘必曰有。曾皙死。曾元養曾子。必有酒。曾子必不請所與。將徹不請所與。事親若曾子者可也。

せんとすれば必ず與ふる所を問ふ。餘ありやと問へば、必ず有りと曰ふ。曾哲死す。曾元曾子を養ふに必ず酒肉あり。將に徹せんとして與ふる所を請はず。餘り有りやと問へば、亡しと曰ふ。將に以て復た進めんとするなり。此れ所謂口體を養ふ者なり。曾子の若きは則ち志を養ふと謂ふべきなり。親に事ふること曾子の若きものは可なり。

● 我が身を不義に陥らぬやうに大切に守るなり ● 曾子の父なり、名は點といふ ● 朋を引き下ぐ ● 曾子の子 ● 無きなり ● 再び親に進むるなり ● 口腹身體

孟子曰。人不足與適也。政不足與聞也。惟大人爲能格君心之非。君

孟子曰く、人は與に適むるに足らざるなり。政は聞するに足らざるなり。惟大人は能く君心の非を格することを爲す。君仁なれば仁ならざること莫し。君義なれば義ならざること莫し。君止しければ正しからざる莫し。一たび君を正しくすれば國定まる。

仁莫不仁。君義莫不義。君正莫不正。一正君而國定矣。

● 小人どもの過失は咎むるにも足りない ● 講るなり ● 大徳の人 ● 君の忠告の堪ることを正すなり ● 君が仁なれば國中不仁であることはなし

孟子曰。有求於之毀。○孟子曰。人之易其言也。無責耳矣。○孟子曰。人之患在好爲人師。

孟子曰く、威らざるの譽あり。全きを求むるの毀あり。○孟子曰く、人の其の言を易くするは、責めなきのみ。○孟子曰く、人の患は、好んで人の師と爲るに在り。

● 豫期せざるの譽を得 ● 其の名全からんことを求めて反つて譽を得ることあり ● 人が容易に言ふは其の言に就きて實を責はず失言あるも顧若ざるが故なり

樂正子從於子敖之齊。樂正子見孟子。孟子曰。子亦來見我乎。曰。先生何爲出

樂正子、之敖に從ひ齊に之く。樂正子、孟子を見る。孟子曰く、子も亦來りて我を見るか。曰く、先生何爲れぞ此言を出す。曰く、子の來ること幾日ぞ。曰く、昔者。曰く、昔者ならば則ち我此言を出す、亦宜ならずや。曰く、舍館未だ定ま



此言也。曰。子來幾日矣。曰。昔者。曰。昔者則我出此言也。不亦宜乎。曰。舍館未定。曰。子聞之也。舍館定。然後求見長者乎。曰。克有罪。

らず。曰く、子之れを聞けりや、舍館定まり、然る後長者を見るを求むるか。曰く、克罪有り。

● 魯人にして孟子の弟子なり ● 子敖は王闔の字。齊王の側臣なり、王闔は孟子の奥に言はざる所の者なり ● 前日、昨日なり ● 旅館未だ定まらず故にすぐ來らざりきと也 ● 樂正子の名、長者にはすぐに稱讃すべきなりと氣付きて謝罪する也

孟子謂樂正子曰。子之從於子敖來。徒餽噉也。我不意。子學古之道。而以餽噉也。孟子曰。不孝有三。無後爲大。舜不告而娶。爲無後也。

孟子、樂正子に謂ひて曰く、子の子敖に從ひて來るは、徒に餽噉するなり。我意はざりき、子古の道を學びて、而して以て餽噉せんとは。 ● 餽は食なり、噉は飲なり、只食を求むるのみと也 ● 孟子が樂正子の古道を學びながら妾に人に従ふを訓へるなり ● 孟子曰く、不幸に三あり、後なきを大と爲す。舜の告げずして娶るは後なきが爲めなり。君子以て猶ほ告ぐるがごとしと爲す。

● 親不孝には、三箇條あり、許からぬ人に阿り陥ひて親を不義に陷るゝこと、家貧しく親老いたるに其の養ひを缺くこと、子なくして先祖の祀りを絶つことなりと精註に見ゆ ● 踏日なきなり ● 親に告げずして、帝堯の姫

君子以爲猶告也。

の城屋、女英を娶れるは後嗣の絶えん事を恐るゝなり、孝の輕重を考へてかくせしなり  
孟子曰く、仁の實は親に事ふる是れなり。義の實は兄に従ふ是れなり。智の實は斯の二者を知りて去らざる是れなり。禮の實は斯の二者を節文する是れなり。樂の實は、斯の二者を樂む。樂めば則ち生ず。生ずれば則ち惡んぞ已むべけんや。惡んぞ已むべくんば、則ち足之れを踏み、手之れを舞ふを知らざるなり。

● 親に事へ、兄に従ふの二事 ● 程よくあやなすなり、親に事へ兄に従ふことを文飾するなり ● 草木の萌へ出づるが如く自然に生ず ● 勢ひの止むべからざるなり ● 足の踏み、手の舞ふも、心付かぬなり

孟子曰。天下大悅。而將歸己。視天下悅而歸己。猶艸芥也。惟舜爲

孟子曰く、天下大いに悦んで、而して將に己れに歸せんとす。天下悦んで己れに歸するを視ること、猶ほ艸芥のごとし。惟舜を然りと爲す。親に得ざれば以て人と爲す可からず。親に順ならざれば、以て子と爲す可からず。舜は親に事ふ

然の不得乎親。不可二以爲人。不順乎親。不可二以爲子。舜盡二事親之道。而瞽瞍底豫。而天下化。瞽瞍底豫。而天下之爲父子者定。此之謂大孝。

るの道を盡して、而して瞽瞍を底す。瞽瞍を底して、而して天下化する。瞽瞍を底して、而して天下の父子爲る者定まる。此れを之れ大孝と謂ふ。

● 舜を指す ● 草の如く親て、念慮に掛げざるなり ● 親の心は叶はぬなり ● 舜の父の名なり ● 悦び樂むこと

卷之八

離婁章句下

孟子曰く、舜は諸馮に生れ、負夏に遷り、鳴條に卒す。東夷の人なり。文王は岐周に生れ、畢郢に卒す。西夷の人なり。地の相去る、千有餘里、世の相後する、千有餘歳、志を得て中國に行ふ。符節を合するが若し。先聖後聖其揆一なり。

● 中國の東方の邊鄙の地名 ● 同上 ● 同上 ● 中國の東方の邊鄙なり ● 岐山の下周の舊邑也 ● 中國の西方の邊鄙に在り、周の都に近き地名 ● 中國の西方の邊鄙 ● 帝舜は天子となり、文王は西伯となり ● 各々其の道を中國に行ひたるなり ● 朔り符を合はせ ● 主として舜と文王とを云ふ ● 度なり

孟子曰く、舜は諸馮に生れ、負夏に遷り、鳴條に卒す。東夷の人なり。文王は岐周に生れ、畢郢に卒す。西夷の人なり。地の相去る、千有餘里、世の相後する、千有餘歳、志を得て中國に行ふ。符節を合するが若し。先聖後聖其揆一也。

子產聽鄭國之政。以其乘輿濟人於溱洧。孟子曰。惠而不知爲政。歲十一月徒杠成。十二月與梁成。民未病涉也。君子平其政。行辟人可也。焉得人人而濟之。故爲政者。每入而悅之。日亦不足矣。

子產鄭國の政を聞き、其乘輿を以て、人を溱洧に濟す。孟子曰く、惠にして政を爲すを知らず。歳の十一月徒杠成り、十二月輿梁成る、民未だ渉るを病まざるなり。君子其政を平にせば、行きて人を辟けしむるも可なり。焉ぞ人人にして之れを濟すを得ん。故に政を爲す者は、人毎に之れを悦ばざば、日も亦足らず。

● 鄭の大夫の公孫僑の字なり ● 政治を行ひ ● 乗りたる車 ● 二つの川の名なり ● 渡す ● 人の徒歩して渡るべき橋 ● 車輿を通ずべき橋 ● 徒歩にて水を渉るなり ● 畏ふるに及ばず ● 位ある人を指す ● 人を左右に押し分くるなり ● いくちやつたとして到底やり切れる話に非ず

孟子告齊宣王曰。君之視臣。如手足則臣視君如腹心。君之視臣。如土芥則臣視君如寇讎。王曰。禮爲蓄君。有服。何如斯可爲服矣。曰。諫行言聽。膏澤下於民。有故而去。則君使人導之出疆。又先於其所往。去三年不反。然後收其田里。此之謂三有禮焉。如此則爲之服矣。今也爲臣。諫則不行。

孟子、齊の宣王に告げて曰く、君の臣を視ること、手足の如くなれば、則ち臣の君を視ること腹心の如し。君の臣を視ること犬馬の如くなれば、則ち臣の君を視ること國人の如し。君の臣を視ること土芥の如くなれば、則ち臣の君を視ること寇讎の如し。王曰く、禮に舊君の爲めに服ありと。何なる斯に爲めに服すべきか。曰く、諫行はれ言聽かれ、膏澤民に下り、故ありて去れば、則ち君人をして之を導きて疆を出ださしめ、又其の往く所に先ち、去りて三年にして反らざれば、然る後に其田里を收む。此を之れ三有禮と謂ふ。此の如くなれば則ち之れが爲めに服す。今や臣と爲り、諫むれば則ち行はれず、言へば則ち聽かれず、膏澤民に下らず、故ありて去れば、則ち君之れを搏執し、又之れを其の往く所に極し、去るの日、遂に其田里を收む。此を之れ寇讎と謂ふ。寇讎には何の服か之れあらん。

● 土や、草の如くは手荒く取り扱はゞ ● 仇敵なり ● 前に事へし君なり ● 忌避あり ● 諫言を採用せられ ● 意見の採用せざる ● 恩澤を人民に及ぼすなり ● 事故ありて其の國を去る ● 濟梁内をするなり ● 國境 ● 其の往かむとする國に對して富人の往き著く前に其の才能を吹聴してやり ● 其の田采里居を取り上ぐるなり ● 道案内と、他國への吹聴と、三年立ちて田畠里居を取り上ぐるの三つの禮なり、右は添へ字なり ● 召し捕ふ ● 惡みて之を苦しむ





當大事。惟送死可以當大事。孟子曰。君子深造之以道。欲其自得之也。自得之則居之安。居之安則費之深。費之深則取之左右逢其原。故君子欲其自得之也。○孟子曰。博學而詳說之。將以反說約也。孟子曰。以善服人者。未有不能服人者也。

に足らず ① 死したる親を見送る、一生一度の事なれば禮を盡すにも大事なり

孟子曰く、君子は深く之れに造るに道を以てするは、其の之れを自得せんことを欲すればなり。之れを自得すれば、則ち之れに居ること安し。之れに居ること安ければ、則ち之れに資ること深し。之れに資ること深ければ、則ち之れを左右に取り、其原に逢ふ。故に君子は其の之れを自得するを欲するなり。○孟子曰く、博く學びて、詳に之れを説くは、將に以て反りて約を説かんとするなり。

① 深く道理に進み入るなり ② 仕方といふこと ③ 道を強ひて求めずして、自然に得んとす ④ 道理の上にて心を落ち着くることの安らかなるなり ⑤ 道理を取り用ひることの深遠なり ⑥ 道理を我が身の左右前後に取り用ひるなり ⑦ 道理の本源に出逢ふなり、原は源と同じ ⑧ 學びて道理を説明す ⑨ 要領の義

孟子曰く、善を以て人を服する者は、未だ能く人を服する者にあらざるなり。善を以て人を養うて、然る後能く天下を服す。天下心服せずして王たる者は、未

だ之れあらざるなり。○孟子曰く、言に實の不祥なし。不祥の實は、賢を蔽ふ者之れに當る。

① 善を以て人を服するは善を我が有として人を威服するものなり ② 善を以て人を敦養して善に赴かしむ ③ 世人の名づけて不祥といふ事に眞實の不祥と見るべきものなし ④ 賢を蔽ふのが眞實の不祥なり

以善養人。然後能服天下。天下不心服。而王者未之有也。○孟子曰。言無實不祥。不祥之實。蔽賢者當之。

徐子曰。仲尼亟稱於水曰。水哉。水哉。何取於水也。孟子曰。原泉混混。不舍晝夜。盈科而後進。放乎四海。有本者如是。是之取爾。苟爲無本。七八月

徐子曰く、仲尼亟々水を稱して、曰く、水なるかな水なるかなと。何ぞ水に取るや。孟子曰く、原泉混混として、晝夜を捨てず。科に盈ちて而る後に進み、四海に放る。本ある者は是の如し。是れを之れ取るのみ。苟も本なかりせば、七八月の間雨集り、溝澮皆盈つれども、其の涸るゝや立つて待つべきなり。故に聲聞情に過ぐるは、君子之れを聴づ。

① 徐詳なり ② 隠々なり ③ 水の徳を稱するなり ④ 水は源泉より涸涸として絶えず流れ出て地を行くや ⑤ 晝夜絶間なし ⑥ 穴なり ⑦ 大海の意 ⑧ 至るなり ⑨ みぞ、溝とは田間の水道なり ⑩ 乾なり ⑪ 久しからぬ意 ⑫ 名が實よりも高きは雨水の溝澮を益すが如く、さぐり給ふのみ

之間雨集。溝洫皆盈。其潤也可立而待也。故辟聞過情。君子恥之。

孟子曰。人之所異於禽獸者。幾希。庶民去之。君子存之。舜明於庶物。察於人倫。由仁義行。非行仁義也。

孟子曰く、人の禽獸に異なる所以の者幾んど希なり。庶民は之れを去り、君子は之れを存す。舜は庶物に明かに、人倫を察す。仁義に由りて行ふ。仁義を行ふに非ざるなり。

● 少しのことである ● 仁義をいふ ● 庶物の理に明なるなり ● 人倫五常を見顯むる意 ● 舜の行ふ仁義は自分の有する仁義によりて行ふなり、庶民の如く外より仁義を取りて行ふにあらず

孟子曰。禹惡旨酒。而好善言。湯執中。立賢無方。文王視民如傷。望道而未之見。武王不泄邇。不忘遠。周公思兼三王。以

孟子曰く、禹は旨酒を惡んで、善言を好む。湯は中を執る、賢を立つるに方なし。文王は民を視ること傷が如し。道を望んで未だ之れを見ざるが而し。武王は邇を泄らさず、遠きを忘れず。周公は三王を兼ねて以て四事に施さんと思ふ。其の合はざるある者は、仰いで之れを思ひ、夜以て日に繼ぐ。幸にして之れを得れば、坐して以て旦を待つ。

● 美酒なり、夏の禹王に時に備飲といふ者、始めて酒を作りしに、禹王之れを飲みて、歎じて曰く後世になりて

施中四事。其有不合者。仰而思之。夜以繼日。幸而得之。坐以待旦。

酒の爲めに國を亡ぼす者あらんとして、儆戒を遺ぎ、酒を絶ちたり、是れ其の酒を惡みたるなり ● 過不及なきを中といふ ● 方は、方角なりといひ或は規なりといふ、即ち賢者の來りし方向と解し又は賢者の類と解す ● 人民を視ること、怪我人を取り扱ふやうに、注意して取扱ふ ● 仁道を望み行うて而未だ邇は至らざる所あるが如く苦心す、而は如と通ず ● 近き朝臣に親み抑れて、疎略にせぬなり ● 邇き諸侯を忘却して、疎遠にせぬなり ● 禹王と湯王と文王武王となり ● 上述の禹王湯王文王武王の行ひし事、一説に四事は四季なりと

● 夜明け

孟子曰く、王者の迹熄んで、詩亡ぶ。詩亡びて、然る後春秋作らる。晉の乗楚の檣杙、魯の春秋は一なり。其事は則ち齊桓・晉文、其文は則ち史・孔子曰く、其義は則ち丘竊に之れを取ると。

孟子曰。王者之迹熄而詩亡。詩亡然後春秋作。晉之乘楚之檣杙。魯之春秋一也。其事則齊桓晉文。其文則史。孔子曰。其義則丘竊取之矣。

● 周の制度によりて、王者十二年目に天下を巡行して、方岳の下に至りて、諸侯を明堂に朝會せしめ、太史に命じて、詩を陳奏せしめて、民間の風俗を觀察す、然るに、周の平王の東遷以後、巡行の禮廢たれて、王者の迹止みければ、采詩の官の回風を察する事もなくなり詩の亡びたるなり ● 孔子の春秋の書の成り出でたるなり ● 晉の記録の名なり、之れを乘といへるは、晉楚共に載せざるはなしといふ義なり ● 楚の國の記録の名なり、昭黙の名より轉して、凶人の諷となり、又轉して、惡を記して、戒めを垂る、義となりたるなりといふ ● 其檣杙



僕曰。庾公之斯也。曰。吾生矣。其僕曰。庾公之斯。衛之善射者也。夫子曰。吾生何謂也。曰。庾公之斯。學射於尹公之佗。尹公之佗。學射於我。夫尹公之佗。端人也。其取友必端矣。庾公之斯。至曰。夫子何爲不執弓。曰。今日我疾作。不可執弓。曰。小人學射於尹公之佗。尹公之佗。學射於夫子。我不忍以夫子之道。反害夫子。雖然。今日之事。君事也。我不敢廢。抽矢。扣輪。去其金。發乘矢。而後反。

- 羿は、昔の射術を善くせし彼人の道に於て、一人の名にあらざるが如し、蓬蒙は、其の一人の弟子なりと、或は曰く羿は有窮國の君にして蓬蒙は其臣と
- 勝ざる
- 其の罪を蓬蒙に比すれば、少し輕いと云ふだけだ
- 鄧の大夫なり
- 侵掠せしむ
- 衛の大夫なり
- 鄧者なり
- 子濯孺子をさす
- 衛の人
- 正しき人なり
- 拙者なり
- 君命なり
- えびちより矢を抜き取るなり
- 車の輪に叩き附くるなり
- 其の鏃を取り除き
- 四本の矢なり
- 引き返すなり

孟子曰。西子蒙不潔。則人皆掩鼻而過之。雖有惡人。齊戒沐浴。則可以祀上帝。

孟子曰く、西子不潔を蒙らば、則ち人皆鼻を掩うて之れを過ぎん。惡人有りと雖も、齊戒沐浴せば、則ち以上帝を祀るべし。

- 昔の美女の西施
- 汚物を頭巾につけて被るなり
- 臭氣を避くるなり
- 容貌の醜き人なり
- 髪を洗ひ身を洗ふなり
- 髪を洗ひ身を洗ふなり
- 天帝を祭るなり

孟子曰。天下之言性也。則故而已矣。故者以利爲本。所惡於智者。爲其黷也。如智者若禹之行水也。則無惡於智矣。禹之行水也。行其所無事也。如智者亦行其所無事。則智亦大矣。天之高也。星辰之遠也。苟求其故。千歲之日至。可坐而致一也。

孟子曰く、天下の性を言ふや、故に則るのみ。故とは利を以て本と爲す。智に惡む所の者は、其の黷するが爲めなり。如し智者禹の水を行る若くならば、則ち智に惡むなし。禹の水を行るや、其の事なき所に行るなり。如し智者も亦其の事なき所に行らば、則ち智も亦大なり。天の高き星辰の遠き、苟くも其の故を求めば、千歲の日至も、坐して致すべきなり。

- 過去の遺迹に則るなり、朱計によれば、則ち故のみと訓じ、已然の迹によるのみ
- 自然に順利なるなり
- 無理なる穿鑿をするなり
- 洪水を源くなり
- 水の自然に順ひて流くなり
- 性の自然に順はば
- 星辰の地を去ることの遠きなり
- 過去の遺迹に就きて、自然に順利なるものを推し求むるなり
- 千年以後の冬至なり
- 骨折らずして分けざるべしと

公行子有子之喪。右師往弔。入門。右進

公行子の喪あり、右師往きて弔し、門に入る。進んで右師と言ふ者あり。右師の位に就き、而して右師と言ふ者あり。孟子、右師と言はず。右師悦ばずし



而與右師言者。有就右師之位。而與右師言者。孟子不與右師言。右師不悅曰。諸君子皆與。言。孟子獨不與。言。是簡驩也。孟子簡。不亦異乎。

て曰く、諸君子皆驩と言ふ。孟子獨り驩と言はず、是れ驩を簡にするなり。孟子之れを聞きて、曰く、禮に朝廷には位を歴て相與に言はず、階を踰えて相揖せざるなり。我禮を行はんと欲す、子放我を以て簡と爲す、亦異ならずや。

● 齊の大夫なり ● 役名なり、王禮時に此の役に在り ● 右師が公行子の門に入るなり ● 右師の前へ進み出づるなり ● 右師の座席の前に就く ● 來合はせたる人々をいふ ● 疎略にするなり ● 人の座席を差し越しては ● 堂の階段を差し越すなり ● 奇怪なり

孟子曰。君子所以異於人者。以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恆

孟子曰く、君子の人に異なる所以は、其の心を存するを以てなり。君子は仁を以て心に存し、禮を以て心に存す。仁者は人を愛し、禮ある者は人を敬す。人を愛する者は人恆に之れを愛し、人を敬する者は人恆に之れを敬す。此に人あり。其の我を待つに横逆を以てすれば、則ち君子必ず自ら反するなり。我は必ず不仁なり、必ず無禮なり、此の者奚ぞ宜しく至るべけんやと。其の自ら反して

愛之。敬人者人恆敬之。有入於此。其待我以橫逆。則君子必自反也。我必不仁也。我必無禮也。此物奚宜至哉。其自反而仁矣。自反而有禮矣。其橫逆由是也。君子必自反也。我必不忠。白

仁なり、自ら反して禮あり、其横逆由ほ是のごとくなれば、君子必ず自ら反するなり。我必ず不忠なりと。自ら反して忠なり、其の横逆是の如くなれば、君子曰く、此れ亦妄人なるのみ。此の如きは則ち禽獸と奚ぞ擇ばんや。禽獸に於て又何ぞ難ぜんと。是の故に君子は終身の憂ありて、一朝の患なきなり。乃ち憂ふる所の若きは則ち之れあり。舜も人なり、我も亦人なり、舜は法を天下に爲し、後世に傳ふべし。我は由ほ郷人たるを免れざるがごとし。是れ則ち憂ふ可きなり。之れを憂へば如何にせん。舜の如くせんのみ。夫の君子の若きは、患ふ所は則ち亡し、仁に非ざれば爲すなきなり。禮に非ざれば行ふなきなり。一朝の患あるが如きは、則ち君子は患へず。

● 心を存して、放れしめざるなり ● 無理非道なる仕向け ● 事なり ● 無法者なり ● 何等差別なきなり ● 禽獸に異なるなき者は敢て論議するにも及ばず ● 生涯に通ずる深き感服 ● 外より來る一時の心配なり ● 村里の常人なり ● 無と同じ、患無き理を説く

禽獸又何難焉。是故君子有終身之憂。無一朝之患也。乃若所愛則有之。舜人也。我亦人也。舜爲法於天下。可傳於後世。我由未免爲鄉人。是則可憂也。憂之如何。如舜而已矣。若夫君子。所患則亡矣。非仁無爲也。非禮無行也。如有二朝之患。則君子不患矣。

禹稷當平世。三過其門而不入。孔子賢之。顏子當亂世。居於陋巷。一簞食。一瓢飲。人不推其憂。顏子不改其樂。孔子賢之。孟子曰。禹稷顔回同道。禹思天下有溺者。由己溺之也。稷思天下有飢者。由己飢之也。是

禹・稷は平世に當り、三たび其門を過ぎて入らず。孔子之れを賢とす。顔子亂世に當り、陋巷に居り、一簞の食、一瓢の飲、人は其憂に堪へず、顔子は其樂を改めず、孔子之れを賢とす。孟子曰く、禹・稷・顔回道を同じくす。禹は天下に飢うる者あれば、由ほ己れ之れを溺すがごとしと思ふ。稷は天下に飢る者あれば、由ほ己れ之れを飢すがごとしと思ふ。是を以て是の如く其れ急なるなり。禹・稷・顔子、地を易へば則ち皆然らん。今同室の人鬪ふ者あらば、之を救ふに被髮纓冠して之を救ふと雖も可なり。郷鄰に鬪ふ者あり、被髮纓冠して往いて之を救ふは則ち惑なり。戸を閉つと雖も可なり。

- ① 禹は洪水を治め、稷は農業を教ふ
- ② 堯舜の平治の時なり
- ③ 家門
- ④ 見苦しき小路
- ⑤ 瓢箪一つの飲物
- ⑥ 三たび其門を過ぎて入らざりしをいふ
- ⑦ 被髮は髮亂れて頭を被ふ義、急ぎて理髮に暇あらざるなり
- ⑧ 纓は冠の紐にて頭に結ぶものなり、纓冠は髮を結ぶ能はず、纓を冠と共に頭に加ふるを云ふ

以如。是其急也。禹稷顔子。易地則皆然。今有同室之人鬪者。救之雖被髮纓冠而救之可也。郷鄰有鬪者。被髮纓冠而往救之。則惑也。雖閉戸可也。

公都子曰。匡章通國皆稱不孝。焉。夫子與之遊。又從而禮貌之。敢問何也。孟子曰。世俗所謂不孝者五。惰其四支。不顧父母之養。一不孝也。博奕好飲酒。不顧父母之養。二不孝也。好貨財。私妻子。不顧父母之養。三不孝也。從

公都子曰く、匡章は通國皆不孝と稱す。夫子之れと遊び、又従つて之を禮貌す。敢て問ふ何ぞや。孟子曰く、世俗の所謂不孝なる者五つあり。其四支を惰らせ、父母の養を顧みざるは、一の不孝なり。博奕し飲酒を好み、父母の養ひを顧みざるは、二の不孝なり。貨財を好み妻子に私し、父母の養ひを顧みざるは、三の不孝なり。耳目の欲を従にし、以て父母の讖を爲すは、四の不孝なり。勇か好み鬪狼し、以て父母を危くするは、五の不孝なり。章子は一つあるか。夫の章子は、子父善を貴めて相違はざるなり。善を責むるは朋友の道なり。父子善を責むるは、恩を賊ふの大なる者なり。夫の章子は豈に夫妻子母の屬あるを欲せざらんや。罪を父に得て近づくを得ざるが爲めに、妻を出し子を屏け、終身養はず。其の心を設くること、以爲らく是の若くならざれば、是れ則ち罪の

耳目之欲。以爲父母戮。四不孝也。好勇鬪狠。以危父母。五不孝也。章子有一於乎。夫章子子父責善。而不相遇也。責善朋友之道也。父子責善。賊思之大者。夫章子母之屬哉。爲得罪於父。不得近。出妻屏子。終身不養焉。其設心以爲不若。是則罪之大者。是則章子已矣。

大なる者と。是れ則ち章子ののみ。

- 齊國の人 ● 全國 ● 顔色を和げ禮を以て遇するなり ● 世間普通なり ● 博は、雙六の類なり、奕は、圍碁なり ● 妻子の愛に引かるゝなり ● 聲色に媚ることなり ● 恥辱なり、父母の名を辱かしむ
- 喧嘩口論するなり、銀は、争ひ臥ぶるなり ● 匡章の章に子を添へたるなり ● 子父は章子よりしていふ ● 折り合はぬこと ● 一般の父子を云ふ ● 妻子をいふ、妻に對して、夫の字を添へ、子に對して、母の字を添へたるなり、夫は、即ち己れ、母は、即ち己れの妻をいふ ● 卻くるなり ● 妻子の養ひを受けぬ ● 心を用ふること

曾子居武城。有越寇。或曰。寇至。盍去。諸曰。無寓三人於我室。毀傷其薪木。寇退。則曰。脩我牆屋。我將反寇退。

曾子武城に居る。越の寇あり。或ひと曰く、寇至る、盍ぞ諸れを去らざる。と。曰く、人を我が室に寓し、其薪木を毀傷する無かれ。寇退けば則ち曰く、我が牆屋を脩めよ、我將に反らんとすと。寇退き、曾子反る。左右曰く、先生を待つこと、此の如く其れ忠にして且つ敬するなり、寇至れば則ち先づ去り、以て民の望を爲し、寇退けば則ち反る、不可なるに殆し。沈猶行曰く、是れ汝が知る

曾子反。左右曰。待先生。如此。其忠且敬也。寇至。則先去。以爲民望。寇退。則反。殆於不可。沈猶行曰。是非汝所知也。昔沈猶有負芻之禍。從先生者七十人。未嘗有與焉。子思居於衛。有齊寇。或曰。寇至。盍去。諸子思曰。如彼去。君誰與守。孟子曰。曾子子思同道。曾子師也。父兄也。子思臣也。微也。

所に非ざるなり。昔沈猶負芻の禍あり。先生に従ふ者七十人、未だ與るあらず。子思衛に居る、齊の寇あり、或ひと曰く、寇至る、盍ぞ諸れを去らざる。子思曰く、如し假去らば、君誰と與にか守らん。孟子曰く、曾子・子思道を同じうす。曾子は師なり、父兄なり。子思は臣なり、微なり。曾子・子思、地を易へば則ち皆然らん。

- 魯の邑名 ● 甥名 ● 寓居す ● 地内の新に取る樹木などを切り倒しなどしてはいけない ● 願と屋根 ● 曾子の弟子 ● 武城の大夫等曾子を取り扱ふことの鄭重なるをいふ ● 人民をして、望み見て、其の眞似をせしむる手本を爲し ● 宜しからぬやうでございませぬ ● 曾子の弟子沈猶は姓、行は名なり ● 亂を作こし、者の名 ● 其の騒動に關係せざるなり ● 孔子の孫の偁の字なり ● 父兄の位職なるがに民に強を逃るべき手本を示せり ● 身分の微賤なるも臣たりの意

曾子子思。易地。則皆然。

儲子曰。王使儲子曰く、王、人をして夫子を闢はしむ。果して以て人に異なるあるか。孟

人嘲夫子。果有以異於人乎。孟子曰。何以異於人哉。堯舜與人同耳。

子曰く、何を以て人に異ならんや。堯舜も人と同じきのみ。

●齊人 ●齊の王 ●賢者の身貌俗人に異なるあるべしと考へしなり

齊人有二妻。一妾而處室者。其良人出。則必饜酒肉。而後反。其妻問下所與飲食者。則盡富貴也。其妻告其妾曰。良人出。則必饜酒肉。而後反。問其富貴也。而未

齊人一妻一妾にして室に處る者あり。其の良人出づれば、則ち必ず酒肉に饜きて而る後に反る。其の妻、與に飲食する所の者を問へば、則ち盡く富貴なり。其の妻其の妾に告げて、曰く、良人出づれば則ち必ず酒肉に饜きて、而る後に反る、其の與に飲食する者を問へば、盡く富貴なり、而して未だ嘗て顯者の來るあらず、吾將に良人の之く所を嘲はんとすと。蚤に起き、施して良人の之く所に從ふ。國中を徧くすれども與に立談する者なし。卒に東郭の間の祭者に之き、其の餘を乞ふ。足らざれば又顧みて他に之く。此れ其の饜足を爲すの道なり。其の妻歸り其の妾に告げて、曰く、良人とは仰望して身を終ふる所な

吾有顯者來。吾將嘲良人之所之也。蚤起施從良人之所之。徧國中無與立談者。卒之東郭墻間之祭者。乞其餘。不足。又顧而之他。此其爲饜足之道也。其妻歸告其妾曰。良人者所仰望而終身也。今若此。與其妻。由君子觀之。則人之所以求富貴利達者。其妻妾不羞也。而不相泣者。幾希矣。

り、今是の若しと。其妻と與に其良人を訕りて、而して中庭に相泣く。而るに良人は未だ之を知らざるなり。施施として外より來り、其妻妾に嘲る。君子由り之を觀れば、則ち人の富貴利達を求むる所以の者は、其妻妾羞ぢず、而して相泣かざる者は幾んど希れなり。

- 婦人夫を稱して良人といふ
- 飽くなり
- 貴顯の人なり
- 朝早く起き出づるなり
- 劉めに附き
- 從ふなり、心付かれやぬうに、踏をつくるなり
- 城下を徧らず廻はるなり
- 遂に
- 東の外郭なり
- 墓地の間なり
- 供物の残りの酒肉なり
- 誘るなり
- 内庭なり
- 機嫌よきさまなり
- 利
- 遊樂場なり
- 其手段兩劣其妻妾をして泣かして泣かしむるに類せざるものは殆ど無い

者幾希矣。良人者所仰望而終身也。今若此。與其妻。由君子觀之。則人之所以求富貴利達者。其妻妾不羞也。而不相泣者幾希矣。



卷之九

萬章章句上

萬章問曰。舜往于田。號泣。其號泣也。孟子曰。怨慕也。萬章曰。父母愛之。喜而不忘。父母惡之。勞而不怨。然則舜怨乎。曰。長息問於公明高曰。舜往于田。則吾既

萬章問ふ曰く、舜は田に往き、旻天に號泣す、何爲ぞ其れ號泣するや。孟子曰く、怨慕するなり。萬章曰く、父母之を愛せば、喜んで忘れず、父母之を惡めば、勞して怨みず。然らば則ち舜は怨みたるか。曰く、長息、公明高に問うて曰く、舜の田に往くは、則ち吾れ既に命を聞くを得たり。旻天に父母に號泣するは、則ち吾れ知らざるなりと。公明高曰く、是れ爾が知る所に非ざるなり。夫の公明高は孝子の心を以て、是の若く恕ならずと爲す。我力を竭し田を耕し、子たる職を共するのみ。父母の我を愛せざるも、我に於て何ぞや。帝其の子九男二女をして、百官、牛羊、倉廩を備へ、以て舜に畎畝の中に事へしむ。天下

得聞命矣。號泣于旻天。于中父母則吾不知也。公明高曰。是非爾所知也。夫公明高以孝子之心爲不若是。恕我竭力耕田。共爲子職而已矣。父母之不我愛。於我何哉。帝使其子九男二女。百官牛羊倉廩備。以事舜於畎畝之中。天下之士多就之者。帝將胥天下而

の士之に就く者多し。帝將に天下を胥て之に遷さんとす。父母に順ならざる爲めに、窮人の歸する所なきが如し。天下の士之を悦ぶは、人の欲する所なり。而して以て憂を解くに足らず。好色は人の欲する所。帝の二女を妻として、而して以て憂を解くに足らず。富は人の欲する所、富天下を有ちて、而して以て憂を解くに足らず。貴きは人の欲する所、貴きこと天子と爲り、而して以て憂を解くに足らず。人之を悦ぶ、好色富貴、以て憂を解くに足る者なし、惟だ父母に順にして、以て憂を解くべし。人少ければ則ち父母を慕ふ。好色を知れば則ち少艾を慕ふ。妻子有れば則ち妻子を慕ふ。仕ふれば則ち君を慕ふ。君に得ざれば、則ち熱中す。大孝は終身父母を慕ふ。五十にして慕ふ者は、予人舜に於て之を見る。

● 舜は五帝の一なり、其の父瞽瞍は後妻の子象を愛して舜を殺さんとす。帝は問なり、天は萬物を憫む故に旻天といふ。● 呼びて泣くなり。● 父母の心に叶はざることを懇めて、父母を慕ふなり。● 公明高の弟子。● 貧子の弟子。● 教へなり。● 父母を呼びて泣くなり。● 下文の我竭力耕田以下を

遷之焉。爲不順於父母。如窮人無所歸。天下之士。悅之。人之所欲也。而不足。以解愛。好色。人之所欲。妻帝之二女。而不足。以解愛。富人之所欲。富有天下。而不足。以解愛。貴人之所欲。貴爲天子。而不足。以解愛。人悅之。好色。富貴。無足以解愛者。惟順於父母。可以解愛。人少則慕父母。知好色。則慕少艾。有妻子。則慕妻子。仕則慕君。不得於君。則熱中。大孝終身慕父母。五十而慕者。予於大舜。一見之矣。

指す 〇 怒は、頓著せざる意 〇 供するなり 〇 父母の我れを愛せざるは我れに於て何の與かること  
あちむ 〇 帝堯なり 〇 田の中の百姓家なり 〇 吾は、須つなり、天下の平定するを得つなり。一説に  
應めるなりと、又は一説、視るなり、舜と共に天下の政事を視るなり 〇 之れを移し與ふるなり 〇 父母の  
心に叶はぬなり 〇 田圃人なり 〇 身を密するなり 〇 悦服するなり 〇 婦人の美色なり 〇 年  
若くして、節よき女なり 〇 心中の燃ゆるばかりにいらだつこと

萬章問曰。詩云。娶妻如之何。必告父母。信斯言也。宜莫如舜。舜之不告而娶。何

萬章問うて、曰く、詩に云ふ、妻を娶るは之を如何せん、必ず父母に告ぐと。斯の言を信せば、舜の如くなる莫かるべし。舜の告げずして娶るは何ぞや。孟子曰く、告ぐれば則ち娶るを得ず。男女室に居るは、人の大倫なり、如し告ぐれば則ち人の大倫を廢し、以て父母を慰む。是を以て告げざるなり。萬章曰く、舜の告

也。孟子曰。告則不得娶。男女居室。人之大倫也。如告則廢。人之大倫。以對父母。是以不告也。萬章曰。舜之不告而娶。則吾既得聞命矣。帝之妻舜。而不告何也。曰。帝亦知告焉。則不得妻也。萬章曰。父母使舜完廬。捐階。臂。燬。焚。廬。使浚井。出。從而揜之。象曰。謾蓋都君。

けずして娶るは、則ち吾れ既に命を聞くを得たり。帝の舜に妻はして告げざるは何ぞや。曰く、帝も亦告ぐれば則ち妻はすを得ざるを知らばなり。萬章曰く、父母、舜をして廬を完めしめ、階を捐つ。臂燬廬を焚く。井を浚はしむ、出づ。從つて之を揜ふ。象曰く、都君を蓋するを諷るは成な我が積なり。牛羊は父母、倉廩は父母、干戈は朕れ、琴は朕れ、張は朕れ、嫂は朕が棲を治めしめん。象往き舜の宮に入る。舜牀に在りて琴ひく。象曰く、鬱陶として君を思ふのみと。扭怩たり。舜曰く、惟れ茲の臣庶、汝其く予に于いて治めよと。識らず。舜は象の將に己を殺さんとするを知らざるか。曰く、奚ぞ知らざらんや。象憂ふれば、亦憂へ象喜べば亦喜ぶ。曰く、然らば則ち舜は偽り喜ぶものか。曰く、否、昔者生魚を鄭の子産に饋るあり。子産校人をして之を池に畜はしむ。校人之を烹て、反命して曰く、始め之を捨てば圍圉焉たり。少しくすれば則ち洋馬たり。悠然として逝くと。子産曰く、其所を得たるかな。其所を得たるか

成我績。牛羊父母倉廩。父母干戈。朕琴。使治。朕樓。象往入。寐宮。象在。寐琴。象曰。鬱陶思君爾。世。惓惓。汝其。子治。不識。舜不知。象之。將殺。已與。曰。象亦。亦憂。象喜。亦喜。曰。然則。舜。僞。喜。者。與。曰。否。昔。者。有。饑。生。魚。於。鄭。子。產。子。產。

など。校人出でて曰く、孰か子産を智と謂ふ。予既に烹て之を食へり。曰く、其所を得たるかな。其所を得たるかなと。故に君子は欺くに其方を以てすべし。罔るに其道に非ざるを以てし難し。彼は兄を愛するの道を以て来る。故に誠に信じて之を喜ぶ、奚ぞ僞らん。

- ① 詩經齊風の南山の篇なり
- ② 諷に此の詩の辭の如くなるべくば
- ③ 怨むなり
- ④ 懐に遣るなり
- ⑤ 倉廩を備蓄す
- ⑥ 樵子を引くなり
- ⑦ 井戸を浚はしめ其の出でんとする時、井に蓋すと、又、一説に井戸を掘りて、土を出ださしむ、又、一説には、出は、舜の樞穴より出でたるなりと
- ⑧ 掘り出だしたる土を、舜の上に落す
- ⑨ 舜の後妻の子
- ⑩ 都は、於なり、君は、舜なり、又、舜の住めば三年にして都をなすより舜を云ふと
- ⑪ 蓋は宮の借妻なり、一説に、蓋は、井戸の上より土を落して、舜を生き埋めにすることなり
- ⑫ 謀るなり
- ⑬ 皆我が手柄なり
- ⑭ 舜の望むたる五絃の琴なり
- ⑮ 舜の秘藏の弓の名
- ⑯ 二人の兄姪なり、娥皇、女英をさす
- ⑰ 吾が隣所に侍らしむるなり
- ⑱ 舜の秘藏の弓の上にて、琴を弾ずる
- ⑲ 氣の塞ぐことなり
- ⑳ 恥かしげなるなり
- ㉑ 百官をいふ
- ㉒ 予が爲めに治めよといはむが如し
- ㉓ 池沼の番人なり
- ㉔ 放つるなり
- ㉕ 苦みのまだ釘びざるさまなり
- ㉖ 漸くに身の働きの自由になりたるさまなり
- ㉗ 元氣よく泳ぎ去りたるなり
- ㉘ 道なり
- ㉙ だますなり

萬章問曰、象日以殺舜爲事、立爲天子、則放之、何也。孟子曰、封之也。或曰、放焉。萬章曰、舜流共工于幽州、放驩兜于崇山、殺三苗于羽山、四罪而天下咸服、誅不仁也。象至不仁、封之有庠、有庠之人。

萬章問ふ、曰く、象は日に舜を殺すを以て事と爲す。立ちて天子と爲れば、則ち之を放くは何ぞや。孟子曰く、之を封するなり。或ひと曰く、放くと。萬章曰く、舜は共工を幽州に流し、驩兜を崇山に放ち、三苗を三危に殺し、鯀を羽山に殛し、四罪して天下咸な服す。不仁を誅するなり。象至つて不仁なり、之を有庠に封す。有庠の人突の罪がある。仁人は固より是の如きか。他人に在りては則ち之を誅し、弟に在りては則ち之を封す。曰く、仁人の弟に於ける、怒を藏さず、怨を宿めず、之を親愛するのみ。之に親めば其の貴きを欲するなり。之を愛すれば其富を欲するなり。之を有庠に封するは之を富貴にするなり。身は天子たり。弟は匹夫たらば、之を親愛すと謂ふべきか。敢て問ふ。或ひと曰く、放くとは、何の謂ひぞ。曰く、象は其國に爲す有るを得ず、天子吏をして其國を治め

奚罪焉。仁人固如是乎。在他人則誅之。在弟則封之。曰仁人之於弟也。不藏怒焉。不宿怨焉。親愛之而已矣。親之欲其貴也。愛之欲其富也。封之有庫。宮之也。身為天子。弟爲匹夫。可謂親愛之乎。敢問。或曰。放者何謂也。曰。象不得有爲於其國。天子使吏治其國。而納其貢稅焉。故謂之放。豈得暴彼民哉。雖然。欲常常而見之。故源源而來。不及貢。以政接于有庫。此之謂也。

成丘蒙問曰。語云。盛德之士。君不待而

しめ、而して其貢税を納れしむ。故に之を放くと謂ふ。豈に彼の民を暴するを得んや。然りと雖も、常常にして之を見んと欲す。故に源源として来る、貢に及ばず、政を以て有庫に接すと。此れの謂なり。

- 場所を定めて、之れを置きて、隨意に他所へ去ることを得ざらしむること、即ち流罪に近し
- 官の名なり
- 流罪に行ふ
- 人の名なり
- 人の名なり
- 地の名なり
- 賤するなり
- 地の名なり
- 下の文の在他人則誅之在弟則封之の二句を指す
- 怒るべきことを心の中に匿し置かぬなり
- 怒むべきことを心の中に留め置かぬなり
- 流る、水の源と通するやうに絶え間なきなり
- 來りて朝覲するなり

接見す

成丘蒙問ふ、曰く、語に云ふ、盛徳の士は、君得て臣とせず。父得て子せず。舜は南面して立ち、堯は諸侯を帥るて北面して之に朝す。瞽瞍も亦北面して之に朝す。

臣。父不待而子。舜南面而立。堯帥諸侯。北面而朝之。瞽瞍亦北面而朝之。舜見瞽瞍。其容有暋。孔子曰。於斯時也。天下殆哉。岌岌乎不識此語誠然乎哉。孟子曰。否。此非君子之言。齊東野人之語也。堯老而舜攝也。堯典曰。二十有八載。放勳乃徂落。百姓如喪考妣。

す。舜は瞽瞍を見て、其の容盛たる有り。孔子曰く、斯の時に於て、天下殆いかな。岌及乎たりと。誠らず此の語誠に然るか。孟子曰く、否、此れ君子の言に非ず。齊東野人の語なり。堯老いて舜攝するなり。堯典に曰く、二十有八載、放勳乃ち徂落す。百姓考妣を喪するが如く、三年四海八音を過密す。孔子曰く、天に二日なく、民に二王なしと。舜既に天子たり、又天下の諸侯を帥るて、以て堯の三年の喪を爲さば、是れ二天子なり。成丘蒙曰く、舜の堯を臣とせざるは、則ち吾れ既に命を聞くを得たり。詩に云ふ、普天の下は、王土に非ざるなく、率土の濱は、王臣に非ざるなしと。而して舜既に天子と爲れり。敢へて問ふ、瞽瞍の臣に非ざるは如何。曰く、是の詩や、是の謂ひに非ざるなり。王事に勞して而して父母を養ふを得ざるなり。曰く、此れ王事に非ざること莫し、我れ獨り賢勞するなり。故に詩を説く者は文を以て辭を害せず、辭を以て志を害せず、意を以て志を違ふ、是れ之を得たりと爲す。若し辭のみを以てせば、雲漢の詩に



三年四海遇  
密八音孔子  
曰天無二日  
民無二王舜  
既爲天子矣  
又帥天下諸  
侯以爲三  
年喪是二天  
子矣成丘蒙  
曰舜之不臣  
堯則吾既得  
聞命矣詩云  
普天之下莫  
非王土率土  
之濱莫非王  
臣而舜既爲  
天子矣敢問  
瞽瞍之非臣  
如何曰是詩  
也非是之謂

曰く、周餘の黎民、子遺あることなしと。斯の言を信すれば是れ周に遺民なきなり。孝子の至は親を尊ぶより大なるはなし。親を尊ぶの至は天下を以て養ふより大なるはなし。天子の父となるは尊の至なり。天下を以て養ふは養ふの至なり。詩に曰く、永く言孝を思ふ。孝を思へば維れ則と。此の謂なり。書に曰く、載を祗みて瞽瞍に見ゆ。變變として齊栗す。瞽瞍も亦允若すと。是れ父得て子とせずとなすなり。

- ① 孟子の弟子なり
- ② 世の盛なり
- ③ 天子の位なり
- ④ 臣の位なり
- ⑤ 舜の父
- ⑥ 安んぜざるさまなり
- ⑦ 危きなり
- ⑧ 高山の今にも崩れんとするさま
- ⑨ 齊の國の片田舎の百姓どもの傳説にして、由るに足らず、齊は東夷に近き片田舎なり、成丘蒙は齊の人なる故にいふ
- ⑩ 天子の事を代理するなり
- ⑪ 今の書經の成書篇名
- ⑫ 舜の代理せらる二十八日なり
- ⑬ 樂なり
- ⑭ 尚節なり
- ⑮ 亡父、亡母なり
- ⑯ 音曲停止なり、金、石、絲、竹、匏、土、草、木を八音といふ
- ⑰ 詩經小雅北山の篇
- ⑱ 天が下は獲ちずなり
- ⑲ 陸地、川の海邊までなり
- ⑳ 賢は、もと財多きことより轉じて勞苦の太だ多きなり
- ㉑ 文字の上なり
- ㉒ 一句の辭なり
- ㉓ 作者の志なり
- ㉔ 讀者の意なり
- ㉕ 迎へ取るなり
- ㉖ 詩經大雅篇
- ㉗ 周の餘りの人民なり
- ㉘ 獨立脱藩するなり、一人として生き残りたる者なきなり
- ㉙ 詩經大雅下武の篇

也。勞於王事而不得養父母也。曰此莫非王事。我獨賢勞也。故說詩者不以文害辭。不以辭害志。是爲得之。如以辭而已矣。雲漢之詩曰。周餘黎民靡有孑遺。信斯言也。是周無遺民也。孝子之至莫大乎尊親。尊親之至莫大乎以天下養。爲天子父。尊之至也。以天下養。養之至也。詩曰。永言孝思。孝思維則。此之謂也。書曰。祗載見瞽瞍。夔夔齊栗。瞽瞍亦允若。是爲父不得而子也。

萬章曰。堯以天下與舜。有諸。孟子曰。否。天下不能以天下與人。然則舜有二天下也。孰與之。曰。天與之。天與之者。諄諄然命之乎。曰。否。天不言。以行

萬章曰く、堯天下を以て舜に與ふと。諸れありや。孟子曰く、否、天子は天下を以て人に與ふること能はず。然らば則ち舜の天下を有つや、孰れか之を與ふる。曰く、天之を與ふ。天之を與ふとは諄諄然として之を命ずるか。曰く、否、天言す。行と事とを以て之に示すのみ。曰く、行と事とを以て之に示すとは之を如何。曰く、天子能く人を天に薦む。天をして之に天下を與へしむること能はず。諸侯能く人を天子に薦む。天子をして之に諸侯を與へしむること能はず。大夫能く人を諸侯に薦む。諸侯をして之に大夫を與へしむること能はず。昔者堯舜

- ① 長く孝行をするなり
- ② 天下の扶則となるなり
- ③ 今の書經の大雅篇
- ④ 事を敬むなり
- ⑤ 敬慎恐懼せるさまなり
- ⑥ 信じて順ふなり
- ⑦ 今の書經の大雅篇
- ⑧ 事を敬むなり
- ⑨ 敬



與子昔者舜。蓋禹於天。十有七年。舜崩。三年之喪畢。禹避舜之子於陽城。天下之民從之。若水。崩之後。不從。也。禹蓋從舜也。禹蓋益於天。七年。喪畢。益避禹之子於箕山。陰朝觀。訟獄者。不之益。而之啓。曰。吾君之子也。謳歌者。不謳歌。益。而謳歌啓。

禹、崩じ三年の喪畢りて、益、禹の子に箕山の陰に避く。朝覲訟獄する者益に之かすして啓に之く。曰く、吾が君の子なりと。謳歌する者、益を謳歌せずして啓を謳歌す。曰く、吾が君の子なりと。丹朱の不肖、舜の子亦不肖、舜の堯に相たる禹の舜に相たる、年を歴ること多く、澤を民に施すこと久し。啓賢にして能く敬んで禹の道を承繼す。益の禹に相たる年を歴ること少く、澤を民に施すこと不だ久しからず。舜・禹・益相去ること久遠、其子の賢不肖は皆天なり。人の能く爲す所に非ざるなり。之を爲す莫くして爲る者は天なり。之れを致す莫くして至る者は命なり。匹夫にして天下を有つ者は、徳必ず舜・禹の若くにして又天子の之を薦むる者あり。故に仲尼は天下を有たす。世を繼ぎて天下を有つ。天の廢する所、必ず桀紂の若くなる者なり。故に益・伊尹・周公は天下を有たす。伊尹、湯に相として以て天下に王たらしむ。湯崩じて太丁未だ立たず。外丙は二年、仲壬は四年、太甲、湯の典刑を顛覆す。伊尹之を桐に放くこと三年、太甲過を悔

曰。吾君之子也。丹朱之不肖。舜之子亦不肖。舜之相也。禹之相也。歷年多。施澤於民久。啓賢能敬承繼禹之道。益之相也。歷年少。施澤於民未久。舜禹益相去久遠。其子之賢不肖皆天也。非人之所能爲也。莫之爲二而至者。命也。匹夫而有天下者。徳必若舜禹。而又有天子薦之者。故仲尼不有天下。繼世而有天下。之所廢。必若桀紂者也。故益伊尹周公不有天下。伊尹相湯。以王於天下。湯崩。太丁未立。外丙二年。仲壬四年。太甲顛覆湯之典刑。伊尹放之於桐三年。太甲悔過。自怨自艾。於桐處仁遷義。三年。以聽伊尹之訓。已也。復歸于亳。周公之不有天下。猶益之於夏。伊尹之於殷也。孔子曰。唐虞禪夏后殷周繼。其義一也。

い、自ら怨み自ら艾めて、桐に於て仁に處り義に遷る三年、以て伊尹の己を訓ふるを聽く。毫に復歸す。周公の天下を有たざるは猶ほ益の夏に於ける、伊尹の殷に於けるがごときなり。孔子曰く、唐虞は禪り、夏・殷・周は繼ぐ、其義一なりと。

● 舜が禹をして政を攝せしむること十七年となり ● 商均なり ● 箕山下に在り ● 同上、陰は山の北なり ● 禹土の輔佐なり ● 禹土の子 ● 招きて來すの義 ● 湯の太子の太丁位に立たして死す ● 太丁の弟の外丙の、位に在ること二年 ● 外丙の弟の仲壬の、位に在ること四年 ● 太丁の子なり ● 湯土の制度を破壞す ● 地の名にして、湯王の墓のある所なり ● 流罪にするが如き意 ● 自ら其の惡行を恕み改む ● 自ら治めて過ちを改む ● 教訓の意 ● 湯土の都の宮へ歸らしむ ● 位を授くるなり、禪祭して位を授く、故に讓位の意に用ふ ● 繼嗣に繼がしむ ● 其義は何れも皆民を安んずるにありと

萬章問曰。人有言。伊尹以割烹要湯。有諸。孟子曰。否。不然。伊尹耕於有莘之野。而樂堯舜之道焉。非其義也。非其道也。一介不以與。一介不以取。諸人。湯使二人以幣聘之。鄞鄞然曰。我何以湯之聘幣爲

萬章問うて曰く、人言へることあり。伊尹割烹を以て湯に要むと。諸れありや。孟子曰く、否、然らず。伊尹有莘の野に耕して堯舜の道を樂しむ。其義にあらす、其道にあらざれば、之に祿するに天下を以てするも、願ざるなり。繫馬千駟も視ざるなり。其義にあらす、其道にあらざれば、一介も以て人に與へず、一介を以て諸れを人に取らず、湯人をして幣を以て之を聘せしむ。鄞鄞然として曰く、我何ぞ湯の聘幣を以て爲さんや。我豈に吠歎の中に處り、是に由りて以て堯舜の道を樂むに若かんや。湯三たび往きて之を聘せしむ。既にして幡然として改めて曰く、我吠歎の中に處り、是に由りて以て堯舜の道を樂まんよりは、吾豈に是の君をして堯舜の君たらしむるに若かんや。吾豈に是民をして堯舜の民たらしむるに若かんや。吾豈に吾身に於て親しく之を見るに若かんや。天の此民を生ずるや、先知をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は天民の先覺なる者なり。予將に斯の道を以て、斯の民を覺さんとするなり。予之を覺すに

哉。我豈若下處吠歎之中。由是樂堯舜之道。往聘之。既而幡然改曰。與我處。吠歎之中。由是以樂堯舜之道。是君爲堯舜之君哉。吾豈若君哉。吾豈若君哉。使是民爲堯舜之民哉。吾豈若於吾身親見之哉。天之生此民也。使先知。後知。使先覺。後覺也。予天

非ずして誰ぞやと。天下の民、匹夫匹婦も堯舜の澤を被らざる者あれば、己推して之を溝中に内るゝが若しと思ふ。其自ら任するに天下の重きを以てする。此の如し。故に湯に就きて之に説くに夏を伐ち民を救ふを以てす。吾未だ己を枉けて、人を正す者を聞かざるなり。況んや己を辱しめ以て天下を正す者をや。聖人の行ひ同じからざるなり。或ひは遠く、或ひは近く、或ひは去り、或ひは去らず、其身を潔くするに歸するのみ。吾其の堯舜の道を以て湯に要むるを聞く。未だ割烹を以てすることを聞かざるなり。伊訓に曰く、天誅政を造すは牧官よりすと。朕意より載むと。

- 食物の料理なり
- 殷の湯王
- 仕官を求む
- 國名
- 馬車に繫ぐ馬四千匹
- 介に同じ、一箇なり
- 禮の進物にして、玉帛の類なり
- 請待す
- 無欲にして、自得せるさまなり
- 田舎の意
- 思ひ直すこと
- 湯王をいふ
- 人より先に知りたる者なり
- 後れて未だ知るに至らざる者
- 人より先に覺りたる者
- 覺るにわかれたる者
- 天の生ずる人民なり
- 此の仁義の道なり
- 庶民のこと、一夫一婦
- 仕て
- 山林にわかれたる者もあれば、廟堂に宜ちたる者もあり
- 君の御



民之先覺者也。予將以下之斯道。覺斯民也。

非予覺之而誰也。思天下之民匹夫匹婦有不被堯舜之澤者。若已推而內之溝中。其自任以天下之重如此。故就湯而說之。以二代夏救民。吾未聞二枉已而正人者也。况辱己以正天下者乎。聖人之行不同也。或遠或近。或去或不去。歸潔其身而已矣。吾聞其以堯舜之道。要湯。未聞以割烹也。伊訓曰。天誅造攻。自牧宮。朕載自亳。

萬章問曰。或謂孔子於衛主癰疽。於齊主侍人瘠環。有諸乎。孟子曰。否。不然也。好事者爲之也。於衛主顔雍。由彌子之妻。與子路之妻兄弟也。彌

萬章問ひて曰く、或ひと謂ふ、孔子衛に於ては癰疽を主とし、齊に於ては侍人瘠環を主とせりと。諸れありや。孟子曰く、否、然らざるなり。事を好む者之を爲すなり。衛に於て顔雍を主とす。彌子の妻と子路の妻とは兄弟なり。彌子、子路に謂つて曰く、孔子我を主とせば、衛の卿は得べしと。子路以て告ぐ。孔子曰く、命ありと。孔子進むに禮を以てし、退くに義を以てす。之を得ると得ざると命ありと曰へり。而るに癰疽と侍人瘠環とを主とせば、是れ義なく命なきなり。孔子魯衛に悦ばれず。宋の桓司馬將に要して之を殺さんとするに遭ひ、微服して

子謂子路曰。孔子主我。衛卿可得也。子路以告孔子。曰。有命。孔子進以禮。退以義。得之不得。曰。有命。向主癰疽與侍人瘠環。是無義無命也。孔子不悅於魯衛。遭宋桓司馬將要而殺之。

宋を過ぐ。是の時孔子肥に當れり。司城貞子陳侯周の臣となるを主とせり。吾れ聞く、近臣を觀るには、其の主となる所を以てし、遠臣を觀るには、其の主とする所を以てすと。若し孔子、癰疽と侍人瘠環とを主とせば、何を以てか孔子となさん。

- 癰疽の醫者 ● 近侍にして姪は瘠、名は環と云ひし人 ● 宿の主人と相むなり、近臣なり ● 物好きの者なり
- 衛 衛大夫なり ● 衛の國公の臣、彌子瑕なり ● 孔子の弟子 ● 姉妹なり ● 魯や衛の君の御氣には入らざりし ● 宋の大夫の桓魋なり ● 待ち設けて撃たんとす ● 微服の衣服を著るなり
- 災難に遭ふなり、主を探ぶ暇なし ● 陳の人なり ● 陳の國公にして、名は越といふ、忠臣なり ● 自國の家來なり、之を見るには、その者が如何なる遠客の主となるかを觀察す ● 他國より來る家來なり ● 如何なる家に來り寓するかを觀察す

微服而過宋。是其所主。若孔子主癰疽與侍人瘠環。何以爲孔子。

時孔子當肥。主司城貞子爲陳侯周臣。吾聞觀近臣。以其所爲主。觀遠臣。以其所主。若孔子主癰疽與侍人瘠環。何以爲孔子。

萬章問曰。或曰。百里奚自鬻於秦。養性

萬章問ひて曰く、或ひと曰く、百里奚自ら秦の性を養ふ者に五羊の皮に鬻ぎ、牛を食うて以て秦の繆公に要むと。信なるか。孟子曰く、否、然らず。事を好む

者五羊之皮。食牛以要秦。繆公信乎。孟子曰。否。不然。好事者爲之也。百里奚處人也。晉人以垂棘之璧與屈產之乘。假道於虞。以伐虢。宮之奇諫。百里奚不諫。知虞公之不諫。而秦年已七十矣。曾不知下以食牛于秦。繆公之爲汙也。可謂智乎。不可諫而不諫。

者之爲爲すなり。百里奚は虞人なり。晉人垂棘の璧と屈産の乘を以て道を虞に假りて以て虢を伐つ。宮之奇諫む。百里奚は諫めず。虞公の諫む可からざるを知りて去りて、秦に之く。年已に七十なり。曾て牛を食ふを以て秦の繆公に干むる汗たるを知らざるや、智と謂ふ可けんや。諫む可からずして諫めず、不智と謂ふ可けんや。虞公の將に亡びんとするを知りて先づ之を去る、不智と謂ふ可からざるなり。時に秦に舉げられ繆公の與に行ふある可きを知りて之を相く、不智と謂ふ可けんや。秦を相けて其君を天下に顯はし、後世に傳ふ可くす、不賢にして之を能くせんや。自ら驚きて以て其君を成すは、郷黨の自ら好みする者も爲さず、而るを賢者之を爲すと謂はんや。

- 百里は姓、奚は名なり。虞の國の賢臣
- 自ら其身を賣りて、五枚の羊の皮を得て、秦の國の輸性用ひる獸類を飼ふ家の爲めに、牛を飼ひたるなり
- 國名
- 垂棘の地より出づる璧
- 屈の地より産する馬
- 道路を借りて軍を通すなり
- 國の名なり
- 虞の賢臣なり
- 無理に求むるなり
- 卑劣なる行ひなり
- 村里の自ら身を好しとする者さへも爲さず

可謂不智乎。知虞公之將亡。而先去之。不可謂不智也。時弊於秦。知繆公之可與有行也。而相之。可謂不智乎。相秦而顯其君於天下。可傳於後世。不賢而能之乎。自黨以成其君。郷黨自好者不爲。而謂賢者爲之乎。

卷之十

萬章章句下

孟子曰伯夷  
日不視惡色  
耳不聽惡聲  
非其君不事  
非其民不使  
治則進亂則  
退橫政之所  
出橫民之所  
止不忍居也  
思與鄉人處  
如以朝衣朝  
冠坐於塗炭  
也當紂之時  
居北海之濱

孟子曰く、伯夷は目に惡色を視ず。耳に惡聲を聽かず。其君に非ざれば事へず。其民に非ざれば使はず。治まれば則ち進み、亂れば則ち退く。橫政の出づる所、橫民の止る所、居るに忍びざるなり。思へらく郷人と處ること朝衣朝冠を以て塗炭に坐するが如しと。紂の時に當りて、北海の濱に居り以て天下の清むを待つ。故に伯夷の風を聞く者は頑夫も廉に、懦夫も志を立つることあり。伊尹曰く、何れに事へてか君に非ざる。何れを以てか民に非ざる。治まるにも亦進み亂るゝにも亦進む。曰く、天の斯の民を生するや、先知をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は天民の先覺なる者なり。予れ將に

以待天下之  
清也故聞伯  
夷之風者頑  
夫廉懦夫有  
立志伊尹曰  
何事非君何  
使非民治亦  
進亂亦進曰  
天之生斯民  
也使先知覺  
後知使先覺  
覺後覺予天  
民之先覺者  
也予將以二此  
道覺此民也  
匹夫匹婦有  
不與被堯舜  
之澤者若三己  
推而內之溝

此道を以て此民を覺さしめんとするなり。思へらく天下の民匹夫匹婦も堯舜の澤を與り被らざる者あれば、己れ推して之を溝中に内るゝが若しと。其自ら任するに天下の重きを以てすればなり。柳下惠は汗君を羞ぢず、小官を辭せず、進みて賢を隱さず、必ず其道を以てす。遺佚して怨みず、阨窮して憫へず。郷人と處り、由山然として去るに忍びざるなり。爾は爾たり、我は我たり。我が側に袒褻裸裎すと雖も、爾焉んぞ能く我を浼さんやと。故に柳下惠の風を聞く者は、鄙夫も寬に、薄夫も敦し。孔子の齊を去るや、漸を接して行る。魯を去るに曰く、遲遲として吾れ行く。父母の國を去るの道なりと。以て速かなる可くして速かに、以て久しかる可くして久しく、以て處るべくして處り、以て仕ふべくして仕ふるは孔子なり。

○此一篇の文は公孫丑上の「孟子曰、伯夷非其君不事」の章に類似せる所多し。○正しからざる色、所謂正色以外の色。○正しからざる聲なり、彼の鄭聲のきをいふ。○無理なる政事。○非道なる人民。○正聲して塵埃中に塵するが如く不快に思ふこと、公孫丑上に既出。以下の諸語既に既出なり。○此一句萬章上に既出

中其自任以二  
 天下之重也。柳下惠不羞汗君。不辭小官。進不隱賢。必以其道。遺佚而不怨。陋窮而不憫。與鄉人處。由然不怨。去也。爾爲爾。我爲我。雖相三楊。裸裎於我側。爾焉能浼我哉。故聞柳下惠之風者。鄙夫敦。孔子之去齊。接淅而行。去魯曰。遲遲吾行也。去父母國之道也。可以速而速。可以久而久。可以處而處。可以仕而仕。孔子也。

孟子曰。伯夷聖之清者也。伊尹聖之任者也。柳下惠聖之和者也。孔子聖之時者也。孔子之謂集大成也者。金聲而玉振之也。金聲也者。玉振之也者。終

孟子曰く、伯夷は聖の清なる者なり。伊尹は聖の任なる者なり。柳下惠は聖の和なる者なり。孔子は聖の時なる者なり。孔子は之を集めて大成すと謂ふ。集めて大成すとは、金聲り玉之を振むるなり。金聲るとは條理を始むるなり。玉之を振むとは條理を終ふるなり。條理を始むるは智の事なり、條理を終ふるは聖の事なり。智は譬へば則ち巧なり。聖は譬へば則ち力なり。由ほ百歩の外に射るがごとし。其至るは爾の力なり。其中るは爾の力に非ざるなり。

- ① 清潔にして濁りなきなり
- ② 天下の事を自ら引受くる
- ③ 和樂なる事
- ④ 其の時の宜しきを得たるなり
- ⑤ 伯夷の清と、伊尹の任と、柳下惠の和とを、一身に集めて、其の徳を大成したり
- ⑥ 音樂は、先づ銅を擊ちて、聲を宣べ、後、磬を擊ちて聲を收むるなり
- ⑦ 樂音の脈路を始むるなり
- ⑧ 弓を射る技術なり
- ⑨ 弓

を射る力なり ⑧ 的に届くなり、即ち孔子は巧力共に有して聖賢を兼備せるなり、他の伯夷伊尹等は力餘り有れば巧ならず巧ありば力足らざるなり

條理也。始二條理者。智之事也。終二條理者。聖之事也。智譬則巧也。聖譬則力也。由射於二百步之外也。其至爾力也。其中非二爾力也

北宮錡問曰。周室班爵祿也。如之何。孟子曰。其詳不可得聞也。諸侯惡其害己也。而皆去其籍。然而軻也。管仲其略也。天子一位。公一位。侯一位。伯一位。子男一位。凡五等也。君一位。卿一位。大夫

北宮錡問ひて曰く、周室に爵祿を班すること之を如何。孟子曰く、其詳なるとは、聞くを得べからざるなり。諸侯其の己を害するを惡みて皆其籍を去る。然れども軻や嘗て其略を聞けり。天子一位、公一位、侯一位、伯一位、子男同じく一位、凡て五等なり。君一位、卿一位、大夫一位、士一位、中士一位、下士一位、凡て六等。天子の制地方千里を公侯は皆方百里、伯は七十里、子男は五十里、凡て四等。五十里なること能はずして天子に達せずして諸侯に附くを附庸と曰ふ。天子の卿は地を受くること侯に視ひ、大夫は地を受くること伯に視ひ、元士は地を受くること子男に視ふ。大國は地方百里、君は卿の祿を十にし、卿の祿は大夫を四にし、大夫は上士に倍し、上士は中士に倍し、中士は下士に倍し、下士



一位。上士一位。中士一位。凡六等。天子之制。地方千里。公侯皆方百里。伯七十里。子男五十里。凡四等。不能五十里。不達於天子。附於諸侯。曰附庸。天子之卿受地視伯。大夫受地視子。士受地視男。大國地方百里。君十二卿。卿祿四大夫。大夫倍上士。上士倍中士。中士倍下士。下士與庶人在官者同。祿足三以代其耕也。次國地方七十里。君十卿。卿祿二大夫。大夫倍上士。上士倍中士。中士倍下士。下士與庶人在官者同。祿足以代其耕也。耕者之所獲。一夫百畝。百畝之糞。上農夫食九人。上次食八人。中食七人。中次食六人。下食五人。庶人在官者。其祿以是爲差。

は庶人官に在る者と祿を同じくす。祿以て其耕に代ふるに足れり。次國は地方七十里、君は卿の祿を十にし、卿の祿は大夫を三にし、大夫は上士に倍し、上士は中士に倍し、中士は下士に倍し、下士は庶人の官に在る者と祿を同じくす。祿を以て其耕に代ふるに足れり。小國は地方五十里、君は卿の祿を十にす、卿の祿は大夫を二にす、大夫上士に倍す、上士は中士に倍す、中士下士に倍す、下士は庶人の官に在る者と祿を同じくす、祿は以て其耕に代ふるに足る。耕す者の獲る所、一夫百畝、百畝の糞へる、上農夫は九人を食ひ、上の次は八人を食ひ、中は七人を食ひ、中の次は六人を食ひ、下は五人を食ふ。庶人の官にある者は、其祿是を以て差となす。

① 衛の人 ② 周の朝延で爵位や秩祿を次第するなり ③ 周の制度の已れの所爲を妨害するを恐れ ④ 爵祿の書類を總てききてたるなり ⑤ 一つの階級なり ⑥ 畿内の小國を子といひ、畿外の小國を男といひ、其の男狄に在る者は、大小となく皆子といふ ⑦ 天子諸侯を共にいふ ⑧ 直接に其の姓名及び官職を天子に進達すること能はざるなり ⑨ 増するなり ⑩ 上士なり ⑪ 公侯の國 ⑫ 十倍 ⑬ 四倍 ⑭ 二倍なり

伯の國ナリ ① 三倍ナリ 子男の國ナリ ② 二倍ナリ ③ 得るなり ④ 肥料を施すなり

士。上士倍中士。中士倍下士。下士與庶人在官者同。祿足三以代其耕也。次國地方七十里。君十卿。卿祿二大夫。大夫倍上士。上士倍中士。中士倍下士。下士與庶人在官者同。祿足以代其耕也。耕者之所獲。一夫百畝。百畝之糞。上農夫食九人。上次食八人。中食七人。中次食六人。下食五人。庶人在官者。其祿以是爲差。

萬章問曰。敢問友。孟子曰。不挾長不挾貴。不挾兄弟。而友友也者。友其德也。不可有挾也。孟獻子百乘之家也。有五人焉。樂正。

萬章問ひて曰く、敢て友を問ふ。孟子の曰く、長を挾まず、貴を挾まず、兄弟を挾まずして友たり。友とは其徳を友とするなり。以て挾むことある可からざるなり。孟獻子の百乗の家、友五人あり。樂正・裘・牧・仲、其三人は則ち予之を忘れたり。獻子が此五人者と友たるや、獻子の家を無しとするなり。此五人の者も亦獻子の家ありとすれば、則ち之と友たらず。惟百乗の家のみ然りとすに非ざるなり、小國の君と雖も亦之れなり。費の惠公の曰く、吾子思に於ては則

衰牧仲其三人則予忘之矣。獻子之與此五人者。友也。無獻子之家者。亦有獻子之家。則不與之友矣。非惟百乘之家。爲然也。雖小國之君。亦有之。費惠公曰。吾於子思。則師之矣。吾於顏斂。則友之矣。王順長。息則事我者也。非惟小國之君爲然也。雖

ち之を師とし、吾顔般に於ては則ち之を友とし、王順・長息は則ち我に事ふる者なり。惟小國の君のみ然りと爲すに非ざるなり、大國の君と雖も亦之れあり。晉の平公の多唐に於けるや、入れと云へば則ち入り、坐せと云へば則ち坐し、食へと云へば則ち食ふ。疏食菜羹と雖も、未だ嘗て飽かずんばあらざるなり。蓋し敢て飽かずんばならず。然れども此に終るのみ。與に天位を共にせざるなり。與に天職を治めざるなり。與に天祿を食せざるなり。士の賢者を尊ぶや、王公の賢を尊ぶに非ざるなり。舜尙りて帝に見ゆ。帝、甥を貳室に館し、亦舜を饗して迭に賓主となる。是れ天子にして、匹夫を友とするなり。下を用つて上を敬する之を貴を貴ぶと謂ふ。上用つて下を敬する、之を賢を貴ぶと謂ふ。貴を貴ぶと賢を貴ぶと其義一なり。

- 自ら年節の高きを念こせず
- 身分の貴也
- 兄弟一族の富貴なる
- 自負する意
- 魯の賢大夫の仲孫也なり
- 獻子富貴の昔あるを忘れ赤樵々の人なるなり
- 獻子が其の家の富貴なることを恃む心あらば
- 小の者なり
- 晉の賢人なり
- 玄米の飯
- 野菜の汁物なり
- 上るなり、禮儀の

大國之君亦  
有之。晉平公  
之於唐也。

入云則入坐云則坐食云則食。雖疏食菜羹未嘗不飽蓋不敢不飽也。然終於此而已矣。弗與共天位也。弗與治天職也。弗與食天祿也。士之尊賢者也。非王公之尊賢也。舜尙見帝。帝館甥于貳室。亦饗舜。迭爲賓主。是天子而友匹夫也。用下敬上謂之貴。貴。用上敬下謂之尊。尊。賢。貴。賢。其義一也。

- 身分より上るなり
- 賤なり
- 親なり、甥を指す
- 控へ御殿なり
- 冠帯せしむるなり
- 互になり
- 客と主人となり
- そのわけあひはかなじ

萬章曰。敢問。交際何心也。孟子曰。恭也。曰。卻之。卻之爲不恭。何哉。曰。尊者賜之。曰。其所取之者。義乎不義乎。而後受之。以是爲不恭。故弗卻也。曰。

萬章曰く、敢て問ふ。交際は何の心ぞや。孟子の曰く、恭なり。曰く、之を卻けん。之を卻くるを不恭となすは何ぞや。曰く、尊者之を賜ふに、其の取る所の者は義か不義かと曰ひて而る後之を受く。是を以て不恭となす。故に卻けざるなり。曰く、請ふ辭を以て之を卻くること無く、心を以て之を卻く。其の諸を民に取る不義なりと曰ひて、他の辭を以て受くること無きは不可ならん。曰く、其交るや道を以てし、其接するや禮を以てせば、斯に孔子之を受く。萬章曰く、今人を國門の外に禦むる者あらん。其交るや道を以し、其餽るや禮を以てせば、斯に

請。無以辭卻之。以心卻之。曰。其取諸民之不義也。而以他辭。無受不可乎。曰。其交也以道。其接也以禮。斯孔子受之矣。荀章曰。今有禦人於二國門之外者。其交也以道。其餽也以禮。斯可受。禦與。曰。不可。康誥曰。殺人于貨。閔不長死。凡民罔不敵。是不待教。而誅者

禦むるを受くべきか。曰く、不可なり。康誥に曰く、人を貨に殺越し閔として死を畏れず。凡そ民敵まざることを閔し。是れ教を待たずして誅する者なり。殷は夏に受け、周は殷に受く、辭せざる所なり。今に於て烈こなす。此を如何ぞ其れ之を受けん。曰く、今の諸侯は之を民に取ること猶ほ禦むるがごときなり。苟も其禮際を善くせば、斯に君子之を受く。敢て問ふ、何の説ぞや。曰く、子以爲らく、王者作るあらば、今の諸侯を比して之を誅せんか。其れ之を教へて改めずして而る後に之を誅せんか。夫れ其有に非ずして、之を取る者は盜なりと謂はば、類を充てて義の盡くるに至らしむ。孔子の魯に仕ふるや、魯人獵較すれば、孔子も亦獵較す。獵較猶ほ可なり、而るを況んや其賜を受くるをや。曰く、然らば則ち孔子の仕ふるや、道を事とするに非ざるか。曰く、道を事とするなり。道を事とせば奚ぞ獵較するや。曰く、孔子先づ薄して祭器を正し、四方の食を以て薄正に供せず。曰く、奚ぞ去らざるや。曰く、之が兆を爲すなり、兆以て行ふに足れり。

也。殷受夏。則受殷。所不辭也。於今爲烈。如此何其受之。曰。今之諸侯取之於民也。猶禦也。苟善其禮際。矣。斯君子受之。敢問。何說也。曰。子以爲有王者作。將比今之諸侯。而誅之乎。其教之不。改。而後誅之乎。夫謂非其有。而取之者。盜也。充類至義之盡也。孔子之仕

行はれずして後に去る。是を以て未だ嘗て三年を終へて掩まる所あらざるなり。孔子に行可を見るの仕あり、際可の仕あり、公養の仕あり。季桓子に於ては行可を見るの仕なり。衛の靈公に於ては際可の仕なり。衛の孝公に於ては公養の仕なり。

● 進物の遺り取りをして交はることを交際といふ ● 進物を返却す ● 失禮なり ● 陽貨の贈りし豚を受けし類、論語陽貨篇にも見ゆ ● 人を國都の門外で寄廻して貨物を奪ひ取り、而して後に禮を以て其人に交り荷物を返却せば之を受けますか ● 今の書經周書の篇の名 ● 人の貨物はしきに人を殺して、死體を投げ棄て、平氣で死を畏れざる惡人 ● 惡み繼まぬことなきなり ● 君の命令を待たずして殺すべきもの ● 成周は此の法を受けりて、三代共に一應の上甲にも及ばず、直ちに之れを誅戮するなり、一説に今日は先王の法は多く廢弛したれども、此の法のみは歴然として存在せりと ● どうして進物を受納すべき ● 禮儀實際なり ● 連ぬるなり ● 靈頓の種類を推して、名目の行き止まりまで論じ詰むるなり ● 獲物の多少を比較して、勝敗を決す ● 道を行ふことを専事とす ● 帳面をもて、宗廟の祭りに用ゐる器具の員數を正しく定むるなり ● 四方の國々の求め難き食物をもて、帳面上の正數に供せず ● 兆は、事の端なり、道を行ふ端を試みて人に示す ● 人の邊に其の道を行はざるなり ● 止まるなり ● 其の道の行はるべきことを見るなり ●

於魯也。魯人  
獵較。孔子亦  
獵較。獵較猶  
可。而況受其  
賜乎。曰。然則孔子之仕也。非事道與。曰。事道也。事道奚獵較也。曰。孔子先薄  
正祭器。不以四方之食。供中薄。正曰。奚不去也。曰。爲之兆也。兆足以行矣。而不行。而後去。是  
以未嘗有其所下終三年。淹上也。孔子有見行可之仕。有公養之仕。有公養之仕。於季桓子。見行  
可之仕也。於衛靈公。際可之仕也。於衛孝公。公養之仕也。

孟子曰。仕非  
爲貧也。而有  
時乎爲貧。娶  
妻非爲養也。  
而有時乎爲  
養。爲貧者。辭  
尊居卑。辭富  
居貧。辭尊居  
卑。辭富居貧。  
惡乎宜乎。抱  
關擊柝。孔子

孟子の曰く、仕ふるは貧の爲めに非ざるなり。而も時あつてか貧の爲めに  
す。妻を娶るは養の爲めに非ざるなり。而も時ありてか養の爲にす。貧の爲め  
にする者は尊を辭して卑に居り、富を辭して貧に居る。尊を辭して卑に居り、富  
を辭して貧に居る。惡れか宜しきや。抱關擊柝なり。孔子嘗て委吏となる。曰  
く、會計當るのみ。嘗て乘田となる。曰く、牛羊茁として壯長するのみ。位卑く  
して言高きは罪なり。人の本朝に立ちて道行はれざるは恥なり。

● 尊き位を辭退して、卑しき位に居る ● 間所の番人 ● 拍子木を擊ちて、夜廻はりをする役 ● 關番な  
り ● 勘定なり ● 牧場の番人 ● 生長するさまなり ● 肥え太りて、成長するなり ● 人は君なり、  
本朝は其の朝廷なり

嘗爲委吏一矣。  
曰。會計當而  
已矣。嘗爲乘  
田矣。曰。牛羊  
萬章曰。士之  
不託諸侯。何  
也。孟子曰。不  
敢也。諸侯失  
國。而後託於  
諸侯。禮也。士  
之託於諸侯。  
非禮也。萬章  
曰。君餽之粟。  
則受之乎。曰。  
受之。受之何  
義也。曰。君之  
於氓也。固周  
之。曰。周之則  
受。賜之則不

萬章曰く、士の諸侯に託せざるは何ぞや。孟子曰く、敢てせざるなり。諸侯國  
を失ひて而る後に諸侯に託す、禮なり。士の諸侯に託するは禮に非ざるなり。  
萬章曰く、君之に粟を餽れば則ち之を受くるか。曰く、之を受けん。之を受くる  
は何の義ぞや。曰く、君の氓に於けるや、固より之を周ふ。曰く、之を周へば則  
ち受く、之を賜へば則ち受けざるは何ぞや。曰く、敢てせざるなり。曰く、敢  
て問ふ、其の敢てせざるは何ぞや。曰く、抱關擊柝の者皆常職ありて以て上に  
食はる。常の職無くして上より賜る者は以て不恭と爲すなり。曰く、君之  
を餽れば則ち之を受く。識らず、常に繼ぐ可きか。曰く、總公の子思に於けるや、  
亟く問うて亟く鼎肉を餽る。子思悦ばず。卒に於て使者を擧きて諸れを大門



受。何也。曰。不  
敢也。曰。敢問。  
其不。敢。何也。  
曰。抱關擊柝  
者。皆有常職。  
以食於上。無  
常職。而賜於  
上者。以爲不  
恭也。曰。君餽  
之。則受之。不  
識。可常繼乎。  
曰。纒公之於  
子思也。亟問  
亟餽。廩肉。子  
思不悅。於卒  
也。擇使者。出  
諸大門之外。  
北面稽首再  
拜。而不受。曰。  
今而後知君

の外に出し、北面稽首再拜して受けずして曰く、今にして後、君の俛を犬馬畜するを知る。蓋し是れより臺も餽ること無し。賢を悦びて擧ぐる。こと能はず。又養ふこと能はざるなり。賢を悦ぶと謂ふ可けんや。曰く、敢て問ふ、國君君子を養はんと欲す、如何にせば斯に養ふと謂ふべきと。曰く、君命を以て之を將ひ、再拜稽首して受く。其後廩人粟を繼ぎ、庖人肉を繼ぎ、君命を以て之を將すと。子思以爲らく鼎肉は己をして僕僕爾として亟々拜せしむ。君子を養ふの道に非ざるなり。堯の舜に於けるや、其子九男をして之に事へしめ、二女は焉に女す。百官牛羊倉廩備へて以て舜を吠畝の中に養はしむ。後擧げて諸れを上位に加ふ。故に曰く、王公の賢を尊ぶ者なりと。

● 身を寄するなり ● 押し切つて爲さぬ ● 刑罰の民の急を救ふ ● 門番、夜警 ● 常に繼續して得べきか ● 魯の君なり ● 度々使者を遣はして、安否を尋ね、期に於て煮たる肉を贈る ● 最後なり ● 手を振りて、外へ追ひ遣るなり ● 叩頭と同じ ● 犬馬の如き扱ひにて養ふなり、犬馬は、養ふばかりにて、敬ふことなし ● 蘇は君命を傳ふる小役人なり、纒公立腹して、再び使者に肉を持たせて遣らざりしをかく蘇を

之犬馬畜。彼  
蓋白是臺無  
餽也。悦賢不  
能舉。又不能養也。可謂悦賢乎。曰。敢問。國君欲養君子。如何。斯可謂養矣。曰。以君命將之。再拜稽首而受。其後廩人繼粟。庖人繼肉。不以君命將之。子思以爲。鼎肉使己僕僕爾。亟拜也。非養君子之道也。堯之於舜也。使其子九男事之。二女女焉。百官牛羊倉廩。備以養舜。於吠畝之中。後擧而加諸上位。故曰。王公之尊賢者也。

主とした、如く謝けり ● 執り行ふなり ● 威番なり ● 料理番なり ● 類はしきさまなり ● 嬪皇女英の二娘 ● 田舎の意 ● 高位に同じ

萬章曰。敢問。  
不見諸侯。何  
也。孟子曰。  
在國曰市井  
之臣。在野曰  
艸莽之臣。皆  
謂庶人。庶人  
不傳質爲臣。  
不取見於諸  
侯。禮也。萬章  
曰。庶人召之。

萬章曰く、敢て問ふ、諸侯を見ざるは何の義ぞ。孟子曰く、國に在るを市井の臣と曰ひ、野に在るを艸莽の臣と曰ふ、皆庶人と謂ふ。庶人は質を傳へて臣と爲らざれば、敢て諸侯を見ざるは禮なり。萬章曰く、庶人之を召して役すれば則ち往きて役し、君之を見んと欲し之を召せば、則ち往きて之を見ざるは何ぞや。曰く、往きて役するは義なり。往きて見るは不義なり。且つ君の之を見んと欲するは何の爲めぞや。曰く、其多聞なるが爲めか、其賢なるが爲めか。曰く、其多聞なるが爲めならば、則ち天子すら師を召さす。而るを況んや諸侯をや。其賢なるが爲

役則往役。君欲見之。召之。則不往見之。何也。曰。往役義也。往見不義也。且君之欲見之也。何爲也哉。曰。爲其多聞也。爲其賢也。曰。爲其多聞也。則天子不召師。而況諸侯乎。爲其賢也。則吾未聞欲見賢而召之也。纒公亟見於子思。曰。古千乘之國。以友。如何。子思不悅。曰。古之人有言。曰。事之云乎。豈曰友之云乎。子思之不悅也。豈不曰以位則子君也。我臣也。何敢與君友也。以德則子事我者也。奚可以與我友。千乘之君。求與之友。而不可得也。而況可召與。

らば、則ち吾れ未だ賢を見んと欲して之を召すを聞かざるなり。纒公亟、子思を見て曰く、古千乗の國以て士を友とすと、如何と。子思悦ばずして曰く、古の人言へることあり。曰く、之に事ふと云ふ乎。豈に之を友とすと云ふと曰んやと。子思の悦ばざるや、豈に位を以てすれば則ち子は君なり、我は臣なり、何ぞ敢て君と友たらん、徳を以てすれば則ち子は我に事ふるものなり、奚ぞ以て我と友たる可けんと言ふにあらざるや。千乗の君之と友たるを求めて、而も得べからざるなり。而るを況んや召すべけんや。

● 都邑に居るなり ● 市街の臣なり、昔は、飲料水ある處に市を以てたるに基づきて市井といふ ● 郊外に居るなり ● 弊は、草深きことなり ● 進物を差し出して、家來分となるなり、傳ふは進物番の手を經る意

齊景公田。招虞人。以旌。不至。將殺之。志士不忘在溝壑。勇士不忘喪其元。孔子奚取焉。取非其招不往也。曰。敢問。招虞人。何以。曰。以皮冠。士以旂。大夫以旌。以大夫之招。招虞人。虞人死不敢往。以士之招。招虞人。庶人豈敢往哉。況乎以不賢人之招。招賢

齊の景公田し、虞人を招くに旌を以てす。至らず。將に之を殺さんとす。志士は溝壑にあるを忘れず。勇士は其元を喪ふことを忘れず。孔子奚をか取れるや。其招きに非ざれば往かざるを取れるなり。曰く、敢て問ふ。虞人を招くに何を以てする。曰く皮冠を以てす。庶人は旂を以てし、士は旂を以てし、大夫は旌を以てす。大夫の招きを以て虞人を招かば、虞人死すとも敢て往かず。士の招きを以て庶人を招かば、庶人豈に敢て往かんや。況んや不賢人の招きを以て、賢人を招くをや。賢人を見んと欲して其道を以てせざるは、猶ほ其の入るを欲して之が門を閉づるがごとし。夫れ義は路なり、禮は門なり。惟君子は能く是の路に由りて是の門を出入す。詩に云く、周道底の如し。其直きこと矢の如し。君子の履むところ、小人の視る所と。萬章曰く、孔子君命じて召せば、駕を俟たずして行くと。然らば孔子は非なるか。曰く、孔子仕ふるに當つて官職あり。其官を以て之を召せばなり。

● 此段の文に就ては滕文公下首章を参照すべし、虞人は苑囿の番人 ● 田獵する時に冠る鹿の皮の冠 ● 無

人一乎。欲見賢人。而不以其道。猶下欲其入。而閉之門也。夫義路也。禮門也。惟君子能由是路。出是門也。詩云。周道如砥。其直如矢。君子所履。小人所視。萬章曰。孔子君命召。不俟駕而行。然則孔子非與。曰。孔子當仕有官職。而以其官召之也。

地の大輻の赤旗 ① 二匹の龍を畫ける旗なり ② 詩經小雅の大東篇 ③ 底は砥なり、周の道の平かなること 砥石の如く其の直なること矢竹の如し ④ 上に在る君子の行ふ所なり、小人の視て手本とする所なり

孟子謂萬章曰。一鄉之善士。斯友一國之善士。一國之善士。斯友天下之善士。天下之善士。以友天下之善士。爲未足。又尚論古之人。頌其詩。讀其書。不知其人。不可乎。是以論其世也。是尚友也。齊宣王問卿。

孟子萬章に謂つて曰はく、一郷の善士は、斯に一郷の善士を友とし、一國の善士は、斯に一國の善士を友とし、天下の善士は、斯に天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て未だ足らずと爲し、又古の人を尚論す。其詩を頌し其書を讀む、其人を知らずして可ならんや。是を以て其世を論す。是れ尚友なり。

① 上に進みて、昔の人の得失を評論す ② 吟味するなり ③ 上に進みて友とするの義

齊の宣王卿を問ふ。孟子曰く、王何の卿を之れ問ふや。王曰く、卿同じからざる

孟子曰。王何卿之問也。王曰。卿不同乎。曰。不同。有貴戚之卿。有異姓之卿。王曰。請問貴戚之卿。曰。君有大過則諫。反之不聽。則易位。王勃然變乎色。曰。王勿異也。王問臣。臣不敢不以正封。王色定。然後請問異姓之卿。曰。君有過則諫。反之不聽則去。

か。曰く、同じからず。貴戚の卿あり、異姓の卿あり。王曰く、貴戚の卿を請ひ問ふ。曰く、君大過あれば則ち諫む。之を反覆して聽かれざれば則ち位を易ふ。王勃然として色を變ず。曰く、王異む勿れ。王臣に問ふ。臣敢て正を以て對へずんばあらず。王、色定りて然る後に異姓の卿を請ひて問ふ。曰く、君過あれば則ち諫む。之を反覆して聽かざれば則ち去る。

① 一門親族の卿 ② 士庶人より擧げ用ひられたる卿なり、他姓の大臣をいふ ③ 繰り返して再三諫む ④ 君位を取り易へて、親族中の賢者を王とす ⑤ 無に顔色を變へる也、怒ること

卷之十一

告子章句上

告子曰。性猶杞柳也。義猶枳椇也。以人性爲仁義猶以杞柳爲中栝也。孟子曰。子能順杞柳之性而以爲枳椇乎。將戕賊杞柳而後以爲枳椇也。如將戕賊杞柳而以爲枳椇則亦將戕賊人也。以爲仁義與。率天下之人而禍仁義者。必子之言夫。

告子曰く、性は猶ほ杞柳のごとし。義は猶ほ枳椇のごとし。人の性を以て仁義を爲すは、猶ほ杞柳を以て枳椇を爲るがごとし。孟子曰く、子能く杞柳の性に順ひて以て枳椇を爲るか、將た杞柳を戕賊して而る後に以て枳椇を爲るか。如し將た杞柳を戕賊して以て枳椇を爲らば、則ち亦た將た人を戕賊して以て仁義を爲すか。天下の人を率ゐて仁義を禍する者は必ず子の言ならんか。

● 告は如、名は不善、仁内外の説を主張して孟子と論争せし學者なり ● 枳の一類、枳椇は曲物の椇、人の性は本来善惡なく、どうでも出るものなりと云ふなり ● 戕はそこなふこと

告子曰。性猶湍水也。決諸東方則東流。決諸西方則西流。人性之無分於善不善也。猶水之無分於東西也。孟子曰。水信無分於東西無分於上下乎。人性之善也。猶水之就下也。人無有不善。水無有不流。今夫水搏而躍之。可使過頽激。而行之。可使在。山。是豈水之性哉。其勢則然也。人之可使爲不善。其性亦猶是也。

告子曰く、性は猶ほ湍水のごときなり。諸を東方に決すれば則ち東流し、諸を西方に決すれば、則ち西流す。人性の善不善を分つことなき、猶ほ水の東西を分つこと無きがごときなり。孟子曰く、水信に東西を分つこと無し。上下を分つこと無からんや。人性の善なるや、猶ほ水の下に就くがごとし。人不善あること無く、水下らざるあること無し。今夫れ水は搏ちて之を躍さば、頽を過さしむべし。激して之を行らば山に在らしむべし。是れ豈に水の性ならんや。其勢ひ則ち然るなり。人の不善を爲さしむべきこと、其性も亦猶ほ是のごときなり。

● 流れ出づる口のなき所にて過譽く水を云ふ ● 擊つなり ● 跳ち上るなり ● 頽なり

告子曰。生之謂性。孟子曰。生之謂性也。

告子曰く、生は之を性と謂ふ。孟子曰く、生は之を性と謂ふは、猶ほ白きを之れ白しと謂ふがごときか。曰く、然り。白羽の白は猶ほ白雪の白がごとく、白雪の



猶<sub>二</sub>白之謂<sub>レ</sub>白與<sub>一</sub>。曰。然。白羽之白也。猶<sub>二</sub>白雪之白。猶<sub>二</sub>玉之白。猶<sub>二</sub>玉之白與。曰。然。然則犬之性。猶<sub>二</sub>牛之性。猶<sub>二</sub>人之性<sub>一</sub>與。

白は猶ほ白玉の白のごときか。曰く、然り。然らば則ち犬の性は猶ほ牛の性のごとく、牛の性は猶ほ人の性のごときか。

● 生れあつる比類を同じくするものは其性亦同じと云ふ

告子曰。食色性也。仁内也。非<sub>レ</sub>外也。義外也。非<sub>レ</sub>内也。孟子曰。何以謂<sub>二</sub>仁内義外<sub>一</sub>也。曰。彼長而我長<sub>レ</sub>之。非<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>長<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>我也。猶<sub>二</sub>彼白而我白<sub>一</sub>之。從<sub>二</sub>其白於<sub>レ</sub>外

告子曰く、食色は性なり。仁は内なり、外に非ざるなり。義は外なり内に非ざるなり。孟子曰く、何を以てか仁は内、義は外なりと謂ふ。曰く、彼長じて我之を長とす。我に長あるに非ざるなり。猶ほ彼白にして我之を白とするがごとし。其白に外に従ふなり。故に之を外といふ。曰く、馬の白を白とするや、以て人の白を白とするに異なる無きなり。識らず、馬の長を長とするや、以て人の長を長とするに異なること無きか。且つ謂へ、長する者は義か。之を長とする者は義か。曰く、吾が弟は則ち之を愛し、秦人の弟は則ち愛せざるなり。是れ我を以て

也。故謂<sub>二</sub>之外<sub>一</sub>也。曰。異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>白<sub>二</sub>馬之白<sub>一</sub>也。無<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>白<sub>二</sub>人之白<sub>一</sub>也。不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>。長<sub>レ</sub>馬之長<sub>レ</sub>也。無<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>長<sub>二</sub>人之長<sub>一</sub>與。且謂<sub>二</sub>長者義乎<sub>一</sub>。長<sub>レ</sub>之者義乎。曰。吾弟則愛<sub>レ</sub>之。秦人之弟。則不<sub>レ</sub>愛也。是以我爲<sub>レ</sub>悅者也。故謂<sub>二</sub>之内<sub>一</sub>。長<sub>レ</sub>楚人之長。亦長<sub>レ</sub>吾之長。是以長爲<sub>レ</sub>悅者也。故謂<sub>二</sub>之外<sub>一</sub>也。曰。善秦人之炙。無<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>異<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>吾炙<sub>一</sub>。夫物則亦有<sub>レ</sub>然者也。然則善炙。亦有<sub>レ</sub>外與。

悦ぶことを爲す者なり。故に之を内と謂ふ。楚人の長を長とし、亦吾の長を長とす。是れ長を以て悦ぶことを爲す者なり。故に之を外と謂ふなり。曰く、秦人の炙<sup>あぶりもの</sup>を者むは以て吾が炙を者むに異なることなし。夫れ物も則ち亦然ることあり。然らば則ち炙を者むも亦外に有るか。

● 食慾と性慾 ● 長を長として敬するは内なり、而して長は我に在らずして彼は在り、彼れ即ち外に在る長を敬するより養生す、即ち義は外に在るものに従つて生ずるものなれば義は外なりと云ふなり ● 原文の異於の二字衍文なりと云ふ ● 殊異なる人の意 ● 同上 ● 炙りたる肉を嗜む意

孟季子問<sub>二</sub>公都子<sub>一</sub>曰。何以謂<sub>二</sub>義内<sub>一</sub>也。曰。行<sub>レ</sub>吾敬<sub>レ</sub>故謂<sub>二</sub>

孟季子、公都子に問ひて曰く、何を以てか義は内なりと謂ふ。曰く、吾が敬を行ふ。故に之を内と謂ふ。郷人、伯兄より長すること一歳ならば、則ち誰をか敬せん。曰く、兄を敬せん。酌まば則ち誰をか先にせん。曰く、先づ郷人に酌まん。

之内也。郷人長於伯兄一歲。則誰敬。曰。敬兄。酌則誰先。曰。先酌。郷人所敬在此。所長在彼。果在外。非由內也。公都子曰。不能答。以告孟子。孟子曰。敬叔父乎。敬弟乎。彼將曰。敬叔父。曰。弟爲尸。則誰敬。彼將曰。敬弟。子曰。惡在三。其敬叔父也。彼將曰。在位。故也。子曰。亦曰。在位。故也。庸敬在兄。斯須之敬。在三。鄉人。季子聞之。曰。敬叔父。則敬敬弟。則敬。果在

敬する所に在り。長ずる所は彼に在り。果して外にあり。内に由るに非ず。公都子答ふる能はず。以て孟子に告ぐ。孟子曰く、叔父を敬せんか、弟を敬せんか。彼將た曰ん、叔父を敬せん。曰く、弟尸たらば則ち誰をか敬せん。彼將た曰ん、弟を敬せん。子曰く、惡ぞ其の叔父を敬するに在らんや。彼將た曰ん、位に在るが故なり。子も亦曰く、位にあるが故なり。肅の敬は兄に在り。斯須の敬は郷人に在り。季子之を聞きて曰く、叔父を敬すれば則ち敬し、弟を敬すれば則ち敬す。果して外に在り。内に由るには非ざるなり。公都子曰く、冬日は則ち湯を飲み、夏日は則ち水を飲む。然らば則ち飲食も亦外に在るなり。

- ① 孟子の従兄弟かと云ひ又は孟の字は衍文にて季子と云ふは季任かとも云ふ
- ② 長兄なり
- ③ 酒の酌
- ④ 伯兄を云ふ
- ⑤ 郷人を云ふ
- ⑥ 果して人の云ふ如く義は外にありの証
- ⑦ 父の弟なり
- ⑧ 己れの弟なり
- ⑨ 神代なり、祖先の祭りをする時に、子弟を神の代はりに立て、之れを主として祭るなり
- ⑩ 神代の位に在るなり
- ⑪ 常なり
- ⑫ 其場合暫時なり

外非由内也。公都子曰。冬日則飲湯。夏日則飲水。然則飲食亦在外也。

公都子曰。告子曰。性無善。無不善也。或曰。性可以爲善。可以爲不善。是故文武興。則民好善。幽厲興。則民好暴。或曰。有性善。有性不善。是故以堯爲君。而有象。以瞽瞍爲父。而有舜。以紂爲兄之子。且以爲君。而有微子啓。王子比干。今曰。性

公都子曰く、告子曰く、性は善なく不善なしと。或ひと曰く、性は以て善と爲す可く以て不善と爲すべし。是の故に文武興れば則ち民善を好み、幽厲興れば則ち民暴を好みと。或ひと曰く、性善なるあり、性不善なるあり。是の故に堯を以て君と爲して象あり。瞽瞍を以て父となして舜あり。紂を以て兄の子となし、且つ以て君と爲して微子啓、王子比干あり。今性善と曰ふ。然らば則ち彼皆な非なるか。孟子曰く、乃ち其情の若くすれば則ち以て善と爲す可し。乃ち所謂善なり。夫の不善を爲す若きは才の罪に非ざるなり。惻隱の心は人皆之れ有り、羞惡の心は人皆之れ有り。恭敬の心は人皆之れあり。是非の心は人皆之れ有り。惻隱の心は仁なり。羞惡の心は義なり。恭敬の心は禮なり。是非の心は智なり。仁義禮智外より我を鏖すに非ざるなり。我固より之を有するなり。思はざるのみ。故に曰く、求むれば則ち之を得、舍つれば則ち之を失ふ。或は相倍徒して算無き者、其

善。然則彼皆非與。孟子曰。乃若其情則可以爲善矣。乃所謂善也。若夫爲不善。非才之罪也。惻隱之心。人皆有之。羞惡之心。人皆有之。恭敬之心。人皆有之。是非之心。人皆有之。仁也。羞惡之心。義也。恭敬之心。禮也。是非之心。智也。仁義禮智。非由外鑠我也。我固有之也。弗思耳矣。故曰。求則得之。舍則失之。或相倍蓰而無算者。不能盡其才者也。詩曰。天生蒸民。有物有則。民之秉彜。好是懿德。

才を盡すこと能はざる者なり。詩に曰く、天蒸民を生ず。物あれば則あり。民の夷を乗る。是の懿徳を好むと。孔子曰く、此の詩を爲る者は其れ道を知るか。故に物あれば則あり。民の夷を乗るなり。故に是の懿徳を好む。

● 周の文王、武王 ● 周の幽王、厲王 ● 舜の異母弟 ● 啓は紂の庶兄、膠鬲紂を諫めて用ひられず、比干は紂の伯父、三諫して其罰を罰かる。今孟子の云ふ如く性善とせば彼即ち告子の徒の云ふ所皆非なるか ● 本性の自然に發露する所を情と云ひ、性の自然の働を才と云ふ ● 四端の説にて公孫丑上に詳かなり ● 蓰は親に屬し、敬は心に屬す ● 仁義禮智は外部より來りて我を感化するものに非ず ● 倍は二倍、蓰は五倍、善人と惡人の差は兩次増大して終には算なき程に至るとなり ● 詩經へ雅蒸民篇 ● 天が衆民を任しそこに君臣父子の關係あれば自ら忠孝の道あり、人は此の常道を心に保持するが故に美徳ある人を好む

孟子曰。富歲

孟子曰く、富歲には子弟類多く、凶歲には子弟暴多し。天の才を降すこと爾く

子弟多類。凶歲子弟多暴。非天之降才爾殊也。其所三以陷溺其心者然也。今夫麩麥播種而擾之。其地同樹之時又同。淳然而生。至於日之至之時。皆熟矣。雖有肥磽。雨露之養。人事之不一也。故凡同類者。舉相似也。何獨至於人而疑之。聖人與我同類。

殊なるに非ざるなり。其の其心を陷溺する所以の者然るなり。今夫れ麩麥は種を播して之を擾す。其地同じく之を樹うる時又同じ。淳然として生ず。日之時に至りて皆熟す。同じからざるありと雖も、則ち地に肥磽あり。雨露の養、人事の齊しからざるなり。故に凡そ類を同じくする者は舉な相似たり。何ぞ獨り人に至りて之を疑はん。聖人も我と類を同じくする者なり。故に龍子曰く、足を知らずして履を爲るも、我れ其の糞たらざるを知るなり。履の相似たるは天下の足同じければなり。口の味に於ける同じく者むことあるなり。易牙は先づ我が口の者む所を得たる者なり。如し口の味に於ける其性の人と殊なること、犬馬の我と類を同じくせざるが若くならしめば、則ち天下何ぞ者むこと皆易牙の味に於けるに従はんや。味に至りては天下易牙に期す。是れ天下の口相似たればなり。惟耳も亦然り。聲に至りては天下師曠に期す。是れ天下の耳相似たればなり。惟目も亦然り。子都に至りては天下其の姦を知らざることなきなり。子都

者。故龍子曰。不知足而爲履。我知其不爲。爲黃也。履之相似也。天下之足同也。口之於味也。有同者。易牙先得其口之所善者也。如使口之於味也。其性與人殊。若犬馬之與我。不同類也。則天下何者皆從易牙之於味也。至於易牙。天下期於易牙。是天下之口相似也。惟耳亦然。至於聲。天下期於師曠。是天下之耳相似也。惟目亦然。至於色。天下期於師曠。是天下之目相似也。惟鼻亦然。至於臭。天下期於師曠。是天下之鼻相似也。惟舌亦然。至於味。天下期於易牙。是天下之舌相似也。惟心亦然。至於理。天下期於孔子。是天下之心相似也。

の妓を知らざる者は目なきなり。故に曰く、口の味に於けるや、同じく着むとあり。耳の聲に於けるや、同じく聴くことあり。目の色に於けるや、同じく美することあり。心に至りては、獨り同じく然りとする所無からんや。心の同じく然りとする所の者は何ぞや。謂く理なり、義なり。聖人は先づ我が心の同じく然とする所を得たるのみ。故に理義の我心を悦ばしむるは猶ほ芻豢の我口を悦ばしむるがごとし。

- 聖年の意 ● 類もしげなるもの多きなり ● 亂暴なること ● 其の心が年の豊凶に随順して或は類となり或は類となら、天賦の才そのものに斯の如き殊別あるに非ず ● 大波なり ● 種の上は土をかくるなり ● 種の萌え出づるさまなり ● 夏至の意なり ● 地味の明えたるを、瘠せし石の多きと ● 皆と同じ ● 古の賢人 ● 履を作る職人が人の足の寸法を知らず履を造るも、丸て似もつか、黄モツツとはならず、足に不適あるもやはり履は履也 ● 齊の桓公の臣にして、能く物の味を知る者なり ● 昔に精なる人、雞宴の上篇の首章に所見 ● 昔の美男子なり ● 顔好きなり ● 可の如し、人の心に然りとすなり ● 芻豢は、草を食ふ獸、豢は穀物を食ふ獸

下莫不知其姣也。不知子都之姣者。無目者也。故曰。口之於味也。有同者焉。耳之於聲也。有同聽焉。目之於色也。有同美焉。至於心。獨無所同然乎。心之所同然者。何也。謂理也。義也。聖人先得我心之所同然耳。故理義之悅我心。猶芻豢之悅我口。

孟子曰。牛山之木嘗美矣。以其郊於大國也。斧斤伐之。可以爲美乎。是其日夜之所息。雨露之所潤。非無萌蘖之生焉。牛羊又從而牧之。是以若彼濯濯也。人見其濯濯也。以爲未嘗有材焉。此豈山

孟子曰く、牛山の木嘗て美なり。其の大國に郊たるを以て斧斤之を伐る、以て美となすべけんや。是れ其日夜の息する所、雨露の潤す所、萌蘖の生なきに非ず。牛羊又從つて之を牧す。是を以て彼の若く濯濯たるなり。人其濯濯たるを見らば、以て未だ嘗て材あらずと爲す。此れ豈に山の性ならんや。人に存する者と雖も、豈に仁義の心なからんや。其の良心を放つ所以の者、亦猶ほ斧斤の木に於けるがごときなり。且にして之を伐る。以て美と爲すべけんや。其日夜の息する所、平旦の氣、其好惡人と相近き者は幾ど希し、則ち其且晝の爲す所之を格(九)亡するあり。之を格して反覆すれば、則ち其夜氣以て存するに足らず。夜氣以て存するに足らざれば、其の禽獸を遠ること遠からず。人其禽獸なるを見て以て未



之性也哉。雖存乎人者。豈無仁義之心哉。其所三以放其良心者。亦猶斧斤之於木也。且且而伐之。可以爲美乎。其日夜之所息。平旦之氣。其好惡與人相近也者幾希。則其且盡之所爲。有梟亡之矣。梟之反覆。則其夜氣不足。以存也。夜氣不足。則其達禽獸不遠矣。人見其禽獸也。而以爲未嘗有仁焉者。是豈人之情也哉。故苟得其養。無物不消。孔子曰。操則存。舍則亡。出入無時。莫知其鄉。惟心之謂與。

だ嘗て才あらずとなす者は、是れ豈に人の情ならむや。故に苟も其養を得れば、物として長ぜざるなく、苟も其養を失へば、物として消せざるなし。孔子曰く、操れば則ち存し、舍つれば則ち亡す。出入時なく、其郷を知ること莫し。惟れ心の謂か。

- 齊の東南に在る山
- 大國齊の郊外に在り
- 生長するなり
- 萌とは眞直に伸びる芽をいひ、萌とは傍より出づるをいふ
- 生ずるに従つて食ひ盡くす
- 一草一木なき光山となりたるさま水にて洗ひ去りたるが如しと
- 自然の善心にして、即ち仁義の心なり
- 無朝なり
- 早朝未だ物と接せざる清明の氣を謂ふ
- 其の善を好み惡を惡む心の賢人と相近き心を少しは有すと也
- 終日
- 梟は、手加なり、又終日之れを抑へつけて、消滅せしむることなり
- 平旦の氣なり、夜に入りて、落ち着きたる氣分は、翌朝まで續くものなれば、平旦の氣ともいへり
- 去るなり
- 木色なり
- 持ち守るなり
- 郷里の地にて、居處のことなり

孟子曰。無或乎王之不智也。雖有二天下易生之物也。一日暴之。十日寒之。未有能生者也。吾見亦罕矣。吾退而寒之者至矣。吾如有一萌焉。何哉。今夫奕之爲數。小數也。不事小數也。不事小致志也。則不得也。奕秋。通國之善弈者。使弈秋誨之。二人奕。其一人專心致志。惟奕秋之爲

孟子曰く、王の不智を或むなけれ。天下生じ易き物ありと雖も、一日之を暴し十日之を寒せば、未だ能く生ずる者あらざるなり。吾見ゆること亦罕なり、吾れ退きて之を寒する者至る。吾れ萌すあるを如何せんや。今夫れ奕の數たる小數なり。心を專にし志を致さざれば則ち得ざるなり。奕秋は通國の弈を善くする者なり。奕秋をして二人に奕を誨へしめん。其一人は心を專にし志を致して、惟奕秋に之を聽くことを爲す。一人は之を聽くと雖も、一心に以爲らく、鴻鵠ありて將に至らむとす。弓繳を援きて之を射んことを思ふ。之を俱に學ぶと雖も、之に若かず。是れ其智の若かざるが爲めか。曰く、然るに非ざるなり。

- 齊王なり
- 惑と同じ、怪しむなり
- 發生し易き物なり
- 熱氣にさますこと
- 寒冷の氣にさますこと
- 孟子齊王に謁見すること稀れなり
- 齊王の御前を退くや王を惡もて冷す者也見す
- 善心の萌する發生するなり
- 圍碁なり
- 志を極むるなり
- 圍碁の名人の名を秋といふ者
- 一同を通ずるなり
- 圍碁の外に又一つの心あるなり
- 鴻は大雁なり、鵠は鴈の屬なり
- 繳は鏃を矢に繋ぎ射るなり
- 援は手元を引き寄するなり
- 智慧の及ばざるが爲めにはあらずとの意

聽。一人雖聽之。一心以爲。有鴻鵠將至。思下投弓繳。而射之。雖與之俱學。弗若之矣。爲是其智弗若與。曰。非然也。

孟子曰。魚我所欲也。熊掌亦我所欲也。二者不可得兼。舍魚而取熊掌者也。生亦我所欲也。義亦所欲也。二者不可得兼。舍生而取義者也。生亦我所欲也。所欲有甚於生者。故不爲苟得也。死亦我所欲也。所欲有甚於死者。故患

孟子曰く、魚は我が欲する所なり。熊掌も亦我が欲する所なり。二者兼ぬることを得べからざれば、魚を捨てて熊掌を取る者なり。生も亦我が欲する所なり。義も亦我が欲する所なり。二者兼ぬること得べからざれば、生を捨てて義を取る者なり。生も亦我が欲する所。欲する所生より甚しき者なり。故に苟も得ることを爲さざるなり。死も亦我が惡む所、惡む所死より甚しき者あり。故に患も辭げざる所あり。如し人の欲する所をして生より甚しきこと莫からしめば、則ち凡そ以て生を得べき者何ぞ用ひざらん。人の惡む所をして死より甚しき者莫からしめば、則ち凡そ以て患を辭くべき者、何ぞ爲さざらん。是れに由れば則ち生く、而して用ひざるあり。是れに由れば則ち以て患を辭くべし、而して爲さざるなり。是の故に欲する所生より甚しき者あり。惡む所死より甚しき者

有所不辟也。如使人之所欲莫甚於生。則凡可以得生者。何不用也。使人之所惡莫甚於死。則凡可以辟患者。何不爲也。由是則生而有不用也。由是則可以辟患而有不爲也。是故所欲有甚於生者。所惡有甚於死者。非獨賢者有是心也。人皆有之。賢者能勿

あり。獨り賢者のみ是の心あるに非ざるなり。人皆な之れあり。賢者は能く喪ふこと勿きのみ。一簞の食一豆の羹、之を得れば則ち生き、得ざれば則ち死す。譬爾として之を與ふれば道を行く人も受けず、蹴爾として之を與ふれば乞人も屑しとせざるなり。萬鍾は則ち禮義を辨せずして之を受く。萬鍾我に於て何ぞ加へん。宮室の美妻妾の奉、識る所の窮乏の者我に得るが爲めか。郷には身の死するが爲めにして受けず。今は宮室の美の爲めに之を爲す。郷には身の死するが爲めにして受けず。今は妻妾の奉の爲めに之を爲す。郷には身の死するが爲めにして受けず。今は識る所の窮乏の者の我に得るが爲めに之を爲す。是れ亦た以て已むべからざるか。此れを之れ其本心を失ふと謂ふ。

- 生より甚しき者とは義なり
- 生を得るなり
- 不義なり
- 死亡の患
- 避と同じ
- 生くべく避くべき一路をいふ
- 一つの木器に盛りたる汁類なり
- 此り飛ばすやうに食へといふさまなり
- 道を行く平凡の人なり
- 足踏にすやうに突き出すさまなり
- 乞食なり
- 心持よく眞はぬなり
- 六萬四千石の大蔵なり
- 我が身に加へ贈すことなきなり
- 奉養なり
- 我が惡患を得るなり

喪耳一簞食。

受けることを止むるなり

一豆羹得之則生弗得則死。噲爾而與之。行道之人弗受。歐爾而與之。乞人不屑也。萬鍾則不辨禮義而受之。萬鍾於我何如焉。爲宮室之美妻妾之奉所讖窮乏者得我與。鄉爲身死而不受。今爲宮室之美爲身死而不受。今爲妻妾之奉爲身死而不受。今爲所讖窮乏者得我而爲之。是亦不可以已乎。此之謂失其本心。

孟子曰。仁人心也。義人路也。舍其路而弗由。放其心而不知求。哀哉。人有難犬放。則知求之。

孟子曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。其路を捨てて由らず。其心を放ちて求むることを知らず。哀しいかな。人難犬放るゝことあれば、則ち之を求むることを知る。放心ありて而して求むることを知らず。學問の道他なし。其放心を求むるのみ。

● 本來居るべき場所を去らしむること

有放心而不知求。學問之道無他。求其放心一面已矣。

孟子曰。今有無名之指。風而不信。非疾

孟子曰く、今無名の指屈して信びざるあり。疾痛して事に害あるに非ざるなり。如し能く之を信ぶる者あらば、則ち秦楚の路を遠しとせず。指の人に若かざるが爲めなり。指の人に若かざるは則ち之を惡むことを知る。心の人に若かざるは則ち惡むことを知らず。此れ之を類を知らずと謂ふなり。

● 第四指なり、指として一番用なきもの ● 伸ぶるなり ● 比較輕重を知らざるなり

痛害事也。加有能信之者。則不遠秦楚之路爲指之。不若人也。指不若人。則知惡之。心不若人。則不知惡。此之謂不知類也。

孟子曰く、拱把の桐梓、人苟も之を生ぜんと欲すれば、皆之を養ふ所以の者を知る。身に至りては之を養ふ所以の者を知らず。豈に身を愛すること桐梓に若かざらんや。思はざること甚しきなり。

● 拱は兩手を以て開むこと、把は片手にてにぎること、何れも太さをあらはす言葉 ● きりあづきなり、皆良材なり ● 生長せしむるなり

孟子曰。拱把之桐梓。人苟欲生之。皆知所以養之者。至於身而不知。所以養之者。豈愛身不若桐梓哉。弗思甚也。孟子曰。人之於身也。兼所愛。兼所愛。則

孟子曰く、人の身に於けるや、愛する所を兼ぬ。愛する所を兼ぬれば、則ち養ふ所を兼ぬるなり。尺寸の膚も愛せざる無ければ、則ち尺寸の膚も養はざるな

兼所養也。無尺寸之膚不愛焉。則無尺寸之膚不養也。所以考其善不善者。豈有他哉。於己取之而已矣。體有貴賤。有小大。無以賤害貴。養其小者爲小人。養其大者爲大人。舍其梧櫨。養其臑棘。則爲賤場師焉。養其一指而失其肩背。則爲小以失大也。飲食之人。無有失也。則口腹豈適爲尺寸之膚哉。

きなり。其善不善を考ふる所以の者豈に他あらんや。己に於て之を取るのみ。體に貴賤あり小大あり。小を以て大を害することなく、賤を以て貴を害することなし。其小を養ふ者は小人と爲り、其大を養ふ者は大人と爲る。今場師あり。其梧櫨を捨てて其臑棘を養はば則ち賤場師と爲さん。其一指を養ひて其肩背を失ひて知らざれば、則ち狼疾の人と爲さん。飲食の人は則ち人之を賤む。其の小を養ひて大を失ふが爲めなり。飲食の人失ふこと有る無ければ、則ち口腹豈に適尺寸の膚の爲めならんや。

● 養物すること、四肢五臟を平等に養ふこと ● 己れ自身に於て養の輕重を養ふ外なし ● 賤と云ひ、小と云ふは肉體を指し、貴と云ひ、大と云ふは心志を指す ● 植木屋なり、梧櫨は良木、桐梓に同じ、臑は脚、棘はいばら、何れも惡木なり ● 狼齒の意、よく疾を治し得ず、身を穢ふ意 ● 飲食の人も心を養ふ道を失はざれば、口腹の養に實に尺寸の膚を長ぜしむるのみに非ず、大切なる心の容體を養ふことなる

公都子問曰。鈞是人也。或爲大人。或爲小人。何也。孟子曰。從其大體爲大人。從其小體爲小人。從其大也。或從其小也。或從其大體。或從其小體。何也。曰。耳目之官不。思而蔽於物。物交物則引之而已矣。心之官則思。思則得之。不思則不得也。此天之所與我者。先立乎其大者。則其小者不能奪也。此爲大人而已也。

公都子問ひて曰く、鈞しくは是れ人なり。或は大人と爲り、或は小人と爲るは何ぞや。孟子曰く、其大體に従へば大人と爲り、其小體に従へば小人と爲る。曰く、鈞しくは是れ人なり。或は其大體に従ひ、或は其小體に従ふは何ぞや。曰く、耳目の官は思はずして物に蔽はる。物に交はれば則ち之を引くのみ。心の官は則ち思ふ。思へば則ち之を得、思はざれば則ち得ざるなり。天の我に與ふる所の者を比し、先づ其大なる者を立つれば、則ち其小なる者奪ふこと能はざるなり。此れ大人となるのみ。

● 大體は心の官、小體は耳目の官を指す ● 役目なり ● 外界の事物を指す ● 我耳目外物に蔽はるれば亦これ一個の物也、物と物とが交れば、力強き外物が我が耳目を引き之を誘惑し去る、固より當然の事のみ ● 耳目を誘惑するなり ● 道理を得るなり ● 天より我れに與へられたる善の大小を比較するなり ● 心志を奪ふこと能はざるなり



孟子曰。有三人爵者。仁義忠信樂善不倦。此天爵也。公卿大夫。此人爵也。古之人。脩其天爵。而人爵從之。今之人。脩其天爵。而人爵不從之。今之人。爵既得。而天爵喪。其天爵則惑之甚者也。終亦必亡而已矣。

孟子曰く、天爵なる者あり、人爵なる者あり。仁義忠信善を樂みて倦まざるは此れ天爵なり。公卿大夫は此れ人爵なり。古の人は其天爵を脩めて人爵之に従ふ。今の人は其天爵を脩めて以て人爵を要む。既に人爵を得れば、其天爵を棄つるは則ち惑へるの甚しき者なり。終に亦必ず亡はんのみ。

● 古の人は河徳を修めたる自然の報酬として人爵を受くるなり、然るに今の人は人爵を得んが爲めに天爵を修むるなり ● 人爵をも失ふに至る意

孟子曰。欲貴者。人之同心也。人人有貴於己者。弗思耳。人之所貴者。非良貴也。趙孟之所貴。趙孟能賤之。

孟子曰く、貴きを欲するは人の同じき心なり。人人己に貴き者あり。思はざるのみ。人の貴くする所の者は良貴に非ざるなり。趙孟の貴くする所は趙孟能く之を賤しくす。詩に云く、既に酔ふに酒を以てし、既に飽くに徳を以てすと。仁義に飽くを言ふなり。人の膏粱の味を願はざる所以なり。令聞廣譽身に施く、人の文繡を願はざる所以なり。

● 仁義を云ふ、仁義の心は各人本具のものなればなり ● 富貴を云ふ ● 天爵を指す ● 晉の卿相、賈勝ありて人の進退を自由にしよりかく云ふ ● 詩經大雅既醉の篇なり ● 飽き足るなり ● 肥肉と良米、仁義に飽き精神的満足を得たるが故に肥肉良米の味を願はざるなり ● 善き評判と廣きはまれが身に備はる ● 文繡ある衣服を願はず

詩云。既醉以酒。既飽以德。言飽乎仁義也。所以不願人之膏粱之味也。令聞廣譽施於身。所以不願人之文繡也。

孟子曰。仁之勝不仁也。猶水勝火也。今之爲仁者。猶以一杯水救一車薪之火也。不熄。則謂之

孟子曰く、仁の不仁に勝つや、猶ほ水の火に勝つがごとし。今の仁を爲す者は、猶ほ一杯の水を以て一車薪の火を救ふがごときなり。熄まざれば則ち之を水火に勝たずと謂ふ。此れ又不仁に與するの甚だしき者なり。亦終に必ず亡びんのみ。 ● 小仁を以て大不仁に勝たんとする譬ふ、一車薪とは車に積みたるたきぎの意 ● 不仁者と同じく亦同を亡びさんと也

水不勝火。此又與於不仁之甚者也。亦終必亡而已矣。

孟子曰。五穀

孟子曰く、五穀は種の美なる者なり。苟も熟せざることを爲さば、糞稗に如



明日之鄰以告孟子。孟子曰。於答是也何有。不揣其本而齊其末。方寸之木。可使高於於岑樓。金重於於羽者。豈謂一鈞金與一與羽之謂哉。取食之重者。與禮之輕者。而比之。奚翅食重。取色之重者。與禮之輕者。而比之。奚翅食重。得食。不診則不得食。則將診之乎。論東家牆而攫其處子。則得妻。不攫則不得妻。則將攫之乎。

曹交問曰。人皆以可爲三豕。舜有諸。孟子

奚之翅に色重きのみならんや。往きて之に應へて曰へ。兄の臂を終らして之が食を奪へば、則ち食を得、終らざれば則ち食を得ず。則ち將に之を終らさんとするか。東家の牆を踰えて其處子を攫けば則ち妻を得、攫かざれば則ち妻を得ず、則ち將に之を攫かんとするかと。

- 任人は任國の人なり
- 孟子の弟子、名は連
- 結婚の儀式中に於ける一つの禮法、婿自ら嫂の家に至つて新婦を伴ひ來る儀式なり
- 木の本を量らずして木の末を揃ふること
- 方寸は一寸四方なり、岑は山、樓は樓に同じく丘なり
- 凡そ物の比較は根本より之を量らざる可からず、食色の重大なるものと禮の輕微なるものと比較せば、もとより食色を以て重しとせざる可からず
- 嘗と同じ
- 手をねぎ上げること
- 隣家なり
- 處女
- 手をひくこと

曹交問ひて曰く、人皆以て堯舜たるべしと、諸れ有りや。孟子曰く、然り。交聞く、文王は十尺、湯は九尺と。今交は九尺四寸以て長じ、粟を食ふのみ。如何

曰。然。交聞。文王十尺。湯九尺。今交九尺四寸。以長食粟而已。奚有則可。曰。奚有於是。亦爲之而已矣。有人於此。力不能勝一匹雛。則爲無力人矣。今日舉百鈞。則爲有力人矣。然則舉鳥獲之任。是亦爲鳥獲而已矣。夫人豈以不勝爲患哉。弗爲耳。徐行後長者。謂之

にせば則ち可ならん。曰く、奚ぞ是にあらんや、亦之を爲さんのみ。此に人あり、力一匹の雛に勝ふること能はざれば、則ち力なき人と爲さん。今百鈞を舉ぐと曰はば則ち力ある人となさん。然らば則ち鳥獲の任を舉げば、是れ亦鳥獲たるのみ。夫れ人豈に勝へざるを以て患となさんや、爲さざるのみ。徐行して長者に後る、之を弟と謂ふ。疾行して長者に先だつ、之を不弟と謂ふ。夫れ徐行は豈に人の能はざる所ならむや。爲さざる所なり。堯舜の道は孝弟のみ。子、堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行を行はば是れ堯のみ。子、桀の服を服し、桀の言を誦し、桀の行を行はば是れ桀のみ。曰く、交、鄒の君に見ゆるを得て、以て館を假るべし。願くは留りて業を門に受けん。曰く、夫れ道は大路の若く然り。豈に知り難からんや。人求めざるを病むのみ。子歸りて之を求めば、除師あらん。

- 曹の國君の弟
- 人の臂不肖は身長の如何に在らず、唯だ道を修むると否とに在り
- 一羽の小き雛
- 梁の武王の時の力士
- 緩ルするなり
- 早く歩むなり
- 旅館を借り受くるなり
- 鄒國に逗留する意
- 誰しも之に由りて歩む道也、六ヶ敷ことなきの意
- 師の多きこと

弟疾行先長者謂之不弟。夫徐行者豈人所不能哉。所不爲也。堯舜之道。孝弟而已矣。子服堯之服。誦堯之言。行堯之行。是堯而已矣。子服桀之服。誦桀之言。行桀之行。是桀而已矣。曰。交得見於鄰君。可以假館。願留而受業於門。曰。夫道若夫路。然豈難知哉。人病不求耳。子歸而求之。有餘師。

公孫丑問曰。高子曰。小弁。小人之詩也。孟子曰。何以言之。曰。怨曰。周哉。高叟之爲詩也。有入於此。越人關弓而射之。則已談笑而道之。無他。疏之也。其兄關弓而射之。則已垂涕洟而道之。無他。戚之

公孫丑問ひて曰く、高子曰く小弁は小人の詩なり。孟子曰く、何を以てか之を言ふ。曰く、怨みたり。曰く、固なるかな、高叟の詩を爲むるや。此に人あり、越人弓を關きて之を射ば、則ち己談笑して之を道はん。他なし之を疏すればなり。其兄弓を關きて之を射ば、則ち己涕泣を垂れて之を道はん。他なし之を戚めばなり。小弁の怨むは親を親むは仁なり。固なるかな、高叟の詩を爲むるや。曰く、凱風は何を以てか怨みざる。曰く、凱風は親の過小なる者なり。小弁は親の過大なる者なり。親の過大にして怨みざるは、是れ愈々疏するなり。親の過小にして怨むは是れ磯すべからざるなり。愈々疏するは不幸なり。磯すべからざるも亦不孝なり。孔子曰く、舜は其れ至孝になり、五十にして慕ふと。

也。小弁之怨親也。親親仁也。固矣夫。高叟之爲詩也。曰。凱風何以不怨。曰。凱風親之過小者也。小弁親之過大者也。親之過大而不怨。是愈疏也。親之過小而怨。是不可磯也。愈疏不孝也。孔子曰。舜其至孝矣。五十而慕。

● 野國の人、子夏の弟子高行子なりと云ふ ● 詩經小雅の篇名、周の幽王宣姁を信じ中后をシリげけ宜白を遣放す、宜白此詩を作りて自ら怨む ● 偏固なる者なり ● 高子の老人なるを以て云ふ ● 説くと云ふが如し ● 野蠻人が人を射んとすの歌に用ふ ● 其の不可を言ひて、之を止めん ● 詩經邶風の篇名、此の詩は七子ある母他に嫁せんとするを諫めんとて其子の作りしものなり ● 激し易き爲め觸ること出來ざるを云ふ

宋輕將之楚。孟子曰。先生將何之。曰。吾聞秦楚構兵。我將見楚王。說而罷之。楚王不悅。我將見秦王。說而罷之。有。所遇焉。曰。

宋輕將に楚に之かんとす。孟子、石丘に遇へり。曰く、先生將に何にか之かんとする。曰く、吾聞く、秦楚兵を構ふと。我將に楚王を見て説きて之を罷めしめんとす。楚王悦ばざれば我將に秦王を見て説きて之を罷めしめんとす。二王我將に遇ふ所あらんとすと。曰く、軻や請ふ、其詳なるを問ふことなからん。願はくは其指を聞かん。之を説くこと將に何如にせんとす。曰く、我將に其不利を言はんすと。曰く、先生の志は則ち大なり。先生の號は則ち不可なり。先生利を以て秦



軻也。請無問其詳。願聞其指。說之將何如。曰。我將言其不利也。曰。先生之志則大矣。先生之號則不可。先生以利說秦楚之王。秦楚之王悅於利。以罷三軍之師。是三軍之士樂罷而悅於利也。為人臣者。懷利以事其君。為人子者。懷利以事其父。為人弟者。懷利以

楚の王に説かば、秦楚の王利を悦びて以て三軍の師を罷めん。是れ三軍の士罷むることを樂みて利を悦ぶなり。人の臣たる者利を懷ひて以て其君に事へ、人の子たる者利を懷ひて以て其父に事へ、人の弟たる者利を懷ひて以て其兄に事ふ。是れ君臣父子兄弟終に仁義を去り利を懷ひて以て相接す。然り而して亡びざる者は未だ之れ有らざるなり。先生仁義を以て秦楚の王に説き、秦楚の王、仁義を悦びて三軍の師を罷めば、是れ三軍の士罷むるを樂んで仁義を悦ぶなり。人臣たる者仁義を懷ひて以て其君に事へ、人の子たる者仁義を懷ひて以て其父に事へ、人の弟たる者仁義を懷ひて以て其兄に事ふ。是れ君臣父子兄弟利を去り仁義を懷ひて以て相接するなり。然り而うして王たらざる者は未だ之れあらざるなり。何ぞ必ずしも利と曰はん。

● 宋徑は宋の人 ● 地名 ● 長者を云ふ、即ち宋徑を呼ぶ也 ● 二王のうち我が志と一致するものありとなり ● 旨なり、宋徑が二王に對して説かんとする論旨の大意を云ふ ● 意味を表はす名號、標榜する所 ● 三軍の衆徒即ち大將より兵卒まで ● 三軍の戰士 ● 私利を企圖に轉く

事其兄。是君臣父子兄弟。終去仁義。懷利以相接。然而不亡者。未之有也。先生以仁義說秦楚之王。秦楚之王。悅於仁義。而罷三軍之師。是三軍之士。樂罷而悅於仁義也。為人臣者。懷仁義以事其君。為人子者。懷仁義以事其父。為人弟者。懷仁義以相接也。然而不王者。未之有也。何必曰利。

孟子居鄒。季任爲之處守。以幣交。受之而不報。處於平陸。儲子爲相。以幣交。受之而不報。他日由鄒之任。見季子。由平陸之齊。不見儲子。屋廬子喜曰。連得問矣。問曰。夫子之任。見季子之齊。不見儲

孟子鄒に居る。季任、任の處守たり。幣を以て交る。之を受けて報せず。平陸に處る。儲子相たり、幣を以て交る。之を受けて報せず。他日鄒より任に之きて季子を見る。平陸より齊に之きて儲子を見ず。屋廬子喜びて曰く、連問を得たりと。問ひて曰く、夫子任に之きて季子を見、齊に之きて儲子を見ざるは其の相たるが爲めか。曰く、非なり。書に曰く、享に儀多し。儀、物に及ばざれば不享と曰ふ。惟志を享に役せずと。其の享を爲さざるが爲めなり。屋廬子悦ぶ。或ひと之を問ふ。屋廬子曰く、季子は鄒に之くことを得ず、儲子は平陸に之くことを得。

● 任は小國、季任は任君の季弟なり、或は云ふ季任は任季の諱冠と ● 處守は留守なり ● 幣帛、進物のこと ● 返禮せず ● 齊の邑名 ● 連は屋廬子の名、問はずまじき事なり、孟子の處所異なるが故に質問するべきを、見出し得たりなり ● 書經齊語の篇、物を獻するの禮には儀式多し、儀式が幣物に及ばざる時は之を不享と云ふ、

子曰爲其爲相與曰非也書曰享多儀儀不及物曰不享惟不役志于享爲其不成享也屋廬子曰季子不得之鄒儲子得之平陸

是れ志を享禮に用ひざるが爲めなりと、享に大切なるは志を用ふることも即ち禮を盡すに在り、儲子は之を缺けり、故に孟子報せず、儲子の禮を缺けるは下の屋廬子の答によりて明かなり

淳于髡曰先名實者爲人者也後名實者自爲也夫子在三卿之中名實未如於上下而去之仁者固如此乎孟子曰居下位不以賢事不肖者伯夷也五就湯五就桀者伊

淳于髡曰く、名實を先きにする者は人の爲めにするなり。名實を後にする者は自ら爲めにするなり。夫子三卿の中に在りて、名實未だ上下に加はらずして之を去る。仁者固より此の如きか。孟子曰く、下位に居て賢を以て不肖に事へざる者は伯夷なり。五たび湯に就き五たび桀に就く者は伊尹なり。汗君を惡まず、小官を辭せざる者は柳下惠なり。三子者道を同じくせざれども其趨き一なり。一とは何ぞや。曰く、仁なり。君子は亦仁のみ。何ぞ必ずしも同じからん。曰く、魯の繆公の時公儀子政を爲す。子柳・子思臣たり。魯の削らるゝこと滋く甚し。是の若きか賢者の國に益なきや。曰く、虞は百里奚を用ひずして亡び、秦の穆公は之

尹也。不惡行君不辭小官者。柳下惠也。三子者不也。道其趨一也。一者何也。曰。仁也。君子亦仁而已矣。何必同。曰。魯繆公之時。公儀子爲政。子柳子思爲臣。魯之削也。滋甚。若是乎賢者之無益於國也。曰。虞不用百里奚而亡。秦穆公用之而霸。不用賢則亡。削何可

を用ひて霸たり。賢を用ひざれば則ち亡ぶ。削らるゝこと何ぞ得べけんや。曰く、昔者王豹、淇に處り、河西善く謳ひ、餘駒、高唐に處り、齊右善く歌ふ。華周杞梁の妻善く其夫を哭して國俗を變ず。諸を内に有すれば必ず諸を外に形す。其事を爲して其功無き者は、髡未だ嘗て之を觀ざるなり。是の故に賢者無きなり。有らば則ち髡必ず之を識らん。曰く、孔子魯の司寇たり。用ひられず。從ひて祭る。繆肉至らず。冕を税がすして行る。知らざる者は以爲らく肉の爲めなりと。其知る者は以爲らく、禮なきが爲めなりと。乃ち孔子は則ち微罪を以て行らんことを欲す。苟も去るを爲すを欲せず。君子の爲す所は衆人固より識らざるなり。

● 名譽と功績 ● 進んで人を教ふ ● 漸次的に自己を治め ● 大剛の諸侯は三人の卿を置けり ● 上未だ君を正すを得ず、下未だ民を濟ふを得ざるを云ふ ● 五たびとは屢々隨身せしをいふと、或は湯桀の非を改めんとして伊尹を以て樂に遊む、樂用ふる能はず、伊尹湯のもとにかへる、湯復之を遊む、かくすること凡そ五たびなりしと云ふ ● 心の向ふ所 ● 進退を同じくせねばならぬ必要はない ● 魯の宰相、名は休 ● 泄柳

得與。曰。昔者王豹處於淇。而河西善謳。締駒處於高唐。而齊右善歌。華周杞梁之妻。善哭。其夫。而變國俗。有諸內。必形諸外。爲其事。而無其功。者。髡。未嘗觀之也。是故無賢者。也。有則髡必識之。曰。孔子爲魯司寇。不用。從而祭。膾肉不至。不稅冕而行。不知者以爲爲肉也。其知者。以爲爲無禮也。乃孔子則欲以微罪。行不欲爲苟去。君子之所爲。衆人固不識也。

① 削る、位にてすみしは華意賢人を用ひしが爲めなり ② 衛國の人にて歌を善くす、淇は川の名、衛に在り ③ 齊國の人、亦歌を善くす、高唐は齊の邑名、齊右は齊の西部地方 ④ 共に齊人、高に於て戰死す ⑤ 締駒に賢者無し云ふ ⑥ 魯石に説いて邪祭す ⑦ 膾き肉、祭の時に供へ、之々大夫に分つを禮とす ⑧ 髡冠を脱せずして急ぎ去る ⑨ 膾肉を分たざるは魯君及魯事者の罪なりと雖も孔子大夫の位にあるを以て已も亦罪ありとなし、此を以て自ら魯を去れり、是より先き隨國齊が魯を亂さんとして女樂を送る、魯君歡樂して朝せざること三日、孔子道の行はれざるを見、魯を去らんとせり、然れども罪を其君に歸することを欲せず、故に時の來るを待てり、今膾肉不至を以て好禮となし、強ひ自らも罪ありとして去る

孟子曰。五霸者。三王之罪人也。今之諸侯。五霸之罪人也。今之大夫。今之諸侯

孟子曰く、五霸は三王の罪人なり。今の諸侯は五霸の罪人なり。今の大夫は今諸侯の罪人なり。天子の諸侯に適くを巡狩と曰ひ、諸侯の天子に朝するを述職と曰ふ。春は耕すを省みて足らざるを補ひ、秋は斂むるを省みて給らざるを助く。其疆に入り、土地辟け、田野治り、老を養ひ賢を尊び、俊傑位に在

之罪人也。天子適諸侯。曰。巡狩。諸侯朝於天子。曰。述職。春省耕而補不足。秋省斂而助不給。入其疆。土地辟。田野治。養老尊賢。俊傑在位。則有慶。慶以地。入其疆。土地荒蕪。遺老失賢。捨克在位。則有讓。不伐。諸侯伐而不討。諸侯撻其爵。再不朝。則削其地。三不朝。則六師移之。是故天子討而不討。五霸者。撻諸侯。以伐諸侯者也。故曰。五霸者。三王之罪人也。

れば則ち慶あり。慶するに地を以てす。其疆に入り、土地荒蕪し、老を遺れて賢を失ひ、培克位にあれば、則ち讓あり。一たび朝せざれば則ち其爵を削し、再び朝せざれば則ち其地を削り、三たび朝せざれば則ち六師之に移す。是の故に天子は討じて伐せず、諸侯は伐して討せず。五霸は諸侯を撻きて以て諸侯を伐つ者なり。故に曰く、五霸は三王の罪人なり。

● 春秋時代に於ける諸侯の盟主、齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、宋の襄公、楚の莊王是れなり ③ 三王は禹湯文武なり、文武は父子の關係あるが故に一王として歌ふるなり ④ 賞與なり ⑤ 自らはこりて人に勝つことを好む人、即ち不良不正の人を云ふ ⑥ 賈む ⑦ 降す ⑧ 大事をわけて之を討つなり ⑨ 命を下して討たしむ ⑩ 天子の命を奉じて諸侯親征するを云ふ

五霸桓公爲盛。葵丘之會。諸侯束牲載

五霸は桓公を盛なりと爲す。葵丘の會に諸侯性を束ね、書を載せて血を敵らず。初命に曰く、不孝を誅し、樹子を易ふると無かれ。妾を以て妻と爲すこと無か

書而不詆血。初命曰。誅不孝。無易樹子。無以妾爲妻。再命曰。尊賢育才。以彰三德。三命曰。敬老慈幼。無忘賓旅。四命曰。士無世官。官事無攝。取士必得。無專殺大夫。五命曰。無曲防。無過糴。無有封而不告。曰。凡我同盟之人。既盟之後。言歸于好。今之諸侯。皆犯此五

れ。再命に曰く、賢を尊び才を育ひ以て有徳を彰せ。三命に曰く、老を敬ひ幼を慈し、賓旅を忘るゝこと無かれ。四命に曰く、士官を世々にすること無かれ。官の事は攝すること無かれ。士を取るには必ず得よ。專に大夫を殺すと無かれ。五命に曰く、防を曲ぐるゝこと無かれ。糴を過むるとな無かれ。封ありて告げざること無かれ。曰く、凡そ我が同盟の人既に盟ふの後、言に好に歸せよと。今の諸侯は皆此の五禁を犯せり。故に曰く、今の諸侯は五霸の罪人なりと。君の惡を長ずるは其罪小なり。君の惡を逢ふるは其罪大なり。今の大夫は皆君の惡を逢ふ。故に曰く、今の大夫は今の諸侯の罪人なりと。

- 魯僖公九年の會盟、左傳參照
- 犧牲を壇上に縛したるのみにて殺さざりし意
- 盟の辭を記せるもの
- 會盟には血を飲るべきに飲らざりしなり
- 五命の文辭中の初命なり
- 嗣子
- 有徳者
- 旅行者を疎略にする
- 世襲
- 官を兼ねること
- 國防を曲ぐるゝこと
- 隣國が、饋贈などの爲めに米穀を購入する時に之を糴するること勿れ
- 盟主に告げずして封を人に與ふる勿れ
- 交際之言
- 君の心に惡心未だ發せざるに、臣其の意を警へ君に惡に類くは其の罪大なり

禁。故曰。今諸侯。五霸之罪人也。長二君之惡。其罪小。逢二君之惡。其罪大。今之大夫。皆逢二君之惡。故曰。今之大夫。今之諸侯之罪人也。

魯欲使下慎子爲將軍。孟子曰。不教民而用之。謂之殃。民殃民者。不容於堯舜之世。一戰勝齊。遂有南陽。然且不可慎。子此則滑盪所不識也。曰。吾明告子。天子之地。方千里。不千里。不足以待諸侯。諸侯之地。方百

魯、慎子をして將軍たらしめんと欲す。孟子曰く、民を教へずして之を用ふる之を民を殃すと謂ふ。民を殃する者は堯舜の世に容れられず。一たび戦ひて齊に勝ち、遂に南陽を有つて、然も且つ不可なり。慎子勃然として悦ばずして曰く、此れ則ち滑盪の識らざる所なり。曰く、吾明かに子に告げん。天子の地、方千里、千里ならざれば以て諸侯を待つに足らず。諸侯の地、方百里、百里ならざれば以て宗廟の典籍を守るに足らず。周公の魯に封ぜらるゝや、方百里と爲す、地足らざるに非ず、而して百里に儉す。太公の齊に封ぜらるゝや、亦方百里と爲す。地足らざらば則ち魯は損する所に在るか、益する所に在るか、徒に諸を彼に取りて以て此に與ふ。然れども且つ仁者は爲さず。況んや人を殺して以て之を求むる



に於てをや。君子の君に事ふるや、務めて其君を引きて以て道に當り、仁に志さしむるのみ。

●魯の臣、用兵に巧なる者 ●人民に禮典を教へて、父母長上に事ふる人の道を知らしめ、又農業の暇に軍事を習はしめて後人民を戦に使用すべきに然らずして人民を戦に用ふるなり ●人民に災難を掛くるなり ●魯の如き聖人の世には、其の罪を容赦せられぬ ●泰山の西南、汶水の北に在る地 ●悦ばざる貌 ●孟子の名なり ●合點のゆかぬことなり ●諸侯の朝覲聘問の待遇をすするなり ●諸侯の祭祀朝會の典例の記録なり、之れを宗廟に藏め置くが故に宗廟之典籍といふ ●百里に局限するなり ●戦はずして取るなり ●齊を指す ●魯を指す ●道理に叶へしむるなり

里。不百里。不  
足三以守三宗廟  
之典籍。周公  
之封於魯。爲  
方百里也。地  
非不足。而儉  
於百里。太公  
之封於齊也。  
亦爲方百里  
也。地非不足  
也。而儉於百  
里。今魯方百  
里者。五子以  
爲有王者作。則魯在所損乎。在所益乎。徒取諸彼以與此。然且仁者不爲。況於殺人以求之乎。君子之事君也。務引其君以當道。志於仁而已。

孟子曰。今之  
事君者曰。我  
能爲君辟土  
地。充府庫。今  
之所謂良臣。

孟子曰く、今の君に事ふる者は曰く、我は能く君の爲めに土地を辟き府庫を充さんと。今の所謂良臣は、古の所謂民の賊なり。君道に郷はず仁に志さずして之を富ますんことを求む、是れ桀を富ますなり。我れ能く君の爲めに、與國と

古之所謂民  
賊也。君不鄉  
道。不志於仁。  
而求富之。是  
爲桀也。我能  
爲君約與國。

約し戦へば必ず克たんと。今の所謂良臣は古の所謂民の賊なり。君道に郷はず、仁に志さず。而して之を爲めに強戦することを求む。是れ桀を輔くるなり。今の道に由りて今の俗を變すること無ければ、之に天下を與ふと雖も、一朝も居ること能はざるなり。

●我今の君に仕官する者 ●人民に害をなす者 ●夏の桀土の如き暴君を富ましむるよからざる仕方 ●同盟國 ●正しき道 ●齊くの間も天下を有つこと能はず

之所謂良臣。古  
之所謂民賊也。君不鄉道。不志於仁。而求爲之強戰。是輔桀也。由今之道。無變今之俗。雖與之天下。不能一朝居也。

白圭曰。吾欲  
二十而取一。  
何如。孟子曰。  
子之道。貉道  
也。萬室之國。  
一人陶則可  
乎。曰。不可。器  
不足用也。曰。

白圭曰く、吾二十にして一を取らんと欲す何如と。孟子曰く、子の道は貉の道なり。萬室の國一人陶すれば則ち可ならんや。曰く、不可。器用ふるに足らざるなり。曰く、夫れ貉は五穀生ぜず、惟黍のみ之に生ず。城郭宮室宗廟祭祀の禮無く、諸侯の幣帛饗飩無く、百官有司無し。故に二十にして一を取りて足れり。今中國に居り、人倫を去り君子無ければ、之を如何ぞ其れ可ならんや。陶以て穿きも且つ以

夫貉五穀不生。惟黍生之。無城郭宮室宗廟祭祀之禮。無諸侯幣帛饗飮。無百官有司。故二十取一而足也。今居中國。去人倫。無君子如之何。其可也。陶以寡。且不可。以爲國。況無君子乎。欲輕之於堯舜之道者。大貉小貉也。欲重之於堯舜之道者。大桀小桀也。

て國を爲す可からず。況んや君子無きをや、之を堯舜の道より軽くせんと欲する者は大貉小貉なり。之を堯舜の道より重くせんと欲する者は大桀小桀なり。

◎ 婚は曰、名は丹、字は圭、周人なりと  
◎ 租税十分の一を徴收するが三代の通則なり、然るに今二十分の一を租税として取り立てんとす  
◎ 北方周朝の國の名  
◎ 萬戸ある所にて一人が陶器を燒くこと  
◎ 銅幣の通物  
◎ 賓客を饗應する禮なり  
◎ 實際の禮をいふ  
◎ 位を以て云ふ、在官の人を云ふ  
◎ 租税の率は十分の一が最も適當なり、是れ堯舜の古法、之より多くも少くも共に惡しと云ふなり  
◎ 租税を軽くするに比りて大小を云へり  
◎ 租税又は輕税に比りて云ふ

白圭曰。丹之治水也。愈於禹。孟子曰。子過矣。禹之治水。水之道也。是故禹以四

白圭曰く、丹の水を治むるや、禹より愈れり。孟子曰く、子過てり。禹の水を治むるは水之道なり。是の故に禹は四海を以て壑となす。今吾子は鄰國を以て壑と爲す。水逆行する之を降水といふ。降水とは洪水なり。仁人の惡む所なり、吾子過てり。

海爲壑。今吾子以鄰國爲壑。水逆行。謂之降水。降水者。洪水也。仁人之所惡也。吾子過矣。

◎ 白圭の名  
◎ 禹の治水は四方の海に水を注ぎやり天下の害を除く  
◎ 丹の治水は隣國に水を注ぎやり白國の害を除くのみ

孟子曰。君子不亮。惡乎執。○魯欲使樂正子爲政。孟子曰。吾聞之。喜不寐。公孫丑曰。樂正子強乎。曰。否。有知慮乎。曰。否。多聞識乎。曰。否。然而不察。爲喜而不察。曰。其爲人也好善。好善足乎。曰。好善。優於

孟子曰く、君子亮ならざれば、惡にか執らん。○魯、樂正子をして、政を爲さしめんと欲す。孟子曰く、吾之を聞き喜びて寐ねられず。公孫丑曰く、樂正子は強か。曰く、否。知慮あるか。曰く、否。聞識多きか。曰く、否。然らば、則ち奚爲ぞ喜びて寐られざる。曰く、其の人となりや善を好む善を好めば足るか。曰く、善を好めば天下に優なり。而るを況んや魯國をや。夫れ苟も善を好めば、則ち四海の内、皆千里を輕んじて、來つて之に告ぐるに善を以てせんとす。夫れ苟も善を好まざれば、則ち人將に曰はんとす、訑訑として予既に已に之を知ると。訑訑の聲、音顔色人を千里の外に距む。士千里の外に止まらば、則ち讒詔面諛の人至らん。讒詔面諛の人と居らば、國治を欲すとも得べけんや。

天下而況魯國乎。夫苟好善。則四海之內。皆將輕千里而來告之。士止於千里之外。則讒諂面諛之人。至矣。與讒諂面諛之人。居國欲治。可得乎。

- 信なり、信無くば力と恃む者無になしとなり
- 樂正子克なり
- 聞強果斷なり
- 知慝慝處ありや
- 博聞多識なりや
- 餘裕あること
- 千里を遠しとせざる事
- 自分の習を誇りて他人の言を賤むこと

陳子曰。古之君子。何如則就三所去。三。迎之致敬。以有禮。言將行之禮貌未衰。其言也。則就之。禮貌未衰。言弗行也。則去之。其次雖未行。其言也。迎之致敬。以

陳子曰く、古の君子何如なれば則ち仕ふる。孟子曰く、就く所三つ、去る所三つ。之を迎ふるに敬を致して以て禮あり、言ひて將に其言を行はんとすれば、則ち之に就く。禮貌未だ衰へざるも、言行はれざれば則ち之を去る。其次は未だ其言を行はずと雖も、之を迎ふるに敬を致し、以て禮あれば則ち之に就く。禮貌衰ふれば則ち之を去る。其下は朝に食はず、飢餓門戸を出づる能はず。君之を聞きて曰く、吾大にしては其道を行ふ能はず。又其言に従ふ能はず。我土地に飢餓せしむるは、吾之を恥づとて、之を周はば亦受くべきなり。

死を免るゝのみ。

- 陳臻
- 仕ふるなり
- 仕へざるなり
- 遇するに禮を以てし待つに和禮を以てすること
- 上にし
- 下と同じ
- 其の次に同じ
- 教ふなり
- 謙の多くを受けず、死を免かる。程度に於て受くるのみ

有禮。則就之。禮貌衰。則去之。其下朝不食。夕不食。飢餓不能出門。戶。君聞之曰。吾大者不能行其道。又不能從其言也。使飢餓於我土地。吾恥之。周之亦可受也。免死而已矣。

孟子曰。舜發於畎畝之中。傅說舉於版築之間。膠鬲舉於魚鹽之中。管夷吾舉於士。孫叔敖舉於海。百里奚舉於市。故天將降大任

孟子曰く、舜は畎畝の中に發し、傅説は版築の間に擧げられ、膠鬲は魚鹽の中に擧げられ、管夷吾は士に擧げられ、孫叔敖は海に擧げられ、百里奚は市に擧げらる。故に天の將に大任を是人に降さんとするや、必ず先づ其心志を苦め、其筋骨を勞し、其體膚を餓し、其の身を空乏にし、行其の爲す所に拂亂す。心を動し、性を忍び、其の能くせざる所を曾益する所以なり。人愜に過ちて然る後に能く改む。心に困し、慮に衡して後に作る。色に徴し、聲に發して後に喩る。

於是人也必  
先苦其心志  
勞其筋骨餓  
其體膚空乏  
其身行拂亂  
其所爲所以  
動心忍性曾  
益其所不能  
人恆過然後  
能改困於心  
衡於慮而後  
作徵於色發  
於聲而後喻  
而後死於安  
樂也

入りては則ち法家拂士無く、出ては則ち敵國外患無き者は國恆に亡ぶ。然して後に知る、憂患に生きて安樂に死すること。  
 ① 田忌なり、辯初め歷山の下に祈せりと云ふ ② 城郭を築くこと、傳説は其の人夫の中に居りしに、殷の武丁之を擧用せり ③ 段射を避けて魚を獲る、周の文王之を也 ④ 管仲は魯より捕はれ齊に送られ、獄官の中より桓公に拔擢せらる ⑤ 初め海濱に居りしが楚の莊王に擧げらる ⑥ 秦の穆公に市中より擧用さる ⑦ 困窮貧乏にす ⑧ 思ふ事皆違ひて一つも當し遂げられぬこと ⑨ 其心を驚動し ⑩ 其性を堅く忍ばせ ⑪ 増益す ⑫ 思慮の屈化して通ぜざること ⑬ 禮儀の中に明かにする能はず、事理顯著、以て人の色に驗し人の察に待するに至つて始めてよく體悟して通ぜずと也 ⑭ 法度 ⑮ 諸代の家と婦嬖の臣

孟子曰。教亦多術矣。予不屑之教誨也者。是亦教誨之而已矣。

孟子曰く、教も亦術多し。予が之を屑しとして教誨せざる者は、是れ亦之を教誨するのみ。

① 人を教ふるにも種々方法あり、受教者の行よからず、之を教ふるを屑とせずして之を謝絶するも、其の人之に感憤して行を改め學に志すこととならば、謝絶も亦一の教誨なり

卷之十三

盡心章句上

孟子曰く、其心を盡す者は其性を知る。其性を知れば則ち天を知る。其心も存して其性を養ふは、天に事ふる所以なり。殫壽貳せず、身を脩めて以て之を俟つは、命を立つる所以なり。

① 惻隱慈悲恭敬是非の心 ② 人性の善なることを認知す ③ 人性は天の賦與する所なれば、性の善なるを知れば之を感與する天の善を好むことを自ら知り得るとなり ④ 殫は短命、貳は難ふ意、立命は天命を守ること

孟子曰く、命に非ざること莫きなり。順ひて其正を受く。是故に命を知る者は巖窟の下に立たず。其道を盡して死する者は正命なり。桎梏して死する者は正命に非ざるなり。

孟子曰。盡其心者。知其性也。知其性。則知天矣。存其心養其性。所以事天也。殫壽不貳。脩身以俟之。所以立命也。

孟子曰く、盡其心者、知其性也、知其性、則ち天を知る、其心も存して其性を養ふは、天に事ふる所以なり、殫壽貳せず、身を脩めて以て之を俟つは、命を立つる所以なり、



道<sup>一</sup>而死者。正命也。桎梏死者。非正命也。孟子曰。求則得之。舍則失之。是求有益於得也。求在我也。求之有道。得之有命。是求無益於得也。求在外者<sup>二</sup>也。孟子曰。萬物皆備於我矣。反身而誠。樂莫大焉。強恕近<sup>レ</sup>焉。孟子曰。行之

● 人の死は皆天命なりと雖も、善を行ひて正命を受くべく努力すべしとなり ● 天命に隨ひて正當なるものを受く ● 於嚴知難なり ● 罪人を罰する手段足誠なり  
孟子曰く、求むれば則ち之を得、舍つれば則ち之を失ふ。是れ求め得るに益あるなり。我に在る者を求むればなり。之を求むるに道あり。之を得るに命あり。是れ求め得るに益無きなり。外に在る者を求むればなり。

● 我身内に在るもの、即ち天爵を云ふ、朱註に仁義禮知凡そ世の有する所の者といへり ● 求むる方法 ● 外より來るもの、人爵を云ふ、富貴利達類亦皆然り

孟子曰く、萬物皆我に備る。身に反みて誠なれば樂焉より大なるは莫し。強恕して行ふ。仁を求むること焉より近きは莫し。

● 天下の人心皆同じ、故に我心を推して人に譲らば、故に彼我心に備はると謂ふべし、萬物とは天下の萬物なりと云ふ ● 自ら勉强して忠恕の道を行ふべし、忠恕とは己を推して人に及ぼすこと、即ち同情なり

孟子曰く、之を行ひて著しからず。習ひて察せず。終身之に由りて而も其

道<sup>一</sup>を知らざる者は來し。

● 仁義の心を云ふ ● 顯著ならしむる能はず ● 仁義の道に従りながらの意

孟子曰く、人にて恥づること無かるべからず。恥無きを之れ恥づれば恥づること無し。○孟子曰く、恥の人<sup>一</sup>に於けるや大なり。機變の巧を爲す者は恥を用ふるに所なし、人に若かざるを恥ぢざれば何ぞ人に若くことか有らむ。

● 無恥の心が無ければならぬ ● 恥づるなき所に恥づれば修身恥辱に遇はずと ● 恥を知ることは人に大切なりと ● 計略や言端を以て人を附れること ● 人に及ばざるなり

孟子曰く、古の賢王は善を好みて勢を忘る。古の賢士は何ぞ獨り然らざらん。其道を樂みて人の勢を忘る。故に王公も敬を致し禮を盡さざれば則ち亟<sup>一</sup>之を見ることを得ず。見ることをすら且つ猶ほ亟<sup>二</sup>することを得ず。而るを況んや得て之を臣とするをや。

而不著焉。習矣而不察焉。終身由之而不知其道者衆也。孟子曰。人不可以無恥。無恥之於人大矣。爲機變之巧者。無所用恥焉。不恥不若人。何若人有。孟子曰。古之賢王好善而忘勢。古之賢士何獨不然。樂其道而忘

人之勢。故王公不致敬。盡禮。則不得亟見之。見且猶不得亟而況得而臣之乎。

- 人の勢を好むなり
- 己の權勢を忘れて貴者を敬すること
- 己の道なり
- 君侯の權勢

孟子曰。子好遊乎。吾語子遊。人知之亦囂。人不知亦囂。囂。曰。何如斯可以罷囂。曰。曰。尊德樂義。則可以罷囂矣。故士窮不失義。達不離道。窮不失義。故士得已焉。達不離道。故民不失望。

孟子、宋句踐に謂ひて曰く、子、遊を好むか。吾、子に遊を語らむ。人之れを知れども亦囂。人知らざれども亦囂。囂たり。曰く、何如せば斯に以て囂罷たるべき。曰く、徳を尊び義を樂めば則ち以て囂罷たるべし。故に士は窮して義を失はず。達して道を離れず。窮して義を失はず、故に士己を得。達して道を離れず、故に民望を失はず。古の人志を得れば澤民に加はり、志を得ざれば身を脩めて世に見はる。窮すれば則ち獨り其身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす。

- 當時の遊説安なり、好は來、名は句踐
- 遊説
- 自得無敵の貌
- 徳は得なり、我身に得たる徳なり
- 我身の守る義なり
- 榮達なり
- 己の本分を全うす
- 人民本望通りになる
- 名實諸侯に見はる

焉。古之人得志。澤加於民。不得志。脩身見於世。窮則獨善其身。達則兼善天下。

孟子曰く、文王を待つて後に興る者は凡民なり。夫の豪傑の士の若きは、文王無しと雖も、猶ほ興る。○孟子曰く、之に附するに韓魏の家を以てするも、如し其れ自ら視ること欲然たらば、則ち人に過ぐることを遠し。

- 感化を受くること
- 感憤興起すること
- 益し加ふること
- 言の御用の家柄にて富貴なり、後、骨を分割して各々國を立つ
- 不滿の貌

家如其自視。欲然。則過人遠矣。

孟子曰。以佚道使民。雖勞不怨。以生道殺民。雖死不怨殺者。

孟子曰く、佚道を以て民を使へば、勞すと雖も怨みず。生道を以て民を殺せば、死すと雖も殺す者を怨みず。

- 安逸ならしむる道
- 民生を涉りしめんとする道

孟子曰く、霸者の民は靡靡如たり。王者の民は皞皞如たり。之を殺して怨みず、

之民。雖虞如也。王者之民。皞皞如也。殺之而不怨。利之而不庸。民日遷善而不知爲之者。夫君子所過者。化。所存者神。上下與天地同流。豈曰小補之哉。

之て利しを庸とせず。民日に善に遷りて之を爲す者知らず。夫れ君子過ぐる所の者は化し、存する所の者は神、上下天地と流を同じうす。豈に之を小補すと曰はんや。

- 樂み喜ぶ様
- 廣大自利の貌
- 功とせず
- 善に遷らせし者
- 聖人の意
- 感化を及ぼすこと
- 聖人の存在する所に其の感化神の如し
- 王業は決して一時の取り纏ひに非ざること

孟子曰。仁言不如仁聲之入人深也。善政不如善教之得民也。善政民畏之。善教民愛之。善政得民財。善教得民心。

孟子曰く、仁言は仁聲の人に入るの深きに如かざるなり。善政は善教の民を得るに如かざるなり。善政は民之を畏れ、善教は民之を愛す。善政は民の財を得、善教は民の心を得。

- 仁言を以て民を諭すこと
- 仁君といふ評判が深く人心に感化を與ふるに及ばず
- 政は法度禁制なり
- 教は仁義禮樂なり
- 百姓足りて君足らざることなしの意
- 其親を彼にせず君を連れざる意

孟子曰。人之所不學而能者。其良能也。所不慮而知者。其良知也。孩提之童無不知愛其親也。及其長也。無不知敬其親也。親親仁也。敬長義也。無他。達之天下也。

孟子曰く、人の學ばざる所にして能くする者は其良能なり。慮らざる所にして知る者は其良知なり。孩提の童も其親を愛すること知らざること無し。其長するに及びて其兄を敬することを知らざること無し。親を親しむは仁なり。長を敬するは義なり。他無し之を天下に達するなり。

- 人爲を假らず、自然に得たる能り
- 自然の知能
- 孩は小兒の笑ふこと、抱は抱抱なり、二三才の幼兒を云ふ
- 仁義の道を行ふとはこの天性の仁義を天下に推し廣むるのみ

孟子曰。舜之居深山之中。與木石居。與鹿豕遊。其所以異於深山之野人者。幾希。及其聞一

孟子曰く、舜の深山の中に居る、木石と居り、鹿豕と遊ぶ、其の深山の野人と異なる所以の者幾ど希なり。其の一の善言を聞き、一の善行を見るに及びて、江河を決て沛然として之を能く禦むること莫きが若し。

- 歷山の窟 居りし故窟く云ふ
- 舜の深山に住する状態は兎の凡人とまして異ならぬなし
- 其の趨向することの旺盛なる状を形容していふ

善言一見一善行。若決江河。沛然莫之能禦也。

孟子曰。無爲其所不爲。無欲其所不欲。如此而已矣。

○孟子曰。人之有德慧術知者。恆存乎心。而疾疢。獨孤臣孽子。其操心也危。其慮患也深。故達。

孟子曰。有事君人者。事是君則爲容悅者也。有安社稷者。以安社稷爲悅者也。有天下民者。

孟子曰く、其の爲さざる所を爲すこと無く、其の欲せざる所を欲する無かれ、此の如くせんのみ。○孟子曰く、人の徳慧術知ある者、恆に疾疢に存す。獨り孤臣孽子其の心を操るや危く、其の患を慮るや深し。故に達す。

己の爲すを欲せざることを他人に要求せざるなり。○朱注にては其の行ふまじき事を行ふなく、其の欲すまじき事を欲するなしと解す。○徳の絶たる術の巧なる。○熱病、凡て人は災厄に遭うて謹慎し其の知徳を成就するものなり。○君に用ひられざる孤立の臣下、親に疎んぜらる、庶子、かゝる不遇に居るものは常に危きに居るが如く用心するものなり。○心持の安からぬなり。○道理に達す。

孟子曰く、君に事ふる人といふ者あり。是の君に事ふれば則ち容悦を爲す者なり。社稷を安する臣といふ者あり。社稷を安するを以て悦と爲す者なり。天下民といふ者あり。達して天下に行ふべくして、而る後に之を行ふ者なり。大人といふ者あり。己を正しうして物正しき者なり。

達可レ行レ於レ天下。而後行レ之者也。有レ大人者。正レ己而物正者也。

孟子曰。君子有三樂。而王天下不與存焉。父母俱存。兄弟無故。一樂也。仰不愧於天。俯不怍於人。二樂也。得天下英才而教之。三樂也。君子有三樂。而王天下不與存焉。

孟子曰。廣土衆民。君子欲之。所樂不存。

○面色を悦ばせて取り入ること。○社は土地の神、穀は五穀の神、轉じて國家の意に用ふ。○己の満足を得有りて隠れて人に役せられざる民。○聖人と同じ。○君と民とを兼ね一物と云へり。

孟子曰く、君子に三樂あり。而して天下に王たるは與り存せず。父母俱に存し兄弟故無きは一樂なり。仰いで天に愧ぢず俯して人に怍ぢざるは二樂なり。天下の英才を得て之を教育するは三樂なり。君子に三樂あり。而して天下に王たるは與り存せず。

王者たることは三樂の中に加はり居らず。○事故

孟子曰く、廣土衆民は君子之を欲す。樂しむ所は存せず。天下に中して立ち四海の民を定む。君子之を樂しむ。性とすする所は存せず。君子の性とすする所は大に



焉。中天下而立。定四海之民。君子樂之。所性不存焉。君子所性。雖大行不加焉。雖窮居不損焉。分定故也。君子所性。仁義禮智根於心。其生色也。睟然見於面。盎於背。施於四體。不言而喻。

行ふと雖も加へず。窮居すと雖も損せず。分定まるが故なり。君子の性とする所は、仁義禮智心に根ざす。其の色に生ずるや、睟然として面に見はれ、背に盎れ、四體に施き、四體言はずして喻る。

● まだ樂しむ所には足らぬ ● 天下の中央に都すること ● 君子の性とする所ではない ● 天賦の性の分限定まる ● 心に根をあるす ● 仁義禮智の身の外に見はるゝや ● 潤澤の貌 ● 以下は行き渡る意 ● 四肢も命命を受けずとも我が性を施る、古注にては脚を人之々々囁きなりと解す

孟子曰。伯夷辟紂。居北海之濱。聞文王作興。曰。盍歸乎來。吾聞西伯善養老。則仁人以為己歸。矣。五畝之宅。樹牆下以桑。匹婦。之則老者。足以衣帛矣。五母雞。二母。無失。其時。老者。足以無失肉矣。百畝之田。匹夫耕之。八口之家。可以無飢矣。所謂西伯善養老者。制其田里。教之樹畜。導其妻子。使養其老。五十非帛不煖。七十非肉不飽。不煖不飽。謂之凍餒。文王之民。無凍餒之老者。此之謂也。

孟子曰く、伯夷紂を辟けて北海の濱に居り、文王作興すと聞き、曰く、盍ぞ歸せざる、吾聞く西伯は善く老を養ふ者と。太公紂を辟けて東海の濱に居り、文王作興すと聞き、曰く、盍ぞ歸せざる、吾聞く西伯は善く老を養ふ者と。天下に善く老を養ふあれば、則ち仁人己の歸となす。五畝の宅牆下に樹るに桑を以てし、匹婦之に繇せば、則ち老者は以て帛を衣るに足れり。五母雞二母其

時を失ふ無くば、老者は以て肉を失ふ無きに足れり。百畝の田、匹夫之を耕せば、八口の家を以て飢うる無かるべし。所謂西伯善く老を養ふとは其田里を制し、之に樹畜を教へ、其妻子を導き其老を養はしむ。五十は帛に非ざれば煖ならず。七十は肉に非ざれば飽かず。煖かならず飽かざる之を凍餒と謂ふ。文王之民凍餒の老無しとは此の謂なり。

● 本章は無妻上に出づ ● 己の歸すべき所となす ● 以下婦人上篇に見ゆ、女に少男あり ● 五羽の母雞 ● 二匹の牝家 ● 人民の田里と宅地とを制限するなり ● 穀物と桑とを植うる事及び雞とを飼ふ事

孟子曰。易其田疇。薄其稅斂。民可使富。

孟子曰く、其田疇を易め其稅斂を薄くせば、民は富ましむべきなり。之を食ふに時を以てし、之を用ふるに禮を以てせば、財勝けて用ふべからざるなり。民水

也。食之以禮。財用之。以禮。財不可勝用也。民非水火不生活。昏暮叩人之門戶。求水火。無弗與者。至是矣。聖人治天下。使有菽粟。如水火。而民焉有不仁者乎。

火に非ざれば生活せず。昏暮に人の門戸を叩きて水火を求むるに與へざる者無し。至りて足ればなり。聖人の天下を治むる、菽粟有る水火の如くならしむ。菽粟水火の如くにして、民焉ぞ不仁なる者有らんや。

● 曠は一井の田なり、一説に毎年耕し得べき田と ● 一説に休なりと解す、地力を休むるなりと ● 其の時節時節を過へぬ事必要なるを云ふ、食は一に養也と解す、又通ずるに似たり ● 法度なり ● 豆と米とが深山あることを形容す

孟子曰。孔子登東山而小魯。登泰山而小天下。故觀於海者難爲水。遊於聖人之門者難爲言。觀水有術。必觀其瀾。日

孟子曰く、孔子東山に登りて魯を小とし、泰山に登りて天下を小とす。故に海に觀る者は水を爲し難く、聖人の門に遊ぶ者は言を爲し難し。水を觀るに術あり、必ず其瀾を觀る。日月明有り。容光必ず照す。流水の物爲るや、科に盈たざれば行かず、君子の道に志すや、章と成さざれば達せず。

● 魯の城東の山 ● 海を知らず者は大水を知る、故に之を説くに小水を以てし難し、聖人の門に遊ぶ者は大道を聞く、故に之に説くに小道を以てし難し ● 水大なれば波も大なり ● 微小の間隙を云ふ ● 内に盈ちて外

月有明。容光必照焉。流水之爲物也。不盈科。不行。君子之志於道也。不成章。不達。

に章をなすに非ざれば ● 眞に其道に通達せりとなきや

孟子曰。雞鳴起。孳孳爲善者。舜之徒也。雞鳴而起。孳孳爲利者。跖之徒也。欲知舜與跖之分。無他。利與善之間也。

孟子曰く、雞鳴きて起き、孳孳として善を爲す者は舜の徒なり。雞鳴きて起き、孳孳として利を爲す者は跖の徒なり。舜と跖との分を知らんと欲せば、他無し、利と善との間なり。

● 勤めて已まぬこと ● 盜跖のこと、大盜賊なり

孟子曰。楊子取爲我。拔一毛而利天下。不爲也。墨子兼愛。摩頂於踵。利天下。爲

孟子曰く、楊子は我が爲めに爲るを取る。一毛を抜きて天下を利するも爲さざるなり。墨子は兼ね愛す。頂を摩し踵に至るも、天下を利するは之を爲す。子莫は中を執る。中を執るは之に近しと爲す。中を執りて權なきは猶ほ一を執るがごとし、一を執るとを惡む所の者は、其の道を賊ふが爲めなり。一を擧げて百

之。子莫執中。

執中爲近之。

執中無權猶

執一也。所惡

執一者。爲其

賊道也。舉一

而廢百也。

孟子曰。飢者

甘食。渴者甘

飲。是未得飲

食之正也。飢

渴害之也。豈

惟口腹有飢

渴之害。人心

亦皆有之。人

能無以飢渴之

害爲心害。則

不及人。不爲愛矣。

を廢すればなり。

● 名は朱、前出 ● 利己主義を主張すること ● 名は霍、兼愛論者 ● 自他を平等に愛すること ● 頭の上より足の踵りまですりつぶすこと ● 善の賢者 ● 前二者の間を執る ● 聖人の道に近し ● 物事に軽重なきけいふ ● 固執して偏宜を知らざれば、獨善と同じく一方に偏するものなり

孟子曰く、飢ゑたるものは食を甘んじ、渴する者は飲を甘んず。是れ未だ飲食の正を得ざるなり。飢渴之を害すればなり。豈に惟に口腹のみ飢渴の害あるらんや。人心も亦皆害有り。人能く飢渴の害を以て心の害と爲すこと無ければ、則ち人に及ばざるは憂と爲さず。

● 飢渴が人の味覺を害するを云ふ ● 人心の利欲に害せらるゝを云ふ

孟子曰く、柳下惠、不以三公易其介。○孟子曰く、柳下惠は三公を以て其介を易へず。○孟子曰く、爲すこと有る者は

辟せば井を掘るが若し。井を掘ること九仞にして泉に及ばざれば猶ほ井を棄つ

子曰。有爲者。辟著掘井。掘井九仞而不及泉。猶爲棄井也。○孟子曰。堯舜性之也。湯武身之也。五霸假之也。久假而不歸。惡知其非有也。

となす。○孟子曰く、堯舜は之を性にするなり。湯武は之を身にするなり。五霸は之を假るなり。久しく假りて歸さず。惡んぞ其の有に非ざるを知らんや。

● 太、太傅太保之を三公と云ふ ● 節操 ● 古註にては、爲すある者は得られずと知れば中道にて盡く前に行ひし所を棄てて他の事をなすと解し、朱註によれば、道に志して中道にて止むは井を掘りて九仞の深さに達せるに泉に至らずとて止むに等しく自ら止むかり、成功に堪なきなりと解す ● 掘は傍なり、傍は普通八尺をいふ ● 之の字は仁義を指す、堯舜は天性自然に仁義を好む、湯武は身に行ひて得ず ● 體得したるなり ● 借出す ● 久しく假りて歸さざれば遂に己れのものとなら故に仁義も亦執めて行ふに在らざる

公孫丑曰く、伊尹曰く、予不順に狎れずと。大甲を桐に放く。民大に悦ぶ。大甲賢にして又之を反す。民大に悦ぶ。賢者の人臣たるや、其君不賢ならば則ち固より放くべきか。孟子曰く、伊尹の志有らば則ち可なり。伊尹の志無くば則ち竊へるなり。

● 書經大甲篇に見ゆ ● 義理に従はざること ● 無問す ● 都の臺へ歸す

賢者之爲人。臣也。其君不賢。則固可放。孟子曰。有伊尹之志。則可。無伊尹之志。則不可。

公孫丑曰。詩曰。不素餐兮。君子之不耕而食何也。孟子曰。君子居是國也。其君用之。則安富尊榮。其子弟從之。則孝弟忠信。不素餐兮。孰大於是。

公孫丑に曰く、詩に曰く、素餐せずと。君子の耕さずして食ふは何ぞや。孟子曰く、君子の是の國に居るや、其君之を用ふれば則ち安富尊榮、其子弟之に従へば則ち孝弟忠信、素餐せざること、孰れか是より大ならん。

● 詩經魏風伐檀の篇 ● 功なくして食祿を食むこと ● 暗に孟子を指す

王子墊問曰。士何事。孟子曰。尚志。曰。何謂尚志。曰。仁義而已矣。殺一無罪。非仁也。非其有而取之。非義也。居惡在。仁是也。路惡在。義是也。居仁由義。大人之事備矣。

王子墊問ひて曰く、士何をか事とする。孟子曰く、志を尚くす。曰く、何をか志を尚くすと謂ふ。曰く、仁義のみ。一無罪を殺すは仁に非ざるなり。其有に非ずして之を取るは義に非ざるなり。居惡にか在る。仁是なり。路惡にか在る。義是なり。仁に居り義に由る、大人の事備れり。

● 齊王の子 ● 學者の通稱 ● 高尚にす ● 公卿大夫をいふ

孟子曰。仲子不義與之齊國。而非受。人皆信之。是舍單食豆羹之義也。人莫大焉。亡親戚君臣上下。以其小者。信其大者。奚可哉。桃應問曰。舜爲天子。皋陶爲士。瞽瞍殺人。則如之何。孟子曰。執之而已矣。然則舜不禁與。曰。夫舜惡得而禁之。夫有所受之也。然則

孟子曰く、仲子是不義にして之に齊國に與ふるも受けず。人皆之を信ず。是れ箒食豆羹を舍つるの義なり。人、戚君臣上下を亡するより大なるは莫し。其小なる者を以て其大なるを信ず、奚ぞ可ならんや。

● 齊の陳仲子、節出 ● 一説に「之に齊國を與ふるも不義として受けず」と訓ず ● 賢者なりと信ず ● 一箒の食一豆の羹、之を捨つるは小節なり ● 仲子の兄を避け母を避けて君祿を食はず人はの大徳なきこと前に見ゆ ● 頂大なる罪の意 ● 賢者となす可からず

桃應問ひて曰く、舜天子たり。皋陶士たり。瞽瞍人を殺せば則ち之を如何にせん。孟子曰く、之を執へんのみ。然らば則ち舜禁せざるか。曰く、夫れ舜惡んぞ得て之を禁ぜん。夫れ之を受くる所有るなり。然らば則ち舜之を如何にせん。曰く、舜天下を秉つる視るがこと猶ほ敵讎を秉つるがごとし。竊かに負ひて逃れ、海濱に違ひて處り、身を終ふるまで斷然として樂みて天下を忘れん。

● 孟子の弟子 ● 刑官の官 ● 舜の父 ● 其儀に及ばずと止めないか ● 法令は先代より傳受する所にて私に變ず可からざればなり ● 破れたる草履 ● 欣然に同じ



舜如之何。曰。舜視棄天下。猶棄敝屣也。窮負而逃。遊四海。濱而處。終身。斯然樂而忘天下。

孟子曰。食而  
齊。望見齊王  
之子。喟然歎  
曰。居移氣。養  
移體。大哉居  
乎。夫非盡人  
之子。與。孟子  
曰。王子宮室  
車馬衣服。多  
與人同。而王  
子若彼者。其  
居使之然也。  
況居天下之  
廣居者乎。魯  
君之宋。呼於  
堙。澤之門。守  
者曰。此非吾  
君也。何其聲  
之似我君也。  
此無他。居相  
似也。

孟子曰。食而  
齊。望見齊王  
之子。喟然歎  
曰。居移氣。養  
移體。大哉居  
乎。夫非盡人  
之子。與。孟子  
曰。王子宮室  
車馬衣服。多  
與人同。而王  
子若彼者。其  
居使之然也。  
況居天下之  
廣居者乎。魯  
君之宋。呼於  
堙。澤之門。守  
者曰。此非吾  
君也。何其聲  
之似我君也。  
此無他。居相  
似也。

孟子曰く、食ひて愛せざるは之を豕交するなり。愛して敬せざるは之を獸畜す

- 野の邑なり
- 歎息する状
- 居所は氣象を轉移せしむ
- 季後には形體を移し易ふ
- 種々の説あるも孟子曰を行文と見ずして端を改めて細説するの意を示すべく此三字を用ひしと見るべきか
- 氣象の同じからざるなり
- 仁を云ふ
- 宋の城門の名
- 宋の君

弗愛豕交之也。愛而不敬。獸畜之也。不敬者幣之末。而無貳君子不可虛拘。

孟子曰。形色天性也。惟聖人然後可以踐形。○齊宣王欲類喪。公孫丑曰。爲非之喪。猶愈於已乎。孟子曰。是猶下或終其兄之臂。子謂之姑徐。徐云爾。亦教之孝。

るなり。恭敬は幣の未だ將はざる者なり。恭敬して實なければ君子は虚しく拘す可からず。

孟子曰く、形色は天性なり。惟聖人にして然る後以て形を踐む可し。○齊の宣王喪を短くせんと欲す。公孫丑曰く、非の喪をなすは猶は已むに愈るか。孟子曰く、是れ猶ほ其兄の臂を終らすものあり、子之に謂つて姑く徐徐にせよと言ふがごとし。亦之に孝弟を教へんのみ。王子其母死する者あり。其傳之が爲めに數月の喪を請ふ。公孫丑曰く、此の若き者は何如ぞや。曰く、是れ之を終へんと欲して得可からざるなり。一日を加ふと雖も已むに愈れり。夫の之を禁する莫くして爲さざる者を謂ふなり。

- 形體と顔色
- 仁義禮智の天性
- 舉動の禮に合するを云ふ
- 三年の喪を短くして一年となさんとす

第一而已矣。王子有其母死者其傅爲之請數月之喪。公孫丑曰。若此者何如也。曰。是欲終之而不可得也。雖加二日。愈於已。謂之夫莫之禁。而弗爲者也。

るなり ① 初の喪は一年の喪なり ② 緩やかにするなり ③ 庶子の父母に對する喪切は短し、故に更に數月の喪を請出せるなり ④ 三年の喪をいふ ⑤ 三年の王制の喪を禁止せられしものならずして

孟子曰。君子之所教者五。有如時雨化之者。有成德者。有達財者。有答問者。有一私淑艾者。此五者。君子之所教也。

孟子曰く、君子の教ふる所以の者五、時雨の之を化するが如き者有り。徳を成す者有り。財を達する者有り。問に答ふる者あり。私は淑艾する者あり。此五者は君子の教ふる所以なり。

① 財は材即ち才なり ② 淑艾は善く治むること、直接に業を受くること能はず他人より傳へて修業すること

公孫丑曰。道則高矣美矣。宜若登天然。

公孫丑曰く、道は則ち高し美し。宜しく天に登るが若く然るべし。及ぶ可からざるに似たり。何ぞ彼をして幾及す可きを爲して日々に學せしめざる。孟子

似不可及也。何不使彼爲可幾也。而日學乎也。孟子曰。大匠不爲。拙工改中廢繩。墨不爲。羿變其教。率。君子引而不發。躍如也。中道而立。能者從之。

曰く、大匠は拙工の爲めに繩墨を改廢せず。羿は拙射の爲めに其教率を變ぜず。君子は引きて發せず、躍如たり。中道にして立つ。能者之に従ふ。

① 典法にして企て及ぶべき道を作りて得人をして日之を勤行せしめざる ② 我々に同じ ③ 勝れたる工匠は拙き工匠の爲にすみなむを改め又はやめず ④ 古の弓の名人 ⑤ 弓を張る程度 ⑥ 君子人を教ふるの道を工匠の法及び射法に比して云ふ ⑦ 物の日進に躍り出づる有様 ⑧ 萬人に見安く道の中央に立つ

孟子曰。天下有道。以道殉身。天下無道。以道殉身。未聞以道殉身。人者也。公都子曰。滕更之在門也。

孟子曰く、天下道有れば道を以て身に殉ず、天下道無ければ身を以て道に殉ず。未だ道を以て人に殉ずる者を聞かざるなり。

① 身用ひられ道自ら行はるゝこと ② 道行はれず身従つて退くこと ③ 道を曲げて人に従ふこと

公都子曰く、滕更の門に在るや、禮する所にあるが若し。而も答へざるは何ぞや。孟子曰く、貴を挾みて問ひ、賢を挾みて問ひ、長を挾みて問ひ、勳勞有る

若在所禮而  
不答何也孟  
子曰挾賢而  
問挾賢而問  
挾長而問挾  
有勳勞而問

を挾みて問ひ、故を挾みて問ふは、皆答へざる所なり。滕更二つあり。

● 滕更の弟 ● 孟子の門に來りて學ぶをいふ ● 侍ひたり ● 故舊、知り合ひのこと ● 賢と賢とを挾みたり

孟子曰於不  
可已而已者  
無所不已於  
所厚者薄無  
所不薄也其  
進銳者其退  
速

孟子曰く、已むべからざるに於て已む者は、已まざる所無し。厚くする所に於て薄くすれば薄うせざる所なし。其進むこと銳き者は其退くこと速くなり。

● 爲さざる可からざるに爲さず、厚くすべきに薄きものと共に及ばざるの弊あるをいふ ● 熱中し易きものは又冷し易し、其の弊は過ぐるにあり

孟子曰君子  
之於物也愛  
之而弗仁於  
民也仁之而  
弗親親親而

孟子曰く、君子の物に於けるや、之を愛して仁せず。民に於けるや、之を仁して親しません。親を親しみて民に仁し、民に仁して物を愛す。

● 禽獸草木 ● 取るに時あるを云ふ ● 人類に對するが如き仁愛を以てせず ● 骨肉に對するが如き親愛

仁民仁民而  
愛物

を以てせず、儒教の仁愛に自ら差別あるを知るべし

孟子曰知者  
無不如也當  
務之爲急仁  
者無不愛也  
急親賢之爲  
務堯舜之知  
而不徧物急  
先務也堯舜  
之仁不徧愛  
人急親賢也  
不能三年之  
喪而緦小功  
之祭而飯流  
歎而問無齒  
決是之謂不  
知務

孟子曰く、知者は知らざる無きなり。務むべきを之れ急と爲す。仁者は愛せざる無きなり。賢を親しむを急にするを之れ務と爲す。堯舜の知にして、物に徧からざるは先務を急にするなり。堯舜の仁にして人を愛するに徧からざるは賢を親しむことを急にするなり。三年の喪を能くせずして緦小功を之れ祭し、故飯流歎して齒決無きを問ふ。是れ之を務を知らずと謂ふ。

● 天下の事を細く知らぬ ● 父母の喪にして、忌服の重きもの ● 緦は、繼麻にして三箇月の喪、小功は、五箇月の喪にして忌服の輕きもの ● 細かに注意す ● 際限もなく飯を食ひ、際限もなく汁物を啜ることにして、大なる無作法なり ● 乾きたる肉を噛み切りテして、手に裂きて食ふ體なり、之れを噛み切るは、小なき無作法なり ● 問題にしてやかましくいふ

卷之十四

盡心章句下

孟子曰、不仁哉。梁惠王也。仁者以其所愛。及其所不愛。不仁者以其所不愛。及其所愛。公孫丑曰。何謂也。梁惠王以土地之故。靡爛其民而戰之。大敗。將復之。恐不能勝。故驅其所愛子弟以殉之。是之謂以其所不愛及其所愛也。

孟子曰く、不仁なるかな、梁の惠王、仁者は其の愛する所を以て其の愛せざる所に及ぼし不仁者は其の愛せざる所を以て其の愛する所に及ぼす。公孫丑曰く、何の謂ぞや。梁の惠王は土地の故を以て其民を靡爛して之を戦はせ、大に敗る。將に之を復せんとす。勝つ能はざるを恐る。故に其の愛する所の子弟を驅りて以て之に殉す。是れ之を其の愛せざる所を以て其の愛する所に及ぼすと謂ふなり。

- 恩澤を自國の民より遠く天下の民に及ぼすを云ふ
- 遠く他國を攻伐すより其害遂に己の民に及ぶを云ふ
- 死屍野に充ちて骨砕け肉爛れる様を云ふ
- 再戰す
- 太子の申及び數人の子弟を指す
- 國難に殉ぜしむ

孟子曰く、春秋無義戰。彼善於此。則有之矣。征者。上伐下也。敵國不相征也。

孟子曰く、春秋に義戰無し。彼此より善きは則ち之れ有り。征とは上下を伐つなり。敵國は相征せざるなり。

- 孔子の作書名
- 義に合へる戰
- かの國とこの國とを比較して善惡をきめる位のことには之れ有るなり
- 上下とは天子と諸侯とを指す
- 名分則等しき國

孟子曰く、盡く書を信すれば書無きに如かず。吾武成に於て二三策を取るのみ。仁人は天下に敵無し。至人を以て至不仁を伐つ。而るに何ぞ其れ血の杵を流さん。

- 書經を云ふ、一説には凡ての書と
- 書經の篇名、此の一篇中に於て二三章を信ずのみとなり
- 古昔竹にて簡策となすより云ふ
- 武王を指す
- 紂王を指す
- 紂成は國に作る、齒は肉なり、戰ひの爲め人を殺し、血杵を流すに至る、かゝる事に至らない筈との意

孟子曰く、人あり、曰く、我善く陳を爲し、我善く戰を爲すと。大罪なり。國君仁を好めば天下に敵無し。南面して征すれば北狄怒み、東面して征すれば西夷怒む。曰く、奚爲れぞ我を後にすると。武王の殷を伐つや、革車三百兩、虎賁三千人。

孟子曰く、盡く書。則不如無書。吾於武成取二三策而已矣。仁人無敵於天下。以至人伐至不仁。而何其血之流杵也。

孟子曰く、有る人曰く、我善く陳を爲し、我善く戰を爲すと。大罪なり。國君仁を好む。曰く、奚爲れぞ我を後にすると。武王の殷を伐つや、革車三百兩、虎賁三千人。



仁天下無敵焉。南面而征。北狄怨。東面而征。西夷怨。曰。奚爲後我。武王之伐殷也。革車三百兩。虎賁三千人。王曰。無畏。寧爾也。非敵三百姓也。若崩厥角稽首。征之爲言正也。各欲正己也。焉用戰。

王曰く、畏るゝ無かれ、爾を寧ぜん、百姓を敵とするに非ざるなりと。崩るゝが若く角を厥して稽首す。征の言たる正なり。各々己を正しくせんと欲するなり。焉んぞ戦を用ひん。

● 陣に同じ ● 合戦 ● 此句樂王下篇に既に ● 兵車、爾は輔に同じ ● 弓矢、櫓をとる戦士云々 ● 厥は頓首の頓に同じ、厥角は獸が角を地に觸れるが如く、民の武王を迎へて、頓首する云々

孟子曰。梓匠輪輿能與人規矩。不能使人巧。○孟子曰。舜之飯糗茹艸也。若將終身焉。及其爲天子也。被袵衣。鼓琴。二女果。若罔有之。

孟子曰く、梓匠輪輿は能く人に規矩を與ふるも、人をして巧ならしむる能はず。○孟子曰く、舜の糗を飯ひ艸を茹ふや、將に身を終へんとするが若し。其の天子と爲るに及びて袵衣を被り琴を鼓し二女果す。之を罔有するが若し。

● 大工と車を作る人、膝又公下篇に既に ● 野菜 ● 畫衣 ● 端の二女を侍べらること

孟子曰。吾今而後知殺人之親之重上也。殺人之父。人亦殺其父。殺人之兄。人亦殺其兄。然則非自殺之也。一聞耳。孟子曰。古之爲關也。將以禦暴。今之爲關也。將以爲暴。○孟子曰。身不行道。不行於妻子。使人不以道。不能行於妻子。○孟子曰。周于利者。凶年不

孟子曰く、吾今にして後人の親を殺すの重きを知る。人の父を殺せば人も亦其父を殺す。人の兄を殺せば人も亦其兄を殺す。然らば則ち自ら之を殺すに非ざるなるや一間のみ。

● 別族 ● 吾れ我が父兄を殺したるに非ざれども、殆ど殺したると大差なく、中間に一人餘計に加はるのみ

孟子曰く、古の關を爲くるや、將に以て暴を禦がんとす。今の關を爲くるや、將に以て暴を爲さんとす。○孟子曰く、身道を行はざれば妻子に行はれず。人を使ふに道を以てせざれば妻子に行ふ能はず。

● 古昔の關を設けたる理由 ● 非常に備へる ● 今世の關を設くる理由 ● 敵人から重税を取らんとするをいふ ● 妻子を使ふこと

孟子曰く、利に周き者は凶年も殺すこと能はず。徳に周き者は邪世も備すこと能はず。○孟子曰く、名を好む人は能く千乗の國を讓る。苟も其人に非ざれば

能殺。周于德者。邪世不能亂。○孟子曰。好名之人。能讓千乘之國。苟非其人。單食豆羹。見於色。

ば簞食豆羹も色に見はる。

● 田意の周到なること ● 邪説の行はるゝ世 ● 善い意味の名なり、即ち不朽の名なり ● 名を好まざる人は利を好む、故に一簞の食、一豆の汁にても之を争ひて顔色を變ず

孟子曰。不信仁賢。則國空虛。無禮義。則上下亂。無政事。則財用不足。○孟子曰。不仁而得國者。有之矣。不仁而得天下。未之有也。

孟子曰く、仁賢を信ぜざれば則ち國空虛す。禮儀無ければ則ち上下亂る。政事無ければ則ち財用足らず。○孟子曰く、不仁にして國を得る者之れ有り。不仁にして天下を得るは未だ之れあらざるなり。

● 國中に人無きに等し ● 上下の崩亂る ● 諸侯となること

孟子曰。民爲貴。社稷次之。君爲輕。是故。

孟子曰く、民を貴しと爲す。社稷之に次ぎ、君を輕しと爲す。是故に丘民に得て天子となり、天子に得て諸侯と爲り、諸侯に得て大夫となる。諸侯社稷を危

得乎丘民。而爲天子。得乎天子。爲諸侯。得乎諸侯。爲大夫。諸侯危社稷。則變置。犧牲既成。粢盛既潔。祭祀以時。然而旱乾水溢。則變置社稷。

くせんとすれば則ち變置す。犧牲既に成り、粢盛既に潔く、祭祀時を以てす。然り而して旱乾水溢あれば則ち社稷を變置す。

● 田野の民なり ● 供物

孟子曰。聖人百世之師也。伯夷柳下惠是也。故聞伯夷之風者頑夫廉。懦夫有立志。聞柳下惠之風者。薄夫敦。鄙夫寬。奮乎百世之上。百世之下聞者莫不興起也。非聖人而能若是乎。而況於親炙之者乎。

孟子曰く、聖人は百世の師なり。伯夷・柳下惠是なり。故に伯夷の風を聞く者は頑夫も廉に、懦夫も志を立つること有り。柳下惠の風を聞く者は薄夫も敦く、鄙夫も寛なり。百世の上に奮ひて、百世の下聞く者興起せざるは莫し。聖人に非ずして能く是くの若くならんや。而るに況んや之に。炙する者に於てをや。

● 萬章下篇を見よ ● 感動して奮起す ● 親しく授けて教を受くること

孟子曰。仁也者人也。合而言之道也。○孟子曰。孔子之去魯。曰。遲遲吾行也。去父母國之道也。去齊接淅而行。去他國之道也。

孟子曰く、仁とは人なり。合して之を言へば道なり。○孟子曰く、孔子の魯を去るに曰く、遅遅として吾れ行くなりと。父母の國を去るの道なり。齊を去るに漸を接して行く。他國を去るの道なり。

● 仁と人とを合すなり ● 此章は萬章下篇に出づ

孟子曰。君子之厄於陳蔡之間。無上下之交也。○貉稽曰。稽大不理於口。孟子曰。無傷也。士憎茲多口。詩云。憂心悄悄。慍于羣小。孔

孟子曰く、君子の陳蔡の間に厄するは上下の交無ければなり。○貉稽曰く、稽大に口に理ならず。孟子曰く、傷む無かれ。士憎茲に多口なり。詩に云く、憂心悄悄、羣小に慍みらるとは孔子なり。肆に厥の慍を殄たす。亦厥の問を殄たすとは文王なり。

● 孔子のこと ● 厄に同じ ● 君臣上下共に惡みて交接すまなければなり ● 理は類なり、大勢に諱られず ● 類みなきこと ● 士となれば大勢から諱られるものなり、憎は増に同じ ● 憂せらる、事多し ● 詩經邶風柏舟の篇 ● 憂ふる貌 ● 多くの小人 ● 詩經大雅緜篇の字面 ● 聲聞即ち評判なり

子也。肆不殄厥慍。亦不殄厥問。文王也。

孟子曰く、賢者は其昭昭を以て人をして昭昭たらしむ。今は其昏昏を以て人をして昭昭たらしむ。○孟子、高子に謂つて曰く、山徑の蹊、間く介然として之を用ふれば路を成す。間くも用ひざるを爲せば則ち茅之を塞ぐ。今茅子の心を塞げり。

● 明德なり ● 昏徳なり、亂れたる政を云ふ ● 齊の人、孟子の弟子 ● 山間の小径の足跡、一説に「山徑の蹊間、介然として」と訓ず ● 堅固の貌、固くそのみを用ふること ● 十路を成就す

今茅塞子之心矣。

高子曰く、禹の聲は文王之聲に尙れり。孟子曰く、何を以て之を言ふ。曰く、追の聲せるを以てなり。曰く、是れ奚んぞ足らむや。城門の軌は兩馬の力ならんや。

● 晋梁の聲なり ● 追は鐘を釣りかくる聲、龍頭、蓋は磨滅し一絶えんとすること ● 是れ奚ぞ之を知るに

高子曰。禹之聲。尙文王之聲。孟子曰。何以言之。曰。以追。奚曰。是奚

足哉。城門之軌。兩馬之力與。

齊饑。陳臻曰。國人皆以。夫子將復為發棠。殆不可復。

孟子曰。是為馮婦也。晉人有馮婦者。善搏虎。卒為善士。則之野。有衆逐虎。虎負嵎。莫之敢撓。望見馮婦。趨而迎之。馮婦攬臂下車。衆皆悅之。其為士者笑之。

足らんや 城門の車轍のきしれる跡は軍に一車兩馬の力に非ず、歲月を稱むこと久しきに由る、兩馬とは變化の制なり  
齊饑う。陳臻曰く、國人皆以らく、夫子將に復た爲めに棠を發せんとすと。殆ど復すべからざるか。孟子曰く、是れ馮婦を爲すなり。晉人馮婦といふ者あり。善く虎を搏つ。卒に善士となる。則ち野に之く。衆有り虎を逐ふ。虎嵎を負ふ。之に敢て撓る莫し。馮婦を望み見て趨りて之を迎ふ。馮婦臂を攬け車を下る。衆皆之を悦ぶ。其の士たる者は之を笑ふ。

邑の名、こゝに次倉あり、先に飢饉ありし時、孟子姪王に勸めて此米倉を開かしめ、米を出して貧弱を賑恤したることあり 二度と請ふ事は出来ぬか 人名 手どりにする 終に荒業を止め善士となる 山隅を背にして人に向ふを云ふ 觸れ近づく 腕まくり 心ある者

孟子曰。口之味に於ける、目の色に於ける、耳の聲に於ける、鼻の臭に於ける、四肢の安佚に於ける、性なり。命有り。君子は性と謂はざるなり。仁の父子に於ける、義の君臣に於ける、禮の賓主に於ける、知の賢者に於ける、聖人の天道に於ける、命なり。性有り。君子は命と謂はざるなり。

孟子曰く、口の味に於ける、目の色に於ける、耳の聲に於ける、鼻の臭に於ける、四肢の安佚に於ける、性なり。命有り。君子は性と謂はざるなり。仁の父子に於ける、義の君臣に於ける、禮の賓主に於ける、知の賢者に於ける、聖人の天道に於ける、命なり。性有り。君子は命と謂はざるなり。

五官の欲は皆天性なり、然れども世上の物皆己が國ふまゝ、に享け得らるべきに非ず、故に君子は其天命ある事を知つて、強ひて之を求むることを爲さざるなり 人の性質は斷斷正邪の別あるはもとより天の命する所なり、然れども人の本性は善、故に君子は之を天命と言はずして、吾身を修め其の不善を去つて本性の善を明かにせんと務むるなり 天運

於味也。目之於色也。耳之於聲也。鼻之於臭也。四肢之於安佚也。性也。有命焉。君子不謂性也。仁之於父子也。義之於君臣也。禮之於賓主也。智之於賢者也。聖人之於天道也。命也。有性焉。君子不謂命也。

ける、四肢の安佚に於ける、性なり。命有り。君子は性と謂はざるなり。仁の父子に於ける、義の君臣に於ける、禮の賓主に於ける、知の賢者に於ける、聖人の天道に於ける、命なり。性有り。君子は命と謂はざるなり。

浩生不害問曰。樂正子何人也。孟子曰。善人也。信人也。何謂善。何謂信。曰。可欲

浩生不害問ひて曰く、樂正子は何人ぞや。孟子曰く、善人なり、信人なり。何をか善と謂ひ、何をか信と謂ふ。曰く、欲すべき之を善と謂ひ、諸れを己に有する之を信と謂ひ、充實する之を美と謂ひ、充實して光輝ある之を大と謂ひ、大にして之を化する之を聖と謂ひ、聖にして之を知るべからざる之を神と謂ふ。樂正子



之謂善。有二諸己之謂信。充實之謂美。充實而有光輝。之謂大。大而化之之謂聖。聖而不可知之之謂神。樂正子。二之中。四之下也。

は二の中四の下なり。

● 姓は養生、名は不害、齊人なり ● 何人も親しみ好むを善と云ふ ● 善を體得して居るを信と云ふ ● 善と信とを充實すること ● 心を用ひて道に叶ふ ● 善信の中間に在り、美大聖神の下に位するなり

孟子曰、逃墨必歸於楊。逃楊必歸於儒。歸斯受之。而已矣。今之與楊墨辯者。如追放豚。既入其筮。又從而招之。

孟子曰く、墨を逃るれば必ず楊に歸し、楊を逃るれば必ず儒に歸す。歸すれば斯に之を受けんのみ。今の楊墨と辯する者は放豚を追ふが如し。既に其筮に入れば又從つて之を招ぐ。

孟子曰、有布練之征。粟米之征。力役之征。

孟子曰く、布練の征、粟米の征、力役の征有り。君子は其一を用ひて其二を緩くす。其二を用ふれば民殍有り。其三を用ふれば父子離る。○孟子曰く、諸侯の

● 墨は墨子、楊は楊朱、何れも孟子學說上の敵なり ● かこひの筮にて豚を入れる所 ● 足をいはひつけること

征。君子用其二

寶は三。土地人民政事。珠玉を寶とする者は殃必ず身に及ぶ。

● 布と糸とを取り立てること ● 年貢の米 ● 夫役 ● 飢死ぬもの ● 諸侯の寶とすべきものを寶とせずして世俗の寶とする珠玉を寶とする者の誤れるをいふ

一。緩其二。用其二。而民有殍。用其三。而父子離。○孟子曰。諸侯之寶三。土地人民政事。寶三。珠玉者。殃必及身。

盆成括仕於齊。孟子曰。死矣。盆成括。盆成括見殺。門人問曰。夫子何以知其將見殺。曰。其爲人也小。有才。未聞君子之大道也。則足以殺其軀而已矣。

盆成括、齊に仕ふ。孟子曰く、死ななかな盆成括と。盆成括殺さる。門人問ひて曰く、夫子何を以て其の將に殺されんとするを知る。曰く、其の人と爲りや小にして才あり。未だ君子の大道を聞かず。則ち以て其軀を殺すに足るのみ。 ● 姓は盆成、名は括 ● 其の器量小なるをいふ ● 器量に才ありて未だ君子の大道を聞かざることを結果は其、自身を殺すに至る理由なり

孟子之滕館

孟子滕に之きて上宮に館す。儒上に業履有り。館人之を求めて得ず。或ひ

於上宮有業  
屨於廟上館  
人求之弗得  
或問之曰若  
是乎從者之  
度也曰子以  
是爲竊屨來  
與曰殆非也  
夫予之設科  
也往者不追  
求者不拒苟  
以是心至斯  
受之而已矣

と之を問ひて曰く、是の若きか、從者の度せるや。曰く、子はれ屨を竊むが爲めに來ると以へるか。曰く、殆ど非なり。夫れ予の科を設くるや、往く者は追はず、來る者拒まず。苟も是の心を以て至らば、斯に之を受けんのみ。

● 旅館の名、或は館の樓上の室、又は地名など云ふ ● 宿をとる ● 離りさして未だ成らざる屨を窓に置くなり ● 得たり得ざる言ふ ● 孟子の從者 ● 屨なり、暗に盜むの意を含んで言へるなり ● 孟子の言とすべし ● 教授科目なり ● 往く人來る人と解すべし ● 道を學ぶ心

孟子曰、人皆  
有所不忍、達  
之於其所忍  
仁也、人皆有  
所不爲、達  
於其所爲、義  
也、人能充無  
欲害人之心、

孟子曰く、人皆な忍びざる所有り。之を其の忍ぶ所に達するは仁なり。人皆爲さざる所有り。之を其の爲す所に達するは義なり。人能く人を害するを欲する無きの心を充てば、仁勝けて用ふ可からざるなり。人能く穿踰する無きの心充てば、義勝けて用ふ可からざるなり。人能く爾汝を受くる無きの實を充てば、往く所として義たらざる無きなり。士未だ以て言ふ可からずして言ふは、是れ言ふを以て

而仁不可勝  
用也、人能充  
無穿踰之心、  
而義不可勝  
用也、人能充  
無受爾汝之  
實、無所往而  
不爲義也、士  
未可<sub>レ</sub>以言、而  
不言、是以不  
言、恬之

之を恬るなり。以て言ふ可くして言はざるは、是れ言はざるを以て之を恬るなり。是れ皆穿踰の類なり。

● 氣の善なと思ふ心 ● 穿は壁に穴をあけること、踰は垣をこえること、故に竊盜の意となる ● 呼びすてにせらるること、輕絶せらる、定なり ● 實心 ● 取ること

孟子曰、言近  
而指遠者善  
言也、守約而  
施博者善道  
也、君子之言  
也、不下帶而  
道存焉、君子  
之守、脩其身  
而天下平、人  
病<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>其田、而

孟子曰く、言近くして指遠きは善言なり。守ること約にして施すこと博きは善道なり。君子の言や帶を下らずして道存す。君子の守其身を脩めて天下平かなり。人其田を捨てて人の田を芸るを病む。人に求むる所重くして、自ら任ずる所以の者輕ければなり。

● 言葉がわかり易くして ● 意味深きこと ● 朱注に云ふ、古人視ること帶より下らず、則ち帶の上は乃ち目前常に見る至近の處なり、目の近事をしめて、而も至理存すと ● 自己を修めずして他人の世話を焼く體

芸<sup>レ</sup>人之田<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>求<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>人者重<sup>レ</sup>而所以自任<sup>レ</sup>者輕<sup>レ</sup>。

孟子曰。堯舜性者也。湯武反之也。動容周旋中禮者。盛德之至也。哭死而哀。非爲<sup>レ</sup>生者也。經德不回。非<sup>レ</sup>以干<sup>レ</sup>祿也。言<sup>レ</sup>謂必信<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>以正<sup>レ</sup>行也。君子行<sup>レ</sup>法以俟<sup>レ</sup>命而已矣。

孟子曰く、堯舜は性なる者なり。湯武は之に反るものなり。動容周旋中禮に中る者は盛徳の至なり。死を哭して哀むは生者の爲めに非ざるなり。經徳回ならざるは以て祿を干むるに非ざるなり。言語必ず信なるは以て行を正すに非ざるなり。君子は法を行ひて以て命を俟つのみ。

- 仁禮智を性のまゝ行ふ
- 本性にかへるなり
- 動作容儀の細微なること
- 禮節にかなふ
- 平常・徳行に少しの邪曲なきこと

孟子曰。說<sup>レ</sup>大人則藐<sup>レ</sup>之。勿視<sup>レ</sup>其魏魏然。堂高數仞。榱

孟子曰く、大人を説くには則ち之を藐ぜよ。其魏魏然たるを視ること勿れ。堂の高<sup>レ</sup>數仞、榱<sup>レ</sup>數尺、我志を得るも爲さざるなり。食前方丈侍妾數百人、我志を得るも爲さざるなり。般樂して酒を飲み、驅騁出獵し、後車千乘、我

題數尺。我得志弗爲也。食前方丈。侍妾數百人。我得志弗爲也。般樂飲酒。驅騁

志を得るも爲さざるなり。彼に在るもの皆我が爲さざる所なり。我に在る者は皆古の制なり。吾何ぞ彼を畏れんや。

- 當時の王公貴人
- 輕視すること
- 立派なる有様
- たる木の端
- 禽物の獸立方丈に及ぶ
- 大に音樂をなすこと
- 馬に乗りに馳け廻る
- 先王の禮法

孟子曰。養心莫善於寡欲。其爲人也寡欲。雖有不存焉者。上寡矣。其爲人也多欲。雖有不存焉者。寡矣。

孟子曰く、心を養ふは寡欲より善きは莫し。其の人と爲りや欲寡ければ存せざる者ありと雖も寡し。其の人と爲りや欲多ければ存する者ありと雖も寡し。

- 仁義の心
- 欲減ければ徳の存せざるものありとも、その存せざるもの甚だ寡し、多欲なる者は之に反す

曾皙嗜羊棗。而曾子不忍食<sup>レ</sup>羊棗。公孫

曾皙羊棗を嗜む。曾子羊棗を食ふに忍びず。公孫丑問ひて曰く、膾炙と羊棗と孰が美なる。孟子曰く、膾炙なるかな。公孫丑曰く、然らば則ち曾子何爲れぞ膾

丑問曰。膾炙  
與羊裘執美。  
孟子曰。膾炙  
哉。公孫丑曰。  
然則曾子何  
爲食膾炙。而  
不食羊裘。曰。  
膾炙所同也。羊  
裘所獨也。諱名  
不諱姓。姓所同  
也。名所獨也。

炙を食ひて羊裘を食はざる。曰く、膾炙は同する所なり。羊裘は獨する所なり。名を諱みて姓を諱まず。姓は同じくする所なり。名は獨する所なり。

● 曾子曾子の父 ● 羊裘はなつめなり ● 膾はなます、炙は焼肉 ● 然らば曾子も當然膾炙を嗜みしなり  
● 然るに ● 膾炙は何人も同じく好む所なり、羊裘は曾子の獨り好む所なり、諱の法に名は諱めども姓を諱まず、  
是れ姓は同族の共に有する所なれども名は各人の獨り有する所なればなりとこれと同じ理なりとの意

萬章問曰。孔  
子在陳。曰。盍  
歸乎來。吾黨  
之士。狂簡進  
取。不忘其初。  
孔子在陳。何  
思魯之狂士。  
孟子曰。孔子  
不得中道而  
與之。必也狂

萬章問ひて曰く、孔子陳に在り。曰く、盍ぞ歸らざる。吾黨の士、狂簡進んで取り其初を忘れずと。孔子陳にあり、何ぞ魯の狂士を思ふ。孟子曰く、孔子中道を得て之に與せざれば、必ずや狂獦か。狂者は進みて取り、獦者は爲さざる所有り。孔子豈に中道を欲せざらんや。必ずしも得べからず、故に其次を思ふ。敢て問ふ、何如なる斯に狂と謂ふ可きと。曰く、琴張、曾皙、牧皮の如きは孔子の所謂狂なり。何を以て之を狂と謂ふ。曰く、其志、嚶嚶然たり。曰く、古の人、

獦乎。狂者進  
取。獦者有所  
不爲也。孔子  
豈不欲中道  
哉。不可必得  
故思其次也。  
敢問。何如斯  
可謂狂矣。曰。  
如琴張曾皙  
牧皮者。孔子  
之所謂狂矣。  
何以謂之狂。  
曰。其志嚶嚶  
然。曰。古之人  
古之人。夷考  
其行而不掩  
焉者也。狂者  
又不可得。欲  
得不屑不潔  
之士而與之。

古の人と、夷に其行を考へて掩はざる者なり。狂者又得べからず。不潔を屑しとせざるの士を得て之に與せんと欲す。是れ獦なり。是れ又其次ぎなり。孔子曰く、我門を過ぎて、我室に入らざるも我憾みざる者は其れ惟郷原かと。郷原は徳の賊なればなり。曰く、何如なる斯に之を郷原と謂ふべき。曰く、何を以てか是れ嚶嚶たるや。言行を顧みず、行ひ言を顧みず。則ち曰く、古の人、古の人と。行何爲ぞ躑躅涼涼たる。斯の世に生れては斯の世に爲すなり。善なれば斯に可なりと。闒然世に媚ぶる者は是れ郷原なり。萬章曰く、一郷皆原人と稱す。往く所として原人爲らざることなし。孔子以て徳の賊となすは何ぞや。曰く、之を非らんとするも擧ぐる無きなり。之を刺らんとするも刺る無きなり。流俗に同じ汗世に合はせ、之に居ること忠信に似、之を行ふこと廉潔に似、衆皆之を悦び、自ら以て是と爲して、而して與に堯舜の道に入る可からず。故に徳の賊と曰ふなり。孔子曰く、似て非なる者を惡む。莠を惡むは其の苗を亂るを恐れてなり。佞





21988

四書

散宜生則見而知之。若孔子則聞而知之。由孔子而來至於今。百有餘歲。去聖人之世。若此其未遠也。近聖人之居。若此其甚也。然而無有乎爾。則亦無有乎爾。

五〇八

375

42x

~~7302~~  
3

孟子終



昭和二年六月十五日印刷  
昭和二年六月十八日發行

漢文叢書 (非賣品)

編輯者

塚本哲三

印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
三浦理

發行所

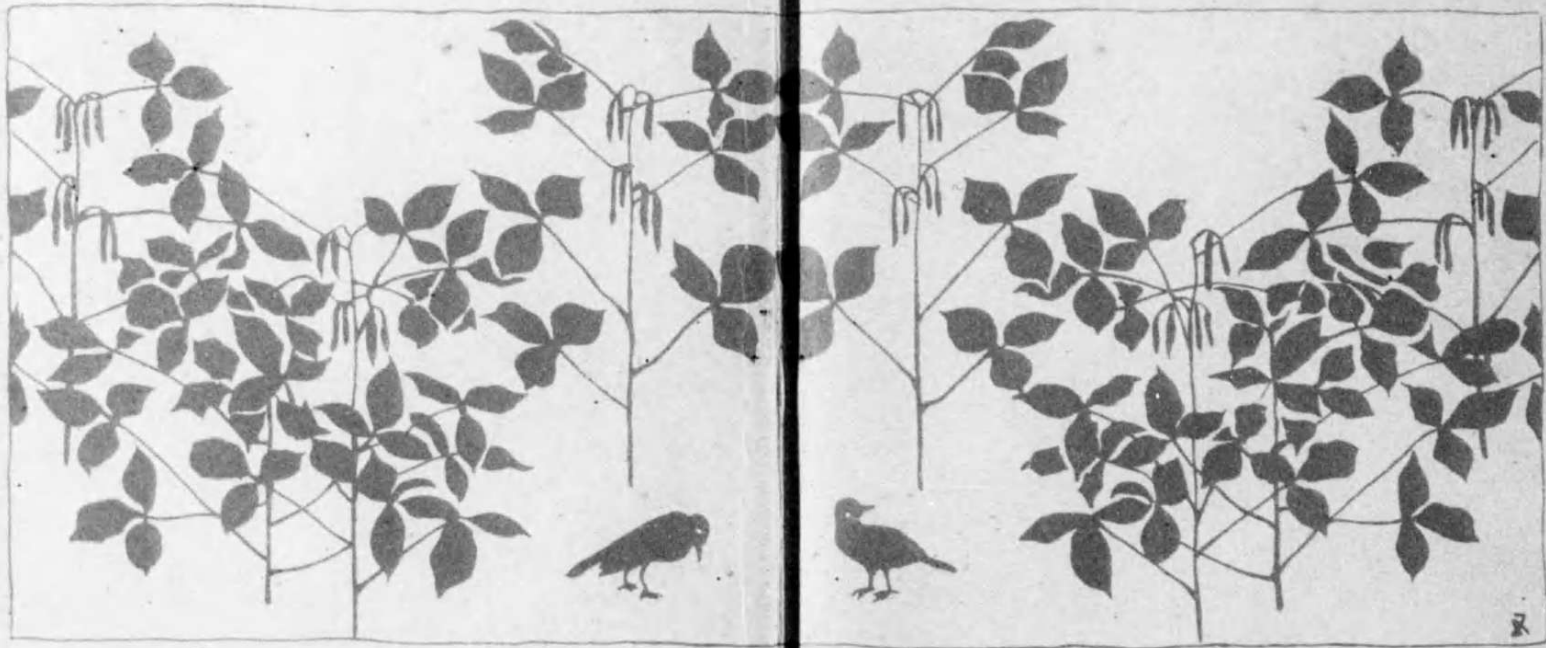
東京市神田區錦町三丁目九番地  
有朋堂印刷所

發行所

東京市神田區錦町一丁目十九番地  
有朋堂書店

不許複製

(本製山岡)



終

